

三人が行く！

変なおっさん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

もし、あの三人が人として先にこの世界に来ていたらの話。

目次

三人が行く！

1

第2話

6

第3話

11

第4話

16

第5話

22

第6話

28

第7話

35

第8話

44

第9話

53

第10話

60

第11話

67

第12話

74

第13話

79

第14話

86

第15話

92

第16話

97

第17話

106

第18話

115

第19話

127

第20話

134

第21話

141

第22話

146

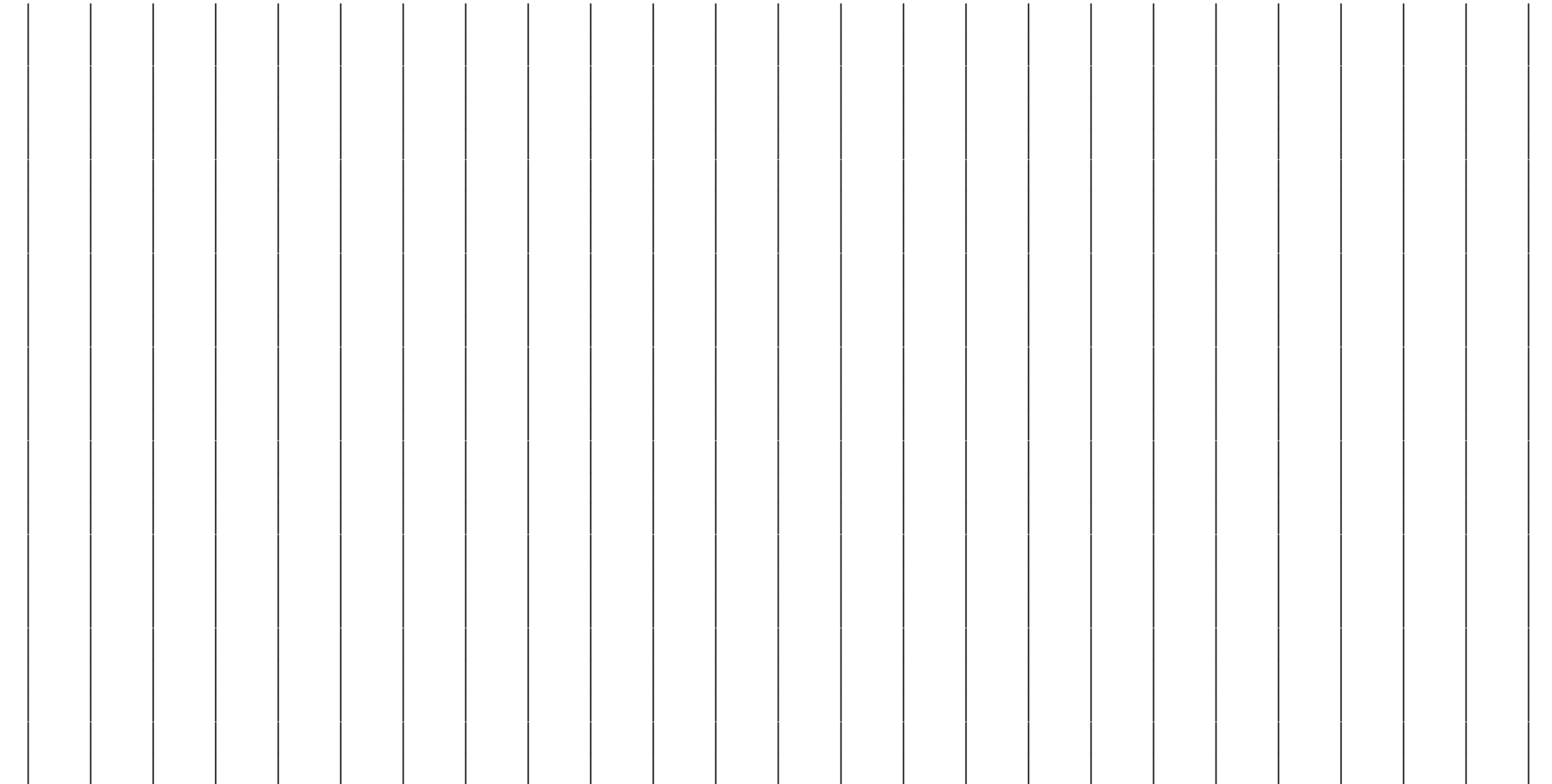
第23話

154

第24話

160

第49話 第48話 第47話 第46話 第45話 第44話 第43話 第42話 第41話 第40話 第39話 第38話 第37話 第36話 第35話 第34話 第33話 第32話 第31話 第30話 第29話 第28話 第27話 第26話 第25話



328 322 316 310 303 294 285 277 270 260 255 250 244 239 235 229 224 219 205 199 193 186 180 174 169

第
57
話

第
56
話

第
55
話

第
54
話

第
53
話

第
52
話

第
51
話

第
50
話

395 388 374 362 356 349 344 336

三人が行く！

何処かの世界での話。リ・エステイ―ゼ王国と呼ばれる場所に三人の男達が居た。彼らが居るのは、王国の王都リ・エステイ―ゼ近くの平原。近くには小さいながらも川があり、その近くで天幕を張って生活している。

「ハッ！ セイツー！」

好青年を思わせる出で立ちの戦士。身に着けている物は、寄せ集めの武器や防具だがキッチンと装備している為にどこか真面目さと気品を感じさせる。この世界に来てからは、剣の稽古を欠かさずに続けている。

「たつちさん。そろそろ出来るぞ」

その近くで、たき火で炊いた鍋をグルグルかき回しながら別の男が口を開く。こちらは、たつちと呼ばれた男に比べると少々ガラが悪い。あまり服装なども興味がなさそうに緩く着ている。そんな彼が食事の担当で、今日の朝ごはんとして小麦とチーズを溶かした物に野菜の切れ端を入れた物を作っている。ついでに言えば、固いパンも用意されている。

「ありがとうございます。ウルベルトさん」

たつちは、剣の稽古をやめて汗を拭い、二つ空いている席のうち一つへと腰を下ろす。

「いやー、見て下さいよ！ 大きな魚が釣れましたよー！」

そんな彼らの下に小川で釣りをしていた青年が近寄ってくる。二人に比べると歳は少し若いぐらいで、今日の釣果を自慢気に見せている。

「凄いですね、ペロロンさん」

「そうだな。大物だな」

「もつと褒めてもいいんですよ？ 早く焼いて食べましょうよ！」

ペロロンは、釣ってきた魚をウルベルトに渡す。すると、手慣れた手つきで魚を捌く。

「上手くできるようになりましたよね」

「美味くはないけどな」

「なに言ってるんですか？ ウルベルトさんの料理は美味しいですよ！ それに、俺達は料理できないですからね」

ウルベルトが料理をできるようになったのはつい最近の事だ。今までも三人で挑戦はしてきたが、煮るだけ、焼くだけの料理ですら失敗する。煮る事はできるが味がまずい。焼く方に関しては炭化する。「やはり、この世界はゲームの中なのでしょうか？」

「かもな。経験を積みめばスキルを覚えられるみたいだからな。昔は、邪魔だと思っていた物が今じゃ大事なもんだ」

「料理は生活するには必要ですからね。でもよかったじゃないですか！ これで、パンとジャムだけの生活からおさらばできるんですから。もう飽きましたよ、流石に」

「そうですね。ウルベルトさんのおかげです」

「……もう出来たぞ」

魚を捌き、木の枝で刺して焚火から少し離して地面に枝の部分を刺し込む。その後他に他の二人の分から器に鍋の中身を入れていく。

「今日は、どうしましょうか？」

「レベリングにも飽きましたし、一度帰りましょうよ！ せっかく集めても腐ったら無駄になるんですから」

「俺としては、このまま続けてもいいと思う。金に関しては、まだ少しはある。先にレベルとスキルを上げた方が後々楽になると思うぞ？」

三人は、今後について考える。この世界では、モンスターと戦うか、何かしらの仕事をして経験を積むと頭の中にゲームの時と似たようなシステムが浮かぶ。それが何かはわからないが、その中にあるスキルを選択すると使用できるようになる。たっちは、騎士を選択。ウルベルトは、魔術師と司祭を選択しながら料理人を少しだけ。ペロロンは、弓兵を選択しながら商人を少しだけ覚えた。他にも必要そうな物は、その時々で考えながら覚えていった。

「安全第一で行きたいですね。回復に関しては、ウルベルトさんに任せっきりでいいから。回復アイテムが異様に高いですからね」

「ポツタくりですよ、あれ。商人のスキルを取っても少し値下げし

てくれるぐらいですし」

「ならどうする？ たっちさんが決めてくれ。俺もペロロンさんも急ぐ理由はない。戻る場所のあるたっちさんには、悪い事をしたと思う」

この世界に三人が来た理由。昔の友人から連絡があつた。最後にもう一度会いたい。しかし、素直に会いに行く事はできなかった。この場に居る三人は、会う資格がなかった。昔の友人と知り合ったのは、ユグドラシルと呼ばれるオンラインゲームの中。この場にいる者ともそこで出会った。他にも仲間達は居たが、それぞれの事情でその場所から離れていった。

「そんなことないですよ。私も、ウルベルトさんとは仲直りがしたかったですから」

きっかけは、友人からの連絡だった。

「俺が、モモンガさんに会う前に二人に仲直りしてもらおうとしたのが原因です。そうしなければ、こうはならなかったと思います」

ペロロンからたっちとウルベルトの二人に連絡があつた。モモンガさんに会いに行きましょう。一緒に、と。仲直りをして一緒に居る姿をモモンガさんに見せましょうと。

「ペロロンさんは、悪くないさ。誰がこんな事を予想できる？ まさか、新しいアカウントを作成してログインしたらこんな知らない世界に居るなんて」

「初めは、バグか何かだと思いましたがね。サービス終了間際にログインしましたから」

ペロロン立会いの下、二人は無事に仲直りができた。そして、友人の待つユグドラシルの世界に行くために急いで新しいアカウントを作成してログインした。ゲームのサービス終了間際だったので、延長時間に懸けてのログインだったがまさかこんな事になるなんて思いもしなかった。

「見知らぬ場所。見知らぬ世界。言葉は通じますが、読み書きは別でしたね。言葉が分かったおかげで何とかなりましたけど」

「不幸中の幸いってヤツだろうな。それに、ゲームの時と同じように

できるのも運がよかった。いきなりモンスターに襲われた時は、流石に死んだと思っただけからな」

「新アカですと、レベル1からですもんね。装備も初期装備ですし。たっちさんが居なかつたら下手したらゲームオーバー、死んでましたよ……」

ペロロンの言葉に空気が重くなる。状況を理解する前にモンスターに遭遇して襲われた。今思うと、ゾツとするような話だ。

「でも、人間でよかったですね。時間がないからアバターを使ったのがよかったんでしょうか？ この世界の人間は、異形種に対していい感情を持っていないですから」

「ある意味では、ユグドラシルと変わらないけどな。ただ、元のキャラのままだと生活は辛かっただろう」

今の三人の姿は、現実を元にしたアバターだと思う。もしかしたら現実の姿で居るだけかもしれないがゲームに近い事を考えるとそっちの方が自然だと結論が出た。

「私の意見でいいのでしたら一度、王都に戻りましょう。無理をして死んでは意味がない。私は、お二人を失いたくはありませんから」
「たっちさん……」

たっちには、帰るべき場所がある。最初の頃は、元の世界に、妻と子供の居る世界に戻ろうと必死だった。今でも諦めてはいない。しかし、心の何処かでは諦めているのか知れない。最近のたっちは、あまり現実の話をしなくなった。

「じゃあ、王都に帰るのに決定で！ 今日、久しぶりの街ですから大騒ぎしましょうよ！ たっちさん！ ウルベルトさん！」

場の空気を変える為にペロロンが無理して騒ぎ立てる。

「ええ、今日は飲むとしましょう。ウルベルトさん。今日は、負けませんよ……」

「他はともかく、飲み比べで俺に勝てると思うなよ？」

離れてから時間は経った。喧嘩もした。憎みもした。そんな関係だった二人が今ではこうして、一緒に居る事ができる。

「俺の事も忘れないで下さいよー」

「忘れてませんよ、ペロロンさん」

「忘れてはいないが、どうせ最初に潰れるからな？」

三人は、この知らない世界で生きる。生きていく。

第2話

王都に着くと、正門から王城へと続く中央通りを通り、冒険者組合へと向かう。

「イビルアイちゃんは、今日も可愛いね！ 久しぶりに会うからもうたままないよー！」

「ええい、寄るな、変態！」

ペロロンは、冒険者組合に居たイビルアイと呼ばれる冒険者に求愛行動を取っている。しかし、それも空しくイビルアイは仲間である女戦士の後ろに隠れている。

「おいおい、イビルアイ。せっかくモテてんだ。少しは、相手してやったらどうだ？」

「うるさい！ なんだったら、ガガーランが相手をしてやればいいだろうー！」

「おつ？ そうだな。どうだい、ペロロン？」

ガガーランは、ペロロンにウインクをする。ガガーランは、ペロロンはもちろんだが、たちよりもウルベルトよりもデカくて大きい筋肉を持っている。ペロロンは、思わず尻餅をついて後退る。

「あまり馬鹿な事はするなよ。相手は、《蒼の薔薇》なんだからな。すみません、うちのペロロンが失礼な事をして」

ウルベルトがガガーランに頭を下げる。蒼の薔薇。王国に住む者なら一度は聞いたことのある冒険者チーム。構成メンバーが全員女性というのが特徴なのだが、実力は冒険者として最高峰とされるアダマントイト級になる。ガガーランもイビルアイも、今の彼らからしてみれば大先輩になる。

「換金が終わりましたよ」

モンスターの身体の一部を代表して冒険者組合に提出していた、たちが合流する。王国では、治安維持の一環で組合を通す形で冒険者にモンスター退治を依頼している。その証明として、指定されているモンスターの身体の一部を組合に持つていくと報奨金が貰える。他にも個人や組織からの依頼などもあるが、レベリングをしている彼

らにとつては、主な資金源になる。

「ああ、やつとか。どうでした内容は？」

「腐らせる前にお願ひします、と言われました。それでも交換してくれて、金貨で6枚と銀貨が10枚。後は、銅貨ですね」

「大物を狙うにしても回復アイテムとかで赤字になるから難しいな」
「そうですね。早く、強くなりたいたいものです」

モンスターによって報奨金が変わる。当然、強くなれば報奨金の額も上がるが危険も同様に上がる。

「よう、たつち。お前さんは、弱くはないだろう？ 他もそうだが、短期間でカツパーからシルバーにまでなったんだからな」

この世界に来てからレベリングをしている。安全を考えているのと予想以上にモンスターが見つからない。上手くはいかないがそれでも確実にレベルは上がっている。冒険者には、下から、カツパー、アイアン、シルバー、プラチナ、ゴールド、ミスリル、オリハルコン、アダマンタイトとあるのだが順調にシルバーにまで成れた。

「ガガーランさん達には、まだまだかありませんよ」

「それでも十分だ。今日は、街に泊まるんだろ？ 付き合えよ？」

「私は、別にかまいませんよ」

「俺もかまわない。ペロロンさんは？」

「イビルアイちゃんも一緒ですか？ 一緒なんですか!？」

「随分と入れ込んでるな。素顔も見た事ないのに」

「ウルベルトさんには、分からないんですか!？ あの仮面の下にあるプリティーフエイスが！ 俺には、分かります！ 絶対に可愛い！

絶対に！」

イビルアイは、大きな宝石がはめ込まれた仮面を常にしている。話によると、蒼の薔薇の人間以外は見ただ事がないとか。それなのにペロロンは、イビルアイに求愛している。唯一つ言える事は、本人が大人だと断言しているが体形が少女だという事ぐらいだろう。

「ロリコンも大概にしておけよ？」

「ここだと合法なんですよ？ 知りませんでした？ それにイビルアイちゃんは、既に大人ですから何も問題ないですよ！ ああつ……

あの仮面の下にあるイビルアイちゃんを想像するだけで夜も眠れない！」

ペロロンの言葉にイビルアイは、より深くガガーランの後ろに隠れる。しかし、その行動が更にペロロンの興奮を高める。蒼の薔薇として冒険者達の頂点に居て、普段は大人びた態度を取っている。それなのに可愛らしい女の子としての一面を見せられたらたまらないのだろう。

「わ、私は、部屋に帰る！ 別に怖いわけじゃないぞ！」

とうとうイビルアイは、冒険者の宿にある蒼の薔薇専用の部屋に帰る事にした。彼女達ほどにもなると最高級の宿の部屋を実質個人部屋として長期利用できる。

「夜は、付き合えよー！」

ガガーランの言葉を聞いているかは分からないが、何も言わずにイビルアイは立ち去る。

「怒らせてしまいましたか？」

「そうじゃない。大人ぶっててもまだ子供なんだよ、イビルアイは。それよりもだ。どうだい、少しは進展あったかい？」

「いえ、何もありません。価値の高いレアなアイテムなどの情報は何も」

「金を払って探してもらってもいるがなにもないからな。まあ、蒼の薔薇の皆さんが分からないようじゃ難しいだろうが」

「願いを叶えるか、好きな所に行けるようなアイテムだったよな？」

この世界がユグドラシルの中ならワールドアイテムクラスになるのだろうか、他の物でもかまわないので広い言葉で蒼の薔薇や他の者達から情報を集めている。

「正直に言えば、イビルアイが知らないとなると難しい話だ。知識に関しては、蒼の薔薇の中で一番だからな。情報が手に入ったら教えてやるが、あまり期待はしないでくれよな」

「ありがとうございます」

「あなたが代表で言葉を言い、他の二人は倣って頭を下げる。」

「この後は、どうする気だい？」

ガガーランの言葉に三人は考える。そう言えば、何も決めていなかった。

「そうですね。どうしましょうか？」

「依頼を受けるか、レベリングするかで買う物も決まるしな？」

「冒険者としてランクを上げるには、依頼をこなしていくのが一般的ですし」

「特にならうちのを手伝わないか？」

「蒼の薔薇のですか？」

「いや、無理だろ？ ガガーランさんには悪いがランクが違い過ぎる」「死んじやいますよね？ もしかして、イビルアイちゃんの事で怒ってますか？ それなら謝ります！ すみませんでした！」

ペロロンは、全力で頭を深々と下げる。

「別に人の色恋に興味はないよ。それに蒼の薔薇への依頼じゃない。これは、あくまでも私用みたいなもんでね。王都には、二つのアダマントタイト級冒険者チームがある。一つは、蒼の薔薇。もう一つが、朱の雫だ。アダマントタイト級の冒険者チームが居ると安心して生活ができる。だから、立場的にあまり外には行けない。特に朱の雫が留守をしている今の状況じゃ俺達は、此処を空けられない」

王都だからと言って安心はできない。城壁の外には、今もモンスターが居る。軍が常駐する王都に危害を与えるぐらいの物はそうはいないが、絶対には言えない。郊外にある村々などは、度々モンスターに襲われ壊滅する事もある。外の世界が危険だと知っている人々からしてみれば、英雄とまで言われるアダマントタイト級の冒険者は、安心して生活をする上で必要な物になる。朱の雫と呼ばれる冒険者チームは、王都を留守にしている。蒼の薔薇まで居なくなれば、王都に住む者達は不安に陥る事だろう。それだけ、アダマントタイト級の冒険者とは人心の支えになっているのだ。

「ガガーランさんが仰りたいことは分かりました。それで、仕事の内容はなんですか？」

「大した事はない。エ・ランテルまで行って情報を集めてほしいのさ。何か変わった事がないか？ 王都を拠点にしているとはいえ、王国の

冒険者だからね。何もしいって訳にはいかないだろ?」

「正義の味方ですね! 格好いいと思います! 是非、協力させてください!」

たっちは、他の二人に相談なく決める。決めてしまう。たっちは、人々の味方として戦う蒼の薔薇を尊敬している。その協力ができるのなら喜んでするだろう。その事は、ウルベルトもペロロンも了承済みだ。それに、蒼の薔薇には世話になってもいい。少しは、恩を返しておきたい。

「なら詳しい話は、夜にしよう。リーダーから話してもらった方がいいだろう。建前上、組合を通さないといけませんが、今日の分は奢ってやるよ」

「ありがとうございます」

「ラキユースさんも来るのか……」

「あれ? ウルベルトさん、ラキユースさん苦手でしたっけ?」

「苦手って言うか、貴族だろ? 別世界の人間だから緊張するんだよ」

蒼の薔薇のリーダーであるラキユース・アルベイン・デイル・アインドラは、王国貴族のアルベイン家の令嬢になる。

「うちのリーダーは、そういうのは気にしないぞ?」

「それは……知ってるけど……」

普段と違い、ウルベルトの声に力がなく、大きな身体が小さく見える。

「ああ、そういうえば美人ですもんね? ラキユースさん?」

「ち、ちげーし! そういうのじゃないし……」

ペロロンの言葉で他の二人も察する。明らかにウルベルトの態度がおかしい。

「美人ですもんね、ラキユースさん」

「狙うなら丁度いい。空いてるから頑張れよ、ウルベルト」

「だから違うって! 美人だとは思うけど……住む世界も違うし……クソツ! リア充共には分からねえんだ! チクショー!!」

ウルベルトは、言葉を吐き捨て冒険者組合の建物から出ていく。

第3話

ガガーランと別れた三人は、夜の飲み会の前に買い物を買物を済ませる。話し合いの結果、今後の事は今回の依頼を終えてから改めて考える事になった。今は、王都を拠点にしているがモンスターの質や量などを考えるとエ・ランテルでレベリングをした方が効率は良い。王都の場合、軍が周辺を巡回しているので王国内でも比較的モンスターの数が少ないし、野盗も同様に少ない。だからこそ、安全にレベリングができる。しかし、レベルが上がるにつれ弱いモンスターだと数が必要になってくる。大物を狙うのもいいが、この世界の回復アイテムは高いので赤字になる。

「親父さん！ もう少し安くしてよ！ 今度も買いに来るからさー」

「しかしだね……」

「お得意様だから、ねっ？ お願いだつてば！」

商人スキルでの値下げ交渉をペロロンがやっているがいまいち効率は薄い。商人として、少しだけ働いて覚えたスキルだがレベルが低すぎて効果がよくわからない。しかし、それでもスキルがない時よりは、値下げ交渉の成功率が上がった気がする。あくまでも気がするだけだが。

「食料は、これだけあればいいとしても薬草が少ないですよね？」

「薬草は、効果が出るのに時間が掛かる。それに効果もそこまで期待はできないからな」

「ポーシヨン高過ぎ！ 一つ使うだけでも赤字になりますもんね」

一介の冒険者の回復手段は、回復魔法か薬草の二択になる。魔法に関しては、効果もすぐに出る上に休めばまた使えるようになる便利な物だ。しかし、回数に限りがあるので頼り切るのは難しい。そこで、アイテムで補うのだがポーシyonは高過ぎてシルバー級の冒険者だと切り札として持つぐらいだ。とてもではないが複数も所有できない。だからこそ安く手に入る薬草の出番なのだが、すり潰して傷口に塗って使わなければいけないので時間が掛かる。効果も戦闘中に回復できるほど早くもないし、回復量もそこまで期待できない。おまけ

に保存期間で効力も弱まるので考えて買わないと損もする。早く塗るために事前にしり潰すなんて方法もあるが、すり潰した分早く劣化するので金がない今は避けたい。昔なら考えもしなかったことを、今は考えなければいけない。

「できれば、装備なども新調したいのですが……」

「今は、無理だろうな。俺も、仮面とか欲しい」

「この前、ヤギの仮面を見ましたけど買いたいんですか？」

「どうも昔の名残で欲しくなる」

ウルベルトは、ユグドラシルのゲームキャラとしてヤギ頭の悪魔を使用していた。

「なら私も全身鎧が欲しいですね。大きな盾と剣も」

たつちは、昆虫の種族をゲームキャラとして使用していたが、普段から全身鎧なのでこちらのイメージの方が強い。

「だったら俺は、鳥？ 翼とか？ 流星に難しいから顔でも布で隠そうかな？ 隠れて獲物を狙うスナイパーとして！ イビルアイちゃんのハートをこの矢で射貫くんですよ！」

ペロロンは、バードマンと呼ばれる鳥人間だった。流星に翼は生やせないで代用品を考えたようだ。

「買うのはしばらく後になりそうですね。どうします？ もうそろそろ帝国領にも足を延ばしますか？ もしかしたら安くて良い物が売っているかもしれないから」

「せっかくの買い物だから悪くはないが、帝国領でモンスターを倒しても金にならないからな」

「それに、王国ほど帝国は冒険者を重要視してないって聞きますよね。依頼内容も分からないまま行くのは不安ですね」

モンスターに報奨金を出すのは、あくまでも王国だけ。帝国は、別だ。だからこそ今までは、王国内から特に出る用事もなかったので留まっていた。

「では、エ・ランテルに行った時に帝国の方の情報も集めてみましょう。今日は、買い物もこれぐらいで済ませて、蒼の薔薇の所に行きましようか」

とりあえず、食料などの生活用品と回復アイテムは購入した。一度、宿に戻り、蒼の薔薇の待つ場所へと向かおう。

◇◇◇◇◇

王都にある冒険者の宿の敷地内には、宿泊施設、馬小屋、剣を振るうのに十分な広さのある庭がある。王都内でも最上級の宿屋になるこの場所を蒼の薔薇は拠点として利用している。そんな場所に三人はやって来た。

「ほら、好きに飲みな！ 今日、俺達の奢りなんだからな！」

ガガーランが乾杯の音頭を取る。

「ありがとうございます」

「あざーす」

「いいってことよ」

「皆さんには、私達からの依頼を受けて頂くのですから。シルバーではありますが、実力に関してはゴールドだと聞いています。皆さんが引き受けてくれて助かりました」

蒼の薔薇のリーダーであるラキユースは、蒼の薔薇として三人にお礼を言う。

「いやー、大した事はできないですけどね。それにしても、イビルアイちゃんは？」

「部屋に居るよ。会いたくないんだってさ。もしかしたら嫌われたかもな？」

「マジ……ですか!? もう生きていけない……」

ガガーランは、落ち込むペロロンを見て笑う。ペロロンは、落ち込み過ぎて今にも椅子から落ちそうだ。

「冗談だよ。イビルアイは、留守にしてんだ」

「そうなんですか？」

「私が少し用事を頼みました。ごめんなさいね、ペロロンさん」
「いえ、嫌われていないと分かれば平気です！」

まるで何事もなかったようにペロロンは立ち直る。

「嫌われてはいないが、別に好かれてはいないぞ？」

「嫌われていなければチャンスはあります！ 俺は、恋の狩人ですから！ 射止めてみせます！」

一見すると格好いいが、相手は見た目が少女。いや、幼女に近い。これには、慣れていないガガーランとラキユースは少し引く。

「ウルベルトさん。どこか具合でも悪いのですか？」

先ほどから何も話さないでジツとしているウルベルトにラキユースが尋ねる。

「イエ、ダイジヨウブデス。ハイ」

（ウルベルトさん……）

（普段は、威勢がいいけど俺と同じで童貞だもんな）

相手は、貴族で、美人で、英雄で、性格も良い。ウルベルトは、ラキユースの前だと緊張して上手く話したりができない。

（頑張れ俺……今こそリア充になる時……）

この世界の人間は、美形がやたらと多い。何処を見てもアイドルやモデルのような者ばかりだ。その中でもラキユースは、ウルベルトにとって好みのタイプだった。

「ウルベルトさん？」

「ハッハイ!? ナ、ナンデシヨウカ？」

「ウルベルトさん。少し席を外しましょう」

「連れションですね」

緊張してまともに話せないウルベルトをたつちとペロロンが両脇を抱えて店の奥へと消える。

「ガガーラン。私、何か失礼な事をウルベルトさんにしてしまったかしらっ。」

「いや、別に気にする事はないさ」

不思議に思うラキユースの問いを、楽しげにジョッキに注がれたエールを飲んで流す。その一方で、店の奥に連れていかれたウルベルトは。

「なにをやってるんですか、ウルベルトさん」

「正直、情けないですよ？」

「お、俺だつて……頑張つただぞ……」

思わず壁を殴る。痛い。

「別に女性と話せない訳じゃないですよね？」

「姉ちゃんとは話せてましたからね」

「たつちさんもペロロンさんも無茶言わないでくれよ……あんな素敵な人に緊張するなつて方が無理だろ？」

普段の威勢のよさなど欠片もない。恋に臆病な男が一人そこに居る。

「そうかもしれないけど、押せ押せで行かないと口説けないですよ？　俺なんて、この機会を逃すまいと頑張ってますからね」

「ペロロンさんは、少し抑えた方が……いえ、なんでもないです」

「とにかく俺を上手くフォローしてくれよ！　認める！　認めるから！　俺は、ラキユースさんに惚れてる！　これでいいだろう！」

「威張られても……ねっ？」

「そうですね。今日は、話せるように頑張りましょう。私とペロロンさんでフォローしますから。頑張りましょう、ウルベルトさん」

「お前ら……いい奴だな……」

二人は、ウルベルトを励まし、ラキユースの下へ共に再戦しに行く。結果に関しては……次回への持ち越しとなった。

第4話

三人は、王都からエ・ランテルへ徒歩で向かう事にした。もともと馬を借りるお金もないだけなのだが。移動手段である馬は、意外と値が張るのだ。

「ウルベルトさん。そんなに落ち込まないでください」

「そうですねー。頑張ってくださいって言われただけマシじゃないですか？ 俺なんて、イビルアイちゃんに会えなかつたんですから」

たつちとペロロンは、気落ちしながら歩くウルベルトを励ます。こんな状態じゃまともに歩けないと思い、ウルベルトの荷物は二人で交代しながら持っている。

「変な奴だつて思われた……嫌われた……」

二人の協力を得た昨夜の戦いは惨敗した。

「ウルベルトさんは、こう見えても料理が上手なんですよ？」

「そうなんですか。どのようなお料理を作られるのですか？」

「パ、パンに合う物とか、です……」

「パンにですか？」

「はい……」

弾む事の無い会話。他にも。

「最近、新しい魔法を覚えたんですよ、ウルベルトさん？」

「ファイヤーボールを覚えました……」

「第三位階の魔法ですよね？ 凄いです、ウルベルトさん！ 魔法を使える人にとっては、誇れるものですよ」

「そ、そうですね？」

「才能のある方でも覚えるまでには時間が掛かりますから」

ラクユースは、ウルベルトに微笑みかける。ラクユースも才能はあるが、努力をして今の力を得た。その事を知っているラクユースは、ウルベルトの努力を素直に心から称えている。

「ラクユースさんにそう言ってもらえると嬉しいです。すっごく嬉しいです」

「頑張ったかいがありましたね、ウルベルトさん」

「うんうん、よかったよかった」

「俺、今めちやくちや嬉しい」

好きな人に褒められた事も嬉しい。努力を認められたのも嬉しい。これ以上ないほどに幸せだ。

「そろそろ時間ですね。申し訳ありません。そろそろ私は、お部屋に戻りますね。皆さん、今日は楽しかったです。依頼の方、頑張ってくださいね」

どうやらもういい時間のようだ。ラキユースは、部屋に帰る為に席から立つ。

「も、もう帰られるんですか?」

「あまり遅くまで起きているとお肌によくありませんので。では、皆さん、おやすみなさい」

ラキユースは、最後に別れの言葉を言う。

(いいのかウルベルト? このまま見送るだけで)

ウルベルトは自分に言い聞かす。ここで何もしなければ前に進めない。

「あ、あの! ラキユースさん!」

「なんででしょうか?」

ウルベルトの声にラキユースは立ち止まる。

「お、俺、もつと頑張ります! 魔法をもつと覚えます! だからその時は、一緒に世界を変えましょう! 二人で最高の世界を創りましょう!」

思わず出た言葉がこれだった。

「世界を変えるとか……昔の癖が出るなんて……」

ウルベルトは、過去の自分を恨む。現実の世界に不満があったウルベルトは、ユグドラシルの世界で徹底的に悪を目指した。今ある不公平で汚い世界を壊すために。不満をぶつける為に。理想の世界を願って。

「大丈夫ですよ、ウルベルトさん。確かにスケールの大きい夢ですけど、ラキユースさんも引いてはいませんか」

「そうですよ。ちよつと、どう返していいか分からなかっただけで」

三人が見たラキユースの姿は、苦笑いだった。

「素敵な夢ですね」

そんな状態から出た言葉がこれだ。

「どうすればいいんだよ……」

あの時は、いっぱいいっぱいだった。自分なりに頑張った。その結果が世界を変えるだ。

「——たちさん、ウルベルトさん。前方にモンスターが見えます」

ペロロンから二人に警戒するように指示が出る。弓兵として、いち早く敵を発見するためにレンジャーのスキルも覚えている。

「相手は？」

「ゴブリンが三体。オークが二体ですね。見た限り、最下級の奴ですね」

この世界に来てから見るゴブリンとオークは、最下級のものばかりだ。話によると上のランクの者も居るそうだが、森などに行かない限りはまず会わないとの事だ。逆に言えば、そのおかげで森などにはなかなか行けない。モンスターは、一つでも上のランクになると能力も攻撃方法も変わってくる。勝てる見込みがない限り戦いたくはない。

「矢が少し勿体ないですが、ペロロンさん。お願いできますか？」

「いいけど、威嚇？ それとも、攻撃？」

ペロロンに言われて分かったが、距離はまだ十分に離れている。それこそ戦闘を回避して逃げられる距離だ。

「ウルベルトさん。モンスターが出ましたが、戦えそうですか？」

未だ調子の悪いウルベルトに尋ねる。

「……使ってもいいか？ 後の事考えないで？ 無性に炎をぶち込んでやりたい気分なんだ」

目が据わっている。本気でヤル目だ。よほどストレスが溜まっているのだろう。そうなると組み立てを考えないといけない。

「どうせならまとめて焼きたいですね。回復分は残しておきたいです。私とペロロンさんと敵をできる限りまとめましょう。その後、にウルベルトさんが敵を焼き払う。これでどうでしょうか？」

「俺は、それでいいですよ」

「俺もそれでいい。焼いてやる。憎しみの炎で灰も残らず」

「……うん、大丈夫そうですね」

敢えて考えない事にする。

「ペロロンさん。敵を此方に」

「わかりました」

ペロロンは、《遠矢》のスキルを発動する。他の二人、特にたっちの装備を優先していたのでペロロンの弓は初期装備の物だ。それを補うためにも飛距離を伸ばす遠矢は、最適のスキルだ。

「あの辺りかな?」

ついでに《精密射撃》のスキルも発動する。これで、遠くであつても狙いが定まりやすくなる。ペロロンは、弓に矢を番い狙い定め、放つ。放たれた矢は、モンスター達の中央よりもやや此方側で地面に落ちる。

「——どうやら掛かりましたね」

モンスター達は、矢を辿り此方に気づいた。

「もう一つ行きますね」

ダメ押しにもう一度矢を放つ。今度は、当てないようにわざと掠るように放つ。すると、掠りかけたゴブリンが怒りだす。当然だろう。

「ペロロンさんは、援護を。ウルベルトさんは、いつでも魔法を放てるようにお願いします」

「当てないように気をつけますよ」

「ちゃんと逃げろよ?」

「後は、お二人に任せます!」

怒りを露わにしたゴブリンが先頭に立ち、此方へと向かってくる。それを迎え撃つのは、たった一人。

「うおおおおお!!」

雄たけびを上げる事により、気合を入れ、相手を怯ませる。別にスキルでもなんでもないが効果はお互いに出る。たっちの声に怯んだゴブリンは、思わず立ち止まりバランスを崩す。それを見逃さない。ゴブリンの身体は、両断こそされないものの一撃のうちに倒れる。その光景にモンスター達は、呆気にとられるがそうする事すら許されな

い。

「ギャアア!？」

飛んできた矢が身体に刺さる。貫通こそしないものの狙われている恐怖が脳裏をよぎる。

「ニゲル!・ニゲル!」

残りのゴブリンが叫び出す。

「逃がしません!」

たっちは、矢に射られた方を無視して叫ぶゴブリンに一気に近づく。皮鎧に金属の板を張り付けただけの身軽な装備のおかげでたちの動きに制限はない。動揺していたゴブリンが身構える頃には、既にたっちは間合いに入っており、剣で真横に薙ぎ払う。

「グエガア……」

あと少し早ければ。あと僅かでも傷が浅ければ、もしかしたらゴブリンが振り下ろそうとした剣がたっちに届いたかもしれない。しかし、それはもう届く事はない。

「早く離れる、たっち!」

ウルベルトの声が聞こえ、反射的にたっちはその場から離れる。すると、二体のオークがすぐ傍まで迫っており、一体はたっちが居た場所に手に持っていた棍棒で力任せに叩きつけていた。

「お願いします!」

「わかっている!」

たっちが離れたのを確認すると、魔法の射程範囲まで近づいていたウルベルトが魔法を唱える。

「ファイヤーボール」

ウルベルトが唱えた火球は、オークの一体に当たるともう一体を巻き込むように爆発する。

「ペロロンさん!」

たっちは、体勢を立て直しながらペロロンに確認を取る。

「……まだ動いていますね」

そう言うと、ペロロンは追撃で矢を放つ。一つ、二つ、三つ。先ほど、矢が刺さった方は既にペロロンが射殺しているので、これで戦い

は終わる。

「火力が足りないな」

節約をしているので上乗せはしなかった。そう分かっているでも不満は出る。本当なら灰も残さず焼き払いたかった。

「ウルベルトさんには、回復の役割がありますからね」

そう言うたつちも全力ではない。今回は、常時発動している身体能力を向上させるもの以外はスキルを使用していない。こちらも節約だ。

「矢の回収、矢の回収」

それに比べ、ペロロンはスキルと矢を消耗した。こちらに関してはある程度は仕方がないと割り切っているが矢はタダではないので少し困る。それでも危険を冒し、怪我をするよりかはマシだと考えている。

「矢の値段にはなったかな？」

モンスターから換金用の部位を取り考える。元は取れるが割には合わないかもしれない。

「それでは、改めてエ・ランテルに行きましょう」

「そうだな。だが、できればもう少し戦いたい」

「エ・ランテルが見えたら全部出しきつちやいましょうよ、ウルベルトさん。溜まると身体に悪いですからね？」

ペロロンがウルベルトに小突かれながら再びエ・ランテルを目指し歩き出す。道中の小遣い稼ぎとウルベルトのストレス解消を兼ねながら。

第5話

三人は、無事にエ・ランテルに到着する。残念ながらエ・ランテルが見えてからモンスターを見つける事はできず、ウルベルトのストレスを完全には解消できずに終わってしまった。しかし、依頼を達成すればラキュースの好感が得られるだろうという事で渋々納得した。ウルベルトの意気込みは他の二人より強い。

「久しぶりですね」

「そうだな」

「個人的には、王都よりも好きですね」

久しぶりのエ・ランテルに三人は、少し心を落ち着かせる。王都は、場所柄どうしても貴族などの金持ちや身分の高い者が居る。そのため、常に気を使わないと厄介事に巻き込まれる可能性がある。それに比べると、エ・ランテルは一般人も多く居る為気が休まる思いだ。

「宿を取る前に冒険者組合に先に顔を出しましょう」

今回の依頼は、情報集めだ。エ・ランテルは、バハルス帝国に近く戦争では軍事拠点として利用される場所だ。立地としても他国との交易路にもなるので規模も人も王都に負けていない。情報を早く、多く集めるためには冒険者組合の協力は不可欠になる。エ・ランテルは、外周、内周、最内周部の三重の城壁に守られているのだが冒険者組合は、内周部の中央広場にある。

「組合長のアインザックさんに用があるのですがお会いできますか？

蒼の薔薇からの依頼なのですが？ それと、コレはモンスターの部位になります。換金の方をお願いします」

たっちが代表して受付嬢に話をする。アダマントイト級冒険者である蒼の薔薇からの依頼なので、エ・ランテルの冒険者組合長であるプルトン・アインザックに会う事ができる。

「少し此处でお待ちください」

受付嬢は、モンスターの部位が入っている麻袋を受け取ると他の組合員にそれを渡し、自らはアインザックの下に話を伝えるに行く。

「いやー、蒼の薔薇の名前は凄いですね。組合長に会えるんですから」

「今回の依頼も国と民を思つてのものですからね」

「素晴らしい……流石、ラキユースさんだ……」

「思いはそれぞれだが、蒼の薔薇の王国での役割には感心する。」

「此方に来られていたのですか？」

「声がした方を振り向く。知っている声だ。」

「お久しぶりです、モークさん」

声の相手は、ペテル・モーク。エ・ランテルに居た時に関わりのあるシルバー級の冒険者チーム《漆黒の剣》のリーダーだ。

「お久しぶりです」

「たつちとモークは、再会を祝して握手を交わす。危険な職業柄また会える事は素直に嬉しいものだ。」

「今日は、モークさんお一人だけですか？」

「仲間達は、買い出しに出かけています。今日は、休みを取る事にしたので。そちらは？」

「蒼の薔薇からの依頼で、エ・ランテルで情報集めです」

「蒼の薔薇ですか!？」

「王国の冒険者で彼女達の名前を知らない者は居ない。なぜか、ウルベルトが誇らしげにしている。」

「何か変わった事などがないかの調査です。今、組合長のアインザツクさんに会うために話を通してもらつてるところです」

「凄いですね……少し前までは、皆さんはアイアンだったので私達の方が先輩として接していましたが、今では同じシルバー。しかし、既に私達よりも上なのかもしれませんね」

モーク達との出会いは、アイアン級の冒険者になつたぐらいの頃だ。効率的にレベリングをするためにエ・ランテルに来た時の付き合いで、一緒にモンスター狩りをした事もある。当時は、彼らがシルバー級の冒険者として戦闘面や生活面でいろいろと助言をしてくれた。

「そんな事はありません。今でもあの時の事は忘れていません。皆さんに対しては、今でも感謝の気持ちを持っています」

「そう言ってもらえると嬉しいですね。そうだ。もし依頼の方が終わ

りましたら一緒にモンスターを狩りに行きませんか？ 今度は、少し森の方に行ってみようと思うんです」

「森ですか？」

モンスター狩りをする森と言ったら一つしかない。エ・ランテルから北に言った所にトブの大森林と呼ばれる場所がある。資源の宝庫となる場所のだが人の手はあまり入っていない。あの場所は、モンスターや危険な動物が多く棲んでおり、大変危険な場所なのだ。しかし、冒険者組合にはトブの大森林絡みの依頼は後を絶たない。危険だと分かっているとしても、そこに眠る宝を求める者が常に居るからだ。

「基本的には、森の周辺で行います。ただ、様子を見て少しだけですが森の中に入ってみたいと思います。モンスターもそうですが、上手くすれば薬草なども手に入りますので」

トブの大森林の魅力の一つだ。消耗品である薬草などを現地調達できる。更に言えば、売る事だってできる。危険ではあるが見返りも大きい。

「仲間と相談してみます」

モークに断りを入れてからウルベルトとペロロンと話す。

「いいんじゃないか？ 依頼を終えてからだから一週間程後になると思うが？」

「そうですね。特に断る理由もないですよ。モークさん達なら危険も冒さないでしょうし」

行動を共にした事があるので二人とも心配はしていない。それは、たつちも同じなので答えはすぐに決まる。

「王都から戻りましたらご一緒させてください。また、モークさん達と一緒に戦えるのを楽しみにしています」

「そうですか。私も楽しみにしています。それでは、一週間後に此処でお待ちしております」

漆黒の剣との共同でのモンスター狩りの約束をした。モークを見ると丁度、受付嬢が戻ってきた。

「プルトン・アインザックが御会いになるとの事です。どうぞ、こちらへ」

受付嬢の案内で、エ・ランテルの冒険者組合長であるプルトン・アインザックの下へと三人は向かう。

「久しぶりだね」

受付嬢に通された部屋にプルトン・アインザックが居た。彼は、元オリハルコン級の冒険者で今もなお歴戦の強者らしい雰囲気を漂わせている。

「お久しぶりです。アインザックさん」

「たっちが代表で、アインザックと言葉を交わす。」

「とりあえず、座って話すでしょう」

アインザックに促され、来客用の椅子に三人は並ぶようにして座る。その向かいには、アインザックが座る。

「蒼の薔薇からの依頼だそうだね？」

「はい。王都から出られない自分達の代わりにエ・ランテルの情報を集めてほしいとの事です」

「アダマンタイト級冒険者である彼女達には苦勞を掛けるな。とはいえ、何かあつたか……」

眉間にしわを寄せ考え込む。

「今ある問題は、野盗ぐらいだな」

「野盗ですか？」

「エ・ランテルから王都へと向かう道で、貴族や金持ち達の荷馬車や馬車が襲われる事件がある。商人の方からも被害は出ているが、組合としては貴族達や有力者達からいろいろと言われている。何かあるとすれば、それぐらいだろう。モンスター達に関しては、常に問題になっているし、他の場所でも野盗は出るからな」

一般的に使われる公道を通ってきたが自分達には何もなかった。ただ単に金の無い貧乏人とも思われたのだろう。実際、その通りだが。

「野盗の件は、どのようにな？」

「既に複数の冒険者チームにアジトを探させているよ。見つかり次第、ミスリル級とゴールド級の冒険者チームを派遣する。噂だと相当の手練れが居るそうだからね」

時間と手間の掛かる偵察をランクの低い冒険者チームに依頼し、アジトを発見次第高ランクの冒険者チームを派遣。特に問題があるとは思えない。

「それなら問題はなさそうですね」

「流石に何でも彼女達の手を借りるわけにはいかないからな。そうだ。君達も参加してみるか？」

「私達が？」

「噂は聞いている。相も変わらずモンスター狩りをしているのだろうか？ 知っていると思うが、冒険者としてのランクを上げるには、組合からの依頼を受ける必要がある。あくまでも組合が君達の実力と功績を見て決めるんだ。特に大事なものは、信頼に値する人物かどうか？

それを見定めるためにも組合からの依頼をもう少し受けてもらいたい。君達の実力は既にゴルド級に相応しいものだと聞いている。前に戦いを見せてもらった事があるが、素晴らしいの一言だった。実力はともかく、互いの事をよく理解した上で戦っていた。それこそ歴戦の古強者のようにな」

相手は、冒険者組合長で元オリハルコン級の冒険者だ。褒められれば嬉しい。特に嬉しいのが仲間との戦いを褒められたことだろう。前にも褒められたがチームワークが段違いで上手いと言われたことがある。

「共に戦った時間は誰にも負ける気はありませんから」

「だな」

「そうですね」

たつちの言葉にウルベルトもペロロンも同意する。喧嘩もしたし、憎みもしたし、離れ離れにもなったが実力は互いに認めていた。特にたつちとウルベルトは、意見が合わない度に何度も戦ったりした仲だが、それでもギルドの為には協力して戦っていた。おそらくだが、誰よりお互いの事を知っている。良い所も、悪い所も。仲直りしてからは、前以上に連携が取れるようになっていだろう。

「大した実力はなかったが開花したのだろうか。君達は、将来有望な冒険者だ。できる事があれば協力はしよう」

「ありがとうございます」

「別にかまわんさ。それで、返事は？」

「申し訳ありません。今の依頼が終わった後に漆黒の剣の皆さんとトブの大森林の方へモンスター狩りに行く約束をしていますのでお断りさせて頂きます」

「漆黒の剣とか……。彼らも有望な者達だろう。頑張ってくれたまえ」

「はい」

「但し、先ほどの話は忘れないでもらいたい。組合からの依頼を受ける。冒険者としては当然の事だ。いいね？」

「アインザックに念を押される。自分達に対しての期待からなのだろうが、言葉と目に有無を言わさぬ威圧感がある。」

「できるだけ努力します」

「たっちの言葉に合わせ、二人も頷く。」

「そうか。なら、今度はゴールド級の冒険者として会えるわけだな。楽しみにしているよ」

「アインザックに言われるがまま話を受ける事になった。別に困るわけではないが、漆黒の剣とのモンスター狩りが終わったら組合からの依頼を受けよう。」

第6話

王都リ・エステイーゼにある寂れた酒場で一人の男が酒を飲んでい
る。大柄な身体に似合わず、カウンターの隅で物思いにふけながら酒
を飲む。男の名前は、ガゼフ・ストロノーフ。王国戦士長にして、周
辺国家最強の戦士として知れ渡る男である。

「よお、ガゼフのおっさん」

「なんだ……ガガーランか」

そんなガゼフの下に蒼の薔薇のガガーランが訪ねてくる。

「聞いたよ」

そう言うと、隣の席に座りエールを一つ頼む。

「散々だったな」

つい先日の事だ。ガゼフは、討伐隊を率いて近隣の村々を襲う野盗
の集団を討伐へと向かった。

「ああ……まったくだ……」

ガゼフは、酒を口に含む。結果は、散々なものだった。多くの仲間
を失い。多くの負傷者を出した。

「噂で聞いたが、相手は帝国と法国だったのか？」

「ああ、そうだ。野盗は、帝国の手の者だった。いや、確証はないが法
国が後ろで手を引いているのだろう。ご丁寧に私達の方にまで貴族
達から妨害があつたぐらいだからな。せめて、王から与えられる装備
を身に着けていたら結果は……少しは変わったかもしれない」

自信はない。仮に王から国の宝である装備を一式与えられたとし
ても勝てたかは分からない。生きているのは、あの者達の力によると
ころが大きい。

「狙いは、ガゼフのおっさんだったか。でも、よく無事だったな？」

「既に王には報告してある。ラナー王女と懇意にしている蒼の薔薇な
ら話は聞いているだろう？」

「魔法詠唱者と戦士の二人組だったな？ 確か、アインズなんとかっ

て言う？」

「アインズ・ウール・ゴウンだ」

野盗の情報を追いかけて、いや、誘導されてカルネ村まで赴いた。その時には既に野盗であった帝国兵達は殺されていた。巨大で、強力で、凶悪なアンデッドのシモベを従えた魔法詠唱者と戦士の二人組の手によって。そして、その後にはスレイン法国の者達が現れた。罠だと思っただが、既に囲まれていた。そこで、その二人組に協力を求めたが受けてはもらえなかった。相手は、おそらく六色聖典。存在しない事になっている特殊な任務を行う者達。戦力差は絶望的だった。それでも戦った。村人を守るために。結果は、惨敗。多くの者達が命を落とした。

「あの者達は、強い。戦っているところは見ていないが分かる」

自分達では、歯が立たなかった者達をあの者達は倒した。魔法詠唱者から渡されたアイテムで、戦場から村の建物の一つに転移したので詳細は分からないが後には何も残らなかった。理解の範疇を超えた力をあの者達は持っている。

「話によると法国の六色聖典。物によって強さは違うらしいが、どれも弱くはない。俺達も昔に戦った事があるが強かった」

蒼の薔薇は、亜人種を守るために六色聖典の一つと戦った事がある。

「命を救われはしたが、不安はある。ガガーラン。この事は、内密で頼む。あの者達が何者か？ 何が目的で此処に居るのか分からない。うちは刺激したくない」

「わかってるよ。完全に隠す事はできないが表立って広める物でもない。ただ、こつちでは勝手に警戒させてもらうけどな。うちのリーダーも気にはなってるんだ」

「敵でないことを祈るばかりだな」

ガゼフの見立てでは、おそらく蒼の薔薇より強い。王国でも最強の冒険者チームと言われている彼女達に失礼だとは思っている。自分でもなんでそう思うかは分からない。しかし、あの者達から感じたのは異質で不気味なまでの力だ。だからこそ注意すべき相手であり、刺激はできただけ避けたい。

「まあ、こればかりは運だねえ。実力のある奴なんて知らないだけ

で居るもんさ。敵か味方かは別としてな」

「できれば、味方が欲しいな。唯でさえ、今の王国は戦力で帝国や法国に負けている。……せめて、アングラウスが居てくれればな」

昔に剣を交えた男を思い出す。

「確か、おっさんと御前試合で戦ったことのある奴だよな?」

「ああ、そうだ。アングラウスは、強かった。できれば、王国の戦士として力を貸してほしい。ただ、今は何処に居るかも分からない」

「居ない奴に頼っても仕方がないだろう。……そういえば、面白い奴らが居るぞ?」

「面白い奴ら?」

「最近、冒険者になった奴らなんだが強い。正確に言えば、将来有望な奴らだ。あつという間にカッパーからシルバーにまでなったからな。実力に関しては、既にゴールド級だって話だし、おっさん好みの奴も居るからな」

「ガガーランから見てもどうなんだ?」

「言つたろ? 強いつて。たつちとか言う戦士が居るんだが、あれは才能の塊だな。剣を交えれば分かる。性格もかなり良いし、気に入ると思う。他も癖はあるが、魔法詠唱者と弓兵が居る。どちらも負けず劣らずの男達だ」

ガガーランの話に興味が湧く。今は、少しでも戦力になる者が欲しい。

「興味があるなら冒険者組合に顔を出しな。今は、俺達の依頼を受けて、エ・ランテルで情報集めをしている頃だからな。そろそろ帰ってくるだろうよお」

「いい話を聞いた。少しは、気が安らぐ」

「なら、今日はおっさんの奢りでいいよなあ?」

「私より稼いでいるのにか? ……好きに飲んでくれ」

ガゼフは、それからガガーランから冒険者達の話聞いた。冒険者組合も目を付けているとの事だが、場合によっては引き抜きたい。今は、顔を知らぬ者達を思いながら酒を飲む。不安を少しでも忘れる為に。

◇◇◇◇◇

三人は、エ・ランテルでの情報収集を終え、王都へと帰ってきた。「ラキユースさんに合わせる顔がないな……」

エ・ランテルでは、大した情報が集まらなかった。冒険者組合長であるアインザックですら情報が集められない以上、聞き込みの成果に期待できないと判断して王都に戻る事にした。

「いいじゃないですか、ウルベルトさん。それだけ平和だという事ですよ。素晴らしいじゃないですか?」

「そうそう。まあ、野盗とかモンスターの話は普通にありましたけどね」

「俺は、凄いですねって褒めてほしかったんだよ」

たっちとペロロンは、足取りの重いウルベルトを何とか王都まで連れて帰ってきた。どれだけ前の事を引きずっているのだろうか?」

「それにしても、あれですね。なんか知らないうちに王都から野盗の討伐隊が派遣されてたんですね」

エ・ランテルで聞き込みをしていたらそんな話を聞いた。

「あまり街には居ませんでしたからね。しかし、村を襲うなんて人として最低です!」

たっちの言葉に力が入る。悪を許さない性格であるたっちからしてみれば、罪無き人に危害を加える者は許せないのだろう。

「でも、この程度の情報ならラキユースさんも知ってるだろ? 俺達と違って、街に居るんだし。ああ……何かないかな? プレゼントでも……いや、貴族のラキユースさんにプレゼントって金が……」

うなだれるウルベルトを連れながらも冒険者組合へと着く。

「入りますよ」

たっちを先頭にして建物の中へと入ると、蒼の薔薇のラキユース、ガガーラン、イビルアイの姿が見える。しかし、同じ席には知らない顔がある。

「もしかして、ラキユースさんの男かも?」

ペロロンの言葉にウルベルトが動く。

「なんだと!？」

その姿は、ガラの悪いチンピラそのものだ。見知らぬ男を睨みながら他の二人と共に彼女達の下へ向かう。

「お久しぶりです」

「お疲れ様です、皆さん」

お互いに代表して、たつちとラキユースが挨拶を交わす。

「報告なのですが、こちらの方は？」

報告をするために知らない相手を確認する。こちらの事をジツと見ている。身に着けている者からして戦士ではあるが初めて見る顔だ。

「こちらの方は、ガゼフ・ストロノーフ様です。王国戦士長と言えば、分かりますでしょうか？」

「初めまして、ガゼフ・ストロノーフと言います」

思わず三人は、呆氣にとられる。王国戦士長ガゼフ・ストロノーフの名前を知らない者は居ない。それだけの有名人だ。

「マジか……」

事実を知ったウルベルトは落胆から床へと崩れる。勝てない。身分とか含めて勝てる要素がない。相手は、周辺諸国最強の戦士と呼ばれる人間。地位も立場もある。ついでに金も。

「彼は、どうかされたのですか？」

そんなウルベルトをガゼフは、心配そうに見ている。

「いつもの事ですからお気になさらずに。報告の方は、どうしますか？」

「かまいません。お願いします」

落ち込むウルベルトは放って置いて、たつちとペロロンは空いている席に座り報告を行う。内容は、アインザックから聞いた件と村を襲ったという野盗の件の二つだ。

「報告ありがとうございます。報酬の方は、組合から頂いて下さい」

「ありがとうございます」

「村の方に関しては、既に聞いていますが……もう一つの方は物騒で

すね」

「エ・ランテルの冒険者組合で対応するそうですから問題はないと思いますが、何かされますか？」

「いえ、お任せしましょう。腕の立つ者が居るとの事ですが、ミスリル級とゴールド級が派遣されるのでしたら問題はないでしょう」

とりあえず報告は終わったのだが、先ほどからジツとガゼフに見られている。

「戦士長様。私に何か？」

「いや、噂通りだと思っただけ」

「噂ですか？」

「真面目な好青年だと聞いている。それに、剣の腕が立つと」

「戦士長様程ではありませんよ」

「どうかな？ もしよければ、剣を交えてみないか？」

「戦士長様とですか？」

「ガガーランから話を聞いて興味が湧いたんだ。実際に見てからは、より戦ってみたくなくなった」

ガガーランの方を見ると、ウインクを一つされた。相手は、あのガゼフ・ストロノーフだ。勝ち目はないだろう。

「——ちよつと、待った！」

話を聞いていたのか、復活したウルベルトが話に割って入る。

「その話、このウルベルトが受けよう！」

「ウルベルトさん？」

「少しは、カッコつけたいんだよ」

名誉挽回のつもりなのだろう。チラリとラキユースの方を一瞬だけ見た。

「だったら、俺もー！ イビルアイちゃんにカッコいいところを見せたい！」

今度は、ペロロンも声を上げる。

「無様に負けてしまえ、変態！」

「そんなこと言わないでよ！ きつと惚れ直すからさー！」

変態呼ばわりされてもめげない姿にウルベルトは素直に感心する。

他は、呆れているが。

「申し出は嬉しいが、私は剣で戦うので同じ形式の方がいいのだが……」

ガゼフの言葉に一理ある。戦い方によって相性もあるので同じ方が相手の力量は分かりやすい。

「私でよければ、お相手させて下さい。戦士長様の剣技をこの目で見たいと思います」

「ズルいぞ、たっち！」

「そうですよ！」

横やりがあるが無視して話は進む。

「帰ってきたばかりで申し訳ないが、私も暇ではない。さっそく、場所を移動しよう」

「はい」

たっちは、ガゼフと剣で戦う事になった。他の二人からあれこれ言われるが、たっちとしても興味のある相手だ。かつては、ゲームの中とは言えワールドチャンピオンとまで言われたのだ。勝負を挑まれて逃げる気などない。

第7話

ガゼフが三人と蒼の薔薇を案内したのは、王城であるロ・レンテ城外に造られている運動場である。案内されていくと数は少ないが兵士達が訓練をしていた。ガゼフの姿に気づいた者達は、姿勢を正して出迎える。

「此処なら存分に剣が振るえる」

「そのようです」

運動場の中央にガゼフとたっちだけが向かい、残りは離れて見る事にする。

「空を飛んで魔法で戦えば勝てそうなんだけどな」

「せこいですよ」

この世界に来てから戦士が上空に居る敵に対して有効な攻撃手段を用いるところを見ていない。王国戦士長ともなればあるとは思いますが、それでも勝てそうな気はする。

「それは違いますよ、ウルベルトさん」

「ラキユースさん！」

一緒に観戦する蒼の薔薇のラキユースがウルベルトの隣に来る。思わず姿勢がよくなる。

「相手がどんな攻撃手段を持っているか分からない以上は、油断は命取りになります」

「そうですね！ ラキユースさんの言う通りです！」

(ブレないなこの人)

こんなので大丈夫なのかと思うけど、気持ちはわからなくもないのでそつとしておく。

「なあ、仲間としてどう思うよ」

ガガールンからの問いかけに二人は考えてみる。

「見てみないと何とも言えませんね。たっちさんも強いですけど、ガガールンさんよりも強いんでしょう？ だったら負けるかもしれないですね」

「そうだな。まあ、やってみないとわからないが」

「なんだか勝てるかもしれないって口ぶりじゃねえか？ 相手は、周辺諸国最強の戦士とまで言われている相手なのによお？」

ガガーランの言いたいことも分かる。ただ、二人の答えは決まっている。

「やってみれば分かります」と思います」

「ただ強いだけじゃダメだからな」

二人のたっちへの信頼は厚い。仲間として共に戦ってきたから分かる。何度も喧嘩をして戦ったから分かる。たっちと言う人間がどんなものなのか。

◇◇◇◇◇

ガゼフと相對するたっちは、頭の中で考える。

身に着けている物は、お互いに軽装。ガゼフは、金属製。こちらは、革に金属板を張り付けたただけなので若干だがこちらの方が身軽だろう。武器は、互いに剣だけで盾は無い。ガゼフの事は知らないが、こちらとしては盾を使いたい。元々は、盾を使用して戦っていたが初期装備の盾が壊れてから何度も買い替える事になった。安物では、使い捨てで金が掛かる。安全と戦いやすさを考えれば必要だが、勿体ないので他に資金を回すことになった。

（盾のスキルは使えない。なら、剣のスキルだが……使う隙はあるのか？）

戦闘の要になるたっちは、常時発動型のスキルを主に選択している。スキルには、どうしても使用回数に制限があるのでその対策の為だ。その為、盾もそうだが剣を含めても技としてのスキルは、たった三つしか覚えていない。レベルが上のスキルを覚えられるまでの繋ぎ程度に考えていたが、どうしたものか？

「準備はできたか？」

「ええ、いつでも大丈夫です」

相手には、余裕が見える。当たり前前だろう。ガゼフからしてみれば、自分は格下なのだから。

「戦士長様。剣を交える前に、一つお聞きしてもよろしいですか？」

「なにかな？」

「武技は、お使いになれますか？」

ユグドラシルにはない、この世界にある概念。こちらで言うスキルの代わりに、この世界の者が使用する技。

「いや、あくまでも実力を知りたいだけだから使わない」

ユグドラシルにはない物なので予測はつかない。

「そうですか……」

たっちは、内心で笑う。別に武技を使わないと口にしたからではない。

「戦士長様と違い、こちらは本気で行かせて頂きます」

本気で来ない？ なめられているのは分かるがいい気はしないな。

「ああ、悪い癖が出てますね」

「相も変わらずだな」

そんな様子を見ていたペロロンとウルベルトは、そう口にする。

「癖ですか？」

「ラキユースさん。ラキユースさんから見て、たっちはどう見えますか？」

「……真面目な方でしょうか？ 誰にでも隔てなく接しているお優し

い方だと思います」

「普通ならそう思いますよね」

「でも、実際は違うんですよねー。たっちは——」

ペロロンが言葉を言い終わる前に事態は急に動き始める。

「——いきなり来るか!？」

「いつでもと、言っただけですよ？」

それは、突然だった。何もないうまま、たっちがいきなりガゼフの方に踏み出し剣を振るった。躊躇いの無い、本気の一撃だ。

「……それが、たっち殿の戦士としての顔か？」

ガゼフは、考えを改め直す。今、面前に居る者は先ほどまでの好青年ではない。反応できる速さではあったが、受けた剣から手に、腕に、身体に衝撃が確かに伝わっている。

「どうですかね？ 戦っている時の顔は見た事がないので、分かりませんよ」

たつちは、そこから動く。動く。動き続ける。

「——連撃か!？」

受け止められた剣を引き戻したと思えば、そこから剣を再びガゼフへと振るう。それを防げば同じように、同じように何度でも繰り返す。優雅さの欠片もない、力任せの連撃。それでも実際にこなすのは難しいだろう。

「——この程度か!」

ガゼフは、たつちの連撃を凌ぎ切り、振るわれた剣を剣先で弾き返すと反撃に出る。

(腕は悪くない。しかし、まるで素人そのもの)

初めは、その豹変ぶりに警戒したが蓋を開けてみれば馬鹿の一つ覚えのような連撃だ。

(期待外れだな)

確かに素質はある。あるだろうが、求めている者にはほど遠い。

「今度は、こちらから行こう!」

今度は、ガゼフの攻撃になる。剣を弾かれ、体勢を崩したたつちは、ガゼフの攻撃を受ける為に防戦一方になる。先ほどまでの勢いは完全に無くなり、見る影もなくなっている。

「……なあ、たつちの戦い方ってあんなだったか?」

剣を交えたことのあるガガーランが不思議に思う。少なくとも、自分と戦った時はああではなかった。

「悪い癖が出てますからね」

「ああ、本当にな」

その答えのようにペロロンとウルベルトはそう呟くが理解がでない。

「そういうえば、この勝負の勝ち負けってどうなんですかね？ やっぱり、先に攻撃を当てたらになるんですかね?」

「そうでないと程度にもよるが、ただの殺し合いだからな。ガガーランさん、そこところはどうなんですか?」

「そうだな。普通は、負けを認めるか、相手に誰が見ても分かりやすい攻撃をしたらだろうな。まともに振るったら死んでるだろ、って思えるような」

「なら、俺はたっちさんに今夜のゴハンを賭けますね」

「それだと賭けにならないだろ?」

二人の言葉の意味が分からない。二人の中では、あのガゼフにたっちが勝つ光景が見えているのだろうか?

「あまり、ストロノーフ様を侮らない方がいいですよ?」

「御言葉ですが、ラキュースさん。こればかりは、言わせてもらいます。たっちさんは、強いんですよ。ムカつくぐらいに」

「そうそう。それに、あの人。戦いだと普段と違うからねー」

「違う?」

「たっちさんは、戦闘狂なんですよ」

「怖いよね、あれ。俺達の中でも一番戦いに入れ込んでたからさー」

その時である。大きな雄たけびが上がる。

「うおおおお!!」

それまで防戦一方だったたっちが攻勢に打って出る。

「――《返し技》」

たっちが覚えている剣のスキルの一つ。

「――これは?」

ガゼフが振るっていた剣筋の一つに合わせて、スキルで反撃を行う。相手の攻撃に対して行うスキル。全ては、コレの為に演技をしていた。稚拙な連撃で相手を油断させ敵に攻めさせる。

(私をなめないでください!!)

ガゼフは、初めから本気ではなかった。相手は格下。様子を見る為に武技は使わない。それどころか、こちらの連撃に対する答えが様子見の剣だった。力が込められていない。勝つ意志の無い剣。たっちの持つ戦いで勝利への誇りを完全に侮辱した行為だ。

「――《強撃》」

更にもう一つのスキルも使用する。ガゼフの剣もこちらへと振られていく。しかし、相手は手を抜いていた。相手からの攻撃と屈辱

に耐え、狙った隙は返し技のスキルにより速度を増し、こちらの剣を先に届かせるだろう。だが、それでも足りない。強撃のスキルで上乘せされた渾身の剣の一振りを叩き込まないと気がすまない。

「――《流水加速》」

ガゼフは、思わず武技を使う。

たつちの目に不可思議な光景が見える。あと少しで渾身の一撃が当たると言う瞬間。ガゼフの身体が思いもよらない速さで動いたのだ。まるでこちらの時間が止まり、ガゼフだけが動いたような。既に止まらない剣は、ガゼフを捉えることなく空を切る。

「――見事！」

反応が遅れる。

「――ッ――」

身体に強い衝撃を受け地面に勢いよく転がる。倒れる前に一瞬だが、ガゼフの姿が見える。どうやら剣ではなく、肩口からの突進を受けようだ。重心が崩れた体勢で受け、なすすべもなく倒れたからか、体中が痛む。だが――

「使い……ました、ね……武技を」

「ああ、そのようだな」

ガゼフは、使う気の無かった武技を使った。否、使わされた。仮に使わなければ、致命傷を受けていたかもしれない。たつちが振るった剣は、命を奪う剣だ。

「……申し訳ありませんが、戦士長様。もう少しだけ、お付き合いですか？」

今、たつちの頭の中で新たな選択肢が生まれた。どうやら今の戦いでレベルが上がったようだ。

(あの速さに対抗できるようになりたい)

選択肢の中からガゼフの速さに対応できる物を選ぶ。負けはしたが、まだ戦える。

「たつち殿。今度は、私も本気で行く。それでいいかな？」

「ありがたい話ですね。戦士長様に本気を出して頂けるなんて」

選択を終えたたつちは、立ち上がると剣を構える。

「では——行きます」

今度は、こちらも初めから本気で行く。先ほどのような奇策が二度も通じる相手ではない。たっちが全力で振るう剣をガゼフは、受けずに剣先で捌き、外へと流す。

「——甘い！」

ガゼフは、返す刃でたっちを狙う。それを見越していたのか、たっちは後ろへと下がる事で躲す。だが、そこからガゼフは剣を押し込むようにして追撃の突きを見舞う。

「——いいですね！ 強いですよ、戦士長様！」

完全に避けきる選択肢を捨て、たっちは前に出る。ガゼフの剣が頬を掠め、血が吹き出ようがお構いなしに前に出たたっちは、先ほどのお返しとばかりに体当たりを仕掛ける。

「荒々しいな！ それが、たっち殿の本性か！」

ガゼフは、たっちの体当たりを正面から受け止める為に身構える。まるで巨石のようなガゼフに容易く体当たりを防がれるが、手元に剣の感覚が戻る。振るえる。下からではあるが振り上げるようにする。これには、流石のガゼフも怯む。互いの身体で死角になっていた剣を間一髪で避けきるのは流石だが、体勢は崩れる。

「——強撃の連撃はどうですか！」

先ほどの稚拙な物とは違い、丁寧に振るわれる剣。それに、強撃のスキルで力を上乗せしている。だが、それを体勢が崩れながらもガゼフは受け切り、徐々に体勢を立て直していく。

「——気に入った！」

ガゼフの目つきが変わる。どうやら、たっちを自分の相手として認めようだ。

「——《四光連斬》」

ガゼフの剣が増えた。否、増えるように見えた。

「——ッ……ガハッ……」

同時に叩き込まれる四連撃。先ほどまでたっちがやっていたのは違い、同時に来たために躲しようがなかった。

(これが、戦士長の武技……)

まともに四つもの剣撃を受けた。意識はあるが、身体に力が上手く入らない。悔しい。悔しいが、見事としか言いようがない。

「いい戦いだっただ」

既にガゼフは、剣を納刀する。

「その……ようですね……」

気合い。意地。誇り。かき集められる物を集めるだけ集めて、倒れたいのを堪える。これ以上は、負けたくはない。絶対に倒れてなるものか。

「まったく、賭けに負けたじゃないか」

「いいじゃないですか、二人とも負けなら奢らなくてすみますし」

勝負が着いたと判断したからか、ウルベルトとペロロンがたっちの下に来る。

「ライト・ヒーリング」

ウルベルトが魔法でたっちを治癒する。どうやら手加減はされているらしく治りそうだ。

「……ウルベルトさん」

たっちは、傷が癒えるのを確認すると息を整え、再び手に持つ剣に力を籠める。

「私の我儘に付き合ってもらってもいいですか？」

「……回数には限りがあるからな」

「こうなるなって思っていましたよ。たっちさん、負けず嫌いでもんね」

慣れているのだろう。二人は、元の位置に戻る。

「戦士長様。もう一戦、お願いします」

たっちは、剣を持ち構える。相手の返答なんて興味はない。受けないのなら、受けるようにするだけだ。

「どうやら、気絶でもしないと止まらなそうだな。いざとなれば、ラキユースさんも居るからな。気が済むまで付き合おう」

「いいのか、リーダー？」

「少しぐらいなら問題はないわ。ただ、余力は残しておきたいのだけど……どうなのかしらね？」

ラクユースの目には、戦いに飢える二人の男の姿がある。緊急時の為に余力は残しておきたいが、こちらの事など気にはしてくれないだろう。

「では、後は気にせずに行きますね。行きます、戦士長様！」

「受けてたとう！」

たっちの剣を受ける為にガゼフは身構える。おそらく、この戦いは長引くだろう。しかし、緊張感が常に漂う戦いを見ている者はそうは感じない。内から滾る興奮が時間など忘れさせる。

(強いな……)

そんな中。唯一人、冷静に見ている者も居る。

(異常なまでの強さ……神人なのか?)

イビルアイは、急成長するたっちを見てそう思う。この世界には、神人と呼ばれる者が居る。プレイヤーと呼ばれる六大神の血を持って生まれ、その血を覚醒させた者は人では得る事の出来ない力を得られるという。もしかすると、たっちは……いや、他の二人も？

「ありえないな」

神人は、希少だ。存在する事が珍しいのに同じチームを組んでいるなんてあるのか？ わからない。わからないが唯一つ言えるのは、周辺諸国最強の戦士と今も戦っている者が居るという事だ。成長を続けながら。

第8話

「たっちとガゼフの戦いは、本人達のあずかり知らぬ場所でちよつとした騒ぎに発展していた。」

「戦士長様と戦ってるのってシルバー級の冒険者なんだろう？」

「そうらしいぞ？　でも、本当にそうなのか？」

「いや、流石に嘘だろう？　シルバー級であそこまで戦えるかよ」

運動場に居た兵士の何人かが知り合いを呼びに行つた。そして、その者達が他の者を。そんな感じで王都中にちよつとした娯楽として話が広まり、多くの見物人が押し寄せていた。

「ハイハイ！　押さないでください！　押さないでください！　ちやんと席はありますから！」

「エールにぶどう酒！　肴に干し肉や焼き肉もありますよー！」

ウルベルトとペロロンをはじめ、集まつた観客達相手に商売を始める者も現れる。今では、ちよつとしたお祭り状態だ。

「いいですね、戦士長！　どんな攻撃をしても防ぎ切るなんて素晴らしいですよー！」

「たっち殿こそ！　戦えば戦うほど動きがよくなっているようだ！」

当の本人達は、周りの事など気にもせずには戦い続けている。これで何度目だろう。既にウルベルトは、MPを使い果たしている。ラキユースに関しても似たようなものだ。当人達もとつくにスキルや武技は使えなくなっている。それでもまだ続けている。

「いい加減にしてほしいわね……」

ラキユースも初めは、二人の戦いを楽しみに見ていた。剣を扱う者としては、学ぶ事の多い戦いだったからだ。

「いいじゃねえか？　ガゼフのおっさんも楽しそうだぞ？　最近じゃ、まともに相手になる奴が居なかつたからな」

ガガーランは、酒瓶を手に持ちながら言う。周辺諸国最強の戦士と言われるガゼフの相手ができる戦士は少ない。それこそアダマンタイト級冒険者であるガガーランなどを含めて王国内だと数人ぐらいだろう。だからこそ新しい相手を見つけられて久しぶりに興奮して

いるようだ。

「それにしたつて……でも、本当にたつちさんは凄いわね。ストロノーフ様が武技を使えば負けるのだろうけど、それでも対等に剣を交えられるようになってきたように思える」

「そうだなあ。たつちの学ぶ早さは異常だろうよお。むしろ、たつちの考えに身体が馴染んでいっているようにすら思える。元々がこれで、今までは制約でも受けてたんじゃないかってぐらいになあ」

「そうね。今の方が何故だか分からないけど、たつちさんらしい気がするわね」

この戦いでたつちは間違いなく成長している。ガゼフに負け、回復し、再戦する度に戦っている時間が確実に伸びている。才能と言えはそれまでだが、それよりもガガーランが言っていた言葉の方が正しく思える。元々、たつちは強かった。今よりも遥かに。しかし、何かしらの原因で弱くなってしまったと考える方が自然な程に自分の動きを把握している。

(レベルが上がらない……)

ガゼフとの戦いで三回ほど選択肢が出た。しかし、それ以降は出てこない。戦うだけよりも倒す方が経験値を多く得られる。

(戦士長様なら一気にレベルが上がりそうな気がする)

心の何処かでそんな黒い考えが浮かぶ。もちろん本心ではない。ただ、目の前に居る相手をどうしても倒したい。倒してみたい。

「——考え事かな？」

思考による反応の隙をついて、ガゼフが動く。本気を出したガゼフは、ほんの些細な隙も見逃してくれない。

「——ええ、少しだけっ！」

なんとか剣で捌く。しかし、やはり差はある。

「……これで終わりのようですね。悔しいですが」

捌く事はできた。ただ、その後の動きがよくなかった。動いた先には、既に振られた剣があり首元へ突き付けられていた。こちらと同じようにガゼフも成長している。こちらの手の内は、既に読まれ切っている。

「もう一戦しますか、たっち殿？」

「いえ、結構。戦士長様の御力は十分に分かりました。今の私では、これ以上は無理のようです」

「……そうか。いい戦いだった」

互いに剣を鞘に納め、固い握手を交わす。

「やっぱり、戦士長様はスゲーやっ！」

「でも、あのたっちもなかなかじゃないか！」

長きに渡る戦いを見守っていた観客達は二人を称えながら拍手をする。今この瞬間。間違いなく王国の中で最も賑わっているのはこの場所だろう。

「終わっちまったか……」

「いやー、十分じゃないですか？」

ウルベルトもペロロンも馬鹿ではない。全て自分達ではやらずに各飲食店に話を持っていきマージンを貰う手はずになっている。観客の数は、優に百は超えているだろう。売り上げの一割を貰う事になっている。人をより多く集める為に雇った運動場に居た兵士達に分け前を払っても十分な利益が見込める。

「エ・ランテルに向かうのは明日ですから今日は少し贅沢しましょうか？」

「いいな。ラキユースさんを誘ってくる」

「なら、俺はイビルアイちゃんを」

仲間であるたっちを放って置いて二人は本能のままに動く。今日は、朝までドンチャン騒ぎだ！

◇◇◇◇◇

ナザリツク地下大墳墓と共に見知らぬ世界へと来たモモンガは、何とか頑張りながら日々を過ごしていた。カルネ村という村が襲われたら助け、王国戦士長であるガゼフから助けを求められた時もなんだかんだ助けた。しかし、未だに見知らぬ世界に不安のあるモモンガは、この世界を知るために様々な方法を考えた。その内の一つが、冒

険者になる事。お共にプレアデスであるナーベラル・ガンマを連れ、エ・ランテルにある冒険者組合で冒険者として登録をし、宿を取り情報を集めてから再び冒険者組合へと依頼を受けに行った。ただ、物事はなかなか上手くはいかない。この世界では、言葉は分かるが文字が読めない、書けない、分からない。掲示板で依頼を確認しようにも内容が分からないので奇策に出た。適当に選んで受付嬢に渡し内容を聞く。内容は、ミスリル級への依頼だった。しかし、そこは偉大なるナザリック地下大墳墓の支配者。今は、ただ一人だけのギルドであるアインズ・ウール・ゴウンの名前を名乗っている。退くわけにはいかない。

「私は、それを受けたいのだ」

「そう、仰られますも」

「くだらん規則だ。昇級試験を受ける日まであんなみすばらしい仕事を繰り返さなければいけない事が不満でな」

「仕事が失敗した場合、多くの方の命が危険に晒されます」

受付嬢の言い分は分かる。組織にとって信頼は築くのが難しく大切なものだ。それをこうして我儘で壊そうとしているのだ。正直、他の冒険者達からの視線も痛い。当然の内容の愚痴や文句を言っている。

「後ろに居る私の連れは、ナーベと言うのだが彼女は第三位階の魔法の使い手だ」

ナーベは、冒険者をする時のナーベラル・ガンマの名前である。モモンガことアインズも冒険者をする時は、モモンを名乗る事にしている。何か問題が起きた時の対策の為だ。

「第三位階……」

「いや、流石に……なあ？」

この世界の事は、カルネ村やガゼフを襲った者達を捉えて少しは知る事ができた。やり方は、ナザリックの者達に任せたが、どうやらこの世界だと第三位階の魔法でも凄いらしい。ユグドラシル基準であれば、あつという間に過ぎるような段階のものだがこのざわめきようである。どうやら少しナーベの機嫌が良くなったようだ。素晴らし

いまだに見下した目を向けている。

「そして、私も当然のようにナーベに匹敵するだけの戦士。この程度の仕事など容易く成し遂げてみせる。必要なら力を見せよう。だから、この仕事を頼む」

さて、どうだ？

「……申し訳ありませんが規則ですので、それはできません」
頭を下げられての謝罪。この辺りで仕掛けるか。

「それでは仕方がないな。我儘を言つてすまなかつた」

まずは、低姿勢で非礼を詫げる。こちらの方が悪いのだから当たり前だ。

「では、カツパーの依頼を見繕つてくれないか？ できれば、難しい物を頼む」

あれだけ言ったのだから少しは見栄を張っておきたい。

「あつ、はい。畏まりました」

受付嬢は、掲示板の方へと向かい探し始める。これで、依頼が受けられる。我ながら素晴らしい機転の利きようだ。頑張れ、モモン。お前がしつかりしないと大変だぞ。

「——あつ、あの……モモンさんですよ？」

突然、声を掛けられる。この街にモモンの名前を知る者が居たか？

「どちら様で？」

声のした方を見ると少年が居た。前髪が長く目元が隠れている。

「初めまして。僕は、ンファイレア・バレアレと言います」

「バレアレさん？ そのバレアレさんが何の用で？」

「その、モモンさんに依頼をしたいのです」

「依頼？」

初めて会ったはずの人間に依頼？

「何処かでお会いしましたか？」

「いえ、会ってはいません。ただ、お話を聞いて」

「話ですか？」

「宿屋での件を聞いたんです。あつという間に一つ上のランクの冒険

者を簡単にふっ飛ばしたって。カッパーの方なら依頼料も安いので、依頼してみようと思ひまして」

「なるほど」

確かに一理ある。実力のある者を安く雇えるのなら得だろう。しかし、どうも引つ掛かる。

「——バレアレさん。もしよければ、俺達が引き受けますよ」

組合の中に居た冒険者から声上がる。

「そんな見知らぬ奴よりも俺達の方がいい働きをしますよ」

四人でテーブルを囲んでいた内の一人がこちらに来る。モモンとナーベを交互に見るが、明らかに見る目が違う。こちらは、憎しみのある目で。ナーベの方は、下心が丸わかりな目だ。

「その方がいいかもしれませんね。私達は、まだこの辺りにも詳しくはありませんし、冒険者になって日も浅い。先輩方に任せるとしましょう。申し訳ありません、バレアレさん。またの機会に。行くぞ、ナーベ」

「はい」

「ちよつと、待ってくだ——」

モモンは、呼び止めようとするンファイレアを無視して、ナーベと共に建物から出ていく。

「大丈夫ですよ、バレアレさん。あんないけ好かない野郎よりも俺達が受けますから」

「で、でも……」

ンファイレアは、困りはするが渋々この冒険者に仕事を依頼する。その頃、建物を出て少し歩いたところで人気のない事を確認して、《メッセージ》の魔法を繋げる。この魔法は、遠くにいる相手と会話をする事ができる。

「アルベド。先ほどの一件は見ていたか？」

メッセージの相手は、ナザリック地下大墳墓からこちらを監視させている階層守護者統括のアルベドである。念の為、周囲に危険な人物が居ないか常に監視させている。

『はい。見ておりました。アインズ様への数々の暴言……許すわけに

はいきません』

言葉だけだが分かる。アルベドは本気で怒っている。ナーベ同様アルベドも人間を良く思っていない。それに加えて、ナザリックの者は例外なくアインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーを至高の存在として忠誠を誓っている。更にアルベドの場合は、自分の行為によるものだがモモンガの事を愛している。そのため、自分絡みの件だと他の者達よりも機嫌が悪くなる。今も、何かしらの呪詛的な言葉を口にしている。正直、怖い。

「ゴホン。アルベド、話を進めていいか？」

『逆さに張り付けして焼き——申し訳ありません。どうぞ、モモンガ様のお言葉をお聞かせください』

「アルベド。今の私は、モモンガではない。アインズ・ウール・ゴウンだ。更に言えば、冒険者としている時はモモンになる」

『申し訳ありません。以後、気をつけます』

「よろしく頼む。それで、話なのだが。先ほどのンフィーレア・バレアレについて調べてほしい。確かに彼の言った言葉には一理ある。しかし、それだけで見知らぬ者に依頼をするとは思えない」

仕事の内容は聞いてはいないが、わざわざ指名するほどだ。それを値段が安いからと知らない者に依頼するか？　もしかすると、こちらを調べる事が目的かもしれない。残念ながらこの世界の事は知らない。簡単にボロが出てしまう。せめて、他の冒険者と一緒ならいいが。

『わかりました。すぐに調べさせます。他には、何かありませんか？』
「そうだな。詳しくは、戻ってから話すがモンスター狩りをしようと思う。金も手に入る上に力を見せつける事もできるだろう。ナザリックから誰かを連れていく事にする。戻るまでに決めておいてくれ」

依頼はダメだったが、他の方法でやって行けばいい。それまでには、文字ぐらい読めるようになっておきたいものだ。



「なんだか凄そうな人達でしたね」

「くうー、あのナーベちゃんめちやくちやいいよねえ！ あんな美人と結婚してえー！」

「なら貴族にでもなるのである」

「あの戦士の方、とても高そうな鎧を着ていましたね。貴族なのでしょうか？」

先ほど行われた冒険者組合での騒動の一部始終を見ていた漆黒の剣は口々に言葉にする。漆黒の剣のリーダーで戦士のペテル・モーク。レンジャーのルクルト・ボルブ。スペルキャスターのニニヤ。ドルイドのダイン・ウツドワンダー。

「羨ましいですね。あのような鎧を着られるなんて」

「俺は、ナーベちゃんの方が羨ましいけどなあ！ ああ……あんな子と一緒にチームになれたらどんなに幸せかあ……」

「しかし、見たところによると二人組。男女の仲なのかもしれないのである」

「貴族と従者でしょうか？」

「俺のナーベちゃんがあのお男に……許せねえ……」

「別にルクルトのものではないでしょう。それよりも話を進めましょう。そろそろ王都からたちさん達が来る頃です。効率的にモンスター狩りを行える場所を決めておかなければいけません」

順調に行けば、今日ぐらいに王都からたち達がエ・ランテルに来る予定だ。その前に聞き込みをして集めた情報からモンスターを多く狩れる場所を決めておきたい。更に付け加えれば、トブの大森林で薬草なども採取したい。場所は慎重に選ぶ必要がある。

「いやー、やっと戻って来れましたねー！」

「運よく荷馬車に乗せて頂けて助かりましたね」

「まだ野盗が居るそうだからな。こちらは楽ができる。あちらは、タダで護衛をしてもらえる。別に感謝する必要はないだろう」

漆黒の剣の四人が話を始めようとした時に待ち人の声が聞こえる。

「丁度いいところに来たぞー！ おーい、こつちこつちー！」

ボルブは、組合の入り口に居るたち達を呼ぶ。

「お待たせしました」

「いいえ、今回はよろしくお願いします」

代表で、たちちとモークが挨拶と握手を交わす。

「お久しぶり、ニニヤちゃん。コレ、俺からのプレゼント。臨時収入が入ったからニニヤちゃんの為に買ったんだー」

ペロロンは、ニニヤに花柄のブローチを渡す。

「ありがとうございます。ペロロンさん」

「ニニヤちゃんにそう言ってもらえると買ったかいがあるってmondane」

「ペロロン。念の為に言っておくが、ニニヤは俺達の家族みたいなもんだからな?」

ニニヤとペロロンの間にボルブが割って入る。

「はいはい。わかってますよー」

「絶対分かってないだろ、お前?」

「分かってますよ。気にしないで」

「ウッドワンダーさん。これは、土産の酒です。王国の北部の物らし

いです。今日は、皆で飲みましょう」

「ウルベルト氏には感謝なのである」

傍で取っ組み合いをしているペロロンとボルブを無視して、ウルベルトはウッドワンダーに土産の酒を渡す。今日は、再会を祝いながら明日のモンスター狩りの話をする事になる。

第9話

漆黒の剣が宿泊する宿に移動し、明日行われるモンスター狩りの話をさっさと済ませ、三人と漆黒の剣は親睦を深める為に食事をしてる。此処は、宿と酒場が一緒になっている所だ。

「戦士長様との戦いですか？」

「たっちが強いのは知ってたが、また随分とすげーことやってんだなあ」

「完敗でしたけどね。戦士長様は、本当に強かったですよ」

この前の王都での話をしてみた。初めは、ペロロンが話したので嘘だと思われたが、たっちが話すと受け入れられる。

「俺って信用無いんですかね？」

「無いんじゃないのか？」

「なんで、そんなこと言うんですか？ ニニヤちゃんは、信じてくれたよね？」

「えっと、はい。もちろんですよ」

「ニニヤちゃんに信じてもらえれば十分だね！」

ペロロンは、機嫌を良くするが傍から見れば嘘だと分かる。ニニヤの表情が引きつっているから。

「そういえば、ちよつと変わったことがあったんですよ。今日の事なんですけど、冒険者組合に変わった二人組が現れまして」

「変わった二人組ですか？」

「なんだか凄い高そうな全身鎧を着た奴と俺の愛しいナーベちゃんの二人組。羨ましいよなあー。俺もあんな美人と一緒に過ごしたいって！」

「貴族でしょうか？」

「高そうな全身鎧なんて普通の奴は着れないからな。たっちさんの装備を探しに行った時に見たが、今の俺達だと手が出せない値段だからな」

今狙っているのは、鋼鉄製の全身鎧と盾だ。本当は、ミスリル製の物が欲しいのだが値段が高過ぎて話にならない。今のままでもたっ

ちは強いが、本来は全身鎧と盾を用いて戦う。戦力増強の為にも是非欲しい装備だ。

「おいおい、たつちもウルベルトもナーベちゃんには興味なしなの？」

あんな美人そうそう見る事ないぜ？」

「好みなんて人それぞれだろ？ それに俺には、狙っている人が居るしな！」

「私も居ますので」

「かぁー！ まったく見てないからそんなこと言えるんだ！ ダイ
ン、お前からも言っておくれよ！」

「好みは人それぞれである。しかし、ルクルット程でもないにしろ組合に居た者達は目を奪われていたのである」

「二ニヤちゃんも見たの？」

「はい。とてもお綺麗な方でした。何処かの国の姫に思えるほどに」
「女性である二ニヤさんが言うのでしたらそうなのかもしれませんね」

「たつちさん。あまりその事は」

モークから指摘され、たつちは謝る。実は、二ニヤは冒険者になる時に女性であることを捨て男性として冒険者をやっている。チームを組む時は、基本的にどこも同性で行う。異性が混ざると色恋などでチームの和が崩れやすいからだ。長く、揉め事を少なくするための一つの知恵である。漆黒の剣は、二ニヤが女性だと知っても受け入れはしたが事はそんな単純なものではない。これから先の事も考えると秘密にしておいた方がいい。二ニヤの為にも。

「でも、プレゼントは身に着けてほしいな。そのブローチの模様の花ってさ、無事、安全とかの意味があるんだって。理由はあるのかもしれないけど、二ニヤちゃんは、あくまでも二ニヤちゃんだからそれぐらいのオシャレはしてもいいんじゃない？ できるだけ男でも持って大丈夫そうなの選んだんだしき」

「ペロロンさん……」

二ニヤは、懐からペロロンに貰ったブローチを取り出す。二ニヤも女性である。こういった物に興味がないわけじゃない。

「でも、ペロロンさんは、すぐに気づきましたよね。ニニヤの事」

「俺は、男装でも余裕でいけるからね！ 男装も一ジャンルに過ぎない！ 可愛いおん——」

「——黙ってような」

ウルベルトがペロロンの口を塞ぐ。今しがた、モークに注意されたばかりだ。

「ペロロンさんではありませんが、母の形見や想い人からの贈り物と誤魔化す事もできると思います。身に着けてみてはいかがでしょうか?」

「私なんかが身に着けてもいいのでしょうか?」

「いいと思いますよ、ニニヤ」

「そうそう、たまにはオシヤレしちやいなよ、ニニヤ」

「うむ。似合うと思うのである」

仲間達からの言葉も受けて、ニニヤも気持ちを決めたのだろう。ブローチを自分の着るローブに付ける。

「ニニヤちゃんが俺の——」

とりあえず、ウルベルトはペロロンを適当に床に投げ飛ばす。うるさいし、邪魔だ。

「似合いますよ、ニニヤさん」

「ええ、本当に」

「今度は、俺達もなんか買うかあ?」

「それはいいと思うのである」

褒められて頬を赤く染めるニニヤを囲みながら夜は更けていく。明日の事など何も知らずに。

◇◇◇◇◇

ナザリック地下大墳墓にある執務室にアインズは居る。冒険者組合から戻る前に少しばかり情報を集め、宿にナーベラルを残し帰還した。

「急な呼び出しに集まってくれた事を嬉しく思う。アウラ、マーレ」

「アインズ様に呼ばれたのでしたらすぐにでも」

「は、はい！ アインズ様に呼ばれたらすぐにでも来ます！」

ダークエルフの双子の兄弟。姉のアウラ・ベラ・フィオーラ。弟のマーレ・ベロ・フィオーレ。製作者であるギルドメンバーの趣味で性別とは逆の服装を着ているのが特徴だろう。アウラは、男装を。マーレは、女装をしている。どちらも幼い子供の姿をしているがナザリツク地下大墳墓の第六階層の守護者である。

「二人には、トブの大森林で緊急時の避難場所となる建物の建設を申し付けている。しかし、今回は別の件を頼みたい」

アインズはそこで言葉を止める。残りは、傍に控える守護者統括であるアルベドからある。腰からの黒い天使の翼、こめかみから生えた山羊の如き角。縦に割れた虹彩と金色の瞳など奇異な点はあるが絶世の美女である。主に運営管理などナザリツクの内の業務を任せてある。

「アウラ、マーレ。あなた達には、アインズ様と共にトブの大森林にてモンスター狩りをしてもらいます。既にある程度は、調べてあるのよね？」

「はい。建設予定地の周辺だけですが、言われた通りナザリツクに従属するか、敵になる者が居ないかは調べてあります」

「その中にアインズ様の御身を脅かすものは？」

「居ないと思います。一番強そうなのもあたしのシモベよりも弱そうですから」

アウラは、ビーストタイマーとして、多くのモンスターをシモベとして使役している。

「あの場所には、《森の賢王》と呼ばれる者が居るらしい。カルネ村でもエ・ランテルでも話は聞いたが伝説の魔獣だそうだ。そんな感じのは居なかったのか？」

「アインズ様のお言葉だと森の南側との事でしたが、それらしいのは

……ねっ、マーレ？」

「う、うん。特には居なかったと思います」

（もしかして姿を隠しているのだろうか？）

なにせ相手は伝説とまで言われる魔獣だ。そう簡単には姿を見せない可能性もある。

「そうか、分かった。何か変わったモンスターは居たか？」

「初めて見るモンスターが居ました」

「ほほう」

初めて見るモンスター。もしかして、ユグドラシルには居なかったモンスターか？

「どのようなモンスターだ？　たくさん居たのか？」

「いえ、一匹だけです。ただ、あたしの知る限りだと一番強そうではありません」

「では、それに関しては生きてそのまま捕獲しよう。珍しいモンスターなら死体で持っていくよりも生きてそのままの方がいいだろう。やはり、戦っているところを見せる方が分かりやすいからな。今回は、ゴブリンやオークなどを100……いや、200程狩る事にする。先ずは、分かりやすいもので様子を見るとしよう。アウラ、マーレ。明日の早朝から狩りを始める。それまでに拠点を中心にモンスターなどを調べておいてくれ」

「はい！　アインズ様の御心のままに」

「御心のままに」

アウラとマーレは、さっそくトブの大森林に戻り明日の為の調査へと向かう。

「さて、アルベド。頼んでおいた方は、どうだ？」

エ・ランテルでの一件の報告を聞く事にする。

「はい。調べたところによりますと、ンフィーレア・バレアレは、エ・ランテルに住む薬師との事です」

「薬師？　それが何故私に？」

「どうやらアインズ様が渡されたポーションがああの者の店に持ち込まれたようです。この世界のポーションは青く、赤色のポーションは希少価値の高い物のようです。なんでも劣化しない完成された物だと」

「そうか」

アンデッド化の影響で動揺が抑えられたことが幸いした。おそら

くだが、宿屋で見知らぬ冒険者と揉めた時に傍に居た無関係の冒険者の女のポーシオンを壊したのが原因のようだ。あの時は、事を丸く収める為に何気なくユグドラシルのポーシオンを渡したが、それが今回の一件を招いたようだ。

(アンデッドの精神抑制が効いて助かったなあー。どうしよう、俺のせいじゃん！)

「どうかなさいましたか、アインズ様？」

「いや、なんでもない。しかし、早い段階で違いが分かった事は不幸中の幸いかもしれんな。アルベド、それで他には？」

「はい。これは、あくまでも私の考えですが、アインズ様に近づいたのはポーシオンの事を調べる為ではないかと思われます。街に潜伏させているシャドウ・デーモンを監視に付けましたが、そのような話を祖母であるリイジー・バレアレとしているのを確認しています」

「他にこの件を知っている者は？」

「おそらくは居ないかと思えます。どうやら秘密にしておきたいようですので」

(知識の独占か？ 商売人ならありえなくもないか？)

「では、両者に監視を付けておけ。必要とあらば確保しろ」
「殺さなくてもよろしいのですか？」

心の中で、「またか」と思う。どうもナザリックの者達は簡単に殺し過ぎる。今は、この世界の事を何も知らない。少し調べただけでもユグドラシルにはない武技というものがある事が分かった。場合によっては、自分達を簡単に殺せるかもしれない武技や魔法、アイテムがあるかもしれないのだ。慎重に動くぐらいがいいだろう。

「私と関わってすぐに死んだ。今後を考えるとそれは避けておきたい。それに薬師というのも価値がある。既に私達の知らないポーシオンがある以上、その知識は価値がある。場合によっては、私が魔法で洗脳でもしよう」

危険を無くせる。知らない知識が手に入る。一石二鳥とは正にこの事だろう。

「アインズ様の仰る通りに」

「それで、他の者達はどうした?」

「御命令通りに動いております」

ナザリツクの者達に命じてこの世界の調査をさせている。とにかく今はこの世界を知る事が全てにおいて優先される。何も知らない状況では重要な判断などは下せない。なにせ、判断が正しいかどうかを知る材料がないのだから。

「なにかあればすぐに報告しろ、いいな?」

「畏まりました」

支配者として今は、ナザリツク地下大墳墓を守る役割がある。少しは、支配者として板についてきたりしていないか?

(誰か居てくれたらな……)

アインズは、遠き日の中に居るアインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーを、仲間達を思い出す。もし傍に居てくれたらどんなに気が楽になる事か。

(でも、ありえないよね)

この世界に来たのは、ユグドラシルのサービス終了時だ。最後に会う事ができたヘロヘロもログアウトを確認している。おそらくこの世界には一人だけ。もしかして誰か居ないかと思いたいが、現実的ではないだろう。アインズは、胸の内を隠しながら支配者として振舞う。今は、鈴木悟でも、モモンガでもない。唯一人のアインズ・ウール・ゴウンなのだから。

第10話

トブの大森林。王国と帝国を股にかけてそびえる広大な未開の森。豊富な資源がある一方で、強力なモンスターや危険な動物が闊歩する世界。その森の南側にナザリツクの避難場所の建設予定地がある。まだ調査段階ではあるが、問題がないようなら此処に建てられることになる。

「さて、始めるとしよう」

伐採などが終わり開けた場所にモモンは居る。そして、その周辺をアウラのシモベであるモンスターが囲むようにしている。種族は様々居るが、今のところ把握しているこの世界のモンスターよりもこの場に居る者達の方が遥かに強い。

「マール、首尾はいいな？」

隣に控えるマールに尋ねる。

「はい。もう少しで、お姉ちゃんが来ると思います」

「そうか。ナーベ、先に森の賢王の件を済ます。その後は、冒険者モモンとナーベで行動する事になる、いいな？」

「分かっております。モモンさん」

どうしてもナーベは、様付けをしようとしてしまう。あくまでも対等な仲間である冒険者を演じたい。じゃないと、仲が悪いとかいろいろと勘繰られるかもしれない。

「お待たせしました！・ア……モモンさん！」

森の中からアウラが現れる。隣には、神獣類のフェンリルことフェンが居る。濡れたような漆黒の巨大な狼は、深い英知を宿したような真紅の英知を持っている。何も知らなければ、フェンが森の賢王に見える事だろう。

「あれがそうか」

よく見ると、フェンが何かを口に咥えている。あのまま力を入れたら痛そうだ。

「フェン。モモンさんの前に」

アウラの命令を聞き、フェンはモモンの前にそれを置く。森の賢王

の特徴を思い出す。銀色の毛並みをしているらしい。どちらかと言えば、スノーホワイトのような気もするが似ていなくはない。次に思い出すのは、森の賢王は鱗に覆われた長い尻尾を持っているそうだ。目の前に居る者も持っている。

「南の森で一番だと聞いた時にまさかと思ったが……これがそうなのか？」

あくまでも可能性だ。これが偽物で、本物がまだ隠れている可能性はある。それこそフェンみたいのが居るかもしれない。

「この辺りだと一番強いです。気絶しているだけなので起こしますか？」

「そうしてくれ」

アウラは、軽くそれに蹴りを入れる。

「……ふにや……此処は何処でござるか……それがしは……」

それは、言葉を発しながらモソモソと動く。どうやら会話ができそうだ。

「おい、そこのお前」

「誰でござい——」

どうやら意識を完全に取り戻したようだ。フェンと目が合ってから固まっているが。

「……アウラ」

「モモンさんが呼んでるだろ！」

アウラは、腰に下げている鞭をしながら振るう。パンツと破裂音のような目が覚める音が響き渡る。速過ぎる鞭は音速を超えるところが、アウラの鞭は音速を軽く超えているのではないかと思える程に速い。

「——ヒッ!? 許してほしいでござる! それがしは美味しくないでござるよー!」

驚くと命乞い。他人の……いや、他獣のそら似だろう、きつと。

「なら、私の質問に答えよ」

「なにをでござるか!」

つぶらな瞳だ。可愛い。デカくなければ。

「一つ聞くが、お前は森の賢王を知っているか？」

「森の賢王でござるか？ それならそれがしでござる——違うでござる!？」

「だから殺さないでほしいでござるよー!」

「言い直しましたね」

「うん、言い直した」

思わずため息が出そうになる。これが、これが森の賢王なのか？

伝説の魔獣なのか？

「嘘を言えば殺す、いいな？」

「本当は、それがしが森の賢王でござる！ 嘘ではないでござる！

だから殺さないでほしいでござるよー!」

どうやらそうらしい。なら、ついでにもう一つ聞いてみよう。

「では、お前の種族名は……そのだな。ジャンガリアンハムスターと
か言わないか？」

森の賢王。尻尾は流石に違うし、大きさは人よりも遥かにデカいが
間違いなくハムスターだ。これが伝説の魔獣とか嘘だろ。傍に居る
フェンリルの事を魔獣とか言うんじゃないの？ もしあれなら周囲
を取り囲んでいるアウラのシモベでもいいけど。

「それがしは、ずっと一人だった故に分からぬでござるよ。もしかし
て、それがしの仲間を知っているのでござるか？」

「知っていると言えば知っているが、こんなにはデカくはない。すま
ないな」

「そうでござるか……」

少し同情はする。独りぼつちは寂しいもんな。

「それはともかくだ。本当に森の賢王なのか？ 誰かと間違えてはい
ないか？」

「そうは言っても嘘を吐くと殺されるのでござろう？ この辺りに
は、それがしよりも強者はいないでござるよ」

アウラの情報でもそうだった。しかし、こんなデカイハムスターで
は計画は失敗だな。街の近くに連れていき人目のある所で戦おうと
思ったが、やめだ。

「最後の質問だ。私の部下になるか、死ぬか、選べ」

「部下になるでござるよ！ なんでもするでござるから殺さないでほしいでござる！」

なんだか可哀想に思えてきた。今思うと、遥かに強いモンスター達で囲んでるんだもんな。

「この者は、今日からこの拠点の守護者だ。アウラ、お前のシモベとして扱え」

「いいんですか!? 初めて見た時から欲しかったんですよ！ いい毛皮もしてるし！」

「毛皮でござるか!? アウラ殿の為に頑張るでござるから？ がないでほしいでござるよー！」

「大丈夫！ モモンさんから拠点の守護者を任されている間は何もしないから」

「本当でござるか？ 頑張って拠点とやらを守るでござるよ！」

予定とは違うが森の賢王の件は済んだな。この拠点は、何かあれば森の賢王の物として処分するのもありだ。

「では、これから本題に入る。今回は、あくまでも私とナーベが主役になる。チームでやる以上は、相手に背中を任せる事になる。ナーベ、今日はお前に私の背中を任せる、いいな？」

「モモン様の背中を私などが!? 必ずや命に代えてもお守りいたします！」

様は……もういいや。やる気みたいだし。

「アウラは、斥候として偵察を頼む。危険があれば知らせてくれ」

「はい！ モモンさん！」

「マーレは、此処でアウラのシモベ達と待機。何かあれば、シモベ達と共に動いてもらう」

「はっ、はい！ 頑張ります！」

「既に知っていると思うが、アルベドには別件を任せてある。私の身を守る事のできる者は、お前達だけだという事を忘れるな」

モモンを守るのが自分だけ。その言葉に至高の存在であるモモンに忠誠を誓う者達にとっては、なにものにも代えがたい褒美となる。アウラ、マーレ、ナーベは瞳を輝かせている。

「では、モンスター狩りへと向かおう」
冒険者モモンとナーベの物語の始まりだ。

◇◇◇◇◇

モンスター狩りの予定は、一泊二日。長くてもう一泊だ。早朝からエ・ランテルを出発して、トブの大森林に着く頃には暗くなるので一泊。次の日の朝から森の中に入り、狩りが終わり次第エ・ランテルに帰還する。それが、トブの大森林に到着するまでの予定だった。

「ペロロンさん。様子はどうですか？」

時間は既に夜を迎えている。トブの大森林には空が夕空から夜空へと変わる前には来る事ができた。天幕は、森から離れた場所に設置し、先に漆黒の剣が休憩を取っている。ただ今回は少しだけ事情が違い、本来ならチームごとで休憩と見張りを交代する手はずになっていたのだが、休憩するチーム側の方でも天幕の傍に見張りを立てて休憩する事になった。と言うのも、天幕とは別に森の方にも見張りを立てる必要ができたからである。

「どうでしょうかね？」

森の様子を見るペロロンの表情は険しい。辺りは暗くなったもののウルベルトの魔法である《ダーク・ヴィジョン》で闇夜でも昼のように見える事の出来るレンジャーのクラスを持つペロロンなら他の者より視界は良い。しかし、特に何かは見えない。

「こっちは、何も無いみたいだ」

《フライ》の魔法で周辺を飛んで様子を見てきたウルベルトがたちとペロロンと合流する。

「場合によっては即時撤退。しかし、判断材料が少ないですね」

全ては、トブの大森林に着いてからの事になる。道中でモンスターの群れと四回ほど遭遇した。モンスター狩りをしようとする者からして見れば、悪くもないし良くもない内容だ。今回は、モンスター狩りについては、漆黒の剣と分け前は内容を問わず半分となっている。その代わり、薬草の採取の時は漆黒の剣が少し多めに取る事になって

いる。これは、薬草採取に関しては、ドルイドであるウッドワンダーを中心に行う事になるからだ。ウルベルトとペロロンは薬草関連のスキルと知識を持っている。しかし、ウッドワンダー程ではないので教えてもらう約束になっている。早い話が授業料だ。ただ、問題はそこではない。

「急に静かになりましたね」

道中だけだと四回。しかし、森の近くに来てからは既に八回程遭遇している。森の周辺をモンスターが徘徊している事は珍しくない。そもそもそれを目当てにやってきている。しかし、今回は徘徊ではない。

「嵐でも去ったのかもな」

モンスター達は、森から逃げてきた。普通なら身を隠す事の出来る森から視界の開けた場所に出る場合は警戒する物だ。これは、人間も、モンスターも、動物もあまり変わりはない。敵がいるかもしれない以上は、警戒ぐらいはするだろう。しかし、今回のモンスターはそのような仕草などはなかった。

「モークさん達も言っていましたけど飛び出してくるのもいましたからね。絶対に何かから逃げてますよ」

全部ではないが、森から警戒など無視で飛び出してきた者も居た。モーク達とも話したが、ゴブリンやオークが逃げ出すような者が居る可能性が高いと話し合いで結論が出た。本当ならすぐにでも離れるべきなのだが、確証がないので三人と漆黒の剣で交代して森の様子を見る事にした。ただ、八回目の遭遇からピタリと止まり、不気味なほどに森が静かなのだ。

「帰った方がいいんじゃないか？ 仮にギガントバジリスクだと全滅だぞ？」

最悪の魔獣。町一つさえ滅ぼすと言われる最悪のモンスター。

「俺達、石化対策とかしてませんからね。《石化の視線》とか受けたら全滅ですよ」

ギガントバジリスクが恐れられているのは、石化の視線と呼ばれる物を持っている事だ。これは、視界に映る者が対象となり効果を発揮

する。地平線の果てに居たとしても向けられたら石化対策をしていない三人と漆黒の剣は簡単に石にされ殺される。

「負けると思いますか？」

たつちは、二人に尋ねる。相手は、絶望的な相手だ。ただ、二人の表情に不安も恐怖もない。それは、たつちも同じだ。

「俺がやられたら負けだろうな。石化を回復できるのは俺しかない。だが、問題はないだろ？」

「たつちさんが突っ込んで、ウルベルトさんの魔法と俺の弓で支援すれば行けますよ！ 石化対策はないですけど、方法が無い訳じゃないですからね。まあ、負けたらしようがないですよ」

「相手は強敵かもしれないですが、私達なら負けるはずがありません」

勝算がないわけではない。しかし、あくまでも戦う方法があると言っただけだ。それでも不思議と怖くない。不安もない。むしろ、楽しみでしかない。

「強敵との戦い。久しぶりですね、この緊張感は」

ユグドラシルを始めた頃を思い出す。あの頃は、些細な事で全滅する事なんて普通にあった。しかし、そこから対策を考えたり、戦闘方法を考えて試したりと楽しい時期でもあった。三人は、森を見つめる。森の中にある何かを期待して。

第11話

エ・ランテルの冒険者組合にモモンとナーベが現れたのは朝と昼の中間ぐらいだろう。彼らが姿を現すと共に血なまぐさい腐臭のような物が組合の中を漂う。その臭いの元は、モモンが持つ大きな麻袋からだろう。それは、無理やり入らない物を押し入れたかのように窮屈に膨らんでいる。

「モンスターの部位を換金したい」

モモンは、受付嬢の下に麻袋を置く。あまりの大きさに椅子に座っていた受付嬢の姿が隠れてしまう。

「……これが全てですか？」

驚きのあまり言葉が上手く出ない。

「そうだ。探すのに手間取ってしまったってこれだけしか狩れなかった。まだ地理にも疎く困ったものだ。なあ、ナーベ」

「はい。モモンさんのお手を煩わすとは無礼な者達です」

平然とモモンとナーベは口にする。しかし、組合に居る冒険者や従業員は未だに状況を呑み込めない。あれだけの大きな袋を満たすだけのモンスターを狩った？ モンスターの部位はそれほど大きくはない。ありえない。彼らは、一昨日に此処を訪れたばかりなのだから。

「一つ尋ねたい。これだけの量になると換金までには時間が掛かるのかな？」

「……はい。お時間を頂く事になると思います」

「そうですか。それでは、また来るとしましょう。ああ、それともう一つありました。この袋の中には、ギガントバジリスクもあります。確認なのですが、仮に依頼ではなく偶然に上のクラスが受けるようなモンスターに遭遇し、偶々狩るのは問題ではありませんよね？ 今回は、カッパーらしく、ゴブリンやオークを狙いましたが二回程ギガントバジリスクに遭遇してしまいましたね。自衛の為に狩ってしまいました。もしダメでしたら謝ります。ただ、許されるのでしたら次回からのモンスター狩りの参考にしたいので危険なモンスターの居る

場所を教えて頂きたい。それでは、私達はこれで失礼させて頂きませす。いくぞ、ナーベ」

「はい。モモンさん」

モモンとナーベは用件を済ませ、冒険者組合を後にする。その後、状況を上手く呑み込めない者達はそれぞれの考えを口にする。

「あいつらつて、この前来たばかりだよな？」

「一昨日に見たが、依頼を探してたのは昨日だったぞ？」

「じゃあ、なにか？ たった一日であれだけの量を？ 話だとギガントバジリスクのもあるのか？」

ギガントバジリスク。冒険者をしている者なら必ず聞く名前。最低でもアダマンタイト級の冒険者チームであたることを推奨されている魔獣。仮にアダマンタイト級だったとしても対策を講じなければ危険なモンスター。それを、たった二人だけで、それもカッパのプレートを持つ冒険者見習いが？ ありえないだろう。でも、一つだけ納得のいく答えもある。

「でもよ、言ってたよな？ あのナーベとか言うのは、第三位階の魔法を使えるんだろ？ あの戦士も同じぐらいだって話だし」

「そうだな。着ている鎧も相当なものだ。あの背中に背負っている馬鹿デカイ二本のグレートソードも冗談じゃないのなら……」

第三位階の魔法を若くして使える実力者に一級品とも言える装備を身に着けている戦士。可能性はなくてもない。

「――申し訳ありませんが、少しだけ此処を空けさせて頂きます」

受付嬢は、自分では判断できない事態にエ・ランテルの冒険者組合長であるアインザックの下へと向かう。これは、冒険者組合が始まって以来の非常事態かもしれない。

◇◇◇◇◇

モモンとナーベは、取っている宿へと戻っていた。

(さて、首尾はどうかな?)

冒険者組合に居た者達の表情を見るに少しやり過ぎたかもしれない

い。ただ、度肝を抜くという点だけでみれば合格点だろう。

「ナーベ」

「はい。モモンサーン」

惜しい。さつきまでは上手く行っていたのに。

「予定より多くはなつたが順調と言えよう。あの場に居た者達の表情から察するに、こちらの力を見せる事には成功した」

昨日行われたトブの大森林でのモンスター狩りは、正直に言うところ微妙な結果だった。と言うのも、冒険者チームモモンとナーベでモンスター狩りをしたのだがその際に制限を設けた。早い話が生命探知などモンスターを探す事のできる魔法やスキルの禁止。当然、アウラからはモンスターの居場所を報告してもらわない。他にも、魔法やスキルに頼らずに相手に気づかれないように行動する。チームでの戦い方の確認と練習など、今後を考えていろいろと試した。その結果、予定していたよりも時間が掛かり、多くのモンスターを狩る事になった。

「だが、ナーベ。冒険者モモンとナーベには多くの課題が残った。チームワークに関しては、まあ……仕方がない部分があると思う。状況によっては、ナーベが私に指示を出すこともあるのだが無理は言わない」

「申し訳ありません。モモン様に私程度が指示を出すなど……」

指示と言っても何かあった時に「逃げろ！」「伏せろ！」「俺に任せろ！」とか言うぐらいだ。それでも至高の存在に指示を出すのには抵抗があるようだ。特にナーベは、馬鹿正直なまでに真面目で不器用だ。二人だけなので周囲に気を使う必要もないから油断でもしているのだろう。もう、様付けしている。

「戦闘においては、不敬などと思わなくてもいい。初めは、確かに問題が起きる事がある。指示の出し方や内容によつては相手に与える印象も違うものになるだろう。だが、それを乗り越えた先に真のチームワークがある」

そう、あるのだ。初めは、喧嘩もした、ムカつきもした。だが、最終的には何も言わなくても仲間が思い通りに動いてくれた。チーム

ワークとは、言葉にしくなくても伝わる物だと思う。

「必ずやモモン様の御期待に応えてみせます！」

「うむ。これからに期待するぞ、ナーベ」

「はいー」

いい返事だ。やる気に満ちている瞳だ。後は、結果が付いてくるのを待つだけか。

「しばらくは、此処で待機する。冒険者組合での換金が終わるまでな。もつともそれだけで済むとは思えんが」

あれだけ実力を見せたんだ。少しは、何かしらのアクションがあるはず。そうでないのなら同じことをするだけ。仮になにもなくても金は稼げる。

「では、私は一度ナザリックに戻る事にする。なにかあれば、すぐに連絡を寄越せ」

「畏まりました。モモン様」

此処は、ナーベに任せ《ゲート》の魔法で作りだした門を潜り、ナザリック地下大墳墓に帰還する。冒険者モモンからナザリックの支配者であるアインズに戻り、支配者としての仕事をするために。

◇◇◇◇◇

「フンフンフーン」

アウラは、トブの大森林の中を木々に飛び移りながら移動していた。昨日のモンスター狩りで、モンスターの生息場所に変化があったのでそれを調べる為だ。

「まだ居るけど、この辺りからはだいぶ居なくなつたかな」

モモンとナーベの存在に気づいた者達は、逃げるようにして移動した。アウラは、それを知つてはいたが、あくまでも護衛がお仕事だったので見逃すことにした。

「——何か聞こえる？…この声は……人間？」

アウラの耳に人間の声が届く。距離はまだまだあるが、アウラの耳はそれを捉える事ができる。

「んー、様子だけ見ようかな？」

トブの大森林に来た人間には手を出さない事になっている。問題を起こして、森に注意が向くのを避けるためだ。例外として、拠点に近づいた場合は殺すか、捉えるかする。これらの判断は、アウラとマーレが一任されている。

◇◇◇◇◇

「これは、いい場所を見つけたのである」

「これだけあれば、モンスター狩りの分にはなるな」

「よかったですね」

ウツドワンダーに教えてもらいながらウルベルトとニヤヤが薬草を採取している。未開の地である為に手付かずの群生地を見つける事ができた。これまで採取した分を含めると相当な稼ぎになる。

「ペロロンさん。そちらはどうですか？」

「んー、何もないかな？」

「ルクルット。こっちは？」

「いや、何もないな」

三人を守るように囲み、たっちとペロロン。モークとボルブで分かれて森の様子を見ている。

「結局、なにもありませんでしたから森へと入りましたが……なにもいませんね」

「そうですね。こんな事は初めてです」

たっち達と違い、漆黒の剣はエ・ランテルを拠点としているのでトブの大森林には足を運ぶ機会がそれなりにある。しかし、この状況は初めてのようだ。

「ペロロン。油断するなよ」

「するわけないでしょ。ニヤヤちゃんが居るんだから」

口ではふざけている二人も緊張感から額から汗が止まらない。何かあれば、自分達が先に気づかなければいけない。そうでなければ、この視界がまともを取れない足場の不自由な場所で未知の敵と戦わ

なければいけないかもしれないのだから。

「ふーん」

そんな彼らを木の上から眺めている者が居る。

「至高の御方々と似た名前なんて人間の癖によくないよね……」

声が出た場所に来たアウラは彼らの様子を見ていた。此処に来るまでに、「たっち」「ウルベルト」「ペロロン」の名前が聞こえたからだ。もしかして至高の御方々が？ そう思うと、胸が高鳴るのを抑えきれなかった。普段よりも速く動いたかもしれない。少しでも早く確認したかったから。しかし、声の場所に辿り着いて見たものは、至高の存在ではなかった。それどころか、下等な人間だった。

「どうしようかな……アインズ様の御命令だと見逃すことになるんだけど……」

問題を起ささないように手を出さない。この世界のモンスターに殺されるのなら仕方がない事だが、こちらから手を出してはならない。でも、自分の期待を裏切ったことは許せない。許せるわけがない。どれだけ会いたいか、会いたいと思っていたか。もう会えないと思っていた。でも、名前を聞いた時に、声を——その時、アウラの頬を何かが触れる。

「——えっ……」

それを確かめるように頬に触れてみる。水だ。雨は降っていない。なら、なにが？

「……泣いてるの？ あたし？」

今も流れるそれは、アウラの目から流れている。

「……なんで？ なんでなんだろう？」

腕で何度も涙を拭う。しかし、涙が止まる事はない。

「期待を裏切られたから？ ……そうじゃないの？ なんだろう……なんだろう……」

訳が分からない。あの人間達を見ていると、声を聞いていると涙が止まらなくなる。胸が苦しくなる。記憶の中にある何かを思い出しそうになると、涙がより流れ、胸の苦しさも強くなる。

「分からない……分からないよ……」

感情が抑えきれない。涙も止まらない。胸も苦しいまま。初めての物に戸惑う、戸惑うがどうしていか分からない。

「——そろそろ引き上げましょう。これだけあれば十分です」
「そうですね。あまり長居はしない方がいいでしょう」

人間達が帰り支度を始める。

「……居なくなっちゃうの？」

アウラは、思わずそう呟く。

人間達は、アウラが悩む間も動いている。そして、少しずつだが遠くへと、アウラの下から遠ざかっていく。

「あたしは……どうすればいいの？」

追いかける理由が見当たらない。なぜか必死になって考えるが、追いかける理由が見つからない。

アウラは、何もできずに人間達を見送る。ただ、見送る。その後ろ姿を。

第12話

気が付けば、トブの大森林にある拠点まで戻っていた。どう戻ってきたかはあまり覚えていない。

「どうかしたのお姉ちゃん？」

心配そうにアウラの事を見るマーレの姿がある。

「ううん、なんでもない……」

心配をかけまいと笑ってごまかすが、双子としてあるからか伝わるようだ。

「何かあったならボクに言ってよ。力になれるか分からないけど、頑張るから」

マーレなりに励ましてくれているのだろう。拠点に居たシモベ達もそれぞれが力になりたそうに見ている。

「なにかあったのでござるか？ これでも森の賢お——」

アウラのシモベとなった森の賢王は、周囲からの視線に恐怖から口を閉ざす。アウラとマーレの会話を邪魔してはいけない。アインズが拠点の守護者として認めていなければ殺されていただろう。

「……ありがとう、マーレ。でも、本当に大したことじゃないの。さつきね、人間が森の中に居たの」

「人間？」

別に不思議な事ではない。トブの大森林は、王国や帝国に住む人間にとつては重要な資源のある場所だ。多くはないが、毎日のように誰かしら訪れる。

「そう。でもね、不思議なんだ。人間なんだけど、なんだか懐かしい感じがして。至高の御方々と似た名前だったからかもしれない。しれないんだけど……」

あの時感じた物をどう言葉にすればいいか分からない。特にあの中の一人には強く思うところがある。

「ペロロンって呼ばれていた人……凄く似てたの、ペロロンチーノ様に。ぶくぶく茶釜様と一緒に居た時のペロロンチーノ様に似てた気がする」

「そ、それって本当なの!？」

これには、マールも驚く。ぶくぶく茶釜は、アウラとマールの創造者だ。そして、ぶくぶく茶釜には弟が居るのだが、それがペロロンチーノになる。至高の四十一人は、アインズを残して自分達の前から消えた。会いたい。会いたいが、もう二度と会えないと何処かで思っていた。しかし、もしかしたらその手掛かりがある。そう、思ってしまう。思いたい。

「うん。でも、ペロロンチーノ様じゃないと思う。声は似てたけど、人間だったし、弱かったから。それに、何も感じなかった」

これは、至高の存在であるアインズもそうなのだが、ナザリックの者達には特別な繋がりがある。アインズ・ウール・ゴウンのギルドに所属しているシモベ達には、揺らめくような気配がある。至高の四十一人ともなると——今は、アインズだけが絶対なる気配をまとっている。しかし、アウラが見た人間にはそれが無かった。だからどれだけ似ていても違う。

「そう、なんだ……残念だね」

期待を裏切られた。心に暗い物が落ちる思いだ。

「でもね、興味はある。もう一度会ってみたい。会って話してみたい。そう思う。ねえ、マール……あたしおかしくなったのかな? 人間にこんな事を思うなんて」

どう答えたらいいのだろう。マールは考えるが相応しい答えを見いだせない。偽物でも会ってみたい。そう思うのは、至高の御方々に対しての不敬だろう。それでもアウラがそれだけ思うのなら自分だって興味がある。無いわけがない。

「ボクじゃ分からないよ……誰かに相談してみようよ」

「相談? でも、誰にすればいいのかな?」

至高の存在に関しては、アインズに相談するのが一番だろう。だが、至高の四十一人に何があったかを知らない。もしかしたら大きな何かがあったのかもしれない。その内容によっては、アインズの機嫌を損ね、自分達の下から他の御方々と同じように消える可能性すらある。考えれば考えるほど不安になる。

「デミウルゴス……デミウルゴスに相談してみる」

「デミウルゴスさんに？」

「他にも、たっち、ウルベルトって呼ばれていた人が居たの。もしかしたらデミウルゴスなら分かるかもしれない」

ウルベルト・アレイン・オードルは、デミウルゴスの創造者だ。たっち・みーに関しては、セバス・チャンの創造者になるのだが、現在はアインズから下された任務の為に出处している。それに、デミウルゴスは、至高の四十一人を除けば、ナザリック一の知恵者で通っている。デミウルゴスなら何か分かるかもしれない。

「うん、聞いてみよう。もしかしたら、何か分かるかもしれない」

アウラとマールレの二人は、デミウルゴスの知恵を借りる為にナザリックへと帰還する。

◇◇◇◇◇

拝啓、アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーの皆様、お元気ですか？ 私は、アンデッドになったので元気がどうかは分かりませんが胃に穴が空きそうな思いで過ごしています。もう、胃はないけど。今は、ナザリックの支配者として粉骨碎身の思いで頑張っています。すがなかなか上手くは行きません。——敬具

「アルベド、もう一度報告を頼む」

「はい。カルネ村にて、ンファイレア・バレアレとエンリ・エモットが接触を致しました。それで、アインズ・ウール・ゴウンとモモンが同一人物だと気づいたようです」

エンリ・エモット。この世界で初めて接触した人間。正確に言えば、エンリの妹であるネムも一緒に接触した。初めて接触した時に怪我をしていたのでポーシオンを渡した。その時は、この世界でのポーシオンの効果を確かめる考えもあったのだが、どうやら世の中はなかなか上手くはいかないようである。

現在、ナザリック地下大墳墓にある執務室にて、ンファイレア・バレアレの監視をしていたアルベドから報告があった。どうやら二人

は知り合いだったらしく、エンリが村での出来事をバレアレに話した。その話の内容に赤いポーションが出てきたのだが、確証はないものの村を助けたアインズ・ウール・ゴウンとモモンが同一人物ではないかと疑問を持ってしまった。アインズ・ウール・ゴウンの時は、魔法詠唱者として振舞った。モモンの時は、戦士だ。しかし、そんなものは未知のポーションの前では些細な問題のようで、バレアレの中では繋がったようだ。そして、バレアレの言葉を受けてエンリもそう思ったらしい。

「アルベド、お前はと思う?..」

「予定通り捕らえるべきかと。あの後も調べさせてみました。面白い事が分かりました」

ん? 何かあるのか? てつきり殺すべきです、と言われると思っていた。

「面白い事?..」

「はい。どうやらあの者は、タレントを持っているそうです」

タレント。この世界にある概念の一つだ。才能とは少し違う、生まれ持つての特殊技能のような物である。どうやらかなりの種類があるらしく、現在は魔法や武技、アイテムと共に調べさせている。

「どのようなタレントなのだ?」

「これは噂話になりますが、あらゆるマジックアイテムが使用可能との事です」

「あらゆるマジックアイテムが使用可能? それは、どの程度の物だ?」

「それは、まだ分かりませんが、役に立つと思われれます」
「なるほど」

程度にもよるが確かに面白いタレントだ。マジックアイテムの中には、使用者制限のある物もある。代表的なのはクラスの習得での使用制限である。他にもギルドの者でしか扱えないなどだが...興味湧いてきたな。

「エンリ・エモットは、このままでかまわない。当初の予定通り、アインズ・ウール・ゴウンからの使いとしてルプスレギナ・ベータを使者

としてカルネ村に送れ。他にも監視は付けておこう。あの者は、この世界で最初にできた繋がりのある村の者だ。利用価値はある。ンフィーレア・バレアレに関して、私が魔法で洗脳しよう。確か、冒険者達が同行していたな？ 適当に野盗の仕業にみせかけて捨て置け。物語はこうだ。野盗に襲われて逃げていたところをトブの大森林から帰る途中のモモンとナーベが発見し保護した。これで、一人だけの洗脳で済む。あれは、MPを無駄に多く必要とするから節約をしておきたい。ああ、それと捕らえる時に姿などは見られるな。洗脳が解けたときに私達の事が知られる恐れがある。目隠しなどをして此処まで連れてこい」

「ナザリックに人間を入れるのですか？」

ナザリック地下大墳墓は、異形種以外の立ち入りを固く禁じている。例外として、ギルドメンバーの妹であるエルフを入れた事はあるがそれ以外に前例はない。ああ、一つあったな。捕らえた者は別だったな。今頃は、どうなっているかは知らないが。

「あくまでも安全に事を運ぶためだ。此処なら邪魔は入らない」

「アインズ様のお決めになった事ですので、私からは何も。ただちに捕らえさせます」

アルベドは、バレアレを捕らえる為に部屋から出ていく。

(支配者って大変だなあ……)

愚痴を零すのも立場上難しい。そもそも誰に零せばいいのやら。愚痴を零している姿などを配下の者達に見せるのは支配者としては失格だろう。せめて、愚痴の零せる場所と人が欲しい。

第13話

モモンは、ナーベからの《メッセージ》の魔法で連絡を受け、エ・ランテルへと舞い戻る。どうやら宿の方に冒険者組合の方から人がやって来たらしい。内容は、冒険者組合長であるプルトン・アインザックから話があるので至急冒険者組合へ向かうように、と。二人は、早速冒険者組合へと向かい、アインザックの居る部屋へ通される。「初めまして、私がエ・ランテル冒険者組合長のプルトン・アインザックだ。君達の事は、いろいろと聞いています」

簡単な挨拶を済ませ、向かい合うようにして座る。

「まずは、幾つかの確認をさせてもらいたい。あのモンスター達は、君達が二人で狩ったのかな？」

「はい。私とナーベの二人で」

「そうか。随分と頑張ったようだな。質はともかく、あれだけの数となると大変だったろう」

「一日ほど掛かりました。トブの大森林にまで足を運んだのですが、終わり次第こちらへ」

「なるほど」

アインザックは、モモンとナーベの顔を見る。話の最中に特に変化はない。嘘は言っていないのだろう。しかし、此処からトブの大森林まで往復で一日は掛かる。馬などを使えば別だが、二人が馬を利用している話は調べたがない。馬を借りた形跡も、預けた形跡もなし、怪しい。

「二つ聞ぐが、移動はどうしたのかな？ 往復で一日程掛かるのだが？」

「企業秘密というものです。手の内を明かす気はありませんので」

「私は、冒険者組合長だ。それでもか？」

アインザックは、心の内では少しだけ怒りの色が現れる。しかし、それは隠す。どうもこの二人からは、得体のしれない何かを感じる。元ではあるが冒険者として窮地を潜り抜け生還した勘だ。信頼はできさる。

「組合長殿を信用していない訳ではありません。しかし、何処から情報漏れるかもわかりませんので」

「場合によっては、君達の冒険者としてのクラスの判断材料になるが？」

「それでもです。他で十分に判断して頂けるものと考えていますので」

「……腕に自信があるのだな？ でなければ、先日のような騒ぎは起こさないか。クラスを設けているのは、信頼を得るためだ。冒険者組合が信頼を得られたのは、信頼を確実にこなしてきたからだ。誰かの我儘で壊していいものではない」

「ええ、理解しています。信頼を築くのは簡単な事ではありませんから」

「どうやらただのバカではないようだ。身に着けている物も見た事が無いほどに素晴らしい物。何処かの世間知らずの貴族だと思っていたが違うようだ。」

「クラスを上げるためには、昇級試験を受けてもらう事になる。それを、今回は特別に受けてもらおうと思うが、やってみるかね？」

「是非」

「そちらのナーベさんだったな。確か、第三位階の魔法を使えるとか？ 嘘を吐くと今後困る事になるが本当なのかな？」

「ナーベは、第三位階の《ライトニング》を得意としています」

「ライトニングは、一直線の貫通する雷撃の魔法だ。本来ならそれよりも上が使えるが、一般的な実力者の使用できる魔法が第三位階の魔法なのでこのようにしている。」

「では、後はモモン君の実力を知るだけだな。戦士としての実力を知るには、なにをすればいいと思う？」

「戦士として……」

モモンは少し考えてから口を開く。

「同じ戦士と、戦うでしょうか？」

「そうだ。君には、上のクラスの者と戦ってもらおうと思う。まだ誰にするか決めてはいないが、最低でもシルバーで考えている」

シルバー。少し足りないな。

「ミスリル級ではダメなのででしょうか？」

「本当に腕に自信があるのだな。残念ながら無理だ。わざわざカッパーの昇級試験の為に力を貸す者は居ない」

「それもそうか。格下、それも最底辺の人間の為に動くわけもないか。まあ、上に行くきっかけにはなるな。」

「それでお願ひします」

「では、相手が決まり次第連絡をしよう。できれば、宿で待機してほしいのだが？」

「宿で待機ですか……」

少し困る。予定だとそろそろエ・ランテルを出発しなければならぬ。本来ならトブの大森林の近くでバレアレと会う事になっている。エ・ランテル近郊だと人が居るので偽造がバレる可能性があるからだ。

「なにか困る事でも？」

「いえ、少し手持ちを考えていただけです。よく考えましたらモンスタ―狩りの報酬がありましたので問題はありません」

「では、決まり次第宿に使いを送る。君の戦士としての腕を楽しみにしている。懸賞金に関しては、下で受け取ってくれ」

モモンは、アインザックと別れの挨拶を交わし、ナーベと共に部屋から出ていく。

「……さて、どうするか？」

アインザックは、考え込む。実は、モモンとナーベが部屋に入った時から威圧感を向けていた。これでも元はオリハルコン級の冒険者だったのだ。その自分の威圧感にモモンもナーベも微塵も反応がなかった。

「何者だ、あの二人は？」

話し通り、ギガントバジリスクの物が袋の中にはあった。ギガントバジリスクは、アダマントタイト級が担当するような相手だ。それを見た二人だけで……。

「確か、まだあの者達はこの街に居るのだったな。話によると、王都で

戦士長と剣を交えたとか」

王国戦士長であるガゼフ・ストロノーフの事は知っている。話によると負けはしたらしいが、あの者は冒険者組合が目をつけるだけの才能を持っている。前に見た時よりも実力をつけている事だろう。

「本当なら依頼を幾つか受けさせてから昇級試験を受けさせたかったが、いい機会だ。たつちの腕はゴールド級。成長していれば、更にもありえる」

アインザックは、たつち達が冒険者組合に顔を出したら自分の所に来るように従業員に申し付けて置く。突如現れた二人組の実力を知るために。

◇◇◇◇◇

大量の薬草を手に入れた三人と漆黒の剣は、予定とは違うが十分な儲けを得たので、エ・ランテルへ暗くなる前には戻ってきた。薬草を取り扱う組合に薬草を卸し、約束通り分け前を漆黒の剣が少し多めで分ける。その後は別れ、三人は念願の目的を果たした。

「ふふふつ、これこそが俺の真の姿」

木製の山羊の仮面を身に着けたウルベルトが不気味に笑っている。わざわざ街の中だと言うのにフードまで被っているので衛兵に何度も職質されているが、当人はあまり気にしていないようだ。

「本当ならミスリルが欲しかったんですけどね」

「十分ですよ。私の装備を優先してもらいありがとうございます」

たつちは、鋼鉄製の全身鎧を身に着けている。手には、買ったばかりの盾もある。ミスリル程の強度はないが、これで本来の戦い方ができる。

「三人パーティーですからね。前衛がたつちさんしかいないから仕方ないですよ。それに、俺も買いましたし」

ペロロンは、砂漠の民が身に着けるようなターバンを被っている。今は街中なので顔が見えるが目元以外は布で隠す仕様だ。

はつきり言って、たつち以外は完全に趣味だ。山羊の仮面は、特に

魔法的効果はなく人目を集めるだけ。ターバンは、カッコいいから買っただけだ。

「でも、ウルベルトさん。そんな仮面、ラキユースさんに嫌われますよ？」

「別にいいんだよ。ラキユースさんの前なら外すから。これは、あくまでも冒険者……いや、偉大なる魔法詠唱者としての顔なんだからな。ラキユースさんの前では、ただのウルベルト。しかし、敵対する者にとっては畏怖の象徴となる物になる。ダークヒーローみたいでカッコいいだろ？」

「そうですかね？」

「私は、少しわかりますね。私も全身鎧を着ている時は、正義のヒーローだと思っっていますから」

「男なら憧れるもんな！」

「ええ、本当に」

(ああ、なんだか場違いな感じがする)

今思うと、ウルベルトは悪として世界を変えようとした。たつちは、正義として世界を変えようとした。ある意味では、似た者同士なのかしれない。ただ、ダークヒーローと正義のヒーローは同じ立ち位置なのだろうか？

傍から見れば変わり者の集団は、宿に戻る前に冒険者組合で依頼を確認しておく。

「すみません。シルバー級の依頼で何かいいのありませんか？」

まだこの世界の文字が分からないので受付嬢に尋ねる。この世界は、識字率が低いらしく読み書きができる者がそこまで多くないので不思議な光景ではない。

「……たつち様ですよね？」

受付嬢になんだか変な目を向けられる。おそらく、後ろで控えているウルベルトの影響だろう。視線が行ったり来たりしている。

「はい。私に何か？」

「冒険者組合長からお話があるとの事です」

「私にですか？」

「はい。ご案内いたしますので、こちらで少々お待ちいただけますようお願いいたします。」

「たっちの返事を聞いてからアインザックへ話を持っていく。その後、戻ってきた受付嬢の案内で部屋に通され、昇級試験の話を受ける。」「——つまり、私がモモンさんと剣で戦えばいいのですね?」

「そうだ。これは、相手もそうだが君達にとっても昇級試験になる。結果ではなく、あくまでも内容によるものなので頑張ってもらいたい」

「まさか噂の貴族様と戦う時がくるなんてな」

「漆黒の剣の皆さんの話だとデカイ剣を持ってたんですよ? たぶん、馬鹿力の持ち主ですよ」

「それにおそらくだが、モモンは強い。ギガントバジリスクを同じチームのナーベと二人だけで倒せるほどにな」

「ギガントバジリスクは、確かアダマンタイト級の相手ですよね?」

「そうだ。だからこそ君に頼みたい。王国戦士長と戦った君に」

「たっちは、考える。石化の視線に対する対策を講じたとしてもギガントバジリスクに勝てるかはわからない。しかし、相手はこちらよりも一人少ないにも拘らず倒した。結果を素直に受け止めれば、相手は自分よりも実力は上だろう。」

「勝負は、いつに?」

「モモンの方の都合もあるだろう。私の方でまとめておく」

「わかりました。私は、相手の方に合わせますので、いつでもかまいません」

「そうか。引き受けてくれるか。では、決まり次第使いを送ろう。頑張ってくれ」

アインザックから差し出された手をたっちは固く握り返す。

「アインザックさん。その戦いつて俺達は必要なんですか?」

「いや、あくまでもたっち君だけだ」

「だったら俺達は外していいですかね? 時間があるなら読み書きの勉強をしたいんですよ」

「そうですね。興味はあるけど、いい加減読み書きできないと不便で

すからね」

「応援をしてくれないのですか?」

「俺達関係ないからな」

「そうですね。あつ、でも、ナーベって人は気になるかも。アインザツクさん、美人でした?」

「話通り、美人だったな。いや、あれが美人なら今までそう呼んでいた人達をどう呼べばいいか分からなくなる」

「そんなに……いや、ウルベルト。お前には、ラキユースさんが居るだろ!」

「別にウルベルトさんのじゃないですけどね。んー、悩むなあー」

「私の応援は?」

「たっちの事よりもウルベルトとペロロンは、ナーベの方が気になる。二人がたっちの応援をするかは分からないが、未知の相手との戦いが決まる。」

第14話

冒険者モモンの下に冒険者組合からの使いが来たのは、次の日の朝だった。モモンは、明日以降であるのならいつでもかまわないと伝えてもらい、ナーベを宿に残し、一人でナザリック地下大墳墓へと帰還する。

(うわあ……)

アルベドにインフィーレア・バレアレと冒険者達を捕らえるように頼んだ。どうやら言ったことは守ったらしい。ただ、てつきり目隠しなどをして連れてくるかと思ったら棺桶のような物を執務室に持ってきた。と言うのも、どうやらデミウルゴスがナザリックに戻っているようで協力を頼んだそうだ。だが、問題はここからになる。棺桶を開けた中には、バレアレが居た。確かに、こちらの情報を知られないようにしろとは言った。言ったのだが――

「どうかなさいましたか?」

不思議そうにアルベドが聞いてくる。

「いや、なんでもない。これなら情報は守れそうだな」

バレアレの姿は、人であった頃なら悲鳴の一つと、嘔吐の一つはしただろう。バレアレは、目隠しをしていない。そもそもする必要が無い。なにせ、目玉が両方とも抉り取られているのだから。耳もそう。耳の穴だと思われる場所からは、血が噴き出している。何かしらの方法で潰されたのだろう。鼻に関しては何かで塞がれている。赤黒い何かで。口に関しては、舌が無い。何か口から音が漏れているが、それが何かはわからない。それと、手足が無い。止血はしているようだが、生きているのが不思議なぐらいのありさまだ。

「確認の為に聞くが、こちらの情報は何も知られてはいないだろうな?」

「はい。捕らえる時も万全を期しております。デミウルゴスが、アラとマールレに呼ばれていたようですので協力して頂きました」

「そうか。アルベドとデミウルゴスの二人なら心配はないな。偽装の方はどうだ?」

「はい。場所なども吟味してあります。野盗に襲われたような跡も残りましたので、この者が乗っていた荷馬車と共に配置すれば問題はなにかと」

「洗脳後は、私とナーベと共にエ・ランテルへ戻る事になる。冒険者の方で昇級試験を受ける事になったが、一日は猶予がある。その時に計画を実行する。再度確認をしておけ」

「畏まりました。それと、アインズ様。昇級試験の相手は調べておいた方がよろしいのでしょうか？　もしかしたら未知の何かを持っているかもしれません」

「アルベド。お前の言いたいことは分かる。だが、相手はたかだかシルバーだ。あのカルネ村に居た戦士長なら分かるが、その辺の者が私が負けるかと？」

「い、いえ、そんな事はございません！　至高の存在であるアインズ様が負けるなどある訳がございません！　申し訳ありません、出過ぎたまねを」

「かまわん。私の身を案じての事だ。それよりバレアレの件を任せろ。あの者は、予定通りいけばカルネ村の住人となる。私の為に精々働いてもらおうじゃないか」

即興で考えた計画だが、このままいけば上手くいくような気がする。と言うか、いつてもらわないと困る。

「既に、アインズ様の御考えの通りに動いております」

「よろしい。多少の問題はあったが全ては私の計画通りに事が運んでいる。アルベド、忙しいと思うがよろしく頼むぞ」

「アインズ様の為でしたらこのアルベド、忙しいなどとは思いません。どのような事でも致します。アインズ様がお望みであるのなら私をもっと好きなようにお使い下さいませ。アインズ様の欲望のままに、このアルベドを！」

グツと、力の籠った目で見られる。ついでに近づいてきてもいい。「そ、そうか。忠誠心は、確かに受け取った。忙しいだろうから今日はもう休みなさい」

「いえ、私は大丈夫でございます！　なんなら今からでもかまいません

ん！」

「な、なにがだ!? ——そ、そうだ! アルベド、今回の件が終わった
ら何か褒美を与える。だから、落ち着け」

「褒美ですか? アインズ様が、私に?」

「そうだ。いろいろと世話になっっているからな、労いを兼ねてだ。ま
だ金に余裕がある訳ではないが何か街で買おう。それで、どうだ?」

今はいろいろとお金が必要になる。ユグドラシルの物が使えれば
いいのだが、この世界の事を知らない今はあまり目立ちたくはない。
とはいえ、背に腹は代えられない。アルベドの暴走は、自分がアルベ
ドの設定を変えてしまったのが原因だ。これも、仲間の考えた設定を
勝手に変えてしまった自分への罰だろう。

「アインズ様が私に……私だけの為に……」

アルベドは、アインズの言葉を受けて何度も自分の中で繰り返し余
韻に浸っている。とても幸せそうな表情をしている。

「まあ、そういう訳だ。すまないな、アルベド。少し用を思い出した」
余韻に浸るアルベドの邪魔をしないようにコソコソと執務室から
逃げ出す。アルベドの事は嫌いではないが、時々怖くなる。自分のせ
いだと分かっているもなかなか慣れない。

◇◇◇◇◇

ナザリツク地下大墳墓の第六階層には、巨大樹がある。そこは、ア
ウラとマールレの家になっており、今日はデミウルゴスをそこに呼んで
ある。

「お待たせいたしました」

デミウルゴスは、外とアルベドから頼まれた仕事を終えたばかり
だ。

「ごめんね、デミウルゴス。忙しいのに」

「ごめんなさい」

「いえ、かまいませんよ。お二人が私に相談など珍しいですからね。
それで、いったいどのような事で?」

アウラは、トブの大森林での出来事をデミウルゴスに話す。話の途中でデミウルゴスの表情に変化があったような気はするが、続けるように言われたので最後まで話す。

「——なるほど。確かに興味深いお話ですね」

アウラから話を聞いたデミウルゴスは、思案を巡らせる。最高の英知を持つ悪魔の頭の中がどうなっているかは分からないが、アウラとマーレでは考えつかないような事も浮かんでいるのだろう。

「どうすればいいと思う？」

「……そうですね。まず一つ言える事は、この事は此処だけの話にしておいた方がいいという事です。お二人もそうですが、ナザリツクの者達は至高の御方々に関しては些細な事でも気になります。いらぬ混乱を招くおそれがある以上は、やめておいた方が賢明でしょう」

デミウルゴスの言葉に二人は納得する。特にアウラは、今も気持ちが落ち着かない。未だに、もしかして、と思ってしまう自分が居る。

「……ねえ、デミウルゴス。もしなんだけど、今度森に来た時にお話とかしちやダメ？ 姿とか見られないようにするから」

少しだけでも話がしたい。そうすれば、今の気持ちが少し収まると思う。

「できれば、それは避けて頂きたい。あまりにも情報がありませんからね。アウラの話では、確かに至高の御方々ではない可能性の方が高いです。しかし、そうでない可能性もあります」

「そ、それって、もしかして本物かもしれないってこと？」

「はい。あくまでも可能性ですが。それに、仮に違つたとしても関係者かもしれない。例えば……そうですね、至高の御方々の子孫などはどうでしょうか？ 何かしらの事情で私達よりも先にこの世界に来た。そして、人間との間にお子を産まれた。子が親に似る事は珍しい事ではありません。可能性は低いですが、ないとは言いきれませんね」

「至高の御方々の子供……」

「その場合ってどうなるんだろう？」

アウラとマーレは、それぞれ至高の御方々に子供ができた時の事を

考えてみる。忠誠心は、至高の四十一人よりはないが、悪い気はしない。

「お二人共、あくまでも可能性だという事をお忘れなく。先ほども言いましたが、今のような事を考える者がナザリックから出るかもしれませんが。そうなれば、ナザリック内で必ず揉める事になるでしょう。それだけは、避けなければいけません」

デミウルゴスの言葉に二人は謝る。

「他にもさまざまな可能性はあります。しかし、あまりにも情報が少ない。今の私は、アインズ様の御命令で別件を扱っています。もつともこれは、お二人も同じですがね。しかし、確かに気にはなります。そうですね、時間を見て私が調べておきます」

「ごめんね、忙しいのに。でも、なにか分かったら教えてね」

「ボクも知りたい」

「分かりました。お約束しましょう。それで、お二人は私を此処で待たれていたようですが、アインズ様から下された御命令の方はどうなっているのかな?」

「——あつ、そうだった!? マーレ、急いで戻ろう」

「う、うん。ありがとう、デミウルゴスさん」

「ありがとうね、デミウルゴス!」

アウラとマーレは、急いで自分の仕事へと戻る。

「ウルベルト様……」

思わず一人になり、口から自分の創造者であるウルベルト・アレイン・オードルの名前が零れる。先ほど、アウラとマーレに言った言葉は、自分に対してのものだ。あの二人にとっては、あくまでも至高の四十一人なのかもしれないがデミウルゴスにとっては、自分を創り出した者なのかもしれないのだ。胸中は、穏やかではない。

「可能性としては低いですが、本人であるという事も……」

あの二人には言わなかったが、本人である可能性だつて十分にある。例えば、何者かの手によって人になってしまった。至高の存在である御方々は確かに強い。しかし、プレイヤーと呼ばれる同格の者達が居る。このナザリック地下大墳墓に攻めてきた憎むべき者達。そ

の者達が、ワールドアイテムか何かでアインズ以外の至高の御方々を人間へと変えてしまった。その為に力を失い。それが理由でこの場所を去ってしまった可能性だってある。

他には、単なる戯れもありえる。話だけではあるが、至高の御方々はよく冒険や旅に出かけられていた。もしかしたらその一環なのかもしれない。力があるが故に戯れで人になる。神話などでは神が人になる話は少なくはない。アインズの反応から考えるに、この世界に来たこと自体は偶然だ。ただ、似たような事が他の至高の御方々に起きたら？

「……いけませんね。思考の罨に掛かってしまいそうです」

他の誰かならこうはならない。しかし、自分を創造したウルベルトが居るかもしれないのだ。焦るなど言うのが無理な話だ。会えないと思っていた者がそこに居る。確かめたくて仕方がない。仕方がないが――

「――今は、アインズ様の御命令の方が優先ですね」

所詮は、可能性にすぎない。自分達の為に最後まで残られたアインズの命令を蔑ろにしてまで動く程ではない。

「あの二人を使うべきだったのかもしれない」

最悪ではある。しかし、今の自分には調べる時間と手駒が無い。なにか、何かを考えなければならぬ。

「今は、役割を果たすとしましょう。本当に至高の御方々なのでしたら何事も問題なく過ごされるはずですからね」

自分の知る至高の四十一人とはそういった存在だ。別に焦る必要はない。今は、役割を果たし、調べるための準備をするだけでいい。

第15話

計画は実行される。ナザリックからエ・ランテルに戻り、ナーベと共にモモンはトブの大森林へと移動。陽が沈み、夜の暗さが現れる頃にアルベドが周囲の確認を行い、偽装する。そして、何食わぬ顔で、ンファイレア・バレアレと共にエ・ランテルへと戻る。

「——そうだったのかい、ンファイレア……」

「お婆ちゃん……」

バレアレ商店には、ンファイレアの祖母であるリイジー・バレアレが居た。どうやら、予定を過ぎても戻らないンファイレアの事を心配していたようだ。今は、ンファイレアの事を優しく抱きしめている。話によると、冒険者組合に搜索の依頼を出すところだったらしく危なかった。

「モモンとやら、心から感謝する。お主が居てくれなければ、ンファイレアもどうなっていた事か……」

「私達は、トブの大森林からの帰りに偶然に会っただけ。人助けに關しては、特に感謝されるような事ではありませんよ。困っている方が居たら助けるのは当たり前ですからね」

これは、アインズ・ウール・ゴウンのメンバーの一人がよく言っていた言葉だ。カルネ村の時は、この言葉を思い出し助けた。後悔はしていないが、やり慣れない事はあまりするものではないと学んだ。まあ。今回は違うが。

「モモンさんが居てくれて本当に安心したんだ……」

「そうかい……よかったのう……」

「どうやらお邪魔のようですね。ナーベ、私達は帰るとしよう」

「はい。モモンさん」

家族の間に水を差してはいけけないのもう帰る。と言うよりも、自分達が居ては計画が進まない。

モモン達がバレアレ商店から去り、ンファイレアの様子が落ち着いた頃の事だ。ンファイレアがリイジーにある話をする。

「そうだ。お婆ちゃん」

「なんだい、ンファイレア?」

「僕を助けてくれる時にモモンさんがあの赤いポーションを使ってくれたんだ」

「赤いポーションを?」

先ほどまでのンファイレアを心配していた家族の顔から、一人の職人へとリイジーの表情が変わる。元々は、ンファイレアがモモン達に依頼をし、その過程で赤いポーションの事について聞く予定だった。しかし、それは失敗した。代わりに別の冒険者に依頼をする事になった。内心では、どのようにして話を聞き出そうか考えていたリイジーにとつては、ンファイレアの言葉は十分な魅力を持つ。

「助けてもらった時に少しだけ話をしてみたんだ。そしたら、この赤いポーションは知り合いの方が製作しているんだって。モモンさんは、それを幾つか貰ったみたい」

「あれを作りだした者が居ると。それで、他には何か言っておったか?」

「それが、お婆ちゃん……」

ンファイレアは、言い辛そうに顔を伏せる。

「何かあったのかい? 言つてごらん?」

「僕、その人の下に行こうと思うんだ。モモンさんが紹介してくれてるって約束してくれたんだ。だから、行かせてほしい」

リイジーは、考える。ンファイレアがこういった事を言うのは珍しい。確かにそれだけの魅力のある話だ。なにせ、劣化しないポーションは薬師にとつては夢の産物だ。それを作りだせる者の場所で学ぶ事ができる。それは、エ・ランテル最高の薬師とまで言われるリイジーにとつても魅力的な話だ。

「ンファイレアがそうしたいのなら止めはしない。行つておいで」

「ありがとう、お婆ちゃん! それと、もしよかったらお婆ちゃんも行かない?」

「ワシもか?」

「うん。僕がお婆ちゃんも興味があるつてモモンさんに言つたんだ。それに、エ・ランテルでも最高の薬師だつて。そしたら、本人が望む

ならって言うてくれたんだ。一緒に行こうよ」

これには、リイジーも驚くが悪い話ではない。しかし、ンフィーレアはここまで積極的な性格だったか？

「魅力的な話だ。若い先短いワシにとっては最後の選択になるだろう。ワシも共に行こう」

「やった！ お婆ちゃんと一緒に嬉しいな」

「それで、ワシはどうすればいいのだ？」

「場所は、カルネ村になるんだって。あの場所は、トブの大森林から近いから研究の材料が手に入るあの場所を今は拠点にしてるんだって。準備ができたらすぐにでも来てほしいって」

「カルネ村？ 確かにあの場所は、トブの大森林に近い。研究をするにはもってこいの場所だ」

「そうだよ。エンリも……うん、なんでもない」

顔を赤くして否定するが、ンフィーレアがカルネ村に居るエンリ・エモットに惚れている事は知っている。カルネ村は、トブの大森林で薬草を採取する時には必ず寄っている場所だ。

「これは、別の方でも期待できるのかのう」

「——もう、エンリとはそういうのじゃ……あつ、そうだ。それと、この事については秘密にしてほしいんだって。あくまでも赤いポジションの事は秘密。それが守れないなら今の話はなしだって言われたんだ」

「うむ。分からなくもないな。劣化しないポジションの事を知れば、ポジション製作に関わる者なら誰しもが師事を願い出るだろう。この事は隠しておこう」

表向きはトブの大森林にある薬草の為にカルネ村へ工房を移す事にした。あくまでも赤いポジションの事は秘密にしたままで。

◇◇◇◇◇

これは、バレアレ家の問題を解決してすぐの事だ。執務室に戻った途端に報告があった。

「不審者？」

「はい。ンファイレーア・バレアレ、リイジー・バレアレの監視をしていたのですが家の様子を窺う者がおりました。今は捕らえて、ニユーロニストが目的を調べています」

ニユーロニスト・ペインキル。ナザリックの五大最悪の一角である《役職最悪》の異名を持つ拷問官だ。誰かは知らないが今まで捕らえた者達同様、碌な目にはあわないだろう。

「そうか。あれから時間はそれほど経ってはいないが何か分かったか？」

「いえ、まだ何も。捕らえた者は、人間の女になりますが変わった物を持っていました。持たなきゃいけない」

アルベドの言葉を受けて、控えていたメイドが金属製のプレートに何かを載せて持ってくる。どうやらその女が持っていた物だろう。いろいろとある。

「これは……冒険者のプレート？」

最初に目についたのは、冒険者が身に着けるプレートだ。今は、カッパのプレートを冒険者モモンとナーベが身に着けているがそれと同じ物だ。しかし、なんだこの数は？ カッパ、アイアン、シルバー、ゴールド。多くのプレートが鎧に縫い付けられている。

「殺しが趣味なのか？」

殺人鬼の中には、殺した者から戦利品を奪う者が居ると聞く。この者は、冒険者を狙う殺人鬼なのだろうか？

「それで、どれが変わった物なのさ？」

「こちらになります」

アルベドが一つを拾い上げると、丁寧にアインズの手の上に載せる。

「《オール・アプレーザル・マジックアイテム》」

アイテムを鑑定する中で上位の魔法。これで、詳細が分かる。

「叡者の額冠……確かに変わった物のようだな。これは、どうもユグドラシル由来の物ではないようだ」

調べてみたところ面白い効果がある。大量のMPを消費する代わ

りに本来使えない位階の魔法を行使できるようにする物。仮に一般的な最高の位階である第十位階の上にある超位魔法で試したらどうなるのか？ ワールドアイテムクラスの事でもできるようになるのか？ 好奇心をくすぐられる物ではある。

「だが、使えないな。これを身に着けたものは自我を失うようだ。それに、使える者も限られている。あのンフィーレアなら使えるかもしれないが、あれには別の役割がある。しかし、ただの殺人鬼が持っている物としては不思議だ。殺した時に手に入れたのか？ まあ、いい。念の為に監視者を増やしておいたかいがあつたな、面白い物を手に入れられた。アルベド、この者からは情報をできる限り集めろ」

「畏まりました。情報を集めた後は、どうなさいますか？」

「その時に考えるでしょう。冒険者相手に殺人鬼として働けるだけの腕があるんだ。もしかしたら価値があるかもしれない。仮にあつたとしても大したものではないだろうが……この世界の人間だと言うだけでも価値はある。壊れてもかまわんが、殺すなどだけ言うだけ」

「やっど問題が解決すると思つたら新しい問題が。明日は、昇級試験があるというのに。」

（いつになったら問題がなくなるのかな？）

「この世界に来てから問題だらけだ。アンデッドだから心労などで死ぬことはないだろうが、いい加減にしてほしい。」

第16話

今日は、エ・ランテルを拠点とする冒険者達にとっては一つのイベントがある日だ。突如現れ、冒険者組合で啖呵を切った風変りな二人組。貴族と思えるほどの見事な全身鎧に二本のグレートソードを持つ戦士モモン。そして、美姫と一部の者達が呼ぶようになった美しき魔法詠唱者ナーベ。まだ二人の戦っているところを見た者はいないが、組合に持ち込まれたモンスターの部位の量と内容を見るにアダマントタイト級ではと噂されている。そんな二人の昇級試験が本日举行されることになるのだが、その内容は決闘である。命のやり取りはしないものの本気で戦いその内容で昇級するかを判断する。

そして、その相手となるのが今やエ・ランテルでは知らぬ者はいない新星たち。シルバー級ではあるが冒険者組合が目をつけるだけの才能を持つ人材で、礼儀正しい好青年は多くの者達から好感を持たれている。最近だと、負けはしたが王国戦士長であるガゼフ・ストロノーフと剣を交えたと噂になっている。本日は、戦士としてモモンとたちが代表として戦うので同じチームの仲間であるウルベルトとペロロンは居ないが、彼を応援する者は少なくはない。中には、身分不相応の装備とナーベを連れている事に対する嫉妬もあるが。場所は、エ・ランテル近郊の平原。街から少し歩くが、多くの冒険者が見に来ている。

「彼が、モモンだ」

アインザックから相手の紹介をされる。されるのだが——たちの目には、その隣に居るナーベが映る。

(似ている……)

たちの脳裏にナーベラルの存在が思い浮かぶ。ナザリック地下大墳墓に居る戦闘メイドであるプレアデス。名前は、ナーベラル・ガンマ。あくまでもユグドラシルのNPCになるのだが、よく似ている。

(名前もそっくりですね……)

もしかして、本人？ 確かに可能性は考えていた。自分達が来たよ

うにユグドラシルの者がこの世界に居る可能性。そうすると、その隣に居るモモンは――

(まさか……モモンガさん?)

可能性はある。おそらくだが、あの最後の日もモモンガはユグドラシルの中に最後まで居ただろう。しかし、何故戦士の格好を? モモンガは、魔法詠唱者だ。仮にオーバーロードと呼ばれる異形種を隠すのだとしても戦士になる必要などあるのだろうか?

「――どうかしたか?」

「いえ、なんでもありません」

気になる。気にはなるが、仮にモモンガではなかったら?

(話してみれば分かりますね)

とりあえず話をしてみよう。話せばわかるはずだ。

◇◇◇◇◇

「まったく、娯楽のつもりなのか」

見世物のようでいい気はしないが、これも冒険者として必要なので我慢しておく。

「しかし、相手はあんなのか」

見る限り弱そうだ。安物の全身鎧。それに、剣と盾。所詮は、シルバー級の冒険者か。

「まあ、問題はないな。ナーベ、離れ――どうかしたか?」

隣に居るナーベが、ジツと相手の事を見ている。珍しい。人間に対して興味のないナーベが凝視するほどの相手。

(もしかして、隠れた実力者か?)

もしかすると、ナーベは相手の何かを感じたのか?

「ナーベ、どうかしたのか?」

「――あつ、いえ……」

ナーベの表情は困惑を浮かべている。

「あの者からは……他の人間とは違う何かを感じます。あちらに居る下等生物とは違う何かを……」

観戦をしている者達の中にもそれなりのクラスの者は居るだろう。シルバーだと甘く見ると痛い目を見るかもしれない。

「なるほど。女の勘とでもいうのか？ よく分からんが注意しよう。ナーベ、邪魔にならないように移動しろ。但し、揉めるな」

「畏まりました。モモンさん」

ナーベは、一礼すると他の冒険者達の居る所へと向かう。

「ナーベちゃん！ 今日可愛いねー！」

「話し掛けるな、ゴミ虫。いい加減その辺で野垂れ死になさい」

「いやー、ナーベちゃんに覚えてもらえて光栄だねえー！」

さっそく揉めている。誰かは知らないが、あまり絡まないでほしい。

「さて、行くとしよう」

相手は、アインザックと話をしている。そういえば——名前を聞いていなかったな。シルバー級の冒険者が相手だとしか聞いていないが、初めての戦士としての戦いだ。名前ぐらいは知っておきたい。

「初めまして、たつちと言います」

——ん？

「どうかしましたか？」

「いえ、なんでもありません。私は、モモンと言います。今日は、よろしく願います」

「はい。今日は、お互いに頑張りましょう！」

二人は固い握手を交わし、アインザックを中心として距離を取る。

モモンは、距離を取ると背中にあるグレートソードを二本とも抜き、一本を地面へと突き刺す。軽々とするその動作に歓声上がるが、モモンにとってはどうでもいい事だ。

（たつち……まさか、たつちさん？）

ありえない者の名前が浮かぶ。たつちこと、たつち・みーは、アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーの一人だ。特にたつちは、モモンにとっては誰よりも心に残る人物だ。ゲームを始めた当初、当時流行っていたプレイヤーによる異形種狩りからたつちがモモンを助けた事からユグドラシルでの全てが始まる。モモンにとって、たつち

の存在は何物にも代えがたいほどに大きい。

(しかし、たちちさんが此処に居る可能性は……)

おそらくない。そもそもたちは、ユグドラシルをやめている。それこそアカウントも消している。最後の日にも現れなかったたちが此処に居るのはおかしい。

「――なら、偽物か」

残念だ。残念だが僅かとは言え、いい夢が見られた。

「しかし、奇しくも同じ装備か」

内容は天と地ほども違う。たちが身に着けていた装備とは違う。安物の装備だ。しかし、全身鎧に剣と盾。更に言えば、構え方も似ている。モモンは、戦士としての戦い方の参考にギルドメンバーを使っている。たちちもその中の一人なのでよく分かる。

「せめて、似た名前のよしみだ。あまり時間を掛けずに戦おう」

これだけ大勢の観客の前で別人とは言え、たちが無様に負けるのはいい気がしない。早々に終わらせよう。

◇◇◇◇◇

「違うのかな?」

先ほど会話を交わしたモモンとユグドラシルで知っているモモンガとは雰囲気が違う。少しとは言え間は空いたが、それでもまだ忘れてはいないはずだ。

「他人のそら似かな?」

世の中には、三人は似た者が居ると言う。名前も似ているのは珍しいが此処は異世界だ。そう思うと、不思議ではないのかもしれない。「しかし、困りましたね。あんな剣を受けられるのでしょうか?」

たちの持つ盾は、鋼鉄製の小ぶりの円形の盾だ。受けるよりも流す事を考えて作られている物。正面から受ければ壊れそうだが、上手く丸みのある部分を利用して捌けばいけるか?

「話だとアダマンタイト級。戦士長様との戦いで少しは成長しましたが、おそらくはパワータイプ。違う戦いができそうですね」

王国戦士長であるガゼフ・ストロノーフも力はある。しかし、剣を交えてみると技術の高さを感じた。今日の前に居る者の力量は分らないが、わざわざグレートソードを、それも二本持つことから力を活かした戦いをすると思われる。速さで翻弄するのが効果的だろう。「――頑張ってください、たちちさん！」

自分を応援する声が聞こえる。今日の事を聞き、応援に来てくれた漆黒の剣の姿が見られる。肝心の仲間であるウルベルトとペロロンは、結局は応援に来なかった。今は、冒険者組合で紹介してもらった人物の下で読み書きの勉強をしている事だろう。仲間なんだから少しぐらい応援してほしい。

「まあ、ない物をねだっても仕方ありませんね」

たちは、最後の確認で軽く剣と盾を扱う。盾を使うのは久しぶりだが、感覚は忘れていない。これなら問題はないだろう。

「では、行きましょう」

たちは、未知の相手との戦いへと向かう。

◇◇◇◇◇

たちちとモモンは、互いに向き合う。距離は、十歩よりも空いているぐらいだ。アインザックの立ち合いの下に行われるわけだが、昇級試験とは思えない緊張感が漂っている。この緊張感を生みだしているのがシルバー級とカッパー級なのだから信じられない。

「――準備はいいな？」

アインザックは、二人に問う。

「私は、いつでもかまいません」

「こちらも」

「そうか。では、始めるとしよう」

アインザックは二人から離れ、他の観戦者達の所まで行く。本来なら此処まで離れる必要はないが、二人から感じる気配がそうさせる。この二人は、加減をする気が無い。念の為に回復魔法を使える人間を呼んであるが死んだら意味がない。

(まったく、血の気が多い)

悪態の一つも吐きたくなるが、この勝負の水を差す気はない。アイザックも冒険者組合長ではなく戦士として興味がある。

「では、昇級試験を始める。念のために言っておくが殺しはなしで頼む。——始めっ！」

勝負はいきなり動いた。開始早々モモンが動いたのだが、このような事を誰か予想できたか？ モモンは、全身鎧を着ている。剣も背丈ほどはある大剣だ。そんなモモンが、一息で十歩以上は離れている距離を一瞬で詰め剣を振るうとは誰が予想できるのか？ モモンは軽々と片手で剣を振るい、予想を遥かに上回る速さでたち目掛けて奇襲を仕掛けたのだ。

(速い——が、相手はたちだ)

この場にいる者の中でモモンの動きを捉えていたのは、アインザックを入れても少ない。それも遠くから見ているから分かるようなものだ。しかし、たちはそれに反応していた。

(——お見事です)

たちは、モモンに合わせて前に踏み出していた。モモンが前進するために踏み込んだとするなら、たちはそれを迎え受ける為に踏み込んだ。

「《スパイクアタック》」

踏み込んだたちは盾を使い、モモンの剣を持つ手を狙う。モモンの持つ超重量級の剣をたちの盾では受ける事はできない。捌く事はできるかもしれないが危険ではある。だからこそ剣以外の部分を狙った。

「——素晴らしい」

しかし、モモンもそれに反応する。傍から見れば、一瞬の攻防だ。モモンは、剣を持っていない方の手で自分の剣の腹を横からぶん殴る。すると、踏み込んでいたたちに向けてモモンの腕ごと金属の塊が一気に動く。

「——ッ——」

たちは、それを剣で捌こうとする。しかし、受けて見てわかった。

異常だ。異常な力が剣を伝わり、腕に、身体へと電流のように伝わる。思わず剣を落としそうになるが、歯を食いしばり耐える。耐えるが――バランスを崩し、簡単に地面を転がされる。

（女の勘というヤツは侮れないな）

モモンは、たつちが立ち上がるのを待っている。その姿は無様なものだ。追い打ちをかければ簡単に倒せるだろう。しかし、そんな無様な真似はしない。モモンが今の動きに対応できたのは、レベル100の力によるものだ。異形種としての感覚も合わさり、人間の頃とは全ての感覚が段違いの物になっている。そんな自分にシルバー級の冒険者が一矢報いようとしたのだ。称賛に値する。

（カルネ村を襲った者達よりも強い。戦士長には負けるが、これも戦士としての才能なのだろうか？）

モモンは、剣を構える。どうやら名前負けはしていないようだ。（たつちさんには遠く及ばないが、十分に楽しめそうだ）

早く立ちあがってほしい。次の戦い方を見せてほしい。それを糧として、目標である本物を超える。

「強い、ですね……」

たつちは、立ち上がる。相手が待っていてくれたから立つ事ができた。これだけの衝撃は今まで受けた事が無い。少なくとも戦士長よりは上だと思う。なんて、馬鹿力だ。

「まだやるかね？」

遠くからインザツクの声が聞こえる。どうやらよほど無様な姿を晒したようだ。

「いえ、まだやらせてください」

既に相手は、こちらを待つようにして構えている。やる気のある相手に感謝を述べたくなる。

「モモンさんでしたね。あなたはとてもお強い。おそらく、アダマンタイト級の戦士でしょう」

「そうですか？　もしや、アダマンタイト級の戦士と戦った事が？」

「ええ、二人ほど。どちらも負けましたけどね」

たつちの言葉にモモンは納得する。どうやらこの相手は、ただのシルバー級ではないようだ。

「たつちさんでしたか？ 私のお願いを聞いてもらえますか？」

「お願いですか？」

「はい。正直に言うと、私は貴方をなめていました。所詮は、シルバー級の冒険者なのだ。しかし、こうして戦ってみて分かりました。貴方は、強い。だからこそ、もう少し付き合って頂きたい」

「……そう言われたらやるしかありませんね。いいでしょう」

盾を突き出すようにたつちは構える。二人には怒られるかもしれないが、勝ちたい。

「——行きます！」

たつちは、駆け出す。先ほどのモモンに比べれば雲泥の差がある。しかし、モモンはそれを迎え受ける。グレートソードを肩に担ぎ振り下ろせる体勢で。それも、先ほどと違い両手で持ちながら。

「うおおおおおー！」

たつちが雄たけびを上げる。それに伴い速度を上げる。どうやら本気ではなかったようだ。

「——遅い！」

モモンは、たつちが間合いに入ると同時に力任せに振るう。剣速は、先ほどは桁が違う。地に脚で踏ん張り、両腕に力を込めて一気に振るう。その剣速は、轟音を響かせ地面へと落ちる。その際に地が揺れた気がするが、気のせいではないだろう。モモンを中心に一気に舞う土煙がそれを証明している。

——その時、金属の響く音が聞こえる。

「——固すぎますね……」

たつちは、モモンの横に立ち剣を振るっていた。しかし、たつちの持つ剣ではモモンの鎧に傷一つ付ける事はできず、中ほどから折れていた。

「……貴方は素晴らしいですよ」

モモンは、最後に称賛を送る。剣は折れたが、それだけの力で振るったのだろう。

「アインザック殿。たっちゃんをよろしく頼みます」

モモンの目には、片腕を切り落としたたっちの姿が見える。あの瞬間、盾と自分の腕を犠牲にしてもモモンの懐へと飛び込んだ。効果は僅かなものだったかもしれないが、たっちの剣をモモンに届かせた。腕を失っても剣が折れるほどに振るうだけの闘争心を持つ戦士。

「わかった。すぐに回復を」

アインザックの指示で待機していた神官がたっちの下へと向かう。

「——待ってください！」

たっちは、モモンを呼び止める。

「片腕が無くなっただけです！ 魔法で治せる程度の物です！ まだ

——私は戦える！」

腕を切り落とされても、あれだけの怪力を見せられてもたっちの目から闘志は消えない。むしろ、それは強まっている。

「馬鹿を言うな！ このままでは死んでしまうぞ！」

アインザックもこれには怒声を飛ばす。

「——なるほど。貴方は、本当に素晴らしい」

モモンは、たっちの方を振り返る。

「貴方は、私の知り合いに似ている。何れは、素晴らしい戦士になるでしょう。だが、今は私の方が強い。再戦は、いつでも受けます」

モモンは、そう言うとナーベを連れ立ち去る。

昇級試験はこうして終わるが、観戦していた冒険者達によりこの戦いは皆の知るところとなる。不屈の闘志を持つ天才と称されるたっちと、それに勝った無双の漆黒の戦士の戦いを。

第17話

モモンは、ナーベと共に宿へと戻ってきた。偽物とは言え、たつちとの戦いで大事な事を思い出した。慢心が命取りになる。仮に相手がレベル1だとしても勝てるとは限らない。もしかしたらワールドアイテムを持っていて可能性があるからだ。相手を油断させて戦うのは常套手段。しかし、勝手に慢心してそのような状況を作り出すのは愚か者がする事だろう。

(戦っていないからか……いや、人間から今の姿に変わったからこそ慢心なのかもしれない)

ユグドラシルの終わり頃は、まともに戦う事がなかった。それを考慮しても自分の力に自信を持ち過ぎていた。相手をなめていた。もし、あの剣が自分を殺せる武器なら死んでいただろう。

「流石は、たつちさん。名前だけとはいええ、大事な事に気づかせてくれるとは」

どこか嬉しくなる。しかし、同時に寂しくもなる。

「あの、モモンさん。一つ聞いてもよろしいでしょうか？」
「なんだ？」

「あの者は、たつち・ミー様ではないのでしょうか？」

たつちの名前を聞いた時に、ナーベは思わず我が目を疑った。ただ人間。力のない人間。しかし、たつちの名前を持つ者である以上は可能性を信じたかった。

「いや、確かに似てはいたが違う」

他の者ならともかくたつちは違う。ユグドラシルをやめた後も少し関わりがあった。最後の日にユグドラシルの世界に来なかった以上可能性はないだろう。しかし、確かによく似ていた気はする。顔を覆い隠す兜を考慮しても声や言動が似ていた気もする。

(いや、心の何処かでそれを望んでいるだけか)

ここ最近、たつちを含めギルドメンバーを考えながら剣を振るっていた。少しでも同じような事ができないかと思ひ。その気持ちがあると思わせているのかもしれない。

「しかし、ナーベの様子を見る限り関われそうな人間だ。人間に慣れるための相手としてはうってつけかもしれない。機会があつたら関わっていくとしよう。さて、連絡をするか」

モモンは《メッセージ》の魔法をナザリックに居るアルベドへと繋げる。

「アルベド。捕まえた者から情報は何か得られたか？」

『はい。どうやら価値のある者だったようです』

「ほほう」

モモンは、アルベドから話を聞く。名前は、クレマンティヌ。今はズーラーノーンと呼ばれる組織に属しているが、戦士長を狙ったスレイン法国の漆黒聖典に属していたらしい。どうやら辞めた際に叡者の額冠を奪ったそうを追われる身なのだそう。そして、そのアイテムをンファイレアに使わせ、エ・ランテルに潜んでいる仲間への螺旋なるものをやらせる。その間に逃走する予定だったらしいが現状に至る。だが、これまでの情報は正直どうでもいい。どうやらスレイン法国には、ユグドラシルのプレイヤーの形跡がある。特に気になるのは、その者達が残したアイテムだ。もしかすると、ワールドアイテムがあるかもしれない。逆を言えば、注意するべき相手でもある。ワールドアイテムは、レベル差など関係ないほどに強力だ。物によっては、ナザリックは負ける事になる。

「——なるほど。確かに価値がある。詳しい事は、後でまとめて報告してくれ」

『畏まりました』

「それと、至急で悪いが外に出ている者を集めてくれ。少しやりたい事がある」

『シャルティア達は、どうなさいますか？』

シャルティア・ブラッドフォールン、セバス・チャン、プレアデスの一人であるソリュシャン・イプシロンには、他とは違う任務を与えている。目立つのが目的なので急に居なくなると今後に差し支えるだろう。

「シャルティアだけ呼び戻せ。セバス、ソリュシャンには、危険な者が

居ると伝えておけ。他と違うと感じたらすぐにこちらの指示を仰ぐように、と」

『畏まりました』

そこで、《メッセージ》の魔法を切る。

「ナーベ。お前も力のない者だからと言って油断はするな。レベルだけが全てではない。戦闘経験やアイテムなどで結果が違う可能性がある」

「肝に銘じておきます」

「うむ。私は、一旦ナザリックへと戻る。何かあれば、連絡をするように」

モモンは、ナザリック地下大墳墓に帰還する。今回学んだことを他の者達に教える為に。

◇◇◇◇◇

アインズとなり、執務室で遠隔視の鏡を弄っている。これは、遠くの場所を見る事ができるアイテムだ。普段は、アルベドなどがナザリックからの監視に使っているが、今は守護者達が集まるまで暇なので適当に眺めている。

(しかし、驚いたなあ……)

昇級試験を意気揚々と受けに行ったらたちと名乗る戦士に遭遇した。あの時は、アンデッドの精神抑制が効かなかったら狼狽えていただろう。後に英雄となる冒険者モモンとして演じている以上は、そんな醜態を人前では晒せない。アンデッドで良かった瞬間だ。

(でも、あのたちっちは参考になりそうだな)

アインズは、遠隔視の鏡を動かし、あのたちちを探す。これから冒険者をする上で参考にするにはいい人物かもしれない。

(たぶんだけど、組合にでもいるのかな?)

エ・ランテルの街もそれなりに広い。おそらくだが、冒険者組合でアインザックとでも話していると見当をつけ――

(……………)

アインズこと、モモンガこと、鈴木悟は絶句する。

◇◇◇◇◇

たつちは、腕を魔法で治してもらおうとアインザックと共に冒険者組合に足を運ぶことになった。アインザックが言うには、おさがりではあるが剣と盾をくれるのだそうだ。

「待たせたね」

アインザックの手には、使い込まれた形跡のある剣と盾がある。

「これは、私が昔愛用していた物でね。少なくとも君の持っていた物よりは物がいいだろう」

「ありがとうございます」

「かまわんよ。こちらの頼みを聞いてくれたお礼だ。まあ、あそこまでやれとは言わないがな」

話を聞くとミスリルを僅かとはいえ使用しているそうだ。純正のミスリル製に比べれば劣るが、それでもただの鋼鉄に比べれば十分に価値のある物になる。

「しかし、君も相当腕を上げたな。私の見る限り、ミスリル級はあるだろう。残念ながら装備の差でオリハルコン級には劣るが戦士としてなら戦える」

「そうですかね？ あんまり実感はないので分かりません。しかし、あのモモンさん……何処かの貴族でしょうか？ 言葉に重みと言いますか、威厳のようなものを感じました」

「可能性は十分にあるな。供にしているナーベも貴族の令嬢か、貴族が困った者と考えれば納得はいく。ただ今は些細な事だ。あの者の実力は、間違いなくアダマンタイト級だ。いや、それ以上かもしれない。なにせ、君との戦いでも余裕を感じられた」

たつちとアインザックのモモンへの評価は高い。それこそ、たつちの中では、あの王国戦士長にすら負けないのではと思えるほどに。

「とはいえ、依頼を受けていないような者をアダマンタイトにはできない。私の権限だけでは、精々ミスリル級が限度だ。それ以上になる

と他にも話を通さなければいけない。たち君。後で、ミスリル級のプレートを渡す。仲間達と共に取りに来てくれ」

「ありがとうございます」

これで、たち達三人は、ミスリル級冒険者になった。話からするにモモン達もだろう。

「さて、一つ依頼を受けてもらおう。話の流れになるが、王都の冒険者組合に今回の件を伝えてもらいたい。仮に疑問を持たれるようなら君が剣を振るうといい。そうすれば、あちらもモモンの実力が分かるだろう。詳しい話は、プレートを取りに来た時にしよう」

「分かりました。仲間達と共にまた伺います」

たちは、アインザックに礼を述べると部屋から出ていく。

「彼は、いい冒険者になる。腕もいいが礼儀正しい。評判も上々だ。仲間に関しては……多少難はあるが問題は……」

話によると、ウルベルトは何度も衛兵に職質されているらしい。なんで、怪しい仮面を自ら被るのか分からない。ペロロンに関してはいつも通り子供を持つ親御さんからの評判が悪い。

「腕だけは確かなのだが……」

将来有望な者達だけに残念だ。

◇◇◇◇◇

たちが話を終え、アインザックの部屋から外に出て休憩室に向かうと、ウルベルトとペロロンが席に座り待っていた。

「聞いたぞ？ ボロ負けだったみたいじゃないか？」

「腕を斬られても戦おうとか、バーサーカーですか？」

「少しは慰めて下さいよ。これでも落ち込んでるんですから」

たちは、空いている席に腰掛ける。

「剣と盾を壊した奴に言葉なんてねえよ！ 代わりに貰えなかったらどうするつもりだったんだ？」

「戦士無しでモンスター狩りとかドキドキ通り越して死にますよ」

「それに関してはすみません。ですが、負けたくなかったんですよ」

「はいはい。どうせいつもの負けず嫌いだろ？ それよりそれはどうなんだ？ 貰った剣と盾は？」

「ミスリル加工されているそうです。純正品には負けるようですが十分だと思います」

「ミスリルって僅かでも高いのに気前がいいですね」

「それだけの内容の戦いだっただろ？ 観戦してた冒険者達から話は聞いたが面白そうな内容らしいからな」

「本当に強かったですよ。ああ、忘れていました。今日から私達は、ミスリル級になりましたので後でプレートを交換します」

「マジか!? これで、ラキユースさんに近づいたな！ よし！ 今から王都に行こう！ ラキユースさんに見せに行こう！」

「丁度、アインザックさんから王都での依頼を受けましたので行きましょう。とりあえず買い物を楽しみましょうか」

三人は、王都に行く前に買い物をする事にする。ウルベルトは、王都に居る蒼の薔薇のラキユースにミスリル級になった事を告げる為に。ペロロンは、同じく蒼の薔薇のイビルアイを見に。たちだけが依頼を忘れずに。

◇◇◇◇

「本物じゃねえか！」

思わず頭を執務机に叩きつける。これには、天井に《不可視能力》で姿を隠す（アインズには見える）エイトエッジ・アサシン達も動揺する。ちなみに森の賢王よりも強い。

「って言うか、楽しそうだな、おい！」

今度は、蹴りを入れる。これには、エイトエッジ・アサシン達もビクツとする。伝説の魔獣と呼ばれる森の賢王を捕食して餌にするような者達が。

「冒険者とか正直つまらない夢のない物だと思っていたが……こんなに楽しい物だったのか……」

遠隔視の鏡で見る三人は楽しそうに見えた。すつごく。ものすつ

ごく羨ましいぐらいに。

(しかし、何故あの三人が?)

この世界に居る可能性として考えていたのはアカウントを残していた者。特に最後のあの日に来た者だ。例えば、エルダー・ブラック・ウーズのヘロヘロなどがその例だ。もしかしたらログアウトできずにこの世界に飛ばされた可能性が無いわけではない。しかし、あの三人はアカウントを消していた。そして、最後の日には来なかった。

(もしかして、来てくれたのか?)

あるとするならそうだろう。最後の自分の呼びかけにあの三人は応じてくれた。そして、新しくアカウントを所持したからレベルが1にでもなったのだろう。なんで三人が一緒かは分からないが。

「……どうする? すぐにも会うべきか?」

正直に言えば会いたい。そして、あの中に混ざりたい。しかし、あの三人を見て何度も——今もアンデッドの精神抑制が働いているが冷静な部分がそれを止める。

(なんで人間なんだ……)

現状はあまりよくない。アイنزには分からないがナザリックに所属する者達には不思議な繋がりがあるらしい。それがあれば相手が姿を偽っていても分かるほどに。しかし、ナーベラルの反応から察するにたつちにはそれが無かった。仮にあつたのならあの時に気づいていただろう。ナザリックの者は、基本的に人間を嫌っている。見下している。その状態で、あの二人と接触してもいいのだろうか?

(他よりも好感はあるようだが……)

好感はあるが至高の存在として認識はしていない。仮にアイنزが説得したとして納得はするのだろうか? したとしてもそれは、自分とは違う物ではないだろうか?

(会いたい……会えない……)

もしあの三人になにかあれば死んでも死にきれない。いや、もう死んでるようなものですけどね!

「しかし、オフ会みたいだな」

今の三人は、現実での人の姿をしている。だからこそ分かったのだ

がオフ会の延長みたいで楽しそうだな、と思う。こうしてみると人間でのプレイも悪くない気がする。

「まずは、ナーベラルで試してみるか？」

人との交流。少しでも抵抗がなくなれば、あの三人の事も受け入れられるのでは？ それとも、ナザリックに所属さえすれば全ては元通りに？ 確か、転生用のアイテムもあるはずだから異形種にもなれる。

（ああ……せつかく、すぐそこに居るというのに……）

アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーがすぐそこに居るのに会いに行けない。先ほどからずっと働いているアンデッドの精神抑制で酔いそうな気分だ。

「——アインズ様！ アインズ様！」

自分を呼ぶアルベドの声で正気に戻る。いつの間に来ていたのだろう？

「……どうした？」

「いえ、言われた通り守護者達をコロシウムの方に集めましたか？」

そう言えば、アルベドに外から帰ってきた守護者達を第六階層にあるコロシウムに集まるように指示しておいたんだった。

「そうか、ご苦労。少ししたら私も向かう」

「畏まりました。……アインズ様」

「なんだ？」

「もしお悩みがありましたらアルベドに申して下さい。力になれるかは分かりませんが、できる限りの事はさせて頂きます」

こうしてみると優しい。人間に対しての姿勢が嘘のようだ。

「その時は頼むとしよう」

今は今後の策を考える時だ。アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーとナザリックの者達。双方ともに大事な物だ。だからこそ円満に事を解決したい。

（協力者が必要か？）

守護者達を見るに創造者に対しては強い忠誠心がある。そうなるのと、自分にとって最高の味方になるのはあの者しかない。宝物殿を

任せているあの者しか。

(コロシウムに行く前に会いに行くか)

アインズは、宝物殿へ向かうとする。自らが創りだしたNPCの下へ。

第18話

宝物殿には、アインズ・ウール・ゴウンの四十一人が集めた宝の数々が置かれている。金貨や宝石は山を築き、それが連なるように山脈を形成している。その量は、枚数を数える気が起きない程だ。他にも強力で価値の高い武器などやアイテムを作成するためのデータクリスタルなどがある。財宝と呼べるような装飾品なども数多く保管されている。そして、最奥には真の宝とも呼べるワールドアイテムもある。この場所は、アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーしか持つことが許されないリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを使用しなければ来る事ができない仕組みになっている。ただ念の為ではあるが、指輪を奪われた時用の罫やギミックなども用意されている。アインズは、あまり会いたくはないが背に腹は代えられぬ状況なので自分の創りだしたパンドラズ・アクターに会いに、この場所を訪れた。「ようこそおいで下さいました、私の創造主たるモモンガ様！」

ピンク色の卵のような頭を持つドツペルゲンガー。パンドラズ・アクターは、アインズが創りだした宝物殿を守る領域守護者である。「どうかなさいましたか？」

表情は読み取れないが、心配はしていると思う。

「いや、久しぶりなもので……ついな……」

アインズが自分にとって最高の味方になるかもしれないパンドラに会いたくなかったのは、パンドラの格好にある。20年ほど前に欧州アークロージー戦争で話題になったネオナチ親衛隊の制服に酷似した軍服をパンドラは着用している。それに、アクターと名付けたので役者のようにオーバーなりアクションを取るようにもしてある。今は、大袈裟な動作で右手を帽子に添えて、敬礼している。当時は、これがかっこいいと思っていた。

「パンドラズ・アクター」

「はい。モモンガ様」

「二つ確認をしてもいいか？ 私は、お前の創造者であり、お前の忠義を一身に受けている。そうだな？」

「その通りでございます。モモンガ様。私は、貴方様に創られました。他の至高の方々に戦いを挑めと言われれば迷いなくそれを行います」
(……これは、どう受け止めればいいんだ?)

自分の為なら他の至高の存在とも戦える。他の守護者達の話だと抵抗はある感じだが？ 今の状況を考えると危険な気もするが、それだけ自分に対しては忠義があるという事なのだろうか？

「そうか。つまり、私の言う事は絶対なのだな？」

「モモンガ様に死ねと言われれば、このパンドラズ・アクター。喜んで自らの命を絶ちます。全ては、モモンガ様の御心のままに」

表情は未だに分からないが、きっぱりと言われる。

「パンドラズ・アクター、いや、パンドラ。お前を信頼して相談がしたい。だが、その前に今置かれている状況を話しておく」

相談をする前に話をしておく。アインズの事をモモンガと呼んでいる事から察するにパンドラは現状を知らない。アルベドやマーレには指輪を渡したので此処に来られない事もないが、特に来る理由もないので何も聞いていないのだろう。ナザリックがユグドラシルとは違う世界に転移したこと。モモンガがアインズ・ウール・ゴウンを名乗る事になった経緯。そして、最近の出来事を話しておく。ついでに、敬礼などはやめるようにも言っておく。なんだか自分の黒歴史を見ているようでいい気はしない。

「私の知らぬ所でそのような事が」

「まあ、そういう事だ。それで、ここからが本題だ。実はな、会ったのだ……たつちさんに」

「それは、至高の四十一人であるたつち・みー様の事ですか？」

「正確に言えば、ウルベルトさんとペロロンさんも居た」

「それは、良い事なのではないのでしょうか？ 私は、アインズ様が奥にある霊廟で至高の方々を思いアヴァターラをお作りになられた事を知っております」

ワールドアイテムの保管場所は宝物殿の最奥になるのだが、その手前には霊廟と呼ばれる場所がある。そこには、ユグドラシルをやめたといった仲間達を基にアインズが製作したゴーレムがある。

「そうなんだが、少し問題があつてな。今の三人の姿は、異形種ではなく人間なんだ」

「人間？ それは……確かに問題ではありませんが、アイテムなどで元の御姿にお戻りになられればよろしいのでは？」

「事はそう簡単ではない。詳しくは話せないが、どうやら三人は私とは違うようなのだ。ナーベラルがたちさんを見た時に私とは違うように感じたらしい。アインズ・ウール・ゴウンに所属していないからかもしれないが、至高の存在としては認識していないようなんだ」

パンドラは考える。設定上だとナザリック随一の頭脳を持つデミウルゴスにも負けていないはずだ。

「先ずは、確かめる必要があるかと。本物であるのか？ アインズ様とどのよう違うのか？ もしかしたらナザリックを転移させた何者かが罫を仕掛けている可能性も考えられます」

「本物だとは思うが……まあ、確かめてはみよう。それとだ、これから六階層にあるコロシウムに行く事になっているのだが、一緒に来い」

我が神の望みとあはれ

W e n n e s m e i n e s G o t t e s W i l l e

「……パンドラ。それは、やめろと言ったはずだ」

「申し訳ありません」

ドイツ語。今でもカッコいいと思うが、痛々しい。いや、傍から見るとなのだろう。しかし、パンドラは役に立つ。頭脳もそうだが、能力に関しても強い。パンドラは、アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバー四十一人の力が八割程度ではあるが使用できる。ドツペルゲンガーとして姿を変える事により行使できるのだが、相手に合わせて戦い方を変えられるのは強みになるだろ。

「今後については、歩きながら話すとしよう」

コロシウムへ向かうまでに簡単ではあるが話し合っておく。アインズとしては、たち達の事を早急に調べたい。しかし、他にも問題がある。パンドラには、こちらの手伝いをしてもらいながらそちらの方の対処もお願いしたい。



ナザリック地下大墳墓にある第六階層のコロシウムでは、一部を除く階層守護者であるシャルティア、アウラ、マール、コキュートス、デミウルゴスと守護者統括のアルベドがアインズの到着を待っていた。「アインズ様からの緊急の呼び出し。いったい何があったのかえ？」

「そんなのあたし達が分かる訳ないじゃん」

「ボ、ボク……何かしっちゃったかな？」

「心配スル事ハナイ。何かアツタトハ聞イテイナイカラナ」

「しかし、何かがあつたからこそ呼び出されたのではないでしょうか？ アインズ様の事です。私達では理解できない何かを見つけられたのかもしれませんが。アルベド、貴女は何か御存知ではありませんか？」

「捕らえた者からの情報をアインズ様に御報告はしたわ。此処に居る者には、先ほど話したでしょう？」

時間があるので、アルベドが捕虜であるクレマンティーヌから得た情報を集まった守護者達に話した。

「ワールドアイテム。至高の御方々が探しておられた物でありんすえ？ 確か、強力なマジックアイテムだとか？」

「ええ、そうです、シャルティア。ワールドアイテムは、他のマジックアイテムとは違います。ナザリックにも幾つかはありますが、どれもが強大な力を保有しています。中には、世界の在り方すら変えられるような物すら存在します」

「確力、我々が置カレテイル状況ニ鑑ミテワールドアイテムガ使用サレタ可能性モアルノダツタナ？」

ナザリック地下大墳墓が転移した可能性の一つとしてワールドアイテムの使用がある。アインズ・ウール・ゴウンに敵対している何者かがワールドアイテムを使い異世界へと転移させた。今は、その可能性も考えて慎重に動いているところだ。

「セバスさん達、大丈夫かな？」

「何かあればすぐに連絡をするように言っております。それよりもそろそろアインズ様も御出でになられるでしょう」

女の勤なのか？ アルベドの言う通りコロシアムの一角に転移の門が現れ、そこからオーバードロードであるアインズが――

「……アインズ様？」

アルベドをはじめ、守護者達はそれを疑いに満ちた目で見る。姿形は確かにオーバードロードであるアインズだが、感じる物は別物だ。

「どうやら、すぐに正体がバレてしまいましたね」

その偽物は、特に悪びれもせずと言つてのけるが、至高の存在であるアインズの姿形を真似た者に対する不快感を誰しもが隠すことなく滲みだしている。

「もういい、パンドラズ・アクター。やはり、完璧とまではいかないようだな」

今度は、別の所からアインズが現れる。こちらは、コロシアムの貴賓席から姿を現す。守護者達は両者を見比べるが、すぐに本物が貴賓席の方だと分かり首を垂れる。

「忙しい中、よくぞ集まってくれた」

そう言うと、《フライ》の魔法を唱え守護者達の下へと降りる。

「話をする前に紹介しておこう。この者の名は、パンドラズ・アクター。私が創った宝物殿の守護者だ」

アインズの紹介を受け、パンドラは元の姿へと戻る。

「見ての通り、この者はドツペルゲンガーである。私を含め、アインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバー四十一人の外装と能力を保持している。完全ではないが、それを巧みに使いこなすだけの力はある」

「守護者統括殿。各階層守護者殿。以後、お見知りおきを」

パンドラは、大袈裟にお辞儀をする。

「守護者統括として知ってはいましたが、会うのは初めてですね、パンドラズ・アクター。アインズ様の御手により御創りになられたのは羨ましいですが、皆を代表して歓迎します」

「これは、ありがたき幸せ。共にアインズ様をお支えしていきましよう」

アルベドとパンドラの間にかが見える気がする。少なくともアルベドからは嫉妬の念が見える。愛されるのは嬉しいがほどほどで

お願いしたい。

「さて、パンドラの紹介も済んだので本題へと入る。先日、捕らえた者から得た情報で危険な者達が居る事が分かった。それも、相手は異形種を嫌うスレイン法国に属する者達だ。他にも真なる竜王などもあるようだが、既に関わりのある方を警戒すべきだと考える」

「アインズ様。失礼ながら申し上げます。既にアインズ様が来られる前に各自には話してあります」

「どうやら待たせ過ぎたようだ。少しパンドラと今後について話していたからだが、説明の手間が省ける。」

「そうか。なら、先に進めよう。アルベドから聞いていると思うが、相手はワールドアイテムを所有している可能性がある。ワールドアイテムは、レベル差などを超えて危険な物だ。《聖者殺しの槍》と呼ばれる使用者と共に相手を抹消する物。《光輪の善神》と呼ばれるカルマ値がマイナスの者に強大な効果を発揮する物。他にも世界に関与しかねない規格外とも言えるような物もある。他にもあるが、どれか一つでも所有していれば被害は甚大な物になる」

「アインズ様。それでは、スレイン法国をお探りに？ 既にこちらは、スレイン法国の者達に危害を加えておりますが？」

「問題はそこだ。もしかしたら既に動いているかもしれない。しかし、そうでない可能性もある。そこで、幾つかの案がある。まず一つが、影武者だ。カルネ村での一件を監視していたのがスレイン法国と考えるのなら偵察に来る可能性がある。パンドラには、私の影武者としてアインズ・ウール・ゴウンを名乗り、私の代わりをしてもらう」

あくまでも保険だ。あの戦いの際に監視していたのがスレイン法国の者なら監視が失敗したことに關して調べに来るかもしれない。その時にアインズの代わりにパンドラを影武者として対応させる。

「二つ目に捕虜の扱いだ。アルベド、まだ生きているな？」

「はい。言われた通りに」

「そうか。あの者には、使い道がある。スレイン法国に追われている身でありながら、ブローラーノーンと呼ばれる組織に属している。あの者には、これから行われる汚れ仕事を全て請け負ってもらおう。それ

と、エ・ランテルに潜んでいる仲間も使う。捕らえておけ」

これも保険だ。場合によっては、ナザリックの代わりにスレイン法
国と戦ってもらおうとしよう。

「そして、最後になるが戦力の強化を図る。お前達は強者ではあるが、
それだけではダメだ。戦闘経験やワールドアイテムなどの強力なア
イテムの使用で負ける可能性がある。他にも私達が知らない武技や
タレントなどでも。私は、戦士モモンとしてレベル差がある相手と
戦った。負ける要素などはなかったが、確かに相手の剣が私に届い
た。心の何処かで慢心や油断があつたのだろう。一度、ナザリックの
者達に自分の保持する力の確認とチームワークを学ばせようと思う。
これは、私と仲間達に言えたことだがチームワークを駆使すれば強敵
であつても戦い勝つ事ができた。強者は、力ある弱者達に負ける。ア
ルベド、パンドラを補佐として付ける。忙しいと思うが、よろしく頼
むぞ」

「畏まりました。必ずや御身のお望みのままに」

「後の事は、また後日に申し付ける。今日は、守護者達の戦力を調べた
いと思う。私にお前達の力を見せてくれ」

場に居る者は、アインズに首を垂れる。アインズに自分の力を見せ
る為に。

◇◇◇◇◇

アインズ監修の下行われた最初の守護者達の模擬戦は、一定の成果
と課題を残して終わった。デミウルゴスは、アインズに命じられた仕
事に戻る前に現状の確認をしておこうとナザリック内で作業をして
いたのだが、移動の途中に廊下で立ち話をしていた戦闘メイドである
プレアデスの二人を見つける。

「おやおや、いけませんね。アインズ様に仕える者が廊下で立ち話な
どとは」

「申し訳ないっす、デミウルゴス様！ 今度から気をつけます！」
「気をつけますっす」

人狼のルプスレギナ・ベータ。虫の集合体で人に擬態しているエン
トマ・ヴァシリツサ・ゼータの二人だ。

「そんなに楽しいお話だったのですか？」

アインズの前ならともかく、そうではないのでデミウルゴスも怒り
はしない。

「いや、楽しいわけじゃないんですけど、ナーちゃんから話を聞いたもの
で」

確か、ナーちゃんとは、同じプレアデスであるナーベラル・ガンマ
の事のはずだ。

「アルベド様への定時報告の時に何かあったら私達にも教えてくれる
んですう。それでえ、なんだかアインズ様が戦われたみたいなん
ですう」

先ほどの話に出ていたものだろう。詳しくは知らないが戦士モモ
ン相手に善戦した者が居たようだ。

「確か、アインズ様に一矢報いたのでしたね？」

「デミウルゴス様も知ってるんですか!? 私達もビックリしましたけ
ど、たっち・みー様なら納得っす！」

思わず頭の中が真っ白になる。アインズと同じ至高の存在である
たっち・みーが戦った？ いや、少し違う。

「あくまでも似た人ですう。アインズ様が違うって仰ったんですか
らあ」

「そうでした。名前が同じだけでしたっすね。せつかく、至高の御
方々が見つかったと思っただのに、残念っす……」

(アインズ様が否定なされた……)

おそらくだが、その相手はアウラが言っていた者達の事だろう。至
高の御方々である可能性があったが、アインズが否定したのならその
可能性はない……本当にそうなのか？ いや、これは願望なのかもし
れない。たっちが偽物であるのなら一緒に居るウルベルトも偽物で
ある可能性が強まる。

「他に何か言っではいませんか？」

「他にですか？ んー、確か、ナーちゃんが人に慣れる練習をするとか

言ってたような？」

「他とは違うって言っていましたからあ、練習にはもってこいだと思いますう」

アウラと同じ。ナーベラルも何かを感じた。

「そうですか。面白い話をありがとうございました。しかし、今後は気をつけるように」

ルプスレギナとエントマは、返事をするとは何処かへと歩いていく。「至高の御方々である可能性は限りなく低くなりましたね」

同じ至高の存在であるアインズが否定したのなら可能性はないだろう。だが、他の可能性、子孫などはまだありえる。

「やはり、早急に調べておきたいですね。しかし、人手が……ああ、そういうえば捕虜の扱いについてはまだ具体的には決まっていますんでしたね」

まだ捕虜の扱いに関しては保留だったはず。アインズに命じられている案件で人手が足りない。既に心は折っているはずだが、管理も兼ねて申し出してみるのもいいかもしれない。

◇◇◇◇◇

アインザックからの依頼を受け、エ・ランテルから王都へと向かう道中。

「へえー、ナーベラルにそっくりだったんですか」

「もしかしたら本物かもな」

たつちが昇級試験の時の事をペロロンとウルベルトに話していた。

「でも、モモンさんの方は違うと思います。名前からしてモモンガさんだと思いましたが、言葉に力がありました。噂通り、本当に貴族の方なのかもしれません」

「モモンガさんは、俺達とあまり変わらないからな。貴族って事はないだろう」

「意外と、頑張ってるだけかもしれないですけどね」

「いえ、あれは上に立つ者の——」

たつちが二人を手で制止する。

「武装してますね」

ペロロンもたつちと同じぐらいのタイミングで分かった。見えるのは、三人組だ。一人は女で、他の二人が男。冒険者か、傭兵か、野盗のどれかだろう。

「……野盗って感じじゃないな」

近づいてくるとウルベルトでも分かる。野盗なら待ち伏せをするだろう。しかし、目に見える者達は明らかに何かから逃げているようだ。

「助けてー!」

間違いない。先頭を走る女から助けを求められる。

「どうします?」

たつちが二人に相談する。普段なら迷わずに助けるのだが、今回はかりは少し事情が違う。

「あれが罠ならビックリですね」

「あの女から話を聞こう。たつちさん、お願いできますか?」

「分かりました」

ウルベルトは少し下がり、ペロロンはいつでも弓を構えられるようにする。野盗やモンスターに襲われている者を演じる野盗も三人の知る限り存在するからだ。

「どうかしましたか?」

たつちも警戒をしながら先頭を走っていた女に話し掛ける。

「——ミスリル!? よかったー、これで助かる……」

女は、たつちが首から下げているミスリルの冒険者を表すプレートを見て安堵の声を漏らす。

「あなたは?」

「申し訳ありません! 私は、アイアンの冒険者のブリタつて言います!」

クラスの違いがあるからか急ぎ身なりを整え、自分の持つアイアンのプレートをこちらに見せて質問に答えてくれる。

「それで、どうされたのですか?」

ブリタの後ろには、同じように逃げてきた者達が安心したからか座り込んでいる姿が見える。相当走ったのだらう。ローブを身にまとった魔法詠唱者と思われる男に関して、今にも倒れそうだ。

「野盗のアジトを見つけたのはいいんですけど見つかってしまって。既に仲間の一人がエ・ランテルの方に知らせに行っているとは思うんですけど、このままだと逃げられます。力を貸して下さい！」

おそらくだが、蒼の薔薇からの依頼で聞いた野盗の件かもしれない。エ・ランテルの冒険者組合からアジトを探すための者達が派遣されていると聞いていたが、この者達の事だろう。

「その野盗とは、腕の立つ者が居ると噂の？」

「はい。実際に会いましたけど、私達じゃとても敵いませんでした。仲間の一人が戦いましたが……殺されました」

辛い言葉を口にさせてしまった。仲間の死を思い出したからか表情が暗くなる。

「相手は、剣士だ。私の魔法を使いながら逃げるだけで精一杯だった」
後ろに居る魔法詠唱者が話に混ざる。

「分かりました。皆さんは、念のためにエ・ランテルへ話を持って帰って下さい。もしかしたら先に向かっている方が襲われている可能性もありますから」

「確かにそうですけど、案内役は必要じゃないですか？」

「案内役が居てくれた方が確かにいいですが、私達は皆さんをかばいながら戦える程強くはありません。大体の場所を教えて頂ければ十分です」

「分かりました」

ブリタは、遠回しに足手まといと言われたことに不満を表さずにとっちにアジトの場所を説明する。アイアンとミスリルの差はそれだけあるし、実際に逃げる事だけで精一杯だった。

「今度会ったらお礼をさせて下さい」

「そうですね。その時は、今日の事を肴に飲みましょう」

ブリタは、疲れている仲間に手を貸し、再びエ・ランテルへ向けて走り出す。一刻も早くこの事を知らせる為に。

「噂の野盗とぼったりとか……運が悪いですね」

「上手く行けば、ラキユースさんに土産話ができるつてもんだ。……それで、どうするよ、たっちさん？ 相手は、人間だ」

ウルベルトは、たっちに尋ねる。

「分かっていきます」

たっちは、それだけを口にする。

「本当か？ 俺は敵なら殺せる。ペロロンさんも戦える。でも、たっちさんは違うだろ？」

これまでも野盗と、人間と戦う機会は何度もあった。

「……すみませんが、投降する意思がないか確認させてください」

しかし、たっちだけは戦うのが躊躇われた。相手は人間。理由があるからと言って簡単には殺せない。

「人を殺すのに慣れるとは言わない。ただ、相手によつては俺達が死ぬ。それだけは忘れないでくれよな」

「本当なら避けたいんですけどね。でも、たっちさんの事だから見逃せませんよね」

「ご迷惑をお掛けします」

「たっちさんの性格は知ってるからな。まあ、いざとなったら俺達がやるさ」

「汚れ仕事に手を染めるなんて少し前までは考えてもいませんでしたけどね」

三人は、教えてもらった野盗のアジトを目指す。

第19話

三人は、ブリタの説明通りに公道から外れた森の中に入り、奥へ進むと洞穴がある場所の近くまで来た。どうやら見張りが二人居るようで松明を点けずに警戒にあたっている。既に外は暗いので居場所を知られない為だろう。

「見張りは二人か」

ウルベルトとたつちの二人は、ウルベルトの《ダーク・ヴィジョン》の魔法で闇夜でも昼間のように見えており《サイレンス》の魔法で周囲の音を消して近くの茂みに潜んでいる。

「居てくれたのは助かりましたけど……どうしましょうか？」

洞穴近くの茂みから様子を窺っているが状況が把握できない。一般的な野盗は数十人で徒党を組んで行動することが多い。流石に三人で数十人を相手にするのは無理があり、あの中に全員が居るとは限らない。最悪の場合は狭い洞穴の中で挟撃に遭う可能性がある。

「罠とかもありそうだしな。外に居た場合は挟撃の可能性もある。狭い洞穴の中での挟撃なんて冗談じゃない」

魔法詠唱者であるウルベルトと弓兵であるペロロンにとって動きに制限のある洞穴は危険だ。相手に接近を許してしまい簡単に殺される。

「とりあえず今は偵察に行っている——」

「——お待たせ」

茂みに隠れている二人の下に偵察に行っていたペロロンが小さく声を掛ける。こちらにも同じようにダーク・ヴィジョンとサイレントを掛けている。

「どうでしたか？」

「やっぱりあった。既に裏口に荷馬車が二台あって積み込みしてるよ」

ペロロンは、二人に裏口のある場所と距離を教える。裏口までは数百メートル程で積み込みをしていたのは5人だったそうさ。

「現状では、7人か。倒せなくてもないが……」

「少し話も聞けたけど外にも居るらしいですよ。なんだか上物が居るとかで、どうやら野盗の頭はそっちに居るようで今は準備だけしているそうです。ただ既に人は送ってあるみたいですからすぐに戻ってくるんじゃないですかね？」

「野盗の頭が少数で動くとは思えませんから少なくとも見積もって十人程ですかね？ 足して最低でも20……ウルベルトさんはどう思いますか？」

「無理だな。俺の魔法にだって限りがある。ペロロンの矢の数もそう。それに腕の立つ奴が居るんだろ？ どう考えても負ける」

3人は考え込むが既にウルベルトとペロロンの考えは決まっている。単純に数は脅威になる。ウルベルトとペロロンの攻撃手段にはMPと矢の本数による制限がある。これを超えてしまえば何もできなくなる。だからと言って、たっち一人で戦える数ではない。ただの雑魚ならともかく相手が人間である以上は、どのような攻撃手段があるか分からないからだ。すぐに思いつくところで毒などがある。毒矢を大量に放たれば、いずれは治療ができなくなり死ぬことになる。

「それと話によると捕虜になっている女性が居るみたいです。ただ、運び出すのは最後みたいですよ」

ペロロンの言葉にたっちの表情が険しいものになる。女性が野盗の捕虜となる意味を知っているからだ。

「たっちさん。気持ちは分かるが冷静にな？ 俺達には、野盗の後を付いていき新しいアジトを見つけるっていう選択肢もある」

「すみません」

ウルベルトは、そっとたっちの肩に手を置く。たっちの気持ちは分からなくもないが無策でどうこうできるものでもない。

「応援が来る前に外に居るのが戻ってくる方が早いと思います。難しいとは思いますが早く決めないと」

「そうだな。今隠れているこの場所だって安全とは限らない。逃げるか、後を追うか……戦うかにしろ早めに行動する方がいい」

ペロロンとウルベルトはたっちの方を見る。

「私としては今すぐにでも捕らわれている人達を助けたいです。しかし、今の戦力と状況を考えると無謀としか言いようがないです……悔しいですが……」

言葉に悔しさが滲む。頭で分かっただけで簡単に受け入れられるものではない。

「せめて表と裏から攻められればいいんですけどね。こっちが先に挟撃を仕掛けられれば少しは話が違ってくるんですけど」

ペロロンの言葉が空しくも耳に届く。そんなことは言われなくても分かっている。ただ人手が足りないという現実がある以上は——
「どうやら私達の出番はあるようですね」

三人は、気配の無かった方を振り返る。思わず声を出しそうになるのを無理矢理抑えながら。

「……モモンさんにナーベさん？」

たっちの言葉でウルベルトとペロロンは臨戦態勢を解こうと考えるが、解くのは早いと判断し身構える。

「たっちさん、本物か？」

急に現れたモモンとナーベを疑うのは当然だろう。特にレンジャーでもあるペロロンの警戒を潜り抜けた以上は。

「はい。前に一度だけですが間違いないと思います」

「魔法とかは？」

魔法などによる偽物の可能性もある。モモン達を知らないウルベルトとペロロンは、たっちと違い疑いの目を——特にモモンに向けて。なにせ全身鎧を着ているために表情が見えない。化けるとするなら最適な人物だ。

「そう警戒しなくても大丈夫ですよ。私は、ナーベと共に行動していたのですがブリタとかいう冒険者に会い助けを求められました。話を聞くとたっちさん達がたつた三人で野盗の下に向かったと聞き力になればと思いますから。たっちさんとは剣を交えた仲間冒険者としても野盗を見過ごせませんからね」

もつともな話。ペロロンとウルベルトは警戒を解こうかを考えるが、その前にナーベに二人の視線が向けられる。

「世の中には三人は似て居る奴が居るって言うが……本当にそっくりだな」

「本当に美人さんですね」

「たっちから二人は、ナーベがユグドラシル時代に同じアインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーが製作したNPCであるナーベラル・ガンマに似ていると聞いていた。二人はナーベの姿を見ながらそれを思い出す。」

「名前も似てるし、本物だったりしてな」

「いやー、流石にそれは……なんなら聞いてみます？ すみません、もしかしてそちらの方はナーベラー——」

「ナーベです」

モモンは、ペロロンの言葉を遮る。

「……えっと、その——」

「ナーベです」

再び聞こうとしたペロロンの言葉を同じようにして遮る。

「彼女の名前は、ナーベ。いいですね？」

「アツハイ」

モモンの気迫に負け、ペロロンは頷く。

「ペロロンさん、遊んでいる場合じゃないですよ。今は、一刻も早く捕らわれている人達を助ける必要があるんですから。モモンさん、ナーベさん。お力をお貸しください」

「もちろんですよ。それで、どうしますか？」

「たっちとモモンは、未だにナーベをジロジロと見ているウルベルトとペロロンを無視して作戦を考え始める。」

「おい、ペロロン？」

「なんですか？」

「めっちゃ睨まれてね？」

「ジロジロ見ているからか、ナーベも二人の方をジッと見ている。美人なので少し嬉しいが変に緊張する。」

「たぶんですけどウルベルトさんの視線がやらしいからですよ」

「な、なんてこと言うんだよ!?!」

「気づいてないかもしれませんが鼻の下が伸びてますよ」

ペロロンの言葉に反応し、思わず鼻の下に手をあててしまう。ニヤケ面のペロロンに気づいたのはその後だった。

「クソツ……」

「やっぱりニヤケてたんじゃないですか。エロ目線で女性を見るからですよ」

「そういうお前はどうかんだよ」

「美人ですけど範囲外なんで」

「……そっか」

親指を立てていい顔をするペロロンを見て思い出す。ペロロンはロリコンだった。

「——危険ですけど、本当にいいのですか？」

「——状況を考えるとこの方がいいと思います」

二人をよそにたっちとモモンの間で話し合いは終わった。

「おっ、もう決まったのか？」

「ええ、決まりはしました」

たっちは、モモンと決めた作戦を二人にも話す。

表側をモモンとナーベが担当し、派手に動き敵の注意をひきつける。その間にたっち、ウルベルト、ペロロンの三人が裏口から洞穴の中に潜入し捕らわれている女性たちの救出を行うと言うものだ。

「なるほどね。でも、分かってるのか？ 表側は危険だぞ？ 外に居

るのが帰ってきたら挟撃になる。話だと、野盗の中には腕の立つ奴が

居るって話だし」

「御心配には及びません。これでも私とナーベは強いですから。それよりも中に潜入する方も危険だと思えますよ？ 罠もあるでしょう。

場合によっては、捕らえている女性を人質にするかもしれません。戦闘になれば狭い空間は、魔法詠唱者であるウルベルトさんや弓兵であるペロロンさんにとっては大変危険だと思えますが？」

「随分な自信だな。まあ、確かに中に入る方も危険だ。だがな、俺も他の二人もこの程度の修羅場は慣れてる」

「ですね。罠なら俺が簡単に解いてみせますよ」

「……そうですか。それは、頼りになりますね」

モモンは、三人の顔を一度見てから行動へと移す。

「では、三人を信頼するのでしょうか。ナーベ、こちらは盛大に暴れるとしよう」

「畏まりました」

「では、私達も行きましょう。ペロロンさん、案内を」

たち達は、ペロロンの先導で草木に隠れながら行動を始める。その様子をモモンは、ジツと見つめている。

（予想とは違うけど、こうしてまた一緒に何かできるとは思わなかったな）

モモンは、ナザリックから三人の様子を遠隔視の鏡を通して見ている。人手が足りずに困っているようだったので思わず来てしまったが……悪い気はしない。

「モモンさん。少しよろしいですか？」

「なんだ、ナーベ」

「ウルベルトとペロロンと名乗る者も……その……違うのでしょうか？ なぜか、こう……他の人間とは違うような気がするのですが？」

ナーベは、たちちを感じたものをウルベルトとペロロンにも感じていた。

「他人のそら似だろう。それよりもあの者達は、冒険者として先輩にあたる。ナーベも他の人間とは違うように感じるのであるならば、やはり関わりを持つのは悪くないだろうな」

澁々納得するナーベを見て思う。本当なら早く名乗り出たい。しかし、ナザリックの者達の中には人間を軽視している者が多い。それ至高の存在であるアインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバー達に對してどのようになっているのかも不安材料としてある。今は、目の前に居るナーベを三人と関わらせて様子を窺う方がいいだろう。

「——さて、連絡を取るか」

モモンは、《メッセージ》の魔法を使いナザリックで遠隔視の鏡を使用し、周囲を監視しているパンドラへと繋げる。

「パンドラ。周囲に誰か居るか？」

『いえ、誰も居りません。それよりもどうでしょうか？　こちらから見ていた限りでは、ナーベラルと口にしそうな感じがしましたが？』
「居なければ聞いていたんだが、そこから勘づかれても困る。今は、大事な時期だ。秘密裏に進める」

『御身の御心のままに。それでは、私は計画通りに』

パンドラとのメツセージの魔法を解くとモモンも準備に入る。

「そうだ。ナーベ、これから言う事を必ず守れ」

「なんででしょうか？」

「なに、難しい事はない。人は殺さずに捕らえよ。生け捕りにするんだ」

「それは、全員でしょうか？」

「ああ、全員だ。まあ、死んでいなければ構わない」

たつちとの話し合いの時にできる限り殺さないようにと頼まれた。あくまでもモモン達の身の安全を優先した上ではあるが無駄に殺したくはないとの事だ。

(たつちさんらしいな)

モモンは、久しぶりのアインズ・ウール・ゴウンのギルドメンバーとのクエストへと移る。内容は、敵を生け捕りしたうえでの捕虜の救出だ。

第20話

ペロロンが二人を案内した場所は、木々が所々に点在している岩肌
が剥き出しになっている開けた場所。既に世界が暗くなり見え辛い
そこでは、2台の荷馬車に岩肌に開いている洞穴から運んできた荷物
を詰め込む者達の姿が見える。本来なら巧妙に隠されている裏口も
こうなつては見つけるのは容易いだろう。

「見張りが1人、積み込みを行っているのが4人です。弓などの飛び
道具はないみたいですよ」

3人は、裏口から少し離れた場所に隠れている。開けているために
視界がよくあまり近づく事ができないためだ。

「此処からだと言距離がありますので飛び道具がないのは助かります
ね。ですが、どうしましょうか？」

「中に助けを呼ばれるわけにはいかなからな。なんなら俺が魔法で
眠らせるか？ 範囲を広げれば岩肌の上からでも届かなくはないぞ
？」

ウルベルトの提案はこうだ。ウルベルトは、《スリープ》の魔法を使
用する事ができる。これを《ワイドマジック》を使用して魔法効果
の範囲を拡大して行使する。スリープは対象を眠らせる事の出来る
魔法だが行使するためには近づく必要がある。しかし、ワイドマ
ジックで範囲を拡大すれば対象との距離を補う事ができる。ついで
に言えば対象を複数にすることも可能になる。

「確かに妙案ではありますがやめておきましょう。岩肌の上からの距
離を考えるとMPの消費が悪過ぎます。ウルベルトさんには回復な
どの役割もあります。できれば温存しておきたいです」

「たつちに言われウルベルトは引き下がる。あくまでも他に方法が
無いのなら程度で提案したので特に食い下がる気もない。」

「ここは、ペロロンさんをお願いしたいと思いますが大丈夫ですか？」
「あの程度なら問題ないですよ。弓兵が遠くからしか戦えないなんて
ことはないって見せてあげます」

ペロロンは自信ありげに胸を張る。

「囿役だぞ？ 内心ビビッてないのか？」

意地悪そうな笑みを浮かべウルベルトがペロロンにちよつかいを出す。

「大丈夫ですよ。二人も別に見てるだけじゃな——ないですよね？
そうですよね？」

「もちろんです。高さがそこまでありませんので私は岩肌の上の方に。ウルベルトさんは、見張りとサポートを兼ねて空をお願いします」

「なにかあつたら助けてやるから行ってこいよ」

「自信はあるけど命懸けなんですからね。まあ、軽く命張ってきますよ」

ペロロンはそう言うと言と姿勢を低くしてほふく前進の姿勢をとると野盗達の方へと向かい始める。できる限り距離を詰めるために。

「では、私達も行きましょう」

ペロロンを見送るとたちちも行動を始める。少し遠回りになるが物陰に隠れながら野盗達にとつて頭上となる岩肌まで移動する。

「何かあつたら俺が全部貰うからな」

ウルベルトは、《フライ》の魔法を唱え暗闇の空へと遠く消えていく。周辺の警戒も兼ねて空で待機するために。

そんな事になっているとは知らずに野盗達は未だにダラダラと物を荷馬車へと積み込んでいく。その姿にはどこか余裕があるようすら見える。

「まったく困ったもんだな。せつかくいい場所だつてのによ」

「仕方ないだろ。冒険者に逃げられちまったんだから。弱い奴らだったが逃げるまでが早かったからな」

「でも、アングラウスさんは流石だったよな。一刀両断。殿に残った奴をバツサリとやっちまうんだからな」

「おう、アングラウスさんが居てくれれば怖いもんなしだ。頭達も新手が来るまでには戻ってくるだろうしな」

「でもよー、頭がわざわざ出向くなんて相当な上物なんだろうなー」
「ザックに言われて一度見に行ったらしいがとびきりの美人だったら

しい。性格が悪いらしいがそこがまたいいんだそうだ」

「気の強い女を好きにできるのは悪くねえからな」

野盗達は頭の中で妄想を膨らませゲスな笑みを浮かべる。まだ見ぬ獲物を思い浮かべて。

「おい、しゃべってんじゃねえよ。早く積みよな」

見張りをしていた一人が暇そうに抜き身の剣を軽く振り回しながら口にする。

「だったらお前も手伝えよ。洞穴から運んで積むのは面倒なんだぞ？」

「うるせえ。俺は見張り役なんだよ。普段なら暇で死にそうな嫌な役だが今日は少しマシかもな」

重労働をしている仲間を見ながら笑い飛ばす。各々から言葉が飛ぶが気にはならぬ――

「――ん？ あれはなんだ？」

比較的視界の良い場所ではあるが周囲に気づかれないために松明などの明かりなどはなく光源は夜空にある星の光だけ。闇夜に目が慣れているとは言え薄暗い世界では視界はあまりよくはない。しかし、10メートル近くまでそれに気づかなかつた。

「おっと見つかった!」

それは声を上げいきなり動き出した。それと同時に。近くから声がある。

「――いてえ!」

「――なんだこりゃ!」

「――矢だ! 矢が飛んできた!」

見張りは声のした方を見る。するとそこには、荷を積んでいた仲間達の身体にそれぞれ矢が刺さっている光景があった。左腕に刺さった矢を抜こうとしている者。腹に矢が刺さった者は気が動転し慌てている。足に矢が刺さった者は痛みからか片膝を折るようにならずくまっている。

「よそ見なんかしてる暇はないよ」

再び声がする。振り返るとそれは弓を構えながらこちらへと駆け

てくる。

「——くそがあー！」

剣を構えそれを迎え撃とうとする。相手は弓兵。ここまで気づかれずに近づいて来られたことは称賛するが接近戦で剣に挑むような馬鹿に負ける気はしない。

「残念だけでも遅いよ」

近づいて来るとその姿がより鮮明に理解できる。弓兵の手には、2本の矢が握られており既にもう1本は弓に番えてある。

弓兵はこちらの剣が見えていないのか躊躇う事もなく突っ込んでくる。笑みを浮かべながら。楽しそうに。

(なんなんだコイツは)

弓兵が矢を放つ。既に面前まで来ている弓兵の矢。至近距離から飛んできた最初の矢を剣で何とか叩き落す。しかし、その頃には次がそこまで来ている。それを肩に。更に飛んできた矢は腹に突き刺さる。

「——なめてんじゃねーぞー！」

痛みがあるがそれ以上に怒りが上回る。未だに減速もせずにこちらへと向かってくる弓兵に対して剣を見定めて振るう。怒りを込めた渾身の一振りだ。

「だから遅いって」

そんな渾身の一振りを気にもせず弓兵はそう言葉にする。すると、急に視界から消え代わりに——

「——ツァ——」

身体に再び痛みが走る。

(姿が見えなくなったと思ったら身体に痛みが!?)

頭が混乱しそうになるのを無理矢理抑えながら痛みの中の正体を見る。そこには新たに身体に突き刺さる矢がある。

(新手か!?! いや——違う)

恐らくだがこの矢は別の者ではない。矢は下の方から放たれたように身体に突き刺さっている。

「少し遅かったんじゃないんですか?」

また声が出たので痛みを堪え振り返る。痛みと混乱からか涙が自然と出るがどうやら今度は自分に向けられたものではないようだ。自分に対してではない事に安堵しそうになるが、他にも声があることに気づき身体は畏縮する。

「申し訳ありません。鎧が重くて少し出遅れました」

振り返った先には、先ほどの弓兵とは別に全身鎧を身にまとった者が居た。その二人の足元には、仲間達がうめき声を上げながら地面にボロクズのように倒れている姿がある。生きているようだが既に戦えるような状態ではないのは一目で分かる程に弱々しい。

「まあ、全部俺がやってもよかったですけどね。最近、たちさんばかり目立ってますし」

「そうですか？」

誰だかは知らないが自分を無視して談笑を始めている。確かに他の仲間は既に地面に倒れている。とてもではないが戦えないだろう。だが、まだ自分はこうして立っている。

「――ほはへはあ……なんほはほはあ？」

恐怖を抑える為に怒りに任せ声を出そうとしたが呂律が回らず上手く言葉が出ない。それどころか身体に力が入らず立ってもいられない。

「対策もしてないのに矢を3本も受けちゃダメですよ。矢には毒が塗られているもんなんですから」

「ほいっ？」

何もできずに力無く倒れた自分を見下ろしながら弓兵は続ける。

「麻痺毒ですよ。3本も受ければ累積して効果が上がるから回るのも早かったみたいですね」

そう言いながら倒れている野盗の身体に突き刺さっている矢を無造作に弓兵は引き抜くとまだ使えるかの吟味を始める。手荒に抜かれた痛みから身悶え声を上げているにも拘らず微塵も興味などがないように。

(なんなんだよコイツら)

怖い。淡々としている姿が怖い。戦いの場。仮にあっけなく終

わったとしても此処は戦いの場だったはずだ。それなのにまるで何事もないかのように平然としているのが怖い。

「もう終わったのか」

上の方から声がする。身体が痺れて上手く顔が動かせないのが姿が見えないがどうやら上にも仲間が居たようだ。

「どうでしたか、ウルベルトさん？」

「ああ、なかなかだな。しかし、器用にやるもんだな。《回避スキル》ってタイミングが難しいんだろ？」

「ペロロンさんは、意外と近接戦でもやっていけるかもしれないね」
ペロロンは手の中にある矢を全て使い果たし、相手の剣の動きを見極めて回避スキルを使用して相手の攻撃を躲した。剣が振り下ろされる前に姿勢を低くして前転をしようと云うものだが、それをこなしただ後すぐに新たに矢を番えて放った。回避スキルと《速射》による連携技。そして、ペロロンが囷として敵を引き付けている間にたちちが岩肌の上から飛び降り、状況を理解できずに気が動転している残り作業とも言えるような内容で盾を使い殴り倒していた。いつでも新しい矢が放てるようにペロロンが傍で待機しながら。

「無理ですよ。無理無理。たちちさんとかと戦えませんって。俺には、逃げ回って攻撃する方があつてますよ」

「そんなことはないと思いますか？」

「それは比べる相手が悪い。さて、話はこれぐらいにして早くやろうぜ。とりあえず腕は折るぞ。縄で結ぶよりも安全だからな」

ウルベルトは、倒れている野盗の一人の腕を手にとると無理矢理に折ろうとする。わざわざ悲鳴を上げる事ができないように頭を地面に押さえつけるように踏みつけながら一切の躊躇いもなく折る。

「流石にそれはどうなんですかね？」

「魔法で治るんだから別にいいだろ？ 本来なら殺されてんだから。たちちさんも文句はないよな？」

「……ええ、ありません。生かしたまま捕らえるには仕方がないですから」

たちちは、あまりいい顔はしていないが危険を冒してまで生かした

まま捕らえるように進言した手前何も言えない。たちちもウルベルトと同様にするが、こちらは骨を折るといふよりも肩の関節を外しているようだ。今この場には二つのものがある。恐怖を伴うものか、慈悲のあるものかの二つが。

「じゃあ、俺は先に行きますね。畏とかあるかもしれないんで」

ペロロンは、岩肌に裂け目のようにして開いている裏口へと姿勢を低くして入っていく。畏がある可能性があるのものでその解除の為だ。「この辺りには誰も居なかったから見張り役はなしでいいだろう。剣とかまとめてその辺りに捨ててくるからたちさんは荷馬車に積んでおいてくれ」

ウルベルトは、倒れている野盗達の武器を拾い集めるとフライの魔法で空を飛び遠くへと捨てに行く。その間にたちちは、野盗達を荷馬車へと載せていくのだが口々に助けを求められる。あの男達から守るように縫うような目で。

「私から言えることは、抵抗はできればしないでください。大人しくしていただければ何もしませんから」

たちちの言葉に安心したのか野盗達は何度も返事をしては頷く。もう何もしない。だから何もしないでくれと。ただ祈りながら、震えながら唯一の希望の言葉に従う。

第21話

ウルベルトが野盗達の武器を捨てて戻ってくる頃には野盗達の姿はなかった。代わりに荷馬車に積まれていたであろう荷物が地面に置かれていた。

「そつちも終わったようだな」

ウルベルトは、たつちの隣へと降り立つ。

「捕らえた人達から中の情報を聞きました。中には、ブレイン・アングラウスと呼ばれる用心棒が居るそうです。他には、6人程居るそうですが気をつけなければいけないのはその人だけみたいです」

「信用できるのか？ たつちさんの事だから拷問とかしたわけじゃないんだろ？」

既に荷馬車に積まれており姿は見えないが、ウルベルトの言葉に反応して物音がする。

「ウルベルトさんが怖いようですよ」

「なるほどな。情けない奴らだ」

ウルベルトは近くの岩肌を背を預ける。

「悪にも種類があるが少なくともコイツらは最低の位置に居る。コイツらがしていた話は聞こえたか？ また誰かを襲おうとしていた。自分の欲望を満たすためだけに。生きる為ではなく。だから気にすんなよ。話の中の人間が無事かは分からないが、少なくとも襲われなくてすんだ者もいるかもしれないんだからな」

「……もしかして励ましてくれてるんですか？」

たつちも同じように岩肌に背を預ける。ウルベルトの隣に。

「これから危険を冒すつてのにそんな神妙な面をされたら困るからな。いっそのことペロロンさんのようにユグドラシルの延長で考えてみたらどうだ？ その方が楽だと思っぞ？」

「確かにそうですね。ですが私には難しいです。どうしても心の何処かで……すみません、弱くて」

「別にそれは弱さじゃないだろ。人として大事なもんだ。まあ、汚れ仕事なら代わってやるさ。なに、慣れたもんさ」

「ウルベルトさん……」

「そんな顔すんなよ。それよりもさ、あの二人はどう思う？」

空気を変える為に話題を変える。たっちもそれ以上は何も言わずに新しい話題へと移る。

「そうですね。前に会った時は戦いだけで話もまともにできませんでした。ですが、今は違う気がします」

「そうか？ 確かに声色は違うし話し方も違う。でもあれはナーベラルだろ？ 聞こうとしたら止められたから分からんが」

「あれは、ナンパだと思われたんじゃないですかね？ よくあるでしょ？ 知り合いの振りをするやり方が」

知り合いを装い話し掛ける方法。古典的な方法なので馴染みのないウルベルトでも知っているものだ。

「ナーベさんほどの方ならよくある事なんでしょう。だからそれを事前にとめたのではないのでしょうか？」

「んー、そうなのか？」

納得はできないが、ナンパに関してはよく分からないのでどうとも言えない。

「その部分は実際のところは私にも分かりませんよ。あくまでも想像です。ただ今言えることはウルベルトさん……今は仮面をしていないですよ？」

たっちに言われて自分の顔に触れてみる。

「ああ、そっか。人が居ないから外してたんだったな」

人が居ない環境で仮面を着けていても邪魔なだけなので外していたのを思い出す。

「今はそのままです。あの仮面を着けたまま捕虜の方に会うのはやめた方がいいですから」

「こういう時にこそ身に着けた方がいいんだけどな」

せっかく取り出した木製の山羊の仮面を見ながら思う。

「今回だけはやめてください」

「わかったよ。でもそうだな……確かにモモンガさんなら俺の顔を知ってるもんな。そういうえば、ペロロンさんも顔を出してたような

？」

ペロロンもファツションで顔を隠せる長さのターバンを頭に被っている。ただあくまでもファツションなので気分で隠すかどうか決めている。

「モモンガさんは、ペロロンさんと特に仲が良かったですからね。もし本物ならその時点で分かるはずですよ」

「俺達と同じでこっちに来てると思ったんだけど——」

その時、ウルベルトに一つの考えが浮かぶ。

「——なあ、たちちさん、仮になんだが……モモンガさんの子孫ってことはないか？ ついでに言えばナーベも」

「子孫ですか？ 先にこちらに来ていれば可能性はあると思いますけど……ナーベもですか？」

「これはあくまでも可能性なんだが仮にナーベラルと共にこの世界に先に来たとする。俺達もそうだが大半の奴はあの二人が恋仲だと思っていた。でも、考え方を変えると別の見方ができる。仮に……そう仮になんだがあの二人が《兄妹》だったら？」

「……兄妹ですか？」

ウルベルトの言葉に思考が一旦止まるが、なんとなく言いたいことは理解する。

「つまりあの二人は、モモンガさんとナーベラルの子供という事ですか？」

「ありえない話じゃないだろ？ ナーベラルが子供を産めるかは分かんないけどさ、それなら名前が似てるのも納得できる。よくあるだろう自分の名前とかを子供に付けたりするの」

「そう言われると……そんな気がしなくもないような……」

ナーベラルは、ドツペルゲンガーと呼ばれる種族で人ではない。どこまで人になれるかは分からないが子供も産めるかもしれない。名前に関しても自分の名前の一部を子供に継がせたりすることもある。他にいろいろと問題はある気がするが。

「だろ？ そっか……モモンガさんがナーベラルと……卒業できたんだな……モモンガさん」

遠き日を思い出す。共に性夜の夜に非リア充の証である嫉妬マスキを身に着け盛っているリア充共に呪いを掛けた事を。当日、ユグドラシルに居た人達と共に。

「流石に飛躍し過ぎな気もしますが……」

「聞けば分かるだろ？」

「それはやめた方がいいと思います。本人でないのなら言わない方が。なにせ場合によっては私達の事を話さなければいけない事になりますからね」

「……説明しにくいよな。ラキユースさん達にも言えてないのに」

よく知らない間柄でいきなり身内の話をされたら怪しまれるだろう。場合によっては関係を聞かれるかもしれない。しかし、その場合はどう答えればいい。別の世界で知り合いだったとでも話せばいいのだろうか？ まだ生きていければ言い訳もできるが、それこそ100年前の人物だったりでもしたら言い訳のしようがない。

「聞くにしてもそれとなくがいいでしょう。ただ難しいとは思いますが。短い付き合いですが常に警戒をしているような緊張感がありますから」

「そうだな。そこがモモンガさんとの大きな違いだな。隙が無い気がする」

「モモンガさんは、もつと親しみやすいですからね」

「冷静沈着。思慮深いとかとは縁がなさそうだったもんな。だからこそまとめ役に向いてた気もするが」

「私やウルベルトさんは向いてませんでしたね」

「まったくだ」

二人は昔を思い出し笑みを零す。

「——なんだか楽しそうですね。こっちは仕事をしてきたのに」

洞穴から不満気な声と共にペロロンが姿を現す。

「どうだった？」

「罫は外しておきました。その代わり新しいのを用意しましたけど。後で説明しますね」

「お疲れ様です。それでは、行きましょう」

二人は、ペロロンの案内で洞穴の中へと入る。捕虜となっている者を助ける為に。

第22話

洞穴の中には外にあった僅かばかりの星々の光すらなく完全なる闇の世界となつている。《ダーク・ヴィジョン》の魔法で視界を確保できていなければ見つかる覚悟で松明を使う必要がある。

「先ほど捕らえた方達に聞いた話だとこの先には野盗の長の部屋があり、入り口を出てすぐ左の道の部屋に盗んだ物が置いてあるそうです。捕虜になっている方達は更に進んで右の方の部屋に。数は4人。全員鎖に繋がれているそうです」

「たつちは、捕らえた野盗達から聞き出した情報を二人に伝える。」

「確かにこの先の部屋はいかにも野盗のトップの部屋つて感じでしたけど信用できるんですか?」

注意深く先に進むペロロンがチラリと後ろを向く。順番は、ペロロン、たつち、ウルベルトの順だ。

「俺が怖いらしい」

ウルベルトの言葉に思わずペロロンは笑いそうになる。

「なら大丈夫かもしれないですね。ウルベルトさん、傍から見ると何するか分かんない感じでしたから」

「……そんなにか?」

「平然と人の腕を折ってたら——止まってください」

ペロロンは二人を言葉と手で制止する。

「足下を見て下さい」

ペロロンに言われ二人は足元を見る。そこには、通路の端から端まで張られたロープが薄っすらとだが見える。わざわざ目立たないように汚してある罠用のロープだ。

「奥も見て下さい」

言われた通り奥を見てみる。すると奥の方にも似た様なものがあるが少し物が違う。張られているロープが太く汚れていないからか先ほどよりもはつきりと見え、そのロープの端にはわざわざ金属製の板のような物まで付いている。

「手前が本命で奥のがブービートラップです。これと似たようなのが

他にもあるんですが気をつけて下さい。配置を変えてありますんで」
そう言うのと楽しいげにペロロンは先を進む。それを二人は追いかける
ながら罠に掛からないようにして進む。

「……なるほど、これは厄介ですね」

「性格悪いな」

先を進むと同じような物を見つける。先ほどとは違い手前の方に
金属製の板がロープに張られている物。両方ともに板がある物や無
い物。ロープも微妙に変わっていたりで、見ながらでないと引掛か
りそうだ。

「配置に関しては覚えておいてくださいね。いざとなったらここを全
力で走るんですから」

簡単に言うが全部を覚えるのは面倒だ。なにせ出る時は順番が逆
になるのだから。

「めんどくせえー」

「頑張つて覚えましょう」

ウルベルトとたつちは、警戒を完全にペロロンに任せて罠の配置を
覚えることに専念する。そんな事をしながらでも歩いて行けばゴー
ルには辿り着く。

「いかにもつて部屋でしょう」

ペロロンに言われ覚えるのをいったん止める。獣油特有の臭さが
漂い僅かばかりの光がある部屋には、簡単なテーブルと椅子があるが
そこにはこの辺りの地図らしい物があるぐらいであとは酒瓶や食べ
残しなどがあるぐらいだ。部屋の隅にいろいろと雑に置かれている
ようだが特に金目の物はない。というか散らかっていて汚いので調
べたくない。

「あくまでも個人の部屋だな。俺としては、盗品のある部屋に行きた
いがそもいかないか」

野盗達の仕事の内容を気にしない冒険者はいないだろう。特に討
伐隊が結成される規模ともなれば価値のある物があってもおかしく
はない。野盗の持ち物は、基本的には討伐した冒険者が戦利品として
得ることが許されている。例外としては、冒険者組合に依頼がある物

ぐらいいだ。この場合は、冒険者組合に提出し報奨金を貰う事になる。勿体ない場合もあるが高額な物が多く、冒険者組合の評価も上がるので悪い話でもない。

「話だとブレイン・アングラウスと呼ばれる者が居るそうです。話が本当で本物であるのなら戦士長様と同格の実力者かもしれません」

「たっちの言葉に二人は思考が止まる。

「……えっ？　なんで今更そんなことを？」

「……そういうのは早く言えよな」

実力者が居るとは聞いていたが、かの有名な王国一の実力者とも言われる王国戦士長ガゼフ・ストロノーフと同格なんて聞いていない。

「知ったところでやる事は変わりません。それに話によると戦士長様には負けたみたいですから」

「いや、そういう問題じゃないだろ？　戦士長クラスとか勝てる気がしないんだが。せめて空を飛ばないと無理だ」

「俺も近づかれたら斬られる自信がありますね。それはもうバツサリと」

二人の不満も分かる。前にたっちがガゼフと戦ったことがあるがスキルを使用しても負けた。ガゼフの方も武技を使用してはいたがたっちとは違い明らかに余力を残していた。

「私達なら大丈夫です。それに戦うのが目的ではないですから」

「でも、表側に行ったらヤバくないですか？　モモンさんがたっちさんよりも強いって言っても勝てるか分かんないんじゃないですかね？」

「モモンさんは、おそらくですが戦士長様とあまり変わらないと思います。技などに関して言えば戦士長様の方が上ですが、身体能力で言えば圧倒的ですからね」

「ならどっちに行くかは運に任せるか」

警戒を強め先へと進む。捕らえた者達から聞く限り中には、ブレイン・アングラウスと呼ばれる者を除くと6人居るそうだ。ただ表側の対応をしているからかペロロンが見つけた罠以外には特に障害もなく目的の場所へと辿り着く。目隠し用の天幕も明かりもない場所。

そこには、世界の冷たさだけがある。

「酷いもんですね」

先を進んでいたペロロンが最初に見つける。二人もすぐに状況を目にするが雄臭い不快な臭いに表情が歪み、捕虜となっていた女性達の事を思うと怒りが込み上げる。岩肌打ち込まれている金具から繋がれている鎖が足に届き、衣服などは着ておらず生傷だらけの裸体で冷たい洞穴の地面に横たわっている。食事も碌に取れてはいないのだろう頬がやせ細り度重なる屈辱と辱めからか目はどこか空虚なものとなっている。

「ウルベルトさん」

「分かってる」

ウルベルトが魔法で傷を治そうと近づくと一人がそれに気づき怯えた目を向ける。

「……イヤ……コナイデ……タスケテ……」

ウルベルトから逃げようと力の入らない身体を動かす。三人に気づかず未だに横たわる者達を押しつけ逃げようとするが身体は上手く動けずにその場でジタバタと僅かばかりに動くだけだ。

「……他から治す」

先に他の者達の治療を始める為に移動する。近づいて見てみると人形ではないかと思えるほどに意思を持たずにいる。

「……すまないな。今はこれしかできない」

ウルベルトが《ライト・ヒーリング》を行使している間も反応はない。僅かばかりの癒しの光。これが今の彼女達にどれだけの癒しをもたらす事ができるのか。

「大丈夫です。私達は、助けに来ただけですから」

たっちは、女性が怖がらないように剣と盾を地面に置き、兜を外して女性に声を掛ける。

「——大丈夫ですから。もう大丈夫ですから」

たっちが声を掛けながら近づくと反射的に手近にあった石を掴んで投げる。投げられた石は、弱々しくもたっちの額に当たり血が薄っすらと流れるがそれを甘んじて受ける。怯える女性を怖がらせない

ように表情を変えずに優しい言葉を掛け続けながら。

「必ず助けます。必ず貴女を本来居るべき場所へと返します。一緒に帰りましょう」

蹴られようが引つ掛かれようがそれでも近づき、女性の下へと届く。

「もう大丈夫ですから」

そっと親が子供に対するように優しく抱きしめる。声を掛け続け身体の震えが収まるまで。

「ペロロン、俺が運ぶから頼んだぞ」

「ええ、俺が意地でも守ってみせますよ」

ウルベルトは、治療を終えた女性の一人を抱きかかえる。魔法職のウルベルトには少しキツイがそんなことは言っていられない。今は少しでも早くこの場所からこの人達を遠ざける為に。

◇◇◇◇◇

今もあの時の事を思い出す。初めて負けを知ったあの時の事を。

——ガゼフ・ストロノーフ。

奴と出会ったのはあの時が初めてだったわけじゃない。それまでも話に聞いていた。戦っているところを見た事だつてある。だが、王国主催の御前試合で見たあの男の姿はそれまでの物とは違っていた。初めてだった。剣の道に生きてから初めて敗北を知った。本物の敗北を。

「——アングラウスさん！」

「……なんだ？」

ブレイン・アングラウスが一眠りしていると声を掛けられる。用心棒として雇われている野盗の一味のうちの一人だ。

「大変です！ 表に新手が現れました！」

「それで？ 俺の腕が必要なのか？」

アングラウスは、気怠そうに身体をおこす。布を敷き詰めて辛うじて寝床と呼べる場所はあまり身体にはよくない。

「はい！　それが豪華な全身鎧を着てる奴とどびきりの美人の二人なんです。それががむちやくちやな強きで！　女に釣られて行った奴がバカデカイ剣で叩かれて吹っ飛んだんですよ、ポーンて感じで！」

「剣で叩かれる？　何を言っているんだ？」

「剣は叩くもんじゃないぞ？」

「そうなんです。が本当なんです。大人程のデカさの剣でその横っ腹で軽々と。あんなバカデカイのを片手で振り回すなんてあれは化け物ですよ」

「片手で？」

何を言っているかよくわからないが仮に大人程の大きさのある剣を片手で振り回せるとしたら確かに化け物だ。そういった物は、普通は身体を軸にして両手で振り回すようにして使うような武器だ。それを片手で扱えるなら化け物と呼ぶにふさわしい。

「面白そうな相手だな」

思わず笑みが零れる。野盗の用心棒をしている理由は、強者と戦うためだ。あの男に勝つ為に。

「アングラウスさんならあんな奴なんて簡単っすよ。ただ女だけは生かしておいてくだっせえ。あんな上玉を殺したとあつては後で頭に殺されちまう」

「女の事なんか知るか」

アングラウスは野盗の言葉を一蹴する。女なんてのは剣の道の邪魔にしかない。

「俺は、強い奴と戦えればそれでいい」

「そう言わないでくだせえよ」

どうやら相当な上玉なのだろう。冷たく一蹴したにも拘らず歩き出したアングラウスに縋りついてくる。

(うざいな……しかし、少し妙な気もする)

考えれば少しおかしな話だ。先に来た者達は弱かった。おそらく冒険者としてはカッパかアイアンだろう。ならば今表に居るのは？　仮に話が本当なら最低でもオリハルコンにはなるだろう。だが、なんで二人なんだ？

「——どうかしましたか？」

急に立ち止まったアングラウスに声を掛けるが返事は返ってこない。

「最初が偵察。次が討伐隊か？」

以前より冒険者組合が討伐隊を結成したという話は情報として入っていた。偵察隊が先に動き、それを受けてエ・ランテルで待機している討伐隊が動く。だからこそ移動の準備をしているわけだがどうなんだ？ 討伐隊が来るにしては早過ぎる。仮に他に居た偵察隊の者だとしたら強いのはおかしい。何処に居るかもわからないよなものを探すのは金のかからない弱い奴の仕事だ。

「ありえないな」

話だけ聞けばオリハルコン級だろう。考えられるのはコイツが馬鹿な夢を見たつてところだろうが、バカデカイ剣で叩かれたのを見間違うとも思えない。

「おい、裏口の方はどうなってる？」

「えっ？ 裏口ですか？」

「まだ積み込みは終わってないんだろ？」

「まだだと思いますが、それが？」

緊急時の避難用となっている裏口は巧妙に隠されており、知らない者には見つける事はできないようになっていた。ただ、荷物の積み込みをしている今は見つける事ができるはずだ。

「もしかしたら陽動かもしれない」

「陽動ですか？」

「おそらくだが本来の討伐隊じゃない。来るのが早過ぎるし数も少ない。そうなる偶然居合わせたんだろう。中の状況が分からないから表と裏に分かれて挟撃つてところか」

冒険者チームは、4人か5人で組む事が多い。少ないと動きやすいが戦いで困る。多すぎると見つかりやすく分け前にも響くからだ。そう考えると裏には、2人か3人。囷になる表に実力のある者を配置し、裏には動けるものが行くのが定石。

「お前は残り呼びに行け。少し早いが撤退する」

「ですが、まだ頭が戻ってませんぜ」

「欲をかいていつまでも此処に居るなど俺は言った。それでも居続けたのは自業自得だろ？ 俺は、あくまでもお前達を守るように雇われた用心棒であって場所や物は関係ない。早くお前は呼びに行つてこい」

「分かりました」

野盗は、アングラウスに言われた通りに表の対応をしている仲間の下へと向かう。

「さて、少し勿体ないが此処から出るとするか」

表に居る実力者が気にはなるがまともに戦えるか分からない状況では意味もない。今は、裏に回っている者達だけで我慢するとしてよう。

第23話

ブレイン・アングラウスが裏口のある方へと足を進めると物音が聞こえ始める。人の声。響く足音。

「どうやら予想は当たったようだな」

見える姿は二人。裸の女を胸に抱きながらこちらを警戒する全身鎧の戦士がそこに居る。女の方は、捕虜だった者だろう。性欲処理としてあてがわれる事になったが必要としなかったために断つたので詳しくは知らなかったが酷いもんだ。隣に居る者に身体を支えられなければ立っていられない程に弱っている。

「他にも居るのか？」

裏口があり、野盗の長が使っている部屋の奥にある裏口の方から音が聞こえる。隠す気のない足音。それが——二つか。

「おい誰か居るぞ!？」

「たぶん噂の人じゃないですか？」

ぽっかり空いた暗闇から新しく姿を現す。一人は、肩を大きく揺らして睨みつける粗暴の悪そうな男。身なりからして魔法詠唱者だろう。もう一人は、飄々としているが手に持っている弓をいつでも構えられるように気を張っているように思える。

「ハズレだと思っただがどうやら違うようだな。お前ら……強いだろ？」

思わず笑みが零れる。囷としての表側に比べれば大した事のない奴らが裏へと回ったと思っていたが違う。これはあくまでも勘だが、この三人は戦い慣れしている。

「ヤバいですよ。あの人マジで強いです」

「ああ、力量の分かんない俺にも分かる」

今、この空間には明確な物がある。

「本物の殺気ですね」

三人の目には、アングラウスから向けられる殺気が目に見えそうになるほど明確に分かる。空間に殺意の色が満ち、それが自分の死を教

えてくれる。

「いいな、悪くない。分かるか？」

隠す気もない殺気。それを受けてもこの三人は怯える事もなく、恐れる事もなく、頭を働かせ行動に移そうとしている。

「俺が殺気を向けてこれだけ平然といられるのはよほどのバカか相当な経験を積んでいるかのどちらかだ。特に力量が分かっているのなら尚更だ」

ゆつくりとした動作で腰に下げている武器を抜く。この辺りでは珍しい武器。此処から南にある国で作られる武器。魔法などは特に込められていないが純粋な切れ味はその辺の物では比べ物にならない武器。

「刀ですか」

その武器を目にして思わず眩く。

「知ってるのか？ この辺りじゃ珍しいが知っているのなら嬉しいな」

腰に下げられた鞘から抜いた一品。己の切れ味を誇示するように光を受け、刃を光らせる業物。

「早速で悪いが試させてもらおう。あんたらの仲間が表で張り切っているようだな応援に向かわないといけないんだわ」

(モモンさん達ですか)

予定では囷となって敵を引き付けているはず。アングラウスがこちらに来たのは予定外ではあるが役目は果たせているようだ。

「私とペロロンさんが戦います。ウルベルトさんは、彼女をお願いします」

「うっし！ 任せておけー！」

弱音を吐いている場合ではない。ウルベルトは、気合を入れる為に自らの頬を思い切り両の手で叩く。だが、世の中はそんなに甘くない。

「イヤア……」

たっちの影に隠れるように捕虜の女はウルベルトから逃げる。

「……この差はなんなんだよ。スリープ」

近くで笑っているペロロンの頭を引っ叩いてからスリープの魔法で眠らせた捕虜の女を抱きかかえる。

「すぐに戻って来る。それまで持ち堪えろよ？」

「わかりました」

「だったら叩かないでくださいよ」

「知るか。フライ」

フライの魔法で宙に浮かぶ。狭い洞穴を移動するのに適さないが非力で体力を消耗している今の状態だと他に選択肢もない。ウルベルトは、速度を落とす気もなく洞穴へと飛び込む。たとえ体中が傷ついても止まらずに進む覚悟を持って。

「これで心置きなくやれるな」

言葉が終わると共にアングラウスは駆け出す。軽装であるが故にその速度は速い。

《速射》

しかし、それにペロロンは合わせる。初めから狙っていたからこそその行動だ。

「——チツ……」

ペロロンから飛んでくる矢に気づいたアングラウスは急停止からの旋回で刀を振るう。無駄のない動作。すぐにでもまた駆け出せるような動作——だが、それは行われぬ。

《スパイクアタック》

矢を刀の一振りで落とした面前に既にたつちが距離を詰めてそこに居る。重装備を考えるとこちらが矢に反応した頃には動いてははずだ。

「面白〜」

迫りくる盾。既に刀は振られ返して切り付けるには無理がある。なら他に方法もない。

アングラウスは躊躇いもなく盾に体当たりをする。優勢なのは先に全体重を乗せた技を繰り出したたつちにある。だが、当たる場所に差がある。たつちは、あくまでも盾を突き出した左腕だけ。アングラウスは、肩口からの身体全体を利用してのものだ。仮にもしアングラ

ウスの行動に躊躇いがあれば動作の遅さなどで競り負けていただろう。

「いいな、おい！」

互いに体勢は崩れる。ただ、この相手達はアングラウスを休ませるはくれない。

「《速射》と《連射》でもくらえ！」

仲間が居ると分かっているながらも矢が飛んでくる。

(当たるのが怖くないのかよ)

不思議な相手だ。戦い慣れているのは分かった。ただ、力量のわりに戦い慣れ過ぎている。合凶も無しに互いの動きが分かっている。言葉を交わさず、見もせずここまで動けるものなのか？ 体勢を崩したたつちの身体の隙間を潜り抜けるように飛んでくる矢を見て興奮しない訳がない。

(お前は どうする、ブレイン?)

刀を振るい。今度は、無理やり体当たりを繰り返す。今は、それらのせいで体勢を取り繕うのも難しい。それなのに矢が続けさまに三本も飛んでくるんだ。

「決まってるよな！」

身体で動かせる場所を探す。右足、左足は無理だ。刀を持つ右手も無理。なら、唯一動かせる左手を使い。アングラウスは、左手を使い矢を撃ち落としかかる。万全な状態なら上手くできたかもしれない。だが、これだけの状況ならそれは無理だろう。最初に飛んできた矢は傷と共に弾いた。二本目の矢は盾にした左腕で甘んじて受けよう。だが、他の二本の矢の逃げ道に用意されていた三本目はこのまま避けさせてもらう。

「確か、たつちだったな。それで、あつちはペロロンだったか。これで、さっきのウルベルトとか言う魔法詠唱者も加わるのか」

たつちを盾にして体勢を整える。正直に言えば、これだけの事を行える弓兵を視界から外したくはないが、此処は狭い洞穴。回り込まれる心配はない。今は、体勢と呼吸を整える。

「二つ訊いていいか？ お前達と表の奴らどちらが強い？」

「表に居る方々ですよ。本来なら情報を相手に与えたくはないですが、モモンさん達なら別です」

「モモンか……聞いたことないな。お前達もそうだ。どうやら裏に籠っている間に表は面白くなってそうだな」

アングラウスは、刀を鞘に納める。一見すると敵を前にして行うものではない。

「居合ですか?」

変わる事のない殺気。否、殺気はより濃いものへと変わった。

「そこまで分かるか。そうなると困るな」

居合には一つ弱点がある。どうやらそれを知っていそうだ。やりにくい相手だ。嬉しい相手だ。

「武技は分かりませんが、居合に関するものでしょうか? 剣速を上げる……そんなところだと思うのですが?」

「御名答。お前は、良い相手だな。できれば、一対一でやり合いたいがそもいかないだろうか?」

「こちらの目的は戦いではありませんので」

「そうか。分かった」

アングラウスは殺気を抑える。

(罨か?)

急に空間から殺気が消えていく。怪しいが、どうやら罨にしては雰囲気が違う。

「今回は見逃してやる。だが、今度会ったら俺と勝負しろ。一対一でだ」

たつちは考える——が、どうすればいいかが分からない。アングラウスが強いことは分かる。居合は行動に制限は掛かるが、まったく動けないかと言われればそうではない。一気に間合いを詰められて振るわれる場合もある。捕虜を逃がす事を最優先で考えれば見逃してもらおう方がいい。だが、これだけの危険人物を野放しにするのが果たしていいのだろうか?

「見逃してくれるのならそうしましょう。今回は、討伐ではなく捕虜の奪還なんですから」

後ろから聞こえるペロロンの声。確かにその通りだ。目的を見失うな。

「分かりました。勝負はお預けします」

たつちは、警戒を解かないままゆっくりと後退する。すると、アングラウスの視界にペロロンの姿が映る。一切警戒を解かずに矢先をこちらに向けている姿が。

「俺の名前は、ブレイン・アングラウスだ。今度会う時まで腕を上げときな」

アングラウスの言葉に答えずに二人は洞穴の闇へと消えていく。

「アングラウスさん！」

表側の方から先ほどの野盗の一人がこちらへと走って来る。しかし、他には誰も居ない。

「他はどうした？」

「それがですね……皆やられちゃいました」

「……そうか」

驚きはしたが納得もした。あれだけの實力を持つ者が信頼している相手だ。コイツ等程度なら相手にならないだろう。

「此処から出るぞ。外で合流する」

「わかりやした。俺は、アングラウスさんに従います」

既に満身創痍だ。当然だろう。此処に居るのは今や二人だけ。戦う気など無くなる。いや、最悪の場合は本当に二人だけかも知れない。外に居る者達がどうしているかは分からないが敵の力量を知らずに挑む可能性は十分にある。なにせ相手は無名なのだから。

「足を洗うかあ……」

金目の物があるか分からないが手分けして探す。どうせ見逃す為の時間がある。今は身を隠し、再戦の準備をしたい。

第24話

ウルベルトとペロロンが身動きを封じた野盗達を乗せた荷馬車を走らせ。たつちが捕虜の女性達を乗せた荷馬車を走らせモモン達が居る表側へと急ぐ。

「なんで戦わないんだよ」

アングラウスの強さは理解していたが、それでもラキユースへの手土産を得ることに失敗したウルベルトは不満気に愚痴を零す。

「あのまま戦っていれば負けてましたよ。相手は間違いなく私達に勝てる自信があつたはず。洞穴でなければ話は別でしたけどそこまで持つかどうか」

「そうですね。捕虜の女性を助けただけでも十分でしょ」

「確かにそうだけどき……俺達の手柄になるのか？」

捕虜の女性達の反応は終始決まっている。これが格差社会だ。

「こればかりはね？ ウルベルトさんも少しは笑顔で居ればいいんですよ、ほらスマイルスマイル」

「……それだけでいけるのか？」

「無理ですね」

隣に座るペロロンの足を蹴飛ばす。

「それよりも間に合いますかね？」

裏口のある場所から荷馬車で表に向かう場合は、どうしても通ってきた森を迂回する必要がある。先にウルベルトが空を飛ぶかペロロンがレンジャーとして隠密で行くべきなのだろうがそうはいかない。ウルベルトの魔力の残量。ペロロンの矢の数を考慮すると単独での行動は危険だ。

「あの口ぶりだと問題はなさそうですけど、外に居る分が戻ってくれば挟み撃ちですからね」

アングラウスの言葉を真に受けるのならモモン達は囿として敵を引き付けている。そんな状況で後方から敵が現れば危険だろう。

「やっぱり俺が先に行くか？ 闇夜に紛れれば少しはマシだろう？」

ウルベルトの提案をリーダーであるたつちが決める。

「危険だと判断した場合は無理をしない方向でお願いします」

「了解。じゃあ、ちよつと行つてくるわ。操縦頼むな」

「任せて下さい」

手綱をペロロンに渡し、自分は空を飛ぶ準備に入る。

「馬鹿な真似はするなよ?」

念の為に馬車の中に転がしている野盗達に声を掛ける。ペロロン一人だと後ろをとられる形になるが、見る限り戦意はない。

「大丈夫ですよ。手足が折れるか外されている上に縛られてるんですから」

「それでも念を入れてだ。じゃあ、行つて来る」

ウルベルトは、フライの魔法で上空へと舞い上がる。地味な格好なのですぐに闇夜と混ざる。

「いつてらつしやい」

「気をつけて下さいね」

そんなウルベルトを二人は見送る。

◇◇◇◇◇

ウルベルトが上空から警戒して飛行していると状況が遠目に見えるてくる。

「……マジかよ」

警戒は無駄に終わった。ウルベルトの目には、こちらに手を振るモモンの姿があるがもちろんそれだけではない。モモンの周囲には動かない人間達が山のように積まれている。

「お疲れ様です。そちらはどうでしたか?」

モモンの傍に降り立ったウルベルトに何事もなかったようにモモンは言葉を口にする。

「あんた強いな」

積みまれている人間達はどうかやら生きてるようだ。見る限り剣で切られたわけでも魔法でなにかされたわけでもない。外傷から考えられるのは、モモンが手に持つ大剣の横っ腹でぶつ叩いたと言ったと

ころだろう。と言うか、先ほどからナーベの姿が無い。もしかしくてもモモン一人によるものだろう。

「いえいえ、弱い相手でしたから。噂の相手は来ていませんが、そちらに居ましたか？」

「居た、見逃してもらったよ」

「……見逃してもらった？」

「捕虜が優先だったからな。まあ、狭い洞穴だどこっちが不利だったけど。でもな勘違いしないでくれよ？ 外でなら俺達の方が強いんだからな」

あくまでも可能性ではあるが勝つ自信はある。対空手段さえなければウルベルト一人でも勝てるはずだ。

「わかっていきますよ。皆さんが負けるなんて思っていません」

「そうか。あんた、見る目があるな」

「それほどでも」

「それより、ナーベさんの姿が無いけどどうしたんだ？」

先ほどから居ない人物の事を訊ねる。

「それでしたら応援を呼びに行かせました。先ほどメツセージの魔法で連絡がありました、直にエ・ランテルの方から応援が来るそうです」「ほう……戦士なのに魔法も使えるのか」

「メツセージの魔法だけです便利ですからね。でも、内緒でお願いします。面倒なのは嫌いなので」

「わかった。これでも口は堅い方だ。忘れるまでは覚えてるよ」

どうやらこれで一段落のようだ。近くの木に背を預けるようにして休む。

「なあ、もう一つ訊いていいか？」

「なんででしょうか？」

「実際のところどうなんだよ？ やっぱり付き合ってるのか？」

「なんのことでしょうか？」

「とぼけんなよ。あんな良い女と一緒に二人旅をしてナニもないなんて嘘つてもんだろ？ 時間もあんだしき、話せよ」

ニヤついたゲスな笑みをウルベルトは浮かべる。

「そんな関係ではないですよ。あくまでもナーベとは旅の仲間としての関係です」

「二人だけなんだから言っちゃまえよ。別に悪いとは思ってないんだろ？」

「それは……まあ……」

「はつきりしないな。それともアレか。もしかして兄弟とか親戚だったりするのか？」

「違いますよ」

「ふーん。だったら何が問題なんだ？」

そう言えば何が問題なんだろう？ 今思うと人間としてのナーベは普通に美人だ。いや、違うだろう。ナーベは仲間達の忘れ形見だ。大事な家族みたいなものだろう。

「兄弟でも親戚でもないですが、ナーベは家族みたいなものなんです」「家族みたいなもんか……」

ウルベルトは少し考え込む。

「モモンさんだっけか、あんた親とか居るか？ もし居るなら名前とか教えてくれない？」

「それを聞いてどうするんですか？」

「なんとなくだよ。無理にとは言わないが」

「親はもう居ません。私もナーベにも。名前は、申し訳ありませんが教えられません」

「そっか。悪いこと聞いたな、忘れてくれ」

深くは訊かずに話を終え、ウルベルトは本格的に休みに入る。少しでも魔力を回復しておきたいからだ。

「……私からもいいですか？」

「ん？ 別にかまわないけど？」

「皆さんは、いつから旅をなされているのですか？」

「そうだなあ……数か月前ぐらいかな？ いろいろあつて王都の近くに飛ばされたんだよ。たぶん転移の魔法か何かだと思っただけど」

「数か月前ですか。それ以前はどちらに？」

「おいおいそんなこと聞いてどうすんだよ？ 過去なんてどうだって

いいじやねえか」

「では、せめて皆さんの武勇伝でも聞かせてください」

グイグイと食い気味に問い詰めてくるモモンに若干引いてしまう。「まあ、暇だからな。その代わりそっちも頼む。そっちの武勇伝も聞いてみたいし」

ウルベルトは、この世界に来てからの事を簡単にまとめて話す。できる限りおかしくないように、変なところが無いように。今までも酒場などで話した事があるので慣れたものだ。

(羨ましい……)

ウルベルトから聞く三人の冒険譚は、モモンの、モモンガの心に嫌と言う程響く。内容は、モモンが知る一般的な冒険者のものと変わらないのになんと楽しそうに過ごしているのだろう。いや、この三人とならあまり関係ないのかもしれない。

(いつそのこと人間になろうかなあ……)

転生のアイテムを使用して人間になる。ナザリックはパンドラ達に任せてもいいんじゃないかな？ でも、それが最善の選択かと言われれば違う気もする。未知の世界に敵。ナザリックの者達が持つ人間に対しての感情。そして、自分達を創造した至高の存在への思い。それらを考えると今の姿と立場を安易に捨てる事などできない。

(神はなんと残酷なんだ)

目の前に求めていた物がある。それなのに手を出す事が出来ない。アンデッドの特性である精神抑制がなければ発狂してしまいそうだ。

◇◇◇◇◇◇

たち達が先に到着し、安全を確保してからウルベルトによる捕虜となっていた女性達の治療が再開された。その間にナーベがエ・ランテルからの応援を連れて来た。面子は、たち達の知る者達だが実力は少々不足していた。緊急だったので、すぐに動ける者達が先行してきたようだ。

「とりあえずこれで終わりですね」

「たつちが離れると捕虜の女性達が動揺するので、モモン達と共にウルベルトとペロロンが洞穴へと入る事となった。調査の結果はもぬけの殻。残されている物は大した価値もない。外に居たであろう野盗の親分達が戻って来る様子もない。これ以上此処に居ても意味が無いのでエ・ランテルへと戻る事になったのだがそこで事件が起きる。」

「そう言えば、なんであんな所にお二人は居たんですか？」

「荷馬車の一つをモモン達に譲り並ぶようにして走らせている。」

「そうですね。皆さんにしたら話してもいいかもしれませぬ」

「モモンは、意味深な間を空けてからゆつくりと口を開く。」

「実は、私達はとある者達を追っています。ズーラーノーンと名乗る組織を知っていますか？」

「聞いた事あるような？」

「アレだよ、アレ。昔、街一つで儀式をやったって言う」

「そう言えばそんなのもありましたね」

「街一つを利用した死の螺旋と呼ばれる大儀式。それがどんな物かは不明だがアンデッドが上限なく増える危険な物であることは分かっている。それもアンデッドがより強いアンデッドを生み出すというオマケ付きだ。」

「話によると、彼らはこの近くに居るらしいのです」

「そうなんですか。つまり、お二人はそのズーラーノーンを追って此処まで来たか？」

「モモンは肯定するように頷く。」

「ただ、相手は強大な力を持つ者達です。できれば、皆さんのお力をお貸し頂ければ助かるのですが」

「私は別にかまいません。二人はどうですか？」

「ラキユースさんの敵になるならやる。そうでないなら保留」

「俺は、別にどつちでもいいですよ。お宝とかありそうですし」

「だそうです。ですが、モモンさん達のお力になれるか分かりませぬよ？」

「いえ、そんな事はありません。皆さんなら必ずや私達の力になって

くれると確信しています。それはもう」

モモンの期待の高さに少し困惑するが特に断る理由も今のところはない。

「でもよ、協力とかなにすればいいんだ？　ズーラーノーンの話とか聞いたことないんだけど」

「それに関してはこちらから連絡をさせて頂きます。ウルベルトさんがメッセージの魔法を使えばいいのですが無いようですので、冒険者組合を通す形をとりたいのですがよろしいですか？」

「私達の拠点はあくまでも王都なのですがそれでもいいですか？」

「問題はありません。それでは——」

話は大きな爆音にかき消される。馬は音により慌てふためき。人間達も何事かと視線を動かす。そして——世界の脅威を知る。

「おい、アレってなんだよ……」

誰が言葉を口にしたかは分からない。そもそも聞こえていない者の方が多いのかもしれない。なにせ、彼らの視線の先には夜空を赤く染め上げる火柱があつたのだから。

「アレは、おそらくですが魔法ですね」

その場に居た者達の疑問にモモンが答える。

「馬鹿言うなよ。あんなのが魔法なわけないだろ？　あんなの第三位階とかじゃすまないぞ？」

距離は此処から大分離れている。それなのにこうして目視できる程の範囲魔法。そんな事を信じられる者は……ユグドラシルの知識があるウルベルト達三人ぐらいだろう。それほどまでに異常な事態なのだ。

「ふふふっ、これはこれは面白い者達が居る」

それは、闇夜の空から聞こえてきた。不快な音。人が使う言葉とは違う異質な物。

「お前は、カジット！」

その声に反応したモモンは、咄嗟に背中から下ろしていた大剣をその声の主へと投げる——が、それは空を切るだけで当たる事はなかった。だがそのおかげで多くの者がその存在に気づく事が出来た。

「リツチ……違う、あれはもつと上の存在だ」

「ほう……そこに居るモモン以外にも骨のある者は居るようだな。そう！ 我こそは、偉大なるズーラーノーンの高弟が一人カジット・デイル・バダンテールである！ 盟主のお力によりエルダー・リツチとして生まれ変わったこの私に勝てる者など居らん！」

エルダー・リツチ。それは、ミスリル級の冒険者チームで勝算があるとされる相手だ。たち達やモモン達なら戦える相手だが、実力の劣る他の冒険者たちは怯えてしまいか荷馬車の影に隠れるようになるのが精一杯だ。

「愚かな者どもよ、聞ぐがよい！ 我らが盟主は死の底よりお戻りになられた！ 先ほどの火柱がその証！ 我らがズーラーノーンに怯え、恐れ、称えよ！ 我らにその身を差し出せ！」

「馬鹿を言うな！ そんな事はさせない！」

モモンが荷馬車から飛び降りる。

「ふんっ！ 貴様に何ができる」

「確かに私だけでは難しいかもしれない。だが、私は新しい仲間を得た。皆さん！」

モモンがたち達の方を見る。

「もちろんです！ 加勢します！」

たち達は、恐れる事もなくモモンの横に並ぶ。

「おいおいマジかよ。エルダー・リツチでも大変なのにあんな魔法を使う奴とやり合うのか？」

「ラキユースさんの敵になりますよ？」

「かかってこいや！」

ウルベルトも威勢よく喧嘩を売る。

「まったくしようがないですね。付き合いますよ」

ウルベルトを焚きつけたペロロンも矢を弓に番える。

「面白い。だが、今回は挨拶だけだ。なにせ、まだ盟主は完全ではないのでな。精々首を洗って待っている」

そう言い残すとカジットは魔法で姿を消す。

「転移の魔法か」

モモンは、周囲を見渡すがそこにカジットの姿はない。

三人の前に現れたブローラーノーンを名乗る新たな敵。モモンとナーベと言う仲間を加えての新しい冒険が始まろうとしている。

第25話

カジットは、転移の魔法を使い火柱が上がった場所まで移動してきた。

「素晴らしい出来でしたよ」

そんなカジットを大規模に焼け焦げた場所で出迎える者が居る。穴が二つだけ空いた仮面を被り、全身を覆い隠すような漆黒のローブを身にまとっている者。

「ありがたき幸せ！ 光栄の極みです！」

カジットは、地に額を付けるほどに深々とその者に頭を下げる。その姿は、生者から恐れられるエルダー・リッチとは思えない程に小さい。

「我が主は、喜んでおられます。貴方は、これからは我が主の人形として振舞ってもらいます。さすれば、貴方の真なる願いも叶えられるでしょう」

名も知らぬ者の言葉にカジットは歓喜に震える。カジットには、どうしても叶えたい願いがある。それは幼き頃に亡くした母親をこの世界に蘇らすこと。かつて複数の人間による儀式で蘇生させようとしたが失敗に終わった。その為、更なる力を求める事にしたが残念ながらそれを成すための時間がない。だからこそエ・ランテルに住まう者達の命を利用した魔法儀式で不死の力を得ようとした。ただ、それは突然の襲撃者によって壊されるが……それこそがカジットにとって願いを叶える希望となった。

（なんと恐ろしい。なんと素晴らしい）

地に伏せて思うは、この者の力。名すら知らぬ者ではあるが、その力は絶対。魔法儀式を行わなくてもいとも簡単に不死の力を与えて下さった。それに先ほど見せられた魔法もそうだ。少なくとも第六……いや、神話にあるとされる第七や第八かもしれない。分からない。理解する事すら許されないだけの差がある。それなのに使い魔なのだ。この者ですら主と比べれば。

（この者の主なら母を生き返らすことも……）

そんなカジットの心を読んだかのように目の前に居る者は言葉を口にします。

「我が主は、生と死を自在に操る事が出来る神である。お前の望む願いを叶える事など容易い」

「このカジット・デイル・バダンテールの全てを捧げます！」

「良い心掛けですね。そんな貴方にコレを差し上げましょう」

その者は、ローブから取り出した杖をカジットの前に無造作に放り投げる。まるで価値のないゴミのように。

「こ、コレを私にお与えくださいるのですか!？」

カジットの目の前には、金を下地に宝石で装飾が施された豪華絢爛な杖があった。おそらく一国の王でも手に持つことは難しいであろう物だ。それになにやら力を感じる。これは、ただの杖ではない。なにかしらの魔法の力が込められている。こんな物を目の前に居る者はどうした？

「主からしたら価値の無い物です。本来なら主の手元にある事すら不思議な程に」

圧倒的な存在。絶対的強者。愛する母を奪い取った神に……いや、主となった真なる神に感謝と共に絶対的な忠誠を捧げる。未だ姿すら見る事すら許されないが願いを叶える事が出来る存在する神に。

◇◇◇◇◇◇◇◇

エ・ランテルの冒険者組合長であるプルトン・アインザックは頭を抱えている。まず一つは、討伐が失敗した事だ。偵察部隊が相手側に見つかり計画通りにいかなかった。ただこれはそこまで悲観する事ではない。野盗の集団の頭領を倒す事などは出来なかったが報告を受けるに事実上の壊滅だろう。拠点と手下を大勢失った今となつてはそこまでの脅威にはならない。それに多くの者を捕虜として捕らえる事もできたので情報を聞き出す事もできるだろう。後は、応援の為に用意していた者達で周辺の探索だけで今は大丈夫なはずだ。

二つ目は、その中に居たとされるブレイン・アングラウスの存在。

かつて王国主催の御前試合に参加していた者で、かの有名な王国戦士長であるガゼフ・ストロノーフと拮抗するだけの戦いを行った強者だ。話を聞く限り用心棒のような事をしていたと考えられる。金と相手を求める方法の一つとしては良い方法ではないが一般的なものだ。どうやらたちとの再戦を望んでいるようなのでこれも一旦は保留とした。

そして、最後になる件が最大の問題だ。

「人を送ったのでその結果次第となるが話が本当なら緊急事態になる」

たち達と応援に向かった者達から聞いた話。夜空を赤く染める程の火柱にエルダー・リッチ。そして、それらにズーラーノーンが絡んでいる。最初に聞いた時は馬鹿らしいと思ったが、三人はともかく他の者達の表情はその時の恐怖を物語っていた。今は人を送り状況の確認に行かせているが内容次第では国が動く必要があるかもしれない。

「それで、情報を持っているモモン君達は、そのズーラーノーンの高弟の一人であるカジットと名乗る者を探しに行ったと」

唯一情報を持っているモモン達は、姿を消したカジットを探しに向かったそうだ。これに関しては、後でゆっくりと話を聞くとしよう。「君達が現れてからいろいろとあったが今回はまた面倒な事になったな」

組合長室でたち達三人を前にしている訳だが愚痴の一つでも零したくなってきた。最近、本当にいろいろとあり過ぎて退屈はしないが気が休まる時が無い。

「コレ美味しいですね。パンに挟んだ肉と野菜が良い感じですよ」

「こっちのシチューも美味しいぞ」

「……たち君」

「なんででしょうか？」

「冒険者チームを変える気はないかね？」

労いの為に食事を用意させたのだが、ペロロンとウルベルトは報告も碌にせずに先ほどから食事をとっている。唯一真面目に話をして

いるたつちを見て思う事があっても致し方ないだろう。

「やめて下さいよ、引き抜きとか」

「だな」

「申し訳ありません。私の背中を預けられるのは二人しかいませんので」

勿体ない。将来有望な人材が前途多難な道をわざわざ歩くなど。確かに実力に関しては申し分ないのだが如何せん品性が無い。それも自覚しているところが尚更たちが悪い。

「二人を前にして言うのもどうかと思うが、たつち君ならいくらでも受け入れ先はある。まあ、無理にとは言わないが」

たつちの性格を考えれば言葉にしている以上は曲げる事はないだろう。本当に勿体ない。

「それよりもさ、アインザックさん。あのアングラウスとか言うのはどうすんだ？ 指名手配とかするのかわか？」

「そうですね。アレは危険ですよ。久しぶりにビビっちゃいましたからね」

「用意したのは私だが、君達は少し食べるのを止めたらどうかね？

ブレイン・アングラウスに関しては注意をするように組合員や関係各所に伝達するだけに留まる。残念ながら身元の保証の無い君達や捕虜となつている犯罪者の証言だけでの手配は無理だ。それに話から考えると当面の脅威にはならないだろう。但し、たつち君には注意してもらわないといけないが」

「それまでには今よりも腕を上げておきます」

「頼もしい言葉だな。君の場合、戦士長殿との戦いも経ている。勝算はあるとみていいのかな？」

「はい。必ずや勝つてみせます」

アインザックの言葉にしっかりとした肯定の意思を持って答える。「それで、肝心なブローラー・ノーンの問題についてだが……今はモモン君達に話を聞くとしよう。こちらとしても情報を集めてからでないとはつきりとした事は言えない」

「でも、動くなら早い方がいいんじゃないですかね？ あの規模の魔

法だと第六位階とか超えていますよ」

「ウルベルト君は、第六位階以上の魔法を知っているのかな？」

「勘です」

「……そうか」

きつぱりと言われると返し方がない。

「とにかく君達には、しばらく此処に待機してもらいたい。情報が集まり次第になるが王都に使いとして行ってもらおう。前に依頼した内容はその時でかまわない。急ぎの内容でもないしな」

「わかりました。ウルベルトさんもペロロンさんもそれでいいですね？」

「ああ、それでいい」

「俺もいいですよ。それよりもたっちゃんも食べましようよ。組合長が選んだだけあつて美味しいですよ、コレ」

短期間でミスリル級にまで上り詰めた者達。これからの事を考えれば居ないと困る人材ではあるがもう少しなんとかならないものかと思わずにはいられない。

第26話

アインズは、ナーベラルと共にナザリック地下大墳墓へと帰還していた。ナーベラルには今後の事を伝え、パンドラとの話があるのでナザリックで待機させている。今は、人払いを済ませた執務室にアインズとパンドラだけが居る。

「まずは、報告を頼む」

アインズの言葉にパンドラは敬礼で答えてから口を開く。

「エ・ランテルで活動していたズーラーノーンの一味を襲撃、確保致しました。その際に首謀者であったカジット・デイル・バダンテールをアインズ様の計画に役立てる事を提案させて頂きました」

パンドラは、予定していた通りクレマンティーヌから得た情報を元にエ・ランテルで活動していたズーラーノーンを襲撃した。

「急に連絡があったので何事かと思ったが使えるのか?」

「はい。あの者は、自らの願いを叶えるためなら大勢の命はもちろんですが己の命すら厭わない者です。試しに幾つか行わせてみました。自らに仕えていた者達を何人も殺させたり、己を殺させたりと」

「そうか。それでその願いとはなんだ?」

「幼き頃に亡くした母親を生き返らす事だそうです。以前に蘇生を試みたようですが失敗し、灰になったとか」

「生き返らす際に起るレベルダウンによるものだろうな。レベルの足りない者は生き返らずに灰になると既に調べは着いている。そうだな?」

ナザリックでは今も多くの実験が行われている。この世界においては、蘇生に最低限のレベルが必要だという事が分かっている。それを満たしていない場合は少なくとも正攻法での蘇生は無理だ。

「はい。ですが、アインズ様の持たれる『ウィツシュ・アポン・ア・スター』や『シユューティングスター』なら可能かと思われませんがどちらも実験は出来ておりませんので」

「実験で行うには少々勿体ないからな」

超位魔法であるウィツシュ^星・アポン^願・ア^い・スター^をは、経験値を消費

して選択肢にある願いを叶える事が出来る魔法だ。この世界での仕様は分からないが通常の蘇生方法よりも効果は高いはずだ。そして、その上位互換になるのがシユ^流ー^れティ^星ング^のスター^{指輪}になる。コレは、経験値の消費が無く性能が上がっているのだが一つ欠点がある。コレは、アインズが夏のボーナスを全て使って得た課金アイテムになる。その為、指輪に元々ある三回の使用制限がある。どちらも今の状況を考えれば安易に使用することは出来ない。

「まあ、別にどうでもいい。願いを叶える気などはないからな。ただ、必要な物はパンドラの判断の下に与えてやれ」

「畏まりました。それとなのですが、デミウルゴス殿より要請がありまして人員が欲しいとありますがどうなされますか?」

「なにか要望はあったか?」

「捕虜として確保したクレマンティヌと今回確保した者達を数名欲しいと聞いております」

デミウルゴスにはいろいろとやってもらっている。表に出ないように行っているという事もありナザリックの人材を使えないので不便なのだろう。

「欲しいのなら与えてやれ。私は、しばらく今後の計画を練る事に集中したい。その……なんだ、カジットだったかの件はパンドラに任せろ。精々使える駒に育て上げろ、いいな?」

「必ずやアインズ様の御希望通りに育て上げてみせます」

パンドラを下がらせ今後の事について思案を巡らす。

「舞台に関してはおいおい考えていけばいいか。せつかく久しぶりにたっちさん達と一緒に戦えるんだから。ふふふつ、なんだかテンションが上がってきたぞ! ……クソツ、精神抑制のせいでせつかくの気分が台無しだな」

アインズ・ウール・ゴウンの仲間達との冒険が待っている。そう思うと精神抑制に何度抑えられてもテンションが上がってしまう。今は新しく手に入れた駒を使い最高の舞台の製作に専念する。



冒険者組合を後にしたたつち達一行は、エ・ランテルの街中をブラ
ついていた。

「……なるほど。では、ウルベルトさんの話を聞く限りではあの二人
は本人ではなく、兄妹でもない」と

「でも、本当に恋人じゃないんですかね？」

「家族みたいだとは言っていたが別に脈が無いわけじゃないと思う
ぞ」

「近いからこそ気づかないってヤツですね。幼馴染ポジションにはよ
くあることですよ」

ペロロンの考え方が正しいかは分からないがそれが一番しっくり
くる。二人は親戚ではないが家族同然に育つ環境に居た。それで理
由があつて行動を共にしている。それが一番答えに近い気がする。

「後は、子孫である可能性ですが話す気が無い以上は聞きようがあり
ません。これから関わりを持って行く中で聞ける事に期待するしか
ないですね」

「こればかりは考えても仕方ないですよ。それよりさっきのご飯は
美味しかったですね。やっぱり組合長ともなるとお金があるんです
ね」

「この街でも指折りの有力者だからな。良いもん食ってんだろ」

「アインザックさんも言っていましたけど、お二人はもう少し周囲に
気を使われた方がいいと思いますよ？」

「形だけ取り繕つてもすぐにボロが出るだけですって。それよりも何
処行きましょうか？ 分ける形になりましたけどそれなりに報酬も
出ましたからばあーつと遊びましょうよ！」

今回の件の報酬は、参加者で分配される事になった。功労者である
三人は他よりも少し多めに貰えた。

「そうだな。ラキユースさんに会うのが延びたし、気晴らしでもする
か。でもあれだな、上手くやれば良い手土産も手に入ったってのに」
「いい加減諦めましょうよ。それよりもズーラーノーンの件をどうに
かする必要があります」

「でも、正直に言つて俺達に勝ち目なんてないですよ？ エルダー・リッチですら大変なのにあの規模の魔法を使える相手とか今のレベルじゃ無理ですって」

「だな。倒せればアダマントタイト級に簡単になれそうだが無謀もいとところだ。モモン達がどれだけかは知らないが敵は最低でも俺達の倍のレベルはありそうだ」

「問題はそこですよ。今以上のレベリングを行う為には石化などを防ぐマジックアイテムを手に入れる必要がありますからね」

ギガントバジリスクをはじめ今の状況で狩れる効率の良いモンスタ―は、石化などの状態異常を使用してくる。対抗手段を持たないとレベリング以前に勝てるか怪しくなってきた。

「売つてはいるが高額だから。遺跡とかで手に入ればいいが近くにはない。そうなると盗賊を狙うか？」

運の要素が絡むが金が無い以上は他に方法も浮かばない。

「あの店なんて良くないですか？ 立ち話はやめて入りましょうよ」
ペロロンが人で混んでいる店を指差す。席が空いているかは分からないが人気はありそうだ。

「そうですね。他にあてもないですし、あの店に行つてみましょう」
「混んでるけど大丈夫かよ？」

先を歩くペロロンの後を追うように二人も混んでいる店へと向かう。

「もしかして、たちちさんですか？ ファンなんです！」

店に入ったところで女性の店員が対応してくれたのだが、どうやらたちの事を知っていたようだ。握手をたちちに求める訳だがそれを慣れたようにたちちは対応する。「混んでいるけど特別ですよ」と言われ機嫌の良い店員に空いた席に通される。

「納得いかねえ」

一連のやり取りを見ていたウルベルトから不満が出る。

「やっぱり見た目なんですかね？」

「そんなことないですよ。私なんて」

「嫌味にしか聞こえねえ。よし決まった！ 今日、たちちさんの奢

りな」

「異議なし」

「ちよつと待つてくださいいよ!」

今度はたつちから不満が出るが二人は無視して注文を頼んでいく。始まりは酒から入り、店自慢の料理を食べていく。

「一仕事した後の飯は美味しいな!」

「この酒もなかなかイケますね」

「あまり頼まないでくださいね。私の懐具合はお二人も知っているでしょう?」

「知らん。リア充の事など知らん。それよりもどうすんだよ? ズーラーノーンも問題だけどたつちさんの場合は他にもあるだろ? 一対一で勝つには早めにレベルを上げないとヤバいぞ?」

「死角を狙った俺の矢も防ぎましたからね。それに安物とはいえ麻痺毒の効きが悪かったですし。たつちさん一人だとキツイと思いますよ? いっそのこと全員で行きます?」

「私だけで戦います。勝負を挑まれたのはあくまでも私だけです」

ペロロンの提案をあつさりと断る。たつちの闘争本能に火が点いたのかもしれない。

「だったらレベリングの方法を考えないとすね」

「でもよ、対策を講じないとダメなレベルになってきたぞ? ゲームで言えば、少し頭を使わないといけない辺りだ。馬鹿正直に戦っていればすぐに死ぬ」

「ミスリル級の仕事ならそれなりに報酬がありますがまとまったお金は手に入りません。盗賊に關してもこの前のところが有名どころでした。少し危険を冒すか……場所を変えるかでしょうね」

とは言え、何処に行くか? 法国には冒険者組合が無いので必然的に帝国になる。ただ、帝国は王都に比べて治安は良いらしい。そうすると後者は無理なので前者になる。

「トブの大森林にでも行くか? また薬草でも取りに」

「そうですね。待機と言われましたがトブの大森林なら近いですか

ら」

「馬とか借ります？ 内容次第ではマイナスになるかもしれませんがど速いし楽ですよ？」

「いや、別にいいだろ。馬を使うなら近くの村に預ける必要もある。あんまり金は使いたくない」

「では、トブの大森林に行くという事でいいですね？」

「たっちの言葉に二人は賛同する。」

「では、後で私の方からアインザックさんに話を持って行きます。お二人は、行く準備をお願いします」

許可が下りるか分からないが当面の方針が決まった。トブの大森林で薬草を集め金に換える。それが済めば今後のレベリングに必要なマジックアイテムを購入しに行こう。

第27話

アインザックから寄り道をしない事を条件に三人は、一泊二日の予定でトブの大森林に向かう事にした。今回は、冒険者チームである漆黒の剣のウッドワンダーが居ないので薬草採取の効率は落ちるかもしれないが三人には秘密兵器がある。と言うのも三人には、ユグドラシルから受け継ぐアイテム取り出しの力がある。なにもない空間にアイテムを入れておけるコレを利用して乱獲するのだ。

「今日も静かですね」

ペロロンを先頭にウルベルト、たっちの順で森の中を進んで行く。

「前回もそうだったが不気味だよな」

前回、漆黒の剣と一緒に薬草採取に来た時も思ったが森が静か過ぎるのだ。特に今回の場合は、森の周辺でもモンスターに遭遇しなかった。まるでこの森からモンスターが消えてしまったような感覚を覚える。

「昔、この森にはエルフが住んでいたそうです。いつの間にか姿を見せなくなったそうですが」

このトブの大森林には、その昔エルフ達が住んでいたと言われていた。ただ、今やその姿を見た者は居ない。

「なんで居なくなっただらうな？」

「森の主達が追い出したんじゃないですかね？ 噂じゃ南、西、東のそれぞれに主が居るらしいですからね。おかげで森の実情を知っている人は居ないって話ですから」

居なくなつたエルフ達に代わり森を支配しているとされる主達。強大な力を持つ魔獣と言われているがその正体はいまいち分かっていない。そもそも主とか関係なくトブの大森林は危険であり、帰らぬ者は後を絶たない。だからこそ薬草などの資源が豊富なわけだが。

「どうしますか？ 何処まで行きますか？」

注意しながらなので進軍速度は遅いがそれでも深く潜った気がする。

「この辺りの探索はしましたからそろそろ採取を始めましょう。私

は、薬草が分からないので見張りをします」

「たつちは、他の二人と違って戦闘系のスキルなどしか習得していない。なので、見張りを担当する事にする。」

「しっかり頼むよ、たつちさん。ギガントバジリスクとか先に見つけないと全滅するからな」

「回復手段がウルベルトさんだけですからね。よっしゃ！ 今日にはガツポリ稼ぎましょう！」

ウルベルトとペロロンは、目星を付けていた場所から薬草を次々と取っては用意していた籠に入れていく。それが籠いっぱいになれば空間に仕舞い、新しい籠を取り出す。空間の容量はそこまで多くはないが三人分となればそれなりになる。陽が暮れるまで今回は取りまくるつもりだ。

◇◇◇◇◇

トブの大森林で、アウラとマーレはいつも通り仮拠点の建設を行っていた。

(また来ないかなあ……)

アウラは、木の上の方にある枝に腰掛け前に見かけた人間達の事を考えていた。自分達の創造者達と同じ名前を持つ者達。特にその中でもペロロンと呼ばれた者の声はどこか懐かしさすら感じた。もし本物であるのならこそアウラとマーレを創造したぶくぶく茶釜の弟になる。そう考えると本物であってほしいと思う。本物なら姉であるぶくぶく茶釜も居るかもしれないのだから。

「アウラ殿ー！」

アウラの名前を呼びながら南の森を支配していた森の賢王がアウラの下に駆けてくる。その背中には、アウラの弟であるマーレが乗っていた。

「お姉ちゃん。あの人達が来たよ」

「本当に!?!」

マーレの言葉に気持ちが跳ねる。そうになると行動が早い。木の枝

から飛び降り、マーレと森の賢王の傍に着地する。

「アウラ殿のシモベの方々のお話ですと前と同じ場所に居るでござる。某は知らないでござるが」

「使えないわね。賢王なんて名前やめたら？」

「それだと某は名前が無くなってしまいうでござるよ。『森』が名前だとなんだか寂しいでござる」

「今度、アインズ様に聞いてみようよ。ボク達が勝手に付けていいかわからないもん」

「そうね。あたしのペットになっただけど聞いておいた方がいいかもしれないわね。と言うか、こんなの名前なんてどうでもいいの！早く行きましよう。それと、あんたはお留守番ね。デカイ身体だと見つかるかもしれないから」

「分かったでござる。いつてらっしやいでござるよ」

森の賢王に見送られ二人は急いで三人の下へと向かう。と言っても木の上を軽々と飛び移っていくアウラと違いマーレは森の中を走るわけだが。

「先に行くからね」

「わ、わかったよ」

いつもなら待つかシモベの誰かの背中に乗って一緒に移動するが今回は気持ちが悪くはさしてくれない。アウラは、今までにない程の速さで移動していく。

(……居た。あの声だ)

耳にあの時間いた声が届く。胸が痛いぐらいに跳ねる。もうすぐ会える。

「いや、大収穫ですね。薬草の山がお金に見えてきましたよ」

「今回は、分けなくてもいいからな。だけど、一気に金に換えられないのは面倒だな」

「仕方ないですよ。徒歩で来た私達が持てないだけの量を売りに出したらおかしいですからね。様子を見ながら売っていきましよう」

未開の地とされるトブの大森林は、まさに宝の山だ。だからこそ危険だと分かっている足も運ぶ者が後を絶たない。すっかり三人も

その魅力に囚われている。

「あ、あの……」

そんな三人の耳に声が届く。

「……今、なにか聞こえなかったか？」

「ウルベルトさんも聞こえましたか？」

ウルベルトとたつちは周囲を窺う。誰も居ないと思っていたのに聞こえた声。警戒レベルを最大まで上げる。

「待つてください、二人共」

そんな二人とは違いペロロンは落ち着いている。

「警戒の必要はないですよ」

「なんでそう言い切れる？」

「決まっています。聞いたでしょう？ この声は、まさに幼き者が持つロリボイス。敵なわけがありません！」

断言したペロロンに二人は冷ややかな視線を送る。

「これは、おそらくエルフでしょう。居なくなったと言われていたエルフが実はまだ残っていた。それもまだ幼いエルフが。ここは、紳士的にいきましょう」

「エルフなら俺達より年上かもしれないぞ？」

ウルベルトの言葉に対して「それがどうかしましたか？」と一蹴したペロロンはコンタクトをとろうと試みる。

「初めまして、ペロロンと言います。決して怪しい者ではありません。一緒にお喋りしましょう」

何処に居るかも分からない相手に声を掛ける。

「お話しできるんですか？」

今度ははつきりと聞こえた。

「どうする、たつちさん？ あの馬鹿は無視するとして危険じゃないか？」

「そうですね。モンスター罠である可能性もありますからね」

ペロロンと違って二人の警戒心は、声をはつきり聞こえた事により強くなる。未だ分からぬ何者が居ると証明されたからだ。

「俺は、君達の味方だよ。怖くないから出ておい——」

ペロロンの頭をウルベルトが思いつきり叩く。

「馬鹿言ってるじゃねえぞ！ 姿どころか気配すらわからない相手を招いてどうすんだよ！ 罨だったら俺達全滅だぞ！」

「痛いですよ、ウルベルトさん。でも、相手は幼女ですよ。警戒なんて必よ——」

またペロロンは叩かれる。

「えつとですね、姿を現すのは少し待ってください。こちらとしては敵ではありませんが流石に現状を鑑みるに警戒を解くことは出来ません。ここは、対話だけで如何でしょうか？」

たつちは、交渉を試みる。その時、新たな声が聞こえた。

「お、お姉ちゃん。いいの、勝手に話しちゃって」

新しく聞こえた声の持ち主の気配も分からない。姿の見えない相手が二人。敵だとしたら絶望的な状況だ。

「おい、なんか増えたぞ？ どうすんだよ？」

「この声は、シヨタですね。声から察するに姉の尻に敷かれているタイプである可能性があります」

どうでもいいペロロンの考察を二人は受け流す。

「もし何か問題があるようでしたら私達は引き揚げますが？」

たつちの言葉に対して返事がなかなか返ってこない。もしかなくとも二人目と相談でもしているのだろうか。

「あの口ぶりだと他にも居そうぞ？」

勝手に話していいのと言う言葉を二人目は一人目に言った。それから考えるに話してはいけないと決めた者が居るはずだ。そして、それは二人より立場は上。話してはならないという事から考えるとあまり友好的ではない可能性がある。

「ペロロンさん。冗談は抜きにして逃げましょう。私達は、エルフの事をよく知りません。森の主の事もです。もしかすると既に敵の術中にハマっている可能性も考えられます」

洗脳か精神系の魔法。又はそれに類似する物。ユグドラシル以外のこの世界特有の力。考え始めると切りがないほどに危険だ。

「そうですね？ まあ、俺としても二人に危険な思いはさせたくない

ですから。もしもし聞こえますか？ 俺達は一旦帰ります。もし危害を加える気が無いなら見逃して下さい。そしたらまた来ますから」
姿の見えない者達に提案をする。返事はなかなか返ってこなかったが、静かに待っている。返答があった。この時のウルベルトとたちには、とてもではないが生き心地がしなかった。

「また来てくれるなら何もしません。ただ、姿は見せられません。ごめんなさい」

謝られた。どうやら帰れそうだ。油断を誘う罠でなければ。

「ありがとうございます。それでは、失礼します」

「今度は、お土産持って来るね」

警戒しながら撤退する二人をしり目にペロロンは気楽に手を振りながらその場を後にする。

「これでよかったのかな？」

そんな三人をアウラとマーレは姿を隠したまま見送る。

「でも、勝手に人間と接触するのはまずいよ」

「分かってる。分かってるけど……」

アウラだけではない。マーレも心のどこかではモヤモヤして気持ち晴れない。

「今は、また来てくれる事を祈ろうよ。ボクもお話したいから」

「そうね。お話だけなら大丈夫よね。もしダメなら……その時はあかし達が殺しましょう」

それが主の命令を聞かずに行動した最低限の責任の取り方だろう。勝手な行動をとってしまった以上は罰として殺されたとしても文句は言えない。それでも関わりを持ちたいと思える者を殺す方が今は辛い気がする。

第28話

逃げるようにしてエ・ランテルに帰還した三人は、早速薬草を換金した。流石に採取中の籠を持って帰る余裕は無かったので空間に仕舞ってあつた分だけになるがそれでも予定していた半分以上は手に入った。ただ、それでも安物のマジックアイテムを一つ買えるだけの価値を考えるとそれほど欲しい物ではないので購入は保留。アインザックに帰還した事を伝えて今は酒場で打ち上げをしている。

「お疲れさまでした！」

何度目かになる乾杯の音頭をペロロンがとる。

「しかし、無事に帰って来られてよかったな」

「そうですね。最後まで心配すら分かりませんでしたから」

森の外に出ても警戒していたが姿を見る事は無かった。あまりにも不確かな情報なので冒険者組合には報告していないが仮に今度行くとしたら万全の準備が必要だろう。

「ロリとシヨタですよ？ そんなに警戒しなくても大丈夫ですつて」

「意味が分かんねえよ。見た目が幼くても凶悪な相手なんていくらでも居るだろう？ そもそもエルフなら俺達よりも年上の可能性があるわけだしな」

「そもそも声だけで判断できるんですか？ 茶釜さんみたいな例もありますし」

ペロロンの姉であるぶくぶく茶釜は声優をしている。それもペロロンの好みであるロリキャラの声を主に演じている。それもペロ

「だからこそですよ！ 姉ちゃんのおかげで俺のスキルは鍛えられたんです！ 本物か声優かぐらい分かれますー！」

自信満々なペロロンには悪いが二人にはよく分からない世界の話だ。

「でもさ、どうするよ？ アインザックさんの話だと明日か明後日まで話し合うんだろ？ それまでエ・ランテルでただ過ごすのもどうかと思うんだが？」

三人が冒険者組合を訪れた時、調査に行った者達を交えてエ・ラン

テルの有力者達がアインザックと話し合っていた。結果は、国家の危機として取り扱うべきだと判断されているようだ。王都の方には既に早馬を飛ばしているようだがどうなるかはまだ不明だ。

「モモンさん達がまだなようですからね。お二人から話を聞くまでは対策も難しいと思います。精々警戒を強める程度でしょう」

「強めるって言っても難しいですよ？ 不審者を探るか怪しい場所を探るかぐらいですか？ ウルベルトさんの仮面姿とか絶対にアウトですね」

エ・ランテルの人達の中には見慣れた人も居るがそうでない人間からは驚きと共に警戒される。

「世知辛い世の中だよな。別に仮面ぐらいいいじゃねえか。蒼の薔薇のイビルアイさんとか着けてても何も言われないのに」

「アダマンタイト級となれば違うのでしょうね。少なくとも私達とでは、信頼と知名度の点だけでも雲泥の差がありますから」

「早くデカイ手柄でも上げてアダマンタイト級になりたいもんだな。そうすれば、ラキユースさんもきつと俺を認めてくれるだろうし」

「認めるのと好きになるのは一緒じゃないと思いますよ？」

「いいんだよ細かいことは。貴族と平民の壁を壊したい俺の心が分かるんないか？」

「私は、応援しますけど難しそうですね」

ウルベルトの恋物語は始まってすらいない。相手は、貴族で英雄。今のウルベルトからしたら手の届かない相手だ。

「同席してもよろしいですか？」

突然、声を掛けられる。

「ナーベさん？」

三人の下に来た来訪者は、漆黒の戦士であるモモンの唯一の仲間である美姫のナーベだ。ナーベに気づいてから分かったが周囲の視線を集めている。

「かまいませんか？」

一目見た者を魅了するとされる美貌を誇る彼女の言葉。ただ、丁寧ではあるがどこか威圧感がある。

「いいですよ！ どうぞどうぞ！」

「美人が同席とか酒が美味くなるな！」

酒が既に入っているペロロンとウルベルトは、そんな威圧感をまったく気にもせずに上機嫌でナーベを迎え入れる。

「ナーベさんは、なにか頼みますか？」

空いていた席に着いたナーベに訊ねる。

「そうですね……」

ナーベは、テーブルの上にある物を見ていく。

「同じ物をお願いします」

「分かりました。すみません」

たっちがナーベに代わり注文をしていく。ナーベの好みが分からないので少し多めにいろいろと頼む。

「モモンさんはどうしたの？」

「モモンさんは、冒険者組合で話をしています。二人も要らないという事で私はその事を皆さんに伝えに来ました」

「なるほどね。でも、こうして美姫として有名なナーベさんと席を共にできるなんて光栄だな。今度、ルクルットの奴に自慢してやるか」
「誰でしょうかその人物は？」

ナーベから疑いの目で見られる。

「ああ、漆黒の剣つて言うエ・ランテルを拠点にしているチームの冒険者だよ。ナーベさんに興味があるらしい」

「……どのような方でしょうか？」

何かを考えている仕草を経てから訊かれる。まるで尋問をされているような気分だ。

「もしかして、共同で作戦をとれるかどうかの審査だったりします？」

モモンは、たっち達の事を共に戦う仲間と言ったが、もしかするとナーベは反対なのかもしれない。だからこそこうして調べに来たのではないだろうか？

「いえ、そうではありません。ただ……」

ナーベは、慌てて自らの口を手で塞ぐ。

(いけない。話してしまうところだったわ)

どうもペースが乱される。他の人間達と違い何故か嫌悪感が無いこの三人にはスラスラと話してしまいそうになる。

(モモン様の御言葉を思い出しなさい)

ナーベは、主であるモモンの言葉を思い出す。

「いいか、ナーベ。お前は、これから私と共に冒険者をやっていく上で人と関わっていかねければならない。そこで、この前会った三人と関わりを持つことで慣れてもらう。私が冒険者組合で話をしている間に今後の話をしておけ。それと、用事を一つ頼む事にする」

今回のナーベは、モモンから大事な任務を受けている。

(頑張りなさい、ナーベ)

覚悟を決め直してから三人を見据える。

(名前が同じだけのただの人間。恐れる事はない)

下等な人間などに心を乱されるわけにはいかない。誇り高きプレアデスとして対応する。

「実は、皆さんにお話があります。一度、お互いの実力を確認しておいた方がいいとモモンさんが言っておられます。もしよろしければ、一度御一緒して頂けないでしょうか？」

「やっぱり審査じゃねえか」

「信頼ないですね」

ウルベルトとペロロンは、試されることに少々不満があるようだ。遠慮もせずに口に出す。

「そ、そうではありません！ 不満と言う訳では！」

美姫と言われ、物静かなナーベから出た突然の大声に三人を含め、盗み聞きをしていた者達もポカーンとする。

「……すみません。失礼しました」

自らの醜態を理解したからかナーベは俯いてしまった。そのどこか恥じらいのある姿に内心喜んでいる者も居るだろう。少なくともウルベルトの心には響いたようだ。

「俺には、ラキユースさんが居る。俺には、ラキユースさんが居る……」

思わずキュンとした自分を窘めるように何度も繰り返す。傍から

見ればおかしな人に見えるだろう。

「これから共に戦うのでしたら必要な事ですね。ただ、私達は明日か明後日には王都に行くと思えますがいつ頃にしますか？」

「それでしたら、王都からこちらに戻られてからではどうでしょうか？」

持ち直したナーベは、先ほどまでの事が無かったように答える。

「分かりました。早めにこちらに戻る事にします。お二人もそれいいですか？」

「俺は、いいですよ。ただ、一日ください。イビルアイちゃんを口説くにはそれだけあれば十分ですから！」

「俺も一日は欲しいかな。ペロロンさんと違って相手次第だけど。本当にその性格が羨ましくなるよ」

「問題ないそうですので、王都から戻って来た後でお願いします」

「分かりました。モモンさんには、そのようにお伝えしておきます。それでは、失礼します」

「えっ!? 食べてかないの? 頼んだのに?」

ペロロンの言葉で思い出し、店内の方を見る。すると、出来たばかりの料理が運ばれてくるどころだった。

「……それでは、少しだけ頂きます」

改めて座り直すと、ナーベの前に料理とお酒が置かれていく。

「安いですけど美味しいですよ、此処は」

「酒も混ぜ物無しだ」

「お口に合えばいいのですが」

三人に勧められ、お腹は空いていないが手近にあつた焼いた肉の料理に手を伸ばす。ナイフとフォークを巧みに使い、小さく一口だけ口へと運ぶ。その仕草と姿勢の良さに育ちの良さが窺える。これが姫と呼ばれる由縁なのかもしれない。

「……美味しくありません。どこが美味しいのでしょうか？」

場の空気が悪くなる。これには、流星のたつちも苦笑いだ。

「よし! 店を変えよう! お勘定は此処に置いて行くから!」

「そうですね行きましょう! とりあえず! 早く!」

「ごちそうさまでした。ナーベさんも御一緒に」

「どうかしたのですか?」

状況がよく分かっていないナーベの腕を引いて三人は足早に店から出て行く。これでしばらくの間はこの店に顔を出せそうにない。

「申し訳ありません」

店から少し離れた所で理解していなかったナーベに説明をした。

「別に謝らなくてもいいですよ。好みは人それぞれですから」

「そうそう。ナーベさんの場合、単純に舌に合わなかったって思われる程度ですみますって」

「俺が高い店の料理を大して美味しいと思わないのと一緒だから。その逆があるってだけだ」

「ですが……皆さんにご迷惑を……」

ただでさえ美人なナーベは人目を引くのに謝らせていると更に視線を集める。たちが居るにも拘らず完全に悪者に思われている目を向けられている。

「そうだ! セツかくですからナーベさんに合う味を探してみたらどうでしょう? 屋台で少し食べ歩きをしませんか?」

「食べ歩きですか?」

「馴染みが無いかもしれないけど屋台の食べ物を買ってその場で食べるんですよ。コレが美味しいんですよね」

「買って帰るとそうでもないけどな」

戸惑うナーベを連れ、三人はエ・ランテル中の屋台に顔を出す事に決めた。

「定番の焼き串ですね。どうぞ、ナーベさん」

「ありがとうございます」

三人はもとより、屋台の店主をはじめ周囲に居た者達もナーベが焼き串を食べるところに注目する。上品良く串に刺されている肉を食べるだけなのに妙な緊張感がある。

「どうですか?」

ナーベの咀嚼が終わるのを固唾を飲んで見守る。

「美味しいです」

言葉と共に満面の笑顔。これには、店主も周囲に居た人達も大喜びだ。但し、三人を除いて。

（嘘だな）

（嘘ですね）

（妹さんとか居るのかな？）

先ほどの事を思えば演技だと分かる。屋台の店主が嬉しそうに三人にも焼き串をくれるので何も言えないが。

「他のお店にも行きましょう」

こうしてナーベを交えての屋台巡りが行われたのだが、最後まで同じ反応しかなかった。

第29話

冒険者組合で計画を遂行するための話を終えたアインズは、ナザリック地下大墳墓に戻りアルベドから報告を受けながら執務を行っていた。アルベドがナザリック内の事を。デミウルゴスが外の事を。パンドラがカルネ村とアインズの補佐をしてくれているので大分やる事がなくなっただけになった。おかげで舞台を整える準備に集中できると言うものだ。

「——となります」

「そうか。ご苦労だったな」

エ・ランテルから戻って来たナーベラルの報告を受ける。問題なく……とは言えないが、任せていた任務はやり遂げたようだ。ただの伝言役だが。

「それで、どうだった？ 食べ歩きの方は？ 遠慮はせずに思った事を言ってみろ」

「あの程度の物をありがたがるのは愚かであると思いました」

食べた事は無いがナザリックの料理は美味いらしい。料理をするのにもスキルが必要になるがその影響なのだろう。

「ただ……」

「ただ、なんだ？ ナーベラルが思った事を言ってみろ」

ナーベラルの表情に困惑の色が見える。言おうか悩んでいるようだが、主であるアインズの言葉に躊躇いながらも口を開く。

「初めて食べ歩きを行いました。悪くはなかったと……思いました」
「つまり、楽しかったと？」

「……はい」

人間を虫けら程度に思っているナーベラルにとっては不思議な体験だったのだろう。人間と一人で行動を共にした訳だが、そこに正の感情とも言えるものがあった。自分の中に生まれた感情をどう判断すべきか悩んでいると見える。

「わかった。今度もまた頼む」

「御方のお望みのままに」

ナーベラルは、頭を垂れると執務室から出て行く。

「アインズ様の御考えに水を差す気はありませんが本当に必要なのでしょうか？ わざわざ人に合わせる事などは私共には要らぬことと思います」

「力で従わせればいいと？」

傍に控えるアルベドをはじめその考えを持つ者はナザリックには少くない。否、ほぼ全員と言っていい。

「必要とあれば力を使う事になるだろう。だが、魔法などは解かれる場合がある。今、パンドラやデミウルゴスが行っているような懐柔なども限度はあるだろう。既に我々に対抗できる力を持つ者達の存在を把握する事が出来た。この優位性を捨てる必要などはあるか？」

「申し訳ありません。出過ぎた真似を」

「かまわん。これからも何かあれば口を出せ。私の言葉だけを全てだと思ふ者を傍に置いておく気はない。それだけは忘れるな」

アルベドもそうだが頭の良さでは競う事すらできない。所詮は、ただの人間だったアインズでは知恵者に勝つ術はない。だが、今はそれを超える必要がある。仲間を迎え入れる為に。

「しかし、食べ歩きか……」

人が面倒な事をやっている間に三人と食べ歩き。羨ましいよなあ。ズルいよなあ。そりや楽しいに決まってるよね。たちちさんやペロロンさんやウルベルトさんと遊んだからさ。でも、俺は食事が食べられないんだよなあ。もう人間になっちゃおうかなあ。嫉妬と切望で気が狂いそうになる。

「アインズ様」

「ん？ なんだ、アルベド？」

「アインズ様の御傍に居る為に一つ御提案をさせて頂いてもよろしいでしょうか？」

「よろしい、許す。これからも遠慮なく考えを私に言え」

「ありがとうございます、アインズ様。それでは、御提案なのですが今度行う予定である人間達との共闘演習を是非私達にもお見せ頂けないでしょうか？」

「共同演習をか？」

「はい。現在、アインズ様の御命令通り私を含め守護者達は、連携の大切さを学んでいるところです。そこで一度だけでも人間達の戦いを学ぶ機会をお与えしてほしいのです」

アルベドの言う事には一理ある。守護者達に強敵との戦いを想定して連携での戦いを学ばせているが結果は今一つ。そもそも連携が必要な場面に遭遇した事が無い以上は感覚が上手くつかめないのだろう。そう考えるとたっちさん達の戦い方は一見の価値があるのかもしれない。だが……話はそう簡単ではない。ナーベラルからナザリックの者達にもたらされた情報は今や皆知る事となっている。今更制限を掛けても逆に怪しいだけなので放置しているが見せるとなると……どうなのだろうか？

「見てみたいか？」

「連携の参考もそうですが、至高の御方々と同じ名前を持つ人間に興味を持っている者は少なくありません。一度見れば気が済むと思われれます」

「ふむ……」

セバスは、ソリユシャンと共に未だ囹として外で活動している。囹である以上、三人の情報を含めこちらの情報を与えていないので来ることはないだろう。デミウルゴスは、今はナザリックに居る事が多いが忙しいことには変わりない。ただ、ウルベルトの事になれば他よりも優先して見に来る可能性が高い。シャルティアは、ナザリックで待機しているために必ず見るだろう。どうせなら不穏な行動をとられる前に先に手を打っておくのも悪くないか。

「許可を出そう。但し、あくまでも支障のない範囲で参加させろ。名前が同じだけで別人なのだからな」

「私の提案を受けて頂きありがたき幸せ。早速、調整に入らせて頂きます」

「頼んだぞ」

後でパンドラに相談しよう。何かあった時に上手くフォローをしてもらわないと困る。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

アインザックから渡された密書を持って王都まで三人はやって来た。王都の冒険者組合に密書を渡し、モモン達と共にミスリル級の冒険者になった事を伝える。疑問は持たれたが今はそれどころではないという事で昇級の件は保留。時期を見て指定した依頼を受ける形をとる事になった。

「もうミスリルかあつという間だったな！ 今日、祝い酒でもするか！」

話を聞いた蒼の薔薇のガガーランが自分の事のように喜んでくれる。

「ありがとうございます、ガガーランさん」

「ただ、残念だがウチのリーダーは参加できない。もしあれなら俺が相手をしてやるがどうする、ウルベルト？」

「遠慮しておきます」

ラクユースが用事で出かけていると聞きウルベルトはテーブルに項垂れるように倒れ伏している。木製の山羊の仮面を被っているローブ姿なので事情を知らない者は何事かと視線が集まる。

「イビルアイちゃん！ 俺、ミスリルになったよ！ これも全ては愛がなせる奇跡だと思わない？ それとコレ、お土産だよ！」

「寄るな、変態！」

「御褒美です！ ありがとうございます！」

土産で買って来た動物の木彫りの置物を渡すついでに触ろうとしているペロロンをイビルアイは足蹴りしている。蹴れば蹴るほどにテンションが上がる姿は、ウルベルトとは別の意味で視線を集める。「しかし、ここ最近はいろいろとあるな。お前達もそうだし、モモンとナーベとか言う実力者が現れる。ズーラーノーンが動いている上に盟主のご登場か。バランスは良いが、お前達が呼び込んだんじゃないだろうな？」

「無いとは思いますが……自信はないです」

「おいおい冗談だつて。真面目に受けんなよ。まったく、なんでたちみたいなのがこの二人と居るのか不思議で仕方ないぜえ」

「私にとつては、大事な仲間です。楽しいですし、頼もしいですよ…」
そう言われて視線を二人に送る。

「これが運命だとしても言うのだろうか。ああ、神よ……哀れな子羊に慈悲をお与えください」

「離れろっ！ このっ！ どこ触つてんだっ！」

「照れなくても大丈夫だよ」

「……良い仲間を紹介してやるぞ？」

「大丈夫です。いつも通りですから」

平然と紅茶を飲んでいる姿を見るとたちももしかしたらそっち側の人間なのかもしれない。

「それにしてもガゼフのおっさんが探していたブレイン・アングラウスがここで見つかるとはな。それも、たちと戦いたいなんておっさんに伝えたらどんな表情をするか楽しみだ」

「戦士長様が探していたんですか？」

「王国は、帝国や法国に比べて弱いからな。少しでも戦力は欲しいだろう？ ずっと探してたみたいだぞ」

確かにアングラウスは強者である。言い方は悪いが、危険に満ちる今の世の中だと実力があれば犯罪者であつても重宝される。上には立てないだろうが、ガゼフの監視の下に傍に置いておくことぐらいなら今でもできるだろう。

「でも、決闘をするなら俺も見たいな。なあ、たち。もし決闘する時があつたら俺が立会人をしてやるから呼んでくれよな？」

「ガガーランさんならこちらからお願いしたい限りです。あちらの許しがあればお願いします」

「あつちから言ってきたんだから聞く必要はねえよ。それじゃあちよつくらおっさんの所に行つてくるわ。イビルアイ、三人の相手をよろしくなー！」

「待て、ガガーラン！ 私を一人にする気か!？」

「じゃあな、頑張れよ」

大袈裟に手を振りながらガガーランはイビルアイを一人置いていく。

「たっちさん、ウルベルトさん！ 此処は、俺に任せて下さい！」

イビルアイに抱きつくように縋りついているペロロンは、まるでこの場を死守するかのような覚悟を決めた顔で言つてのける。

「頼むから私をこの変態と一人にしないでくれ！」

「どうしたらいいと思います、ウルベルトさん？」

「知らん。もうどうでもいい」

アダマンタイト級と瞬く間にミスリル級にまでなった者達の揉め事に首を突っ込もうと思う者は居ない。ガガーランが戻るまでこの状況は続く事だろう。

第30話

「なんで、なんで、私を一人にしたんだよお……ガガーランのバカあ……」

「よしよし。悪かったって」

冒険者組合に戻って来たガガーランは、建物に入るなり泣きながら抱きついて来たイビルアイを優しく慰める。仮面で素顔は見えないが泣いているようだ。

「……これは、いったい？」

ガガーランから話を聞いて、たち達と話をしについて来たガゼフの目に鼻から血を流し白目をむくペロロンの姿があつた。近くにあつたテーブルを壊し、その上で意識が無いほどの重症であるはずのペロロンは、なぜか幸せそうな表情をしている。

「おい、たち。なにがあつたか話してもらえるよな？ ウチのイビルアイを泣かせた以上はこつちも黙っているわけにはいかねえぞ？」

大事な仲間を泣かせた事に対してガガーランは怒りを隠す気はない。ジツと、たちの事を睨みつける。

「申し訳ありません。全てこちらが悪いです」

たちは、意識の無いペロロンに代わり謝罪する。事の顛末はこうだ。ガガーランが居なくなつた後もペロロンはイビルアイに対してしつこく接した。その結果、小さな身体のどこにそんな力があるかは分からないがイビルアイが本気でペロロンを殴つた。それは見事な放物線を描き後方にあつたテーブルへと沈む事となつた。

「……死んでないよな？」

「息はあります。本当ならウルベルトさんに治療をしてもらいたいのですが、ヤケ酒を飲みに行つてしまつて」

「まったくしょうがない者達だな。話があつたので来たのだが、とりあえず私の屋敷までペロロンを連れて行く。治療は、私の知り合いに頼んでみよう」

「本当にすみません」

周りからの冷ややかな視線と同情の視線が混じる中、ペロロンをガゼフと共にたつちは担いで組合から出て行く。流石にイビルアイは参加しないようで、ガガーランが蒼の薔薇が拠点として使っている宿屋まで送る事となった。

「いや、いいパンチをもらいましたね！」

ガゼフの知り合いに治療をしてもらい傷の治ったペロロンは、何事もなかったように振る舞われた酒に手を出している。ガゼフの所で使用人として働いている老夫婦が作ってくれる料理はどれも温かい物ばかりだ。

「死に掛けたのに懲りないな、お前は」

これには、怒りを通り越して呆れるしかない。仮にもイビルアイは、国墮としとまで言われた伝説の吸血鬼だ。見た目は小さいがその力は人間とは違う。それなのにこうして恐怖心などを抱かずに平然としているのは尊敬に値する事だろう。

「愛故にですー！」

呆れすぎたため息が出る。やっぱり尊敬できない。

「たつち殿。ペロロンを私に預けてみないか？ 新兵達と共に鍛錬を受ければ少しは実力に相応しい人柄になると思うのだが？」

「たぶん何をしても変わらないと思いますよ？ 昔から変わらない人ですから」

「今、王国は未曾有の危機にあると言うのに……」

国を思う者としては頭が痛い。英雄になれるかもしれない器があると言うのに。

「それで、戦士長様。話とはなんなのですか？」

「ああ、そうだったな。ガガーランから話は聞いた。先ずは、ミスリル級になった事を心から祝福させてくれ。たつち殿のような御仁が居てくれて誇りに思う」

「戦士長様。俺とウルベルトさんも居ますよ？」

「ペロロン。お前は、大人しくしておけ」

ガガーランが黙らすためにペロロンの頭を抑える。

「私は、ズーラーノーンの事はよくは分からない。だからそちらは、上

の判断に任せようと思う。ただ、アングラウスの事はよく知っているつもりだ。私は、あれだけの剣の使い手を他には知らない。いや、今ではたっち殿もそうだな。既に知っていると思うがこの国はとても弱い。だからこの国の為にもアングラウスもたっち殿も欠けてはいけないと私は思う。もし決闘を行うのであるならば私も立ち会わせてはくれないだろうか？ 戦う前に一度アングラウスと話をしたいのだ。頼む、たっち殿」

ガゼフは頭を下げる。立場を考えれば人目が無いにしてもあつてはならない事だ。

「頭を上げて下さい。いつ挑まれるか分かりませんが話はしてみます」

「ありがとう、たっち殿。心より感謝する」

「いえ、ペロロンさんを助けてもらいましたから。それに国を思うのは私も同じです」

国と、そこに住まう人と思う二人の姿は多くの者を引き寄せることだろう。

「なあ、ペロロン。お前も少しは見習ったらどうだ？」

「無理をしても良い事ないですから。人それぞれですよ、生き方なんでものは。俺がたっちさんみたいになれると思います？ 英雄らしい生き方を出来るか？」

「無理だな」

「でしよー。三日で限界が来ますよ。それより飲みましょう。家庭的な料理なんて珍しいんですから」

店か野営での食事ばかりなので家庭的な料理は珍しい。宿の無い村に寄った時に村長の家などに泊めてもらった時以来だ。

「それでもう一つ聞きたいのだが、いいか？ 話しただけでしか聞かないから分からないのだがモモンやナーベと名乗る者達の実力はどんなものなのだろうか？ スーラーノーンと言えば、国が対応するような相手だ。それをたった二人で追うなどとは相当のものだと思うのだが？」

「俺もそこは疑問だな。俺達だってスーラーノーンの高弟となれば簡

単に勝てる相手じゃねえ。そこんところはどうかなんだ、たちち?」

「強いですよ。ナーベさんが戦っているところを見た事はありませんが、モモンさんの実力は本物でした。戦士長様には悪いですけど、身体能力だけで見れば圧倒的にあちらが勝っていると思います」

大剣を片腕で軽々と振るう剛腕。全身鎧を着ているにも拘わらずそれを感じさせない速さ。どれもが異常だった。あの理不尽な力の前では、小手先の技では通用しないだろう。

「剣を交えてのものだ。信用しよう。剣を持つ者としては複雑な気分だが、味方に居てくれるのなら嬉しい限りだ」

「そう言って、内心は穏やかじゃないんじゃないのか? 目の色が変わったように見えるぞ、おっさん」

「お前もそうだろう? 全力で戦える相手が居る。そう思うと剣を交えてみたいと思うのは仕方がない事だろう?」

ガゼフの言葉にたちちもガガーランも賛同する。戦う者としての性か? 強者がそこに居ると思うと嬉しくなるのは同じなようだ。

◇◇◇◇◇

王都の中でも治安の悪い部類に入る地域でウルベルトはヤケ酒を飲んでいた。

「旦那、そこまでにしといたらどうですか?」

「うるせえな。金出すから酒を出せ」

「はいはい」

渋々新しい酒を店主は出す。

「女なんて星の数ほど居ますよ。そもそも今の世の中じゃ貴族を平民が娶るなんて無理がありますよ。逆なら困うぐらいだと思いますがね」

「んなもん言われなくても分かってるよ」

王国は、未だに身分が全ての場所だ。平民と貴族は違う。ラキュースとの間にある壁はあまりにも巨大だ。

「でもさ、他に居ないだろ? 見た目だけじゃねえ、中身が最高なんだ

よ。命の危険を冒してまで誰かの為に戦えるか？ ラキユースさんは、本気でこの理不尽な世の中を少しでも良くしようとして戦ってた。俺の憧れだよ」

「そうですね。蒼の薔薇と言えば、王国の守護者なんて言われていますから。でも、無理なもんは無理と諦めた方が賢明ですよ。無理な恋より他のなんてどうですか？ 知ってます？ 昨日、王都にとびっきりの美人が来たらしいんですよ。なんでも、あのラナー王女にも負けないとか。街の男共は、こぞって見に行ってるらしいですよ」

「ラナー王女ね……」

黄金の二つ名を持つ第三王女。その容姿は他国に知れ渡るほどだとか。ラキユースの友人でもあるらしく、今日のように用事を頼まれたりするらしい。

「性格は悪いらしいですが、商家の娘ならまだ可能性はあるんじゃないですか？」

「中身が悪いんだろ？ だったらいいよ、別に」

「そうなると物に頼るしかありませんよ。聞いた事ありませんか？ ライラの粉末から作られた媚薬の話。噂だと、お偉い方々の間で流行っているらしいですよ。使えば、どんな女でも思いのままだとか」

店主は、ウルベルトだけに聞こえるように話す。此処は、表の者は来ないような場所だ。それでもこの対応をしなければいけない物なのか。

「ライラの粉末って言えば、麻薬だよな確か？」

ライラの粉末は、見た目が黒く通称黒粉とも呼ばれている。通常の物よりも強力な麻薬であり、一度でも手を出せば終わりだと言われている。そのため現在の王国では厳しく取り締まりを行っている。

「それが最近また出回り始めたんですよ。どうやらそっちの方と話がついたようです」

「どこも変わらないな。正義を私利私欲を満たす道具に使うのは」

「ラキユースさんみたいな貴族は珍しいからですね、本当に。ただ気をつけた方がいいですよ、旦那。これも噂ですが、蒼の薔薇はこの件に絡んでいるそうです。なんでもラナー王女から依頼を受けたらし

くて」

「ここのところ忙しそうにしているのはその為か。いくら王女からの依頼でも随分と面倒な事に首を突っ込んでいるようだ。」

「今日はここまでしておくわ。また何かあったら頼む」

懐から金貨を取り出しテーブルに置く。

「旦那は払いがいいから好きですよ。例の件はまだ何もありませんが、他に面白い話があったらまた話しますよ」

「期待してるよ」

ウルベルトは、周囲を確認してから店を離れる。この店は、表はただの酒場だが情報屋を兼業している。金さえ払えば、無所属の中では腕利きと聞く。三人を代表してウルベルトが情報を集めているのだが未だに此処にきた方法などが分からない。

(潜ってみるかな)

これ以上となると組織的な力が必要となって来る。ウルベルト達にそのあてがない以上は深く潜る必要があるのかもしれない。

第31話

王国と帝国との国境の境にはカツツエ平野と呼ばれる場所がある。度々、王国と帝国との戦いの時に戦場となるこの場所には不思議な事に戦争の時だけ晴れる霧が立ち込めている。普段はその霧が陽の光を遮り、見捨てられた死者の身体と彷徨う魂からアンデッドの生息地となっている。

「皆さん、本日は共同作戦に御参加頂きありがとうございます。本日は、御日柄も良く絶好の戦日和だと思われませう」

モモンがたち達を前に話し始める。それに合わせるように傍に控えるように立っているナーベが拍手などを行っている。

「やり方は簡単。まずは、私とナーベが戦います。そして、合図をこちらが出しましたら入れ替わりで皆さんが。そして、最後に私が皆さんと加わる形となります」

「ナーベさんは、参加しないのですか？」

「実は、ナーベは私以外とは経験がありませんので今回は見学という形をとらせて頂きました。しっかり見ておくのだぞ、ナーベ」

「はい。皆様の御活躍をしかとこの目で見させて頂きます」

「モモンさん以外と経験が無いってなんだかエロいですね」

「黙ってる、ペロロン」

緊張感のまったくないペロロンに視線が集まるが本人は全然気にしない。

「私は、監督役なので特になにかを言う気などは無いが一つだけ言わせてもらってもいいかな？」

咳を一つして、少し離れた所に居たアインザックが自分の存在をアピールする。

「どうぞ、アインザック殿」

「では、失礼して。君達も知っていると思う……というか、見て分かると思う。今朝方、冒険者組合に飛び込みの依頼があった。カツツエ平野でアンデッドが大量発生していると。そして、そのアンデッドの軍勢がエ・ランテルに向かっていていると」

「そうですね。今もこちらに向かつて来ています」

カツツエ平野とエ・ランテルの中間に居る訳だが丁度面前にそれらは居る。視界に納まらないぐらいの数。目測だが優に数百は超えているだろう。主なモンスターは、スケルトンやゾンビのようだが奥の方は見えないのではつきりとは言えない。

「スケルトンやゾンビは今の君達なら相手ではないかもしれない。だが、世の中には多勢に無勢という言葉もある。必ずしも勝てるとは限らんのだ」

「そうですね。私もそう思います」

あまりにも素っ気ないモモンの言葉に怒る気にもなれない。普通は、アンデツドの軍勢相手に五人で挑もうとは思わない。相手は、動けなくなるまで戦う亡者なのだ。少しは躊躇いがあってもいいのではないか？

「君達が共同作戦の練習に使いたいと言うから任せるが、くれぐれも真面目にやるように。先ほどから君達からはまったく緊張感を感じられない。これは遊びではなく命を懸けた戦いだ。それを忘れないでほしい」

「分かっています、アインザックさん。その為に用意もしましたから」
「たっちは、アインザックから貰ったミスリル加工されている剣とは別に鋼鉄製の片手で扱える戦槌を手に握っている。」

「俺ですよ」

ペロロンは、通常の弓や矢ではアンデツドにあまり有効ではないので、今回はたっちの補佐として小さな木の盾とスパイク付きのクラブを持っていく。他にも武器に神聖属性を付与させるための聖水も多めに所持している。効果は弱いがそれでも無いよりはマシである。

「俺は、コレさえあれば万全だ」

ウルベルトは、いつもの木製の山羊の仮面を着けている。なんだか怪しい仮面を身に着けているウルベルトがこの軍勢の黒幕に思える。「わかった。もう私からは何も言わない。打ち合わせ通り邪魔にならないようにしているが、何かあれば私はエ・ランテルに戻り準備をする事にする。アレが陽動である可能性もあるからな。君達が此処で

危険に晒されたとしても助けないと思ってくれ」

アインザックは、共に来ていた者達の方へと行くと乗って来た馬に跨り邪魔にならない所まで移動する。

「でも、なんだかイベントみたいですね。アンデッドの軍勢に襲われる街を助けるって。勝った暁には、女の子にモテモテですよね?」

「知るかよ。それより準備はいいのか?」

「俺はいつでも行けます。たちさんは?」

「私も大丈夫です」

未だ行進を止めないアンデッドの軍勢を前にしても三人は普段と変わらずに過ごしている。

「頼もしい限りだ。それでは、こちらも準備に入ろうか」

モモンは、ナーベに向かつて言葉を放つがそれは別の所に居る者へと向けられる。予め《メッセージ》の魔法で繋げておいた相手に。

◇◇◇◇◇

ナザリツク地下大墳墓では、ちよつとした騒ぎになっていた。執務室にて、遠隔視の鏡を使い噂の人間達を見る事が出来る日だからだ。もつともこれはあくまでも守護者達が連携を学ぶための一環なので必然的に見る者は選ばれる。それでも気になって仕方がない者達は執務室の前に押しかけている。

「今日はお願ひね、コキュートス。貴方の方が私よりも見る目があるのだから」

「ウム、任サレタ。シカト、見極メヨウ」

アルベドは、コキュートスに人間達の力量と戦い方をコキュートスに判断してもらおう事にした。アルベドも戦士としての目を持っているがコキュートスと比べると劣るためだ。

「まったく困ったものでありませんね。たかが名前が同じだけで騒ぐなんて。アインズ様が仰っていたのでありませんしょう? 名前だけで別人だと。それなのに馬鹿みたいに騒いで、アインズ様に仕える者として如何なものかえ? だいたい——」

「シャルティア。申し訳ないが落ち着いてもらえるかな？ 先ほどもら手に持っているカップから零れているんだが」

平静を装っているシャルティアの手はガクガクと震え、手に持っているカップから紅茶があちこちに飛び散っている。隣に座っていたデミウルゴスにも多少なりとも被害が出るほどに。

「ねえー、まだなのパンドラ！ 早く見せて！」

「落ち着いて、お姉ちゃん。パンドラさんの邪魔になるよ」

「少々お待ちを。すぐに合ませますので」

早く見たいアウラをマールレが宥めようとしている。そんな二人を横目にパンドラは遠見の鏡を操作し舞台を映す。

「それでは、観戦を始める前にお配りした物を御覧ください」

パンドラの指示の下に各々は事前に配られていた物を見る。

「それは、アインズ様監修で作られた戦術マニュアルになります。私達はコレを元に今まで連携の大切さを学んできましたが結果は今一つ。そこで、守護者統括であらせられるアルベド様からアインズ様に提案がありました。そして、今日を迎えたわけですがあくまでも連携を学ぶ一環である事をお忘れなく。雑念があつてはせつかくの機会も台無しですからね」

浮足立っている者達を窺める。あくまでも彼らは別人なのだ。

「それでは、内容を説明させて頂きます。今回の相手に御用意しましたのは、各種武装したスケルトン四百体。ゾンビ二百体となっております」

「コキュートス。戦力的にはどうなのかしら？」

「アインズ様、ナーベラルヲ考慮シナケレバ絶望的デハアル。見タトコロダメージヲ完全ニ防グコトハ出来ナイ。回復手段ガ無クナレバ死ヌダロウ」

「しかし、アインズ様はこの戦力で問題ないと御判断なさったのですよね？」

「はい、デミウルゴス様。アインズ様は、こう仰っていました。連携を駆使すれば、この程度の戦力差なら問題なく覆せると。仮にそれが出来ないようであるのならば参考にはならないとも仰っていました」

「パンドラ。もっと大きくできないの？ さつきから小さすぎて全然見えないんだけど。それに音が聞こえないんだけど」

戦場全体を映し出して説明していたのでそれぞれが動く点のように見える。

「アインズ様の合図がありましたのですぐに合わせます。それでは、共に見るとしましょう。アインズ様。こちらの準備は出来ました」

今度は、パンドラから戦場に居るモモンに《メッセージ》の魔法で連絡が行く。

「それでは、私とナーベが先に行きます。ナーベ、ついて来い」

「はい。モモンさん」

モモンは、ナーベを連れてアンデッドの軍勢へと赴く。その足取りは普段と変わらない。

「どんなもんなんですかね？」

「見れば分かるだろ？ 俺としては、ナーベさんの方が気になるな。本当に第三位階までなのか気になるところだ」

「誰かみたいに隠しているかもしれないですからね。切り札として」
「魔法は対策がとれるからな」

三人は、合図が来たらいつでも動けるように待機しつつも二人の動きを観察する。

(なんだか緊張する)

今、後ろにはかつての仲間達が居る。特に気になるのは、たっちの前で剣を振るう事だ。前に戦ってはいるが今回はじっくりと観察される。模範としていたたっちに見られると思うとそれだけで緊張が高まる。それに今頃は、ナザリツクから守護者達も見えている事だろう。

「ナーベ、支援を行え」

「はい、モモンさん」

大剣を両手に持ち、構える。相手は、動きの遅いスケルトンとゾンビ。レベル差、装備、スキルを考えるとどうやっても負けるはずのない相手だ。それでも今回は気合を入れる必要がある。

「道を作れ」

モモンの命令を受け、ナーベはアンデッドの軍勢に手をかざし放つ。

「《ライトニング》」

第三位階の魔法。才能のある者が一生を掛けて得るとされる魔法を若くしてナーベは行使する。

「行くか」

直線状に貫通するように放たれた雷撃によって開いた軍勢の穴にモモンは躊躇いもなく突入し、その剛腕で振るう二本の大剣が暴風の如くアンデッドを蹴散らしていく。その姿は異常な程に他を圧倒。まるでアンデッド達が砂塵であったかのように瞬く間に漆黒の暴風により軽々と散っていく。たった一つの動作で何体のアンデッドが再び死の眠りに戻るのか。

「もうモモンさん一人でいいんじゃないかな？」

止まらずに動き続けるモモンに合わせるようにナーベもライトニングを放っているがそれらも必要ではないと見える。それだけモモンの実力はでたらめなのだ。

「行くか？ 合図はまだないがこのままだと見せ場がなくなる」

「それは、どうなんでしょうか？」

「俺は、ウルベルトさんに賛成です！ せっかく準備したのにこのままだとカッコ悪いですよ！」

今こうしている間にもアンデッド達は土へと還っていく。このままだと本当に終わりそうだな。

「分かりました。行きましょう」

「よし、決まった。《サモン・デーモン》」

ウルベルトは、使い魔としてインプを五体召喚する。歪んだ笑みを浮かべた赤ん坊に羽の生えた悪魔が召喚に応じて現れる。

「お前達は、敵の邪魔をするだけでいい。知恵の無い亡者なら容易いだろう。精々邪魔をして、盾となり死ね。いいな？」

人の声とは違う気味の悪い声で答えるとアンデッドの軍勢の方へと飛んでいく。

「ペロロンさん。後ろを頼みます」

「任せて下さい。弓だけじゃないってところをお見せしますよ！」

たっちは、ペロロンを連れてアンデッド達の下へと駆けだす。途中、ナーベとすれ違う訳だが特に何も言われずにこちらを見たナーベと目が合う。

「勝手に動いて怒っていたりしませんかね？」

「手柄を独り占めする方が悪いってことでいいじゃないですか」

たっちは、今も尚戦い続けるモモンを明確に捉えられる距離まで近づく。

「すみません、モモンさん！」

謝ってから勢いそのままにアンデッド達の中に飛び込む。盾で相手を抑え、戦槌で相手の頭部から叩き潰していく。その勢いは、モモンほどではないが止まる気配がない。

「手柄を独り占めはズルって事でよろしく！」

その後をペロロンが追撃する。行うのは、たっちの攻撃で仕留めきれなかった者の処理。スパイク付きのクラブで倒れ伏した者を叩き潰し、たっちの死角から来る敵の攻撃をウルベルトが召喚したインプ達と共に盾で防ぐ。

「仕方がないですね」

モモンは、二人を一瞥して面前の敵に向き直る。すると、上空から瓶に入った聖水が幾つも落ちてくる。

「今日は、大盤振る舞いで行きますよ！」

それは、ペロロンがばら撒いたものだ。それを、たっちもモモンも分かっていたかのように各々の武器で叩き割る。すると、聖水を浴びたアンデッド達は浄化の痛みからか動きが悪くなる。その隙に聖水により神聖属性を得た武器で追撃をしていく。動きが止まっていた者達を蹴散らすのは難しくない。モモンは、その剛腕で。たっちは、《強撃》のスキルを上乗せして勢いをつけて前進する。

「こっちも行くとするか。ナーベさんは、『フライ』は使えるか？」

「使えます」

「だったら空から行くとしよう。俺が吹き飛ばすから残りを撃ち抜いてくれよな」

ウルベルトとナーベは、互いに《フライ》の魔法を使い上空へと浮かび上がる。但し、相手に弓兵が居ることは先ほどから敵陣に乗り込んだ三人に降り注ぐ矢から見て分かる。大した威力は無いが危険ではあるので高く飛び過ぎないように気を付けながら接近する。

「《ファイヤーボール》」

「《ライトニング》」

ウルベルトが放った火球に直撃した者は焼け焦げ、周囲の者はその爆風で動きが僅かに止まる。そこをナーベが正確に貫通する雷撃で撃ち抜いて行く。三人から離れている場所から削るように確実にそれらを行っていく。

「やりますね、モモンさん！ いい感じですよ！」

「ありがとうございます。お二人も素晴らしいですよ」

「これなら問題なさそうですね」

三人の動きは面白いぐらいに同調している。一撃のあるモモンをメインとした布陣を構築し、たちが敵の攻撃を抑えながら反撃。ペロロンはそんな二人の補佐に回り、飛んでくる矢や殺し損なった者達をインプと共に処理していく。

（今、俺はアインズ・ウール・ゴウンの仲間達と戦っているんだ）

夢にまで見ていた光景が此処にある。漆黒の戦士の参考にしたたちと背中を預けて剣を振るえている。ペロロンは、こちらが気づいていない部分を的確に埋めてくれる。近くにウルベルトの姿は無いが、使い魔のインプが殺される度に補充されては敵を邪魔して戦いやすくなっている。遠くで敵を排除しながらもこちらの支援をできるように把握しているのだろう。

（楽しいなあ……）

戦いやすい。少し共にしただけで互いの穴を埋める事が出来ている。他を気にせずに剣を振るう事が出来る。面前の敵だけを相手にしていればそれだけで全てが終わる。完成されたものがそこにある。仲間達と共に築き上げた場所が此処にある。

「……終わりのようですね」

最後の一体を切り倒す。名残惜しいがしないわけにもいかない。

「終わりましたね」

「疲れたあく。敵、多過ぎでしょう」

周囲には骨やら死体やらが散乱している。鼻につく腐臭が嫌になるが達成感はある。

「ナーベさんと周囲を確認したがもう居ない。治療は必要か？」

安全の為に周囲の確認をしていたウルベルトとナーベが三人の下に来る。

「少しだけですがお願いします」

「俺も頼みます」

「意外と少ないな」

あれだけの相手と戦いそれほどダメージを負ってはいない。ウルベルトは、《ライト・ヒーリング》で二人の治療を行う。

「モモンさんは大丈夫か？」

「私は、皆さんのおかげで怪我はしていないので大丈夫です」

「化けもんだな。見てたけど二人が完全に補佐に回るとは思ってたなかった」

「いえいえ、皆さんのおかげですよ。とても戦いやすかったです」

「そうですね。私も戦いやすかったですよ。なんだか昔からの知り合いのように上手く行きました」

「ですね。やっぱり戦い慣れしていると合わせるのも上手いんですね」

言いたい。物凄く言いたい。私は、モモンガです。アインズ・ウル・ゴウンのモモンガですよ。皆さんの動きは頭の中に入っています。どう動くかも予想できるぐらいに。初めて戦士として一緒に戦いましたけどそれでも合わせられるぐらいにこの時を待っていたんだと言いたい。

「お見事。いやはや意外と早く終わったものだな」

馬に乗りながらアインザックが見物していた他の者達と共にやって来る。

「倒せるとは思っていたが鮮やかなものだ。もしあれなら君達で冒険者チームを組んでも良いぐらいに見えたよ」

「私達で冒険者チームを？」

モモンの心が大きく揺らぐ。それが出来たらどれだけいいか。

「申し訳ありません。私達は、三人だけでいいです。今は三人だけですけど先約がありますので」

「可愛い女の子でもこれだけはダメなんですよ」

「いや、女とか関係なく断れよ。」

そんなモモンの気持ちを知らない三人はそれを断る。

「そうか。それは、残念だな。君達なら上手くやれると思ったんだが」
「先約があるのなら仕方がないですね」

その先約がアインズ・ウール・ゴウンの事だと分かってはいる。いるけど、嬉しいけど、出来れば組みたい。

「それでは、私は先に戻る。問題ないと伝えなければいけないのでな。行くぞ」

アインザックは、供を連れ先にエ・ランテルへと戻っていく。

「じゃあ、俺達も帰りましょうか。ぱあーつと、打ち上げしましょうよ、ぱあーつと」

「費用は掛かったが元は取れそうだしな」

「どうですか、モモンさん、ナーベさん？」

行きたい。行きたいけど今の姿だと飲み食いできない。美味いだろうなこの後の酒とかご飯とか。

「申し訳ありません。実は、私は宗教上の理由で、戦いで命を奪った日は一人で食事をとらないといけないんです」

「そうなんですか。なんだか大変そうですね」

「ええ、本当に」

なにか方法はないのか？ そうでないところの誘惑にいつか負けてしまいそうだ。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「どうやら終わったようですね」

戦いを見ていた執務室では、終わった後も静かで動きはなかなか起

きなかつた。

「それでどうなのかしら？ 勝ったようだけど相手が弱すぎて参考になるか微妙なのだけど？」

「ソウダナ。予定ト動キモ違ウ。アインズ様ヲ主体ニ組ミ込ミ行ワレタ戦イダ。参考ニスルニハ少々物足りナイ。ダガ……」

どう答えるべきか、コキュートスは頭を悩ませる。

「くだらないでありんす。アインズ様が仰る通り所詮はただの人間。あまりにも弱すぎてあくびが出るでありんすよ。それにこんなペロンチーノ様の名前を語るような偽物を見せられては気分が滅入ると言うもの。申し訳ないでありんすが部屋に戻らさせて頂きます」

シャルティアは、欠伸交じりに自分の部屋へと戻っていく。

「あの様子を見るにペロンチーノ様は違うようね。デミウルゴスは、どうかしら？ ウルベルト様ではないのかしら？」

アルベドに言われ改めて考えてみるが答えは出ない。一部始終を見ていたが確信を持ってない。

「これだけではなんとも言えませんね。ただ、あの仮面は良い趣味をしているとは思いました。私としては、シャルティアに期待していたのですが……どうやら違うようでしたね」

「そう。残念ね。せっかく至高の御方々が見つかったと思いましたが。では、私はアインズ様をお出迎えする準備がありますので失礼させてもらうわ」

シャルティアに続き、アルベドも居なくなる。

「私もちよつと用事を思い出したから。行こう、マールレ」
「う、うん」

アウラもマールレと共に部屋から出て行く。

「お二人はどうされますか？」

「そうですね。私も用がありますので失礼します。ただ、その前に一つ確認を。コキュートス、なにか考えている事があるのではないのかな？」

シャルティアにより流された言葉が気になる。今はどんな情報でも欲しい。

「確力ニ参考ニナル内容デハナカッタ。ダガ、見事ダ。見事過ギタ。アインズ様ナラ納得モスルガアマリニモ連携ガ上手過ギタヨウニ思エル。マルデ旧知ノ間柄ノヨウニ……イヤ、ソシナハズハナイト思ウノダガ」

相手の動きや技を知っていたとしてもそれだけでは限界がある。お互いを知り、その上で合わせる動きを何度も積み上げなければ出来ない事もある。それがコキュートスの目には、出来ていたように見えた。

「それこそアインズ様の成せる業ではないのでしょうか？ 事実、私達ともアインズ様は連携を上手くとる事が出来ます」

「パンドラノ言ウ通りダナ。デキレバ、ヨリ良イ戦イデ見タイモノダ。特ニアノ戦士ノ動キハ見事ダツタ。イズレハ戦ツテミタイモノダナ」
「コキュートス様にそう思われるとは、将来有望な戦士のようですね。デミウルゴス様は、他に何かありますでしょうか？」

「……いえ、ありません。私も失礼させて頂きます」
デミウルゴスと一緒にコキュートスも部屋から出て行く。

「一段落でしょうか？ アインズ様にお知らせしないと」
パンドラは、アインズに問題なく終わったことを《メッセージ》の魔法で伝える事にする。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「お前達は下がりなさい。私は、疲れたので一人になりたいのでありません」

部屋に戻ったシャルティアは、自分の部下であるヴァンパイア・ブライドを部屋の外へと出す。そして――

「あああああああ！ アインズ様あああああ！ シャルティアはどうすればいいのですか？ あれは本当にペロロンチーノ様ではないのですか？ あの声！ あの仕草！ なぜ人の御姿なのか私にはわかりませんがシャルティアにはペロロンチーノ様にしか見えません！」

シャルティアの中にあるペロロンチーノの記憶がペロロンを名乗る人間を見ていると重なるような錯覚を何度も覚えた。声も、仕草も、何もかもが重なる。

「でも、私よりもアインズ様の方が御詳しいはず。私の勘違い……いえ、そうは思えないであります。頭から離れない、離れない……ペロロンチーノ様。本当に貴方様ではないのですか？」

アインズへの忠誠とペロロンチーノへの忠誠がシャルティアの中でせめぎ合う。あの場では、アインズに対する忠誠で場を乱さないように堪えたが一人になった途端に抑えられなくなった。

「シャルティア、ちよつとい……い？ 大丈夫、シャルティア？」

部屋を訪れたアウラの目に床に転がるようにして悶えているシャルティアの姿がある。

「アウラでありんすか？」

「マールも居るけど……忙しそうだから後にするね」

そつと扉を――

「待つてほしいであります！ 話を！ 話を聞いてほしいの！」

「……本当に大丈夫？」

シャルティアは、コクコクと激しく頷く。

「じゃあ、入るけど変なことしないでね。入ろう、マール」

「お、お邪魔します」

二人が警戒しながら部屋へと入って来る。

「それで、話つてなに？ 体調が悪いなら誰か呼んでくるけど？」

「違うんであります。その……アウラとマールに聞きたいのであります。あの人間を見てどう思ったでありますか？」

「どうつて……それを聞きに来ただけ。なんだかシャルティアの様子が変に見えたから」

「私が？」

「もし本当に違うならもつと怒るでしょう？ シャルティアの性格なら『ペロロンチーノ様の名前を騙るなんて許せるはずがないであります。今すぐにでも殺してやる』とか言うでしょう？」

アウラの言葉に同意するようにマールも頷く。

「それでどうなの？ 様子から見るにペロロンチーノ様に見えたの？」

「分からないでありんす。アインズ様は違うと。でも、ペロロンチーノ様にしか私には見えないでありんす。私はどうしたらいいのでありんすかえ？」

「どうって言われても？ どうすればいいと思う、マール？」

「ボ、ボクに聞かれても困るよ!？」

「だって他に聞く人も居ないし。ねえ、シャルティア。仮になんだけどうすればペロロンチーノ様だつて分かる？」

「……話をすれば分かると思ひんすが」

アウラとマールはどうしようか悩む。あの事を話すべきかどうか。

「話ならできると思うけど……アインズ様を裏切る事になるかもしれない。それでも話してみたい？」

「アインズ様を裏切れるわけないでありんす！ 最後まで私達の為に残られたあの御方を裏切るなんて……」

でも、知りたい。心が揺らぐ。

「あのね、シャルティア。ここだけの話なんだけどあの三人は、前にトブの大森林に来たの。また来るみたいだからその時に話はできるかもしれない。この事は、アインズ様には報告していかないけど……考えておいて。私も知りたいから。行こう、マール」

アウラは、マールと共にシャルティアの部屋から出て行く。その姿をシャルティアは見送るが未だに心は揺れ動く。

「アインズ様を裏切りたくはない……でも、でも……」

一度揺れた心は簡単には静まらない。答えを見つけるまでは決して。

第32話

たち達と別れたアインズは、ナーベをいつもの宿屋に残してナザリック地下大墳墓に帰還。アルベドに迎えられ、そのまま自室へと直行した。

(楽しかったな)

アンデッドなので疲労感などはないが達成感がある。フワフワのベッドに仰向けに横になりながら思い出しては笑いそうになる。

「良い事でもあったのですか?」

何故か自室の中までついて来たアルベドが問い掛ける。表情筋などない骨だけの顔なのに分かるものなのだろうか?

「そう見えるか?」

「愛しい人の事なら分かるものです。戻られてからのアインズ様は、いつもにも増して輝いて見えます」

「そういうものなのか」

よく分からないが本場の事を話すわけにもいかない。他の話で誤魔化そう。

「なに、計画通りに事が進んでいると思うとな。パンドラは、予定通りに動いているのだろうか?」

「はい。あのカジットと言う者を使い帝国、法国領にもズーラーノンの名を広めております。工作活動の方も同時に行っていますので直に結果は出るかと思われまます」

「熱が冷めないうちにズーラーノンの名を広める。当分は、今回と同じ規模の部隊を各地に送れ」

この前のズーラーノンの一件から大々的にズーラーノンの情報を流している。内容は虚偽を混ぜて様々だが王国だけではなく、帝国や法国も滅ぼす対象である。盟主は、第七位階以上の魔法を行使できる。いつでもどこでも自由にアンデッドの大群を生み出せるなどが内容の一部だ。今回のアンデッドの軍勢をエ・ランテルに向けて送ったのも話の信憑性を上げるため。今頃は、パンドラの指揮の下に

カジットが同じ規模のアンデッドを率いて帝国や法国に挨拶に行っている事だろう。

「できる限り満遍なくアンデッドを配置しろ。できれば各国の戦力や各所の優先度。戦略なども調べておきたい」

「しばらくは、カツツエ平野周辺を予定していますが次回は郊外の村に送る手筈となっております。しかし、戦力は変えなくてよろしいのでしょうか？ スケルトンやゾンビでは弱すぎると思うのですが」

「演出だよ。アンデッドは、その特性により数が集まれば更に強いアンデッドを自然に生み出す。今は、スケルトンやゾンビだけだが徐々に種類を増やし、最終的には上位の者も出していく。まるでスローラーノーンの力が増しているようにな」

本当は、三人の安全を考えた結果である。久しぶりに組む上に戦士としての参加。結果として予想以上に上手く行っただけで、予定としては苦戦しながらも勝つぐらいだった。

（調整をどうするか？）

この世界には一つ大きな問題がある。ユグドラシルの基準で言えば、マジックアイテムの入手はそれほど難しくない。もちろん効果の高い物は入手が難しいが、種類だけの状態異常を防いだりするアイテムなら入手は容易だ。しかし、この世界はその程度の物でも高額で取引されるほどに貴重で今の三人には手が出せない。ゲームとして考えれば、今の三人のレベルだと状態異常を持つモンスターが常態化してくる頃だ。この時期になるとモンスターに合わせて装備や戦略を考える事になる。戦略は問題ないとして、なんとかして三人の装備を整える必要がある。そうすれば、より強いモンスターを用意する事が出来る。

「アルベド。この世界のマジックアイテムを集めさせていたな？」

「はい。デミウルゴスがアインズ様の御命令で集めておりますが、それがどうかありませんでしたか？」

「今ある分でかまわない。価値のなさそうな物も含め全てを私の所へと持って来るのだ」

「畏まりました。すぐに御用意致します」

さて、手元にあるマジックアイテムをどうやって三人に渡すか？
次の共同作戦まで時間はある。ゆつくりと戦いを思い出しながら考えよう。

◇◇◇◇◇

バハルス帝国の帝都アーウィンタールにある皇帝ジルクニフ・ルーン・ファアロード・エルⅡニクスの居城にフルーダ・パラダインが訪れる。英雄の壁を超えた逸脱者とされる魔法使いの一人であり、ジルクニフの教育係も務めた帝国の重鎮である。本日は、ジルクニフに呼ばれ、私的で内密な話を行っている。

「聞いたか、爺。今やこの世界は、アンデッドが蔓延る世界へと変わってきたぞ」

王国での一件を聞きズーラーノーンについて調べさせていた矢先に帝国領にもズーラーノーンがアンデッドの軍勢を率いて現れた。話では、スレイン法国にも現れたそうだが他の国の事などには興味はない。

「そのようすな。いやはや、面白い限りです」

フルーダは、蓄えている髭を指でなぞる。その表情はどこか楽しげだ。

「嬉しそうだな、爺は。まったく魔法に関する事だといつもこれだ。アンデッドの軍勢は所かまわずに現れる。最低でも転移の魔法は使えろと思っついていいな？」

「初めは、カッツエ平野の周辺だけでしたが今では三国を股にかけて行われています。アンデッドを連れまわしているかは分かりませんが、これだけ好きに移動できるとなると可能性は高いと思われます。ただ、これだけの範囲で転移を行えると……この私と同等の力を持つていると考えられます」

逸脱者と呼ばれるフルーダは、人類の限界とされている第六位階の魔法の使い手だ。その戦力は、条件付きではあるが帝国の軍事戦力に匹敵する。そんなフルーダと同等の者が監視の目を掻い潜り好

き勝手に活動しているなど許されるはずがない。

「今のところは、軍を動かせばどうにかなる。しかし、アンデッドはより強いアンデッドを生み出すと聞く。いずれは、対応できない戦力になる可能性はあるのだな?」

「可能性としてはあります。今行われているものは邪魔をさせないための囮。本命は、地の底で育まれているやもしれません」

「そうだとしたら最悪だな。今や各国は、アンデッドに対抗するため
に人手などを割いている。ある意味では、他国を落とす絶好の機会でもあるがこちらが攻められる可能性もある。特に注意すべきは、
法国だ。前に我が帝国と王国を争わせるために工作を行っていた。これを機に攻めてこないとも限らない」

王国との国境付近にある村を帝国の装備を身に着けた法国の者達が村々を荒らしまわった。全ては、王国と帝国を争わせる為だったがそれは偶然その場に居合わせた二人の人物によって阻止された。

「可能性としてはありえますな。法国の者達からすればアンデッドは然程脅威ではありません。被害者を装い力を蓄える。それこそズーラーノーンと裏で繋がっている可能性もあるやもしれません」

「憶測ではあるがな。ただ、爺に匹敵する者となれば自ずと限られる。居るとするならば法国の関係者だろう。あの場所には、爺ですら勝てるか分からぬ者も居るのだから」

スレイン法国には、六色聖典と呼ばれる特殊工作部隊が存在する。その者達の中には、フルーダを凌ぐ力を持つ者も確認されている。盟主をはじめズーラーノーンの素性は未だに不明だが、帝国が把握していない者の中に居たとしても不思議ではない。

「あとは、例の魔法詠唱者か。調べようにもこのような事態になったからには手を出せない。既に調べた限りでは、王国戦士長であるガゼフ・ストロノーフ率いる部隊を壊滅にまで追い込んだ陽光聖典を供の戦士と全滅させた相手だ。爺には悪いが、盟主である可能性がある。わざわざ危険な所に出す気はない」

「残念ですが、今の状況では有益な話もできませんまい」

「えらく簡単に引き下がるな。爺らしくもない」

フルルダは、魔法に関しての知恵欲を満たす為なら貪欲なまでに渴望する。それなのにあつさり引いた事に違和感を覚える。

「確かに気にはなりますが、他にも居りましてな。王国に居る冒険者なのですが瞬間に第三位階までの魔法を習得したと聞いております。それも多くの魔法を扱えるらしく……私の見立てでは力を隠し持っているのではないかと楽しみでして」

「前に報告を受けた者達だったな。確か、他にもあつたような？」

「そちらもまた面白い。こちらも若いのが第三位階の魔法を……もし御許可が頂けるのなら一度王国に赴きたいぐらいです。どちらも私の興味を引いてやみませんので」

「爺が居るからスレイン王国とは言え、帝国には直接事を構える事はできない。行かせられるはずがないだろう」

「では、こちらに呼ばせては頂けないでしょうか？」

(こちらに呼ぶ?)

フルルダの知識欲を満たすのはともかく悪くないかもしれない。フルルダが興味を持つだけの者なら帝国にとって有益な人材である可能性は高い。ズーラーノーンの事も考えると戦力の増強も必要だろう。

「いいだろう。爺の目に適えば帝国に迎え入れよう。すぐに連絡をとれ」

「畏まりました、陛下」

臣下の礼をとるとフルルダはジルクニフの下から去る。今すぐにも自らの欲を満たしてくれる者達を呼ぶために。

第33話

アインザックに呼び出されたたっち達三人とモモン達二人は、時間を潰すために冒険者組合の待合室でトランプゲームに興じていた。この世界では紙が貴重品の為、ペロロンが野営で暇な時に製作していた木札を使用している。サブカルチャーをこの世界でも再現しようとしているペロロンは、一枚一枚に記憶を頼りに絵を描いたりする。内容は、女の子のキャラばかりだが。

「オープン」

親であるペロロンが代表して勝負の言葉を言う。

「俺は、エースと10のツーペアです」

「私は、スリーカードですね」

「申し訳ありません。ストレートです」

ペロロン、モモン、ナーベの順で札を見せて行ったがナーベが勝った。

「ナーベさん、強過ぎじゃね?」

ナーベの前には、賭けていた銅貨が新しく積まれていく。この銅貨は、五度目となる共同作戦によるアンデッド退治の報酬。それを銅貨にしてもらい遊んでいる訳だが先ほどからナーベの一人勝ちである。

「モモンさん。こんなに集まりました」

ナーベは、モモンに成果を見せる。その表情には、先ほどまでとは違い色があるように見える。

「頑張ったな、ナーベ」

モモンに褒められて色は更に濃くなる。こうして見ると感情はあるらしいのだが、勝負の最中は驚くほど無表情だ。

「ゲーム中もそんな感じだと助かるんですけどね。まあ、モモンさんとウルベルトさんは顔が見えませんか?」

フルフェイスの兜と木製の山羊の仮面で二人の顔は見えない。ちなみにモモンはトントン。常に勝負に出ているウルベルトはあと少ししか残っていない。

「今度は、逆ババ抜きにでもしますか? 最後までババを持っていた人

が総取りなんてどうですか？」

「参加料は、五枚でいいよな？　ここらで取り戻しておきたい」

「ちよつと待ってください。どうやら時間のようです」

たつちに言われて気づいたが、五人の下にアインザックから部屋に
来るようにと伝言を預かった従業員がやって来る。どうやら時間が
来たようだ。

「待たせたようだな」

従業員の案内でアインザックの下に通される。向かい合うように
座るのだが、どうやらアインザックは疲れているようだ。表情に疲労
の色が濃く出ている。

「お疲れのようですね」

「ああ、まあな。アインデッドは、こちらと違い休みを必要としない。こ
ちらの都合など考えもしないで好き勝手にやってくれているよ」

今回で共同作戦を五回行ったがそれ以外でも依頼を受けて各地へ
とアインデッド退治に向かっている。いくら軍を配備していたとして
もアインデッドは何処にでも現れる。その為、戦いだけではなく移動に
よる疲労やいつ現れるかもしれない不安で心身ともに疲れる。それ
らの対応に追われるアインザックも例外ではない。

「君達には、本当に助けられている。数が少ないために動きやすく、費
用も掛からないからな。ただ、報酬は申し訳ないが多くは払えない。
国の財政はそこまで豊かではないのでな。代わりにこれまで通り現
物の支給になるがそれでかまわないかな？」

本来なら緊急の依頼の為に上乘せなどがある内容だ。ただ、既に常
態化しているために通常の依頼となっている。その代わり食料や聖
水、馬を無料で貸し出していたりする。

「それでかまいません。国の危機ですから」

「私達もそれでかまいません。元々、ズーラーノーンを倒すことが目
的ですので」

たつちとモモンの言葉を聞き、アインザックは考え込む。どうやら
今日呼ばれた理由に関係していそうだ。

「君達の気持ちはありがたい。ただ、今日呼んだのはそれに関する事

なんだ。実は、帝都にある冒険者組合から君達の指名があった。どうやら帝都も大変だそうだな……いや、遠回しな言い方はやめよう。早い話が引き抜きの話が来た。内容は、しばらく帝都で活動してほしいというもの。おそろくだがその期間に君達の査定と交渉が行われるはずだ」

「初めて聞く話ですね。引き抜きなどあるんですか？」

「正確に言えば、冒険者組合ではない。派遣することはあるがな。今回は、フルルダ・パラダインという人物が絡んでいる。名前ぐらいは聞いたことはないかな？ 生きる伝説とも言える魔法詠唱者だ」

「確か、第六位階の魔法を使えるってニニヤちゃんが言っていましたね。この辺だと珍しいらしいですよ」

「そんな話もあつたな」

「珍しいではすまんよ。君達のがんがズレている事には今更なのでなにも言う気にはならんが、フルルダ・パラダイン一人が居る為に王国も法国も帝国には手を出せない程だ。そんな人物が冒険者組合を通して君達を呼んだ。こちらとしては、君達を帝国に行かせる以外の選択肢がない」

冒険者組合に圧力でも掛けているのだろうか？ 帝国の事は詳しくは知らないが随分とこちらを評価しているようだ。

「どうしても私達に会いたいという事でしようか？」

「君達ではなく、ウルベルト君とナーベさんの二人だと私は考えている。パラダインは、魔法に関しては他の追随を許さない程の頂に立っている。その若さで第三位階の魔法を扱える二人に興味を湧いたのではないかな？」

「おっさんに会いたいわって言われても嬉しくないな。ただでさえ、ラキユースさんに会えないのにおっさんに会うとか何の罰だよ」

ウルベルトの心境は決まっている。行く気はない。

「急なものではないようなので考えておいてくれ。ナーベさんは、どうかな？」

「モモンさんにお任せします」

「そうですね。皆さんが行くのなら一緒に行きます。なので、ウルベ

ルトさん次第という事をお願いします」

「わかった。先方にはそのように伝えておこう。ただ、あまりにも催促があるようならその時は頼む。それと、できれば引き抜きには応じないでもらいたい。待遇は、あちらの方が上だろうがこちらは君達が居ないと困る。頼む、この通りだ」

アインザックは頭を下げる。これには、素っ気なかったウルベルトも姿勢を正す。

「やめてください、アインザックさん。私達は、別にお金の為だけにやっているわけではないですから。困っている人が居るのなら助けるだけです」

「流石、たちさんですね。私も同じ気持ちですよ」

「そうか。ありがとう。私にできる事があれば何でも言ってくれ。できる限り恩に報いたい」

安心したのか背を椅子に預け息を大きく吐いている。

「おっと、そう言えば忘れるところだった。たち君達に指名の依頼が来ていた」

アインザックは、執務用の机に戻ると依頼状と小さな箱を持って戻って来る。

「少し変わった依頼だったので引き受けるか悩んだのだが、先ずはコレを渡しておこう」

アインザックからたちちは小さな箱を手渡される。早速、箱を開けて中を見てみるが――

「指輪ですか？」

銀色の細い指輪が入っている。よく見ると細いながらも模様が刻まれている。

「それは、石化に耐性を持つ指輪だ。依頼主が今回の依頼に必要なと思えば報酬の意味を含めて渡したいそうだ」

「マジかよ!? 石化耐性の指輪を報酬でくれるってどんな金持ちだ!？」

「上級貴族とかでしょうかね? というか、どんな依頼なんですかそれ?」

アダマンタイト級の依頼は覚悟しておいた方がいい破格の報酬。更に別に報酬も出ると言われたら聞かずに帰った方がいい気すらする。

「実は、これとは別に報酬も出る」

「帰りましょう。罨です」

「だな。死にたくない」

アインザックの言葉でペロロンとウルベルトは席を立つ。

「待ちたまえ。確かに怪しい話だが裏はとつてある。内容は、ギガントバジリスクの討伐だ。此処から西にある森に居る。この指輪があれば君達なら問題ないだろう」

それを聞いて二人は元の席に着く。

「怪しさ満点ですけどたつちさんが決めて下さい」

「俺もそれでいい」

「確かに怪しいですが見返りは大きいです。今の状況を打開するためにも危険を冒す必要があると思います」

「そうか。それでは、この依頼状を持って受付まで行ってくれ。詳しくは、そこで教えてくれる」

三人は、怪しい依頼を受け、モモン達と別れ西の森へと向かう事にする。そんな三人を見送るモモンは、内心で上手くいったとほくそ笑む。全ては、モモンが仕組んだ事。ギガントバジリスクは本当に居るが別に罨などはない。

(さて、早く帰って準備しないと)

ナザリック地下大墳墓に戻り急いで遠見の鏡で三人の戦いを見る準備にはいる。その足取りは、ナーベが少し慌てる程に速かった。

第34話

魔獣ギガントバジリスクと戦う際には一つ注意しなければならぬ事がある。それは、先に相手を見つけておくことだ。ギガントバジリスクの石化の視線は距離が関係なく、視界にさえ入れば使用する事が出来る。それこそ道を歩いている時に偶然にも森から顔を出したギガントバジリスクに見つかり逃げ事も出来ずに石化するぐらい先に見つかると終わりだ。その為、どのようにしてギガントバジリスクに見つからず石化の視線を防ぐのかが勝利への鍵となる。

今回のように事前に情報があれば対策はとりやすい。ウルベルトの《サイレント》で三人は周囲の音を消し、レンジャーを持っているペロロンを先頭にして森の中を前進。ついでにウルベルトの《サモン・デーモン》で召喚したインプ達を先行させ、囷とすることで安全も確保している。報酬として先にもらった石化を防ぐ指輪をたちちが装備しているのではよほどの事が無ければ負けない戦いだ。

「なあ、せつかくだからアレを試してみたいか？ ギガントバジリスクぐらいで一度試してみたいんだよ」

ウルベルトからの提案に二人は足を止める。

「確かにそろそろ試しておきたいですよ。ギガントバジリスクは、『呪い』に対して耐性などはありませんから。この辺りだと強い部類のモンスターですから丁度いいかもしれません」

「でも、アレって下手すれば全滅するかもしれないですよ？ 今のウルベルトさんは、第四位階まで扱えるわけですから呪いもレベルIVになりますからね」

実は、ウルベルトは既に第四位階の魔法が扱える。範囲魔法を使う為に他の二人よりも経験値を多く得られていたからだ。

「でもさ、アンデッドと戦うのなら呪いに対抗する手段も必要だろ？ 俺の持つ『リムーブ・カース』で解呪できない場合もある。レベルIVなら解呪できるが死に際とかの強い呪いだは無理だろうからな」

呪いは、命を代価に強化出来る場合がある。

「確かにそうですが、『カース・オブ・ドール』はあまり使いたくないですね。呪いを移す事が出来ると聞こえは良いですがアイテムではなく、あくまでもモンスターですからね。何も知らずに自らの呪いを移して殺されたプレイヤーは少なくないですよ」

サモン・デーモンで呼び出せる通称『復讐人形』と呼ばれるモンスター。この復讐人形はモンスターではあるが通常はただの人形と同じように無害である。ただ、復讐人形には対象の呪いを復讐人形に身代わりさせる事が出来る能力がある。よほど特殊な物でない限り移す事が出来る訳なのだが問題はここから。この復讐人形は、呪いを移されるとその呪いの強さによって戦闘力が変わるモンスターとして動き出す。復讐人形は、壊されるまで本来の呪いの持ち主を殺そうと狙い続け、殺し終えたら元の人形へと戻る。つまり、呪いを移して助かったと思った矢先に人形に殺されることになる。仮に動き出した復讐人形を倒した場合は、移された呪いは元の持ち主へと戻るので危険なだけだったりする。

「確かに呪いを移した後は召喚者であつても還す事は出来ない暴走状態になる危険なモンスターだが、呪いの種類によっては必要になる時もあると思う。一度、どんなもんか試しておいて損はないと思う」

呪いは、様々な種類がある。身体能力の継続的低下。行動不能。復活の阻止。姿や魂の変質なんでものまである。解呪できなければ死ぬよりも辛い目に遭う事があるのが呪いだ。

「分かりました。その辺りは、ウルベルトさんにお任せします。ペロロンさんもそれでいいですか?」

「今回は問題になる要素がないですからいいけど……ホラー映画みたいな光景は勘弁してほしいかな。復讐人形ってビジュアルからして怖いし」

「じゃあ、決まりだ。とりあえずギガントバジリスクを見つけて石化の視線の対策をしよう」

復讐人形を試しに試してみることで話は決まった。ペロロンを先頭に再び森の中を進んで行くわけだが——先に行くインプに反応がある。

「ギガントバジリスクかは分からないが、インプが一体石化したみたいだ」

召喚者であるウルベルトにインプの情報が入る。召喚者とモンスターには繋がりがあるので、モンスターに何かあれば分かる仕組みになっている。

「こっちの方角だ」

ウルベルトが道を示す。それに合わせ、ペロロンが意識をその方向に向けながら足を進めていく。他の二人は、少し距離をとって後に続く。

(居ました)

ペロロンが後続の二人にハンドサインを送る。

「こちらには気づいていませんね」

慎重にたつちとウルベルトがペロロンの傍にまで来る。距離は、20メートル程。体長は、全体が見えない程に大きく、一般的な個体が10メートルぐらいなので相当な大きさになる。この世界の木々が異様に大きくなければとてもではないが姿を隠すことは出来ないだろう。

「私が出ます。ウルベルトさんは、囿になるインプと石化の視線対策を。ペロロンさんは、両方の支援をお願いします」

石化の指輪を持っているたつちが新しく召喚されたインプ達と共にギガントバジリスクの下へと向かう。ギガントバジリスクの適正ランクは、アダマンタイト級。本来であるのなら、ミスリル級である三人が戦うには分が悪い相手だ。それでも三人は勝算があると考えている。否、勝てると確信している。

「行きますー！」

ある程度近づいたたつちは、一気にギガントバジリスクに駆け出し不意を突く。ギガントバジリスクの鱗はミスリルに匹敵すると言われるぐらいに硬いが、たつちの剣も加工ではあるがミスリルが使われている。モモン達とのアンデッド退治でレベルが上がっているたつちの《強撃》のスキルを上乗せした一撃は、深々と鱗を突き破る。だがそれはギガントバジリスクにとっては致命傷にはほど遠いほどの

小さな傷。たつちの存在に気づいたギガントバジリスクは、巨体を揺らしたつちを押しつぶそうとする。

「《返し技》」

盾で防ぎながらも更に攻撃を叩き込もうと剣を引き抜く。その際に猛毒である体液がたつちの身体へと噴きかかる。一般人なら即死する程の猛毒。それにすら怯まずに勇猛果敢に攻め立てる。

「持ち堪えてくれよな！ 行くぞ、ペロロン！」
「潰してみせますよ！」

ウルベルトは、たつちの回復を後回しにして《ファイヤーボール》の連発でギガントバジリスクの目を狙い始める。それに続くようにペロロンも《狙い撃ち》のスキルを駆使して目を狙って行く。

魔獣が吠える。痛みと己の思うままにできない事への苛立ちが巨体を暴れさすようにして表に現れる。

「何処へも行かせません！」

自身と比べてあまりにも巨大な敵。猛毒を受け、圧倒的な暴力を受けてもたつちの闘争心は消えることなく、むしろ更に強まっていく。自分が負ければ後ろの二人に被害が及ぶ。体力や装備の乏しい二人なら一撃で致命傷になってしまう。それが分かっているからこそ負けるわけにはいかない。

「——よしっ！ 潰せましたよ！」

炎によって焼け焦げ、矢が何本も両目に刺さったギガントバジリスクは視界を失い闇雲に暴れはじめる。この隙を三人は見逃さない。

「たつちさん！」

ペロロンの支援射撃に合わせてウルベルトがたつちへと接近。たつちも声を聞き、後退する。ウルベルトは、《キュア・ポイズン》で解毒を行い。《ミドル・キュア・ウーンズ》でたつちの傷を癒していく。
「随分とやられたみたいだな」

回復が一度だけでは足りない。

「やっぱり強いですね。ですが、このまま押し切れそうです。ウルベルトさんは準備に入ってください」

傷が癒えたたつちは、時間を稼ぐために再びギガントバジリスクに

向き合う。

「《サモン・デーモン》」

ペロロンとたちちがギガントバジリスクを引き付けている間にウルベルトは準備へと入る。まずは、復讐人形を召喚する。呼び出された復讐人形は、ボロボロの気味の悪い姿をした子供の人形。その両手には、血で錆びた包丁を持っている。

「《カース・オブ・デイズター》」

今度は、災厄の呪詛をギガントバジリスクへと向ける。今のウルベルトの最大位階魔法レベルはⅣ。災厄の呪詛はそれに応じて、ウルベルトの身体から呪いの黒い霧となりギガントバジリスクの身体と魂を蝕んでいく。

「離れろー」

呪いでギガントバジリスクの動きが抑えられているのを確認した二人は、ウルベルトの声で安全な場所へと退避する。そして、それに合わせるようにウルベルトは復讐人形の能力を発動。ギガントバジリスクに掛かっている呪いを復讐人形へと移し——その場に耳障りな程に煩く気味の悪い子供の笑い声が人形から発せられる。

復讐人形は、ガクガクと激しく震えてからむくりと立ち上がり瞬間にギガントバジリスクへと近づき——それからは惨劇となる。手に持つ包丁は、ギガントバジリスクと比べるとあまりにも小さいがその切れ味は凄まじくミスリルに匹敵する鱗を何事もないかのように切り刻んでいく。飛び跳ね、走り回り、クルクルと回り、ギガントバジリスクに身体を吹き飛ばされ、猛毒の体液を浴びても攻撃の手を止めない。既に目は見えず身体を切り刻まれていくしかないギガントバジリスクの悲鳴が人形の笑い声と共に死を迎えるまでそこにある。

「……怖くない?」

ウルベルトは、自分の所にやって来たたちちとペロロンに聞く。

「ホラーではなく、スプラッター映画の方でしたね」

「でも、これでレベルⅣなんですよね? レベルⅣならウルベルトさんの魔法で解呪できるから使うならそれ以上になるわけですけど……俺達に対処できますかね?」

今も楽しそうに包丁を振り回す復讐人形を見て思うが……無理か
もしれない。

第35話

復讐人形によるギガントバジリスクの殺戮が終わり、三人は警戒しながらもどうしようか悩んでいた。

「コレ、どうします?」

依頼を達成した証としてギガントバジリスクから決められている部位を取る必要があるのだが損傷が酷く取りようがない。

「首か尻尾でも持って帰ればよさそうですが……重いですよね?」

「ウルベルトさんが持つてくださいよ。やり過ぎたんですから」

「馬鹿言うなよ。カース・オブ・ドールを使わなかったら勝てるか微妙だろ? 魔獣は体力が多過ぎて倒し切る前に俺の魔力が切れる可能性だつてあんだから。せめて手伝つてくれよ」

「大丈夫ですよ、ウルベルトさん。ペロロンさんも意地悪しないでください」

たつちは証として、頭部と尻尾の両方から最低限切り落とす。目玉だけでもいいところをコレだと他には何も持つて帰れない。せつかく初めて来た場所なので薬草などを探してみたかったのだが。

「——ちよつと待て!? インプが石化された!」

ウルベルトが突然叫ぶ。警戒にあたらせていたインプの一体が何者かから石化を受けた。

「何処ですか?」

すぐにたつちは剣を構え周囲を見渡し、安全を考えてペロロンは木の影に身を隠す。

「あつちの方角だ」

ウルベルトは、魔力量を計算してインプを追加で二体だけ召喚しておく。いざとなればこの二体と残りを囿に逃げる。

「素晴らしい! お見事です!」

ウルベルトが示した方向から場違いな男が現れる。優し気な面持ちで敵意などもない。綺麗な服を身にまとい、拍手をしながらこちらへと歩いてくる。此処が貴族の居る街の中なら何も不思議ではないが此処は先ほどまでギガントバジリスクが居た森だ。

「誰だお前?」

ウルベルトが代表して問い掛ける。三人は、いつでも動けるように臨戦態勢をとる。

「名前……ですか。そうですね、ビーストティマーとでも名乗っておきましょう」

「ビーストティマー? まさかと思うが、そのギガントバジリスクはお前のか?」

「残念ながら違います。ただ、私の後ろに居るのはそうですが」

男の後ろからゆつくりと影が動くようにそれが現れる。先ほど倒したギガントバジリスクと違う新しい魔獣だ。

「こちらからお聞きしてもよろしいでしょうか? 先ほどのインプもそうですがその人形は貴方のモノですか? インプはともかく初めて見ましたよ、そんなモンスター。それに面白い戦い方ですね」「一人だけではないですね」

たっちの言葉に男は少し驚いた表情を見せる。気のせいか好青年に見える笑顔が嫌なものに変わった気がした。

「お互いにという事で無礼をお許しください。それで、お答えして頂けますか?」

「答えなかったら戦うってか?」

「それも悪くはないですが、申し訳ない。これでも忙しい身ですので。此処には、別件で来たのです。その用事も終わりましたので帰るところなのですが面白そうな人達だなど思いました、つい声を掛けてしまいました」

「あれは、カース・オブ・ドールって言う悪魔だ。呪いで力を増す、本来ならトラップモンスターと呼ばれる部類になる。見てたんなら方法は言わなくても分かるだろう?」

「トラップモンスター……。なるほど面白いですね」

「ちなみに言っておくがギガントバジリスクの石化とかは効かないぞ?」

ウルベルトの警告の言葉に今度は表情を変えない。ただ、ジツとウルベルトの事を見ている。

「申し訳ありません。これ以上は」

男の後ろから隠れていた別の男が現れる。身なりからして魔法詠唱者だろう。言葉遣いから判断すると、最初に現れた方が立場は上らしい。

「……そうですね。分かりました」

表情も変わらず素直に言葉を聞いているように見えるが後から来た方は怯えているように見える。どうやら曲者のようだ。

「それでは、失礼します。またお会いできることを楽しみにしています」

ギガントバジリスクを還し、元来た道を魔法詠唱者と共に帰っていく。

「早く、逃げよう。あれは、ヤバい奴だ」

「そうですね。あまりいい目をしていないように思えました」

ウルベルトは、インプを再び召喚し再配備する。このままペロロンには隠れてもらい、たちと二人でギガントバジリスクの部位を持って帰る事にする。

「勿体ないですね」

見逃した者達を思うと少々後を引かれる。

「ですが、クインティア様。既に皆様は、お戻りになられています。これ以上はまずいかと思われます」

クアイエツセ・ハゼイア・クインティアは、漆黒聖典の一人として亜人の殲滅任務を行っていた。その際にスレイン法国から帰還命令が届いた。以前に派遣した陽光聖典が全滅し、監視をしていた者達が原因不明の爆発に巻き込まれた。原因を確かめる為に漆黒聖典が派遣されたのだが途中で帰還命令が下った。理由は、ズーラーノンの盟主の復活。詳細は不明だが何者かが大規模な魔法を行使した痕跡があるためにクインティアも含めて他の漆黒聖典の人間も帰還する事となった。

「法国領内にもアンデッドが現れ始めたと聞きます。早く戻るべきかと」

「仕方がないですね。隊長も戻られているようですから」

そんな会話がたち達が立ち去った後に行われていたのだが、そんな光景を見ている者が二人。三人の戦いを見ようといういろいろと準備をしていたので声まで聞こえていたのだがアインズは頭を抱えていた。

「パンドラよ。なかなか難しいものだな。ギガントバジリスクを発見し、その辺りの貴族を洗脳して依頼をさせたまではよかったが招かざる客が紛れた」

「そのようですね」

いざとなれば手を打つが何事もなくて心から良かったと思う。

「どうなさいますか？ 法国の者らしいですが？」

「そうだな……」

なかなか面白い事を言っていた。隊長という言葉から連想されるのは、漆黒聖典の第一席次だ。それが撤退した。おそらくだがカルネ村での一件を調べに来ていたのだろう。こちらに有益な情報は持っていないそうだが――

「手に入れたいが何もしない。今の状況で何かあれば三人が疑われるからな。ここは、三人の名前を持ち帰ってもらおうじゃないか」

「スレイン法国でも有名になりますね」

「そうだな。だが、それは時間の問題だ。あの三人なら瞬く間に名声を手に入れるさ」

「その為にも次の計画ですね？」

「うむ。今回の不備を見直し、改めて計画を練り直すぞ。協力しろ、パンドラ」

「仰せのままに。それでは、こちらにまとめておいた資料集を御覧ください」

アインズは、パンドラがまとめておいた資料を見ながら新しく計画を練り直す。今度は、もう少し安全を考慮したものにした。

第36話

無事にエ・ランテルに帰還した三人は、ギガントバジリスクの部位を受付に渡して報酬を貰った。その時に依頼を済ませていたモモンとナーベと出会い酒場で打ち上げをすることにした。

「カース・オブ・ドールですか。聞かないモンスターですね」

「この辺りには居ないモンスターだからな。ただ、これが便利なもんで。呪いと召喚の魔力だけでそれなりに使えんだよ。でも、ズーラーノーン相手には使えないけどな」

ウルベルトがモモンから酌を受けて自慢話に花を咲かせている。今日も戦いで命を奪ったためにモモンは一緒に飲食が出来ず、暇だからと酌をしては話を聞いている。

「アンデッドはそもそも呪いが効かないだろ？ それに復讐人形は、物理攻撃しかできないから物理無効のレイスには意味がない。呪いが元で動くから解呪が出来るのなら簡単に倒せる。それでも価値は十分あるし、魔法やモンスターを上手く組み合わせると楽しいんだよな」

「よく皆で考えてましたね。いろいろ組み合わせせて効果を高めたり応用したりするの」

ユグドラシルでは、必ずしも低レベルだからと言って弱いとは限らない。例えば、敵の攻撃を引き付け、どんな攻撃でも一撃は耐えられるデスナイトもレベルの割には破格の性能がある。魔法の種類も6000以上もあつた為に運営が設けた抜け穴を探すのが一つの楽しみでもあつた。それらを組み合わせれば更に面白い事が出来るとユグドラシルを扱う掲示板ではちょっとした盛り上がりを見せた。

「私は、そんな皆さんが少し羨ましかったです。私は、戦士でしたからそういう話はあまり縁がなかったですから」

「たつちのような戦士は、単純なプレイヤースキルが求められた。」

「皆さんには、他にもお仲間が居るのですか？」

今までモモンと同じように聞き役に徹していたナーベが口を開く。その顔は、興味津々に見える。

「おつ！ ナーベさんもこういう話が好きなの？ 流石は、魔法詠唱者なだけはあるな。そもそもこの方法を考えたのは俺じゃないからな。これを考えたのは確か……モモ——」

「ぶはつくしゅん!! おつと、失礼。急に鼻がかゆくなったもので」
ウルベルトの話は、モモンの大きなくしゃみでかき消される。

「おいおい、風邪か？ なんなら魔法で治すけど？」

「いえ、大丈夫です。誰かが私の噂でもしたのでしよう」

モモンは、笑って誤魔化す。

(危なかった……)

復讐人形の事は、モモンも知っている。当然だろう。一緒に考えた人間の一人なのだから。

「それでは、私達はそろそろ宿に戻ります。行くぞ、ナーベ」

「はい、モモンさん」

モモンは、これ以上ボロが出ないうちに撤退する。もう少し話をしていたいが、流石にくしゃみだけでは誤魔化しきれないだろう。

「でも、危なかったよな。報告のしようがないから話してないけどギガントバジリスクを使役とか」

「モンスターテイマーとなれば、一体だけとは限りませんからね。複数体の運用が出来るのなら私達では勝てないでしょう」

「俺が戦力になればいいんですけどね。良い弓と矢が欲しいですよ」

三人の中でペロロンが圧倒的に弱い。本人の実力で上手くやっているが、弓兵にとっては弓と矢で戦力としての価値が決まるところがある。

「魔法武器はともかく、付与ぐらいは欲しいよな。ズーラーノーンを相手にするなら神聖属性なんか欲しいところだ」

「ですが、魔法武器は見つけること自体が難しいですよ？ 付与はあります但し値段はこの指輪よりも高いですから」

「調べてもらいましたけどその指輪も俺達には買えないレベルですからね。他のに転職しようか迷いますよ、本気で」

とはいえ、転職も簡単ではない。たちが接近戦。ウルベルトが遠距離戦を担当しているので双方の補佐ができる弓兵をできれば育て

たい。

「——此処に居たか」

三人が悩んでいると店の入り口の方から見知った顔が近づいて来る。

「ブレイン・アングラウス？」

忘れるわけがない。場所が戦いに不利だったとはいえ、三人が逃げ出した相手だ。

「お前達の話はいろいろと聞いたぞ。随分と有名なんだな。それに前よりも強くなったように見えるぞ」

先ほどまでモモンが座っていた席に断りもせず座る。

「席に着いたら一杯は飲め。此処は、酒の席だ」

「お姉さん！ こっちの人に一番高いお酒を持って来て！」

勝手にペロロンがアングラウスの分の酒も頼む。

「飲むから普通のにしてくれ。まったく噂通りだな。殺し合いをしただって言うのに」

呆れているアングラウスの前に頼み直したエールが運ばれてくる。

「それで、決闘の話ですか？」

「ああ、そうなんだが……なんだかやる気が失せた。こっちは命懸けで来たのに招かれるとは思わないからな」

「つまらないこと言うなよ。盛り上げてやるからさ」

「戦士長様の時と同じように盛り上げましょうね」

当の本人達を無視して、ウルベルトとペロロンは、たっちとガゼフの戦いの時のように一儲けしようと企んでいる。

「あの、アングラウスさん。実は、決闘を行う際に立会人を設けたいと考えているんですがダメですか？」

「立会人？ こっちとしては戦えればかまわないが誰だ？」

「王国戦士長のガゼフ・ストロノーフ様と蒼の薔薇のガガーランさんです」

たっちの口から出た名前に考え込む。

「知り合いだとは聞いたがストロノーフが立会人なのか。いや、蒼の薔薇のガガーランもそうだが……豪華なもんだな」

アングラウスは、酒を飲んで思いに浸っている。

「すまないが、ストノローフは外してもらえないか？　まだ会いたくないんだ」

「理由を聞いても？」

「……別に何でもいいだろう」

それだけ言うと口を閉じる。徐々に場の空気が悪くなるがそんな様子を見ていたウルベルトが代わりに答える。

「負けたのが悔しいんだろ？　自分の得意なもんで負けると認めたら手でもスツキリしないからな。憧れと嫉妬が混じった嫌な感じだな」

「……そんな経験があるのか？」

「ああ、嫌ってほどな」

二人の会話をたつちは黙って聞く。ペロロンも口を挟む気はない。

「言いたくはないが避けている間は何やっても上手くいかないぞ？」

何やつても頭ん中から離れないだろ？　だからさ、もう一度やってみろよ？　結果はどうあれ、避けてた時よりもずっと気が楽になるはずだ」

話しの終わりにチラリと見たウルベルトの目がたつちと合う。

「なるほど。随分と面倒な相手を敵にしたな」

「まったくだ。俺に無い物を何でも持つてる。でもだからこそ一つぐらいは勝ちたいだろ？　得意なもんでな」

「私は、負ける気はないですよ」

「今なら俺が勝つさ。だから早く強くなってくれよ。でないと張り合いが無いからな」

「いいな、そんな関係も」

三人の中で不思議な絆が生まれた気がした。

(俺だけ蚊帳の外なんだけど)

話しに絡めないペロロンはその光景をチビチビ飲みながら見ていた。経験のないペロロンでは言葉に重みがなく混ざれない。

「今度、王都に一緒に行きませんか？　私との前に戦士長様と一度話し合ってから戦うかどうか決めてもいいと思います。私は、いつでも

かまいませんから」

「頼まれてくれるか？」

「いいですよね、ウルベルトさん？」

「ああ、いいよ。その代わり、つまらない勝負だけはよしてくれよな。負けるにしても負け方つてもんがあるからな」

「俺は、負けない。今度こそ勝つ。勝って変わってみせる」

「そっか。なら奢ってやる。ぱあーっと前祝でもするか」

「思いはそれぞれの夜が更ける。明日は、アインザックに頼んで王都に行かせてもらおう。」

第37話

アインザックから許可を貰い、馬を走らせアングラウスと共に三人は王都へと来た。今は、たっちがストロノーフを呼びに行き、ペロロンとウルベルトの二人がアングラウスと共に酒場で待っている。

「少しは落ち着いたらどうだ？」

「そうですね。子供じゃないんですから」

王都に来てからアングラウスは挙動不審だ。しきりに周囲の確認をしたり、今みたいに落ち着かずには身体を動かしている。

「仕方ないだろ。今まで避けてたんだから」

そう言うのと五杯目になる酒を一気に飲む。いつそのこと酔えてしまえばいいのだろうが緊張からなかなか酔えないようだ。

「気持ちは分かるけど正直に言っただけラキユースさんに会いに行きたいんだよ。まだ顔出してないから居るかもしれないしさ」

「俺もイビルアイちゃんをラブラブしたいかな」

「薄情者！　ここまで連れて来たんだから最後まで付き合えよ！」

身を乗り出す勢いで怒られる。

「わかったって。おっ？　噂をすれば来たみたいだ」

ウルベルトの言葉で、視線が店の入り口の方に向く。

「こちらになります」

たっちが先を歩き、その後にストロノーフの姿がある。

「久しぶりだな、アングラウス。会いたかったぞ」

「……そ、そうか」

挨拶もそこそこで二人も空いていた席に着く。

「話は、たっち殿から聞いた。いろいろとあったようだが深くは私からは聞かない。今は、再会を祝おう」

ストロノーフが自分とたっちの分の酒を頼む。

「またこうして生きて会えたことに」

来た酒を受け取り、ストロノーフが乾杯の音頭をとるわけだが先ほどからアングラウスは視線を合わせようとしない。

「照れ臭いのか、自分の惨めな姿を見られたくないのか分からないけ

ど男なら胸を張れよ。どう繕ったって過去が変わるわけでもないんだから」

「そうは言うが……」

「酒でも飲んで、ほらほら」

ペロロンに勧められるまま新しく届いた分も飲む。面倒なので酔わせて後はストロノーフに任せる作戦に切り替える。

「互いに話したいこともあると思いますですが食事でもしながら時間を過ごしましょう。戦士長様も遠慮などせずに食べて下さい」

「そうだな。焦る必要もない。とはいえ、何を話せばいいのか。私は、そこまで気の利いた話などは出来ない」

「そこは俺達にお任せを！俺達が適当に話して場を盛り上げますよ。そうですね、ウルベルトさん？」

「その方が楽しそうだしな。酒を飲めば話しやすくなるだろう。すみません、こっちにガンガン酒と料理をお願いします」

酒が進みやすいように準備を整えてから話をしていく。内容は、ここ最近の出来事を簡潔に。例えば、この前のギガントバジリスクの討伐や最近行っているモモン達との共同作戦。これには戦いを生業としている二人も興味を示す。

「エ・ランテルで話を集めたがめっちゃくちな物ばかりだったな。ギガントバジリスクを三人だけで倒したのもそうだが、数百規模のアンデッドの群れに五人だけで挑むのも最初に聞いた時はホラ話かと思っただくらいだ」

「また腕を上げたわけか。剣を合わせるのが楽しみだな」

「おいおい、それは無しだ。先に俺が約束してんだから」

「こちらは、お前と違って忙しいんだ。譲っても罰は当たらないだろう？」

酒と戦いの話で二人も話ができるようになった気がする。まだ互いに本音を話してはいないが時間の問題だろう。別に仲が悪いわけではない。すれ違いがあっただけで、互いに認めているのだから。

「しかし、そうなると思いますます気になるな。たっち殿が認めるモモンか。どれだけの強者なのか一度剣を交えて確認しておきたい」

「だったらいつそのことモモンさんも交えて戦えばいいんじゃない？
戦士長様にたっちさん。モモンさんにアングラウスさんの四人で
の戦いなら面白そうですし」

「集客力もありそうだな。もしあれなら俺とペロロンで仕切らせても
らうけど？」

二人の提案に三人の目の色が変わる。戦士としての性だろうか？
強者と戦いたいと思うのは共通の思いなのかもしれない。

「モモンさんには、私から話してみます。どうしますか、お二人は？」
「上等だ！ 王国で誰が一番強いかわかりやすくいいじゃないか。
俺は、それでいい」

「……王国戦士長としての地位はある。負けるわけにはいかない大事
なものだ。だが、今の世には明確な強さが民衆の光となる。誰が勝つ
ても王国の為になるのなら私も賛成したい」

「戦士長様ともなると建前も面倒ですね。そうだ、ついでにガガーラ
ンさんにも聞いてみましょうよ」

「そうだな。多い方が盛り上がる。早いところスポンサーも探して来
るか」

そうと決まれば二人の動きは早い。当の本人達を置いて、早速会場
の手配に回る。

「……いいのかわあれで？」

「大丈夫です。あの二人は、あれで正常ですから」

「本当に変わっている者達だな」

「だからこそ一緒に居て楽しいんですよ。前なんて……」

たっちは、仲間達との思い出を語る。此処での話や自分達が居た世
界での話を上手く混ぜながら語っていく。

◇◇◇◇◇◇◇◇

「その話、俺も乗らせてもらおうぜえ。戦士としちや受けないわけにも
いかないからな」

冒険者組合に居たガガーランは、二人からの話を受け入れる。

「でも、そうなると御前試合の時よりも豪華な戦いになりそうですね」
「本当なら俺も出たいんですが、魔法詠唱者が出る訳にもいかないの
で残念ですよ」

「ウルベルトさんは、自信があるんですね」
「ラキユースさんに勝利を約束しますよ」

久しぶりにラキユースに会えたことでウルベルトは物凄くテン
ションが上がっている。それこそ当日に五人の戦いに乱入しそうな
勢いだ。

「……イビルアイちゃんも俺が勝ったら喜んでくれるかな？」

ペロロンは、イビルアイが普段座っているはずの席に話し掛けてい
る。本日は、ラキユースが居る代わりにいつも居るイビルアイが居な
い。話を聞くと宿で本を読んでいるらしい。

「勝つ自信はあるのか？」

「ないですね。今の俺の武器じゃ勝ち目がないですよ」

「本当によく分からない奴だよな、お前は。イビルアイにちよっかい
出している時は問題児だが意外と冷静な部分もある。ペロロンみた
いなのは敵に回すと面倒だ」

「ガガーランさんにそう言ってもらえると嬉しいですけど、出来れば
イビルアイちゃんにも言っしてほしいですね。『ペロロン様カッコいい
！ 抱いて！』的な感じで」

「……しまんない奴だな」

そう言いながらもガガーランのペロロンに対する評価は高い。他
の二人からは明確な強さを感じるがペロロンからはそこまでのもの
は感じない。だが、そんなペロロンは問題なく二人と行動している。
もしペロロンの実力に合う武器があれば一気に化ける可能性を感じ
ている。

「なあ、ペロロン。弓騎兵の噂って聞いた事あるか？」

「弓騎兵？ なんのことですか？」

「最近、王都周辺をアンデッドの弓騎兵が走り回ってるらしいんだわ。
普通の馬よりも遥かに速い馬に乗ってるらしくてあつという間の出
来事なんだが、そいつはどうやら魔法の弓を持つてるらしい」

「本当ですか!？」

ペロロンにとつては欲しかった情報だ。思わず大きな声が出る。

「なんでもそいつに射貫かれた者に刺さっていた矢は燃えていたらしい。矢自体は普通の物らしいから属性の付与だろうが、どうだ？」

「やってみる気は無いか？ 話からすると戦える相手が少ない。俺達が動けばいいがいろいろとあつてな。最近じゃアンデッドのせいで余計に動きにくくなった。倒せば武器は戦利品としてもらえる。良い話だとは思わないか？」

「それって冒険者組合に依頼は来てるんですか？」

「あるにはあるが場所の特定とか強さは不明だ。さっきも言ったが走り回っているから調べようがないらしい」

「どう思います、ウルベルトさん？」

「すぐに戻るように言われてるけどいいんじゃないか？ 戦力が増える方がいいだろうし、魔法武器を持っているアンデッドが雑魚とは思えない。王国の平和の為に俺達がやるべきだ！」

「そう言ってもらえると助かります。本当は、私達が受けられればいいのですが」

「任せて下さい、ラキユースさん！ 俺がラキユースさんの憂いを払ってみせます！」

邪な動機のウルベルトはともかく、ペロロンとしては是非受けたい内容だ。話からするに火属性の付与を行える弓。矢を金属製に変える必要はあるが性能によってはブローラーノーンとの戦いにも役立つかもしれない。

◇◇◇◇◇

陽も明け、三人はアングラウスを置いて王都を離れる事になった。「世話になったな」

アングラウスは、たっちと握手を交わす。あの後に話し合い、アングラウスはしばらくストロノーフの下で厄介になる事にした。互いに剣技を高め、いずれ日を改めて行われる戦いに備えるそうだ。

「私は、恩義に報いただけですから」

「そう言ってもらえると私も気が楽になる。これで心置きなく戦えると言うものだ。私は、アングラウスと共に剣技を高める。たち殿も今より上を目指してくれ」

「分かりました。今度の戦いの時は、私が戦士長様を倒してみせます」

「馬鹿言うなよ。ストロノーフを倒すのは俺だ。たちも含めて全員俺が倒すからな」

随分と仲が良くなったものだ。

「あの三人、朝方まで飲んでたそうですよ？」

「知ってる。俺が魔法で二日酔いを治したからな」

「二人も世話になったな」

「別にいいですよ。それよりも当日はよろしくお願いします」

「大穴なんだから頑張ってくれよな」

二人が広めた五人の戦いの話は、一晩明ける頃には王都中の噂になっていった。王国戦士長のガゼフ・ストロノーフ。その王国戦士長と互角の戦いをした事のあるブレイン・アングラウス。アダマンタイト級冒険者チームの蒼の薔薇のガガーラン。前代未聞の早さで成長しているたち。そんなたちに圧倒的強さで勝ったと言われる漆黒の戦士モモン。今では、誰が勝つかで賭け事が行われている状況だ。ちなみに一番人気はストロノーフ。五番人気は、知名度が低いアングラウスとなっている。

「大儲けできるからそんな時は俺に掛ける」

「考えとくよ。じゃあ、またな」

三人は、アングラウスと別れ弓騎兵討伐に取り掛かる。何処に居るかも分からない相手だがペロロンの強化とウルベルトの下心の為に。

第38話

セバス・チャンは、ソリュシヤン・イプシロンと共にアインズの命令で王国を中心に情報を集める任務についていた。ソリュシヤンが商家の令嬢に扮し、傲慢で我儘な性格を演じて人目を引く役を。セバスがそんな我儘な主人に仕える生真面目な紳士として情報を集めている。他にも武技などのこの世界にしかない技や魔法を持つ者をシャルティアと共に捕らえる任務があったのだが今はしていない。理由は詳しく説明されていないが危険な勢力が居ると判明したために情報収集以外の活動は停止。シャルティアは、ナザリックでの待機となった。二人の活動もしばらくの間は自粛が続いていたが最近になり囿を兼任しながら再開となった。

(たっち・みー様……)

セバスは、王都で借りた貴族専用の借家の二階の窓から街を眺めていた。活動の場所を王都に移したわけだが此処に来るまでに興味を惹かれる情報を耳にした。王国に英雄候補の冒険者チームが誕生した。一つは、セバス達もよく知っている漆黒の戦士モモンと美姫ナーベの二人だけの冒険者チーム。功績や実績は少ないが実力はアダマントイト級と噂になっている。最近では、王国で起きているズーラーノーンによるアンデッドの討伐で各地を移動しているために知名度が上がってきている。

そして、もう一つがそれよりも以前から話題に上がっている者達。異例ともいえる早さで階級を上げ、今ではミスリル級となった三人組。ウルベルト。ペロロン。そして……セバスの創造者と同じ名前を持つたっちだ。奇しくも噂に聞きたっちも戦士として剣を振るっており、その誠実な人柄と真面目な性格は他の二人の分を差し引いても英雄候補と呼ばれるほどだそうだ。

「また考えておられるのですか、セバス様」

セバスの為に紅茶を淹れて来たソリュシヤンが訊ねる。普段演じている役割とは逆の立場だ。

「気にならないと言えば嘘になります。この世界に、この街にたっち・

みー様が居るのではと思う事はあります。ですが、噂に聞くと既にアインズ様が接触なさっている御様子。私達が囷としての役割があるとはいえ、本当にそうであるのなら報告の一つでもあるのではないのでしょうか？」

囷としての役割の為にこちらから情報をナザリツクに送る事はあってもその逆はない。万に一つ捕まり情報を取り出されては困るからだ。

「そうですね。アインズ様が至高の御方々に気づかぬはずはございません」

ソリュシヤンの言う通りだ。そもそもアインズは、この世界に来ているかもしれない仲間を探すためにわざわざモモンガからギルドの名前であるアインズ・ウール・ゴウンを自らの名前にしたぐらいだ。

「分かっております。分かっておりますよ……」

それでも思いは強くなる。自分の役割はあるが、できる事なら偶然でもいい……会えないだろうか？ 今はそう祈る事しかできない自分がどうしようもなく嫌になる。

◇◇◇◇◇

三人は、冒険者組合で聞いていた弓騎兵の情報を元に馬を走らせて探したのだが意外と早く見つけることは出来た。ただ、見つけたというよりは目の前を駆け抜けていったという方が正確であり、あつという間の出来事だった。話によると弓騎兵は明確な敵対行動はとらないらしい。通り道に居た者を射貫いては立ち去る。ある意味では、弓騎兵らしい戦い方なのだがこれがよくない。弓騎兵は、一般的なボーン・ライダーよりも一回りは大きい骨の馬に騎乗しているのだがとにかく速い。アンデッドなので休みを必要としないのと場所が障害物などの無い平野なので罫を仕掛けられないのも問題だ。縦横無尽に好き勝手走り回る者を相手にするのは予想以上に困難を極めた。

「どうしましょうか？」

戦闘力自体はそこまで高そうではない。もちろん魔法の武器を

持っているので注意は必要だが一発だけならウルベルトでも耐えられるぐらいだ。戦闘に持ち込めれば勝てるだろうがそれが出来なくて三人は立ち往生している。

「俺の魔法もペロロンの矢も当たる前に逃げられる。たっちさんに關しては戦いにならない。どうすんだよ、おい」

「森に追い込もうとしましたけど普通に振り切られて、森を沿うように逃げられましたからね」

せめて場所を変えてほしい。こんな見晴らしの良い場所ですらと？

「ウルベルトさんの最大の範囲魔法ってなんでしたっけ？」

「クラック・イン・ザ・グラウンド」だ。自分を中心に地割れで足場を崩すもんだが……半径5メートルつてとこだな」

クラック・イン・ザ・グラウンドは、周囲の足場を崩して足止めをする魔法。応用として拠点の破壊などもできる魔法だ。一見すると今回のような状況にうってつけに思えるが使っている間に逃げられる。それにそこまで足場も崩れないので上手くいったとしてもほんの僅かな時間だけだろう。

「呪いなら発動さえすれば距離は問題ないんだがアンデッドだしな。ヘイトを集めようにも攻撃が当たらん。ギガントバジリスクより質が悪いぞ」

「戦えないのは辛いですね。ですが、魔法の武器を抜きにしてもどうにかしたいところですよ。活動範囲も広いので近くを通れないようですよから」

「運がよければ通り過ぎて終わり。運が悪ければ矢が身体を貫通している。中途半端が一番被害が出やすいんですね。危険なら避けるけど、それでもないなら遠回りなんてしたくないですよん」

打つ手なしと悩んでいる三人を遠くナザリック地下大墳墓から見ている者が二人。一人は、今回の事を考えたアインズ。もう一人は、補佐をしているパンドラだ。

「他の者には取られないようにしたのがまずかったか？」

集めさせてはいるが魔法武器は珍しい。実際、欲に目が眩んだ者達

が噂の出始めた頃にはよく来ていた。それに対抗するために足を速くしたのだがこれでは意味がない。

「ですが、下手に遅くすると見知らぬ者の手に渡る可能性があります。だからと言って今更やり方を変えるのは不審がられるかと思えます」「良い案だと思っただがな」

「内容は素晴らしいと思います。ただ、細かい点の調整が出来ない状況ですから。ナザリックで実験すれば気づかれてしまいます」

これは、あくまでもアインズとパンドラが行っている極秘の作戦だ。詳細が分かれば、三人の正体も分かってしまう。

「——ちよつとお待ちを」

突然、パンドラの様子に変化が現れる。おそらくだがメッセージの魔法で連絡でも受けたのだろう。

「……分かりました。少しお待ちください。アインズ様にお伝え致しますので」

「私にか？」

「はい。王都に居るソリュシャン・イプシロン殿からの報告なのですが、セバス・チャン殿が人間を連れて帰って来られたようです。それで、アインズ様のご指示を受けたいと申しております」

「……ん？ すまない、状況がよく分からないのだが？」

説明を受けるとこんな感じだ。セバスがいつも通り情報を集めていたところ捨てられるように袋に詰められていた少女を見つけたそうだ。その時に少し揉めたらしいがセバスはそのまま屋敷へとその人間を持ち帰って来た。少女の容態を確認したところすぐにでも治療が必要と判断。これ以上の勝手な行動は主であるアインズの考えに反する可能性があるので指示を仰ぎたいと連絡があった。

「なるほど、なら話は決まっている。わざわざ助ける必要などはない」
当然だろう。見知らぬ他人を助ける筋合いなどない。

「それなのですが……アインズ様」

「なんだ？ 他にもあるのか？」

「助けた理由があるみたいなのです」

「理由？ 価値のある人間なのか？」

「いえ、価値はないと思われれます」

「ならなんだ？」

パンドラは言うかどうか悩む。これを言っているのだろうか。

「セバス殿は、『たち・みー様なら助ける』と思ったそうです。どうやらたち・みー様の話を聞き、思いが強くなったのではないかと思われれます」

「……王都に居るんだったな」

王都は、たち達が拠点として使っていた場所だ。そこには、たちの痕跡が至る所にある事だろう。セバスには、情報収集をさせている。その中には実力者について調べるとある。

「感化されたか。セバスは、ナザリックでは珍しい善人だからな」

アインズもセバスの気持ちは分かる。この世界に来て、アインズは二人の少女の命を救った事がある。それは、アインズの本心ではなく、たちの事を思ったからこそだ。たちさんなら助けるだろうと。

「助ける事によって問題は起こるか？」

「詳細は不明ですが揉めた以上は何かあると思われれます。話を聞く限りともな相手ではないでしょうから」

「そうか。パンドラ、お前に権限を与える。治療の許可を出し、何かあればフォローしてやれ。但し、私に詳細を必ず伝えろ」

「畏まりました。それでは、あちらにお伝えします」

パンドラは、『メッセージ』の魔法で今のことを伝える。

「さて、どうしたものか」

セバスの問題に三人の問題。優先度は決まっているが、やる事は増える一方でなかなか減らない。それでも楽しいと思えるのはなぜだろうか？ 否、答えは分かっている。だからこそこの悩みを楽しもうではないか。

第39話

三人は、弓騎兵を倒すことを一旦諦め王都へと戻る事にした。いろいろと試してはみたが戦う事すらまともに出来なかったからだ。そこで新しく作戦を考え直し、ストロノーフの屋敷を訪れる事にした。「つまり、私達の協力を得たいという事だな？」

話を聞いたストロノーフは、椅子に背を預け考え込む。

「そうなります。いろいろと試したのですが私達の馬では追いつけません。それに馬上での戦いも得意ではありませんので他の方法をとる以外にありません。ペロロンさん」

たつちに言われ、ペロロンが木の板に書いた簡易的な地図を取り出す。

「それでは、俺が説明させていただきます」

作戦は簡単だ。騎兵部隊が弓騎兵をウルベルトが居る目標地点へと追い込む。その際に足止めの魔法に巻き込まれないギリギリの場所にウルベルトを中心として左右に二人配備。あとは、その隙間を通して魔法を行使して足止め。左右に居るどちらかが足が止まっている弓騎兵の骨の馬の脚を狙い動けなくさせるのが今回の作戦の全容である。

「——と、こんな感じですよ。それと、左右の内の一人はたつちさんで決まりなんですけど、もう一人はどっちがいいですかね？」

「それなら俺がやる。剣速には自信があるし、ストロノーフが騎兵を率いた方がいいだろう。それに俺も馬は得意じゃない」

本日から居候となったアングラウスが自分の名前を出す。早速、ストロノーフの下で王国の兵士達と混ざり訓練をしたらしい。あくまでも聞いた話だがアングラウスの居合はかなりのものらしくストロノーフのお墨付きだ。

「王に進言すれば、演習の一環として私のところだけは使えるだろう。ただ、軍と冒険者が共同で行うのを快く思わない者も居る」

「部下から聞いたけど王様と貴族で揉めてんだってな。この前あった法国との一件も邪魔されたって聞いたぞ」

街の噂。王をトップとする王派閥と大貴族達をトップとする貴族派閥で王国は対立しているらしい。それも、貴族派閥には他国と同じにいる者が居ると噂がある。

「恥ずかしい限りだ。だが、なにか考えがあるんだろ？　そうでないなら話を私に持って来るとは思えない」

「実は、帝国の方の冒険者組合から呼ばれてんだよ。話によると、フリーダ・パラダインが絡んでいるらしい。ついでに言えば、モモンさん達も呼ばれてんだ。ズーラーノーンの対応をしている俺達がかしたら移るかもしれない。早くて、安くて、上手く各地でやっているから貴族派閥の人達も……居なくなったら困るんじゃないかな？　まあ、モモンさん達は残るかもしれないけど、道中暇だからいろいろと言うかもしれないよ、俺達」

「王国と敵対している帝国に移られたら困るな。アンデッドの対応にも支障は出るだろう。民衆も不満を抱くだろうし交渉の材料にはなるか」

民の安全を守ろうとした者を追い出せば印象は悪くなる。更に小競り合いとはいえ定期的に王国と戦争をしている帝国に英雄候補とさえ言われる者達が移る。アンデッドが自らの領地を闊歩するのをよしと思う者も居ないだろう。

「ただ、申し訳ありませんがこちらとしては報酬として弓を頂きます。それが受け入れられないようなら話は無かったという事をお願いします。軍との共同となれば戦利品を王国に取られてしまいますので、こちらとしてはそこだけは譲れません」

これは、三人で決めた事。受け入れられないなら別の方法を考える。

「それは、私も賛成だ。国の手に渡れば死蔵になりかねない。持つのは、ペロロンになるのだろうか持ち主として相応しいと思う。明日にでも話を持って行こう」

住み込みの老夫婦が作ってくれた料理を食べながら話していたがすっかり冷めてしまった。だが、これで後は国次第となる。

◇◇◇◇◇

次の日。ストロノーフは、昨夜の件を王に進言し許可を得ることに成功した。王都周辺は、王家が納める領地でもあるため民意を得るといふ打算もあるとストロノーフから言われたが、三人からしてみたら弓さえ手に入ればそれでいいので裏の事情はこの際どうでもいい。今は、予定通りストロノーフ率いる騎兵隊が弓騎兵をウルベルトの所に追い込んでいるところだ。

「こつちに来ましたね」

ウルベルトを矢から守るために傍にペロロンは待機している。左手には木の盾。右手には、スパイク付きのクラブを装備している。

「昨日、痛い思いをしてまでタイミングだけはつかんだからな」

ウルベルトは、作戦を成功させるためにたつちとペロロンと共に弓騎兵の前に立ち魔法のタイミングを身体で覚えた。おかげで、二人が防ぎ切れなかった矢を腹部に受け、矢と炎の痛みの両方を同時に味わった。

「そつちは、大丈夫ですか？」

左右で待機しているたつちとアングラウスに確認をとる。

「私は、いつでも大丈夫です」

たつちは、盾と片手用の戦槌を地面に置き、鞆も外して抜き身の剣だけを手に持っている。少しでも身軽になるために全身鎧ではなく、ストロノーフから借りた軽装にする徹底ぶりだ。

「こつちもだ」

アングラウスは、納刀の状態で構えている。いつでも最速の居合を抜く覚悟は出来ているようだ。こちらにも念のために両手用の戦槌が用意されている。

「どつちに転んでも大丈夫そうですね。あとは、間を通ってくれるか……」

知恵はそこまでないようだがロープなどの罠には反応した。今のような布陣で足を引っかけようとしたら避けられるか、飛び越えるかの行動に出た。どうやら逃げる事に関しては知恵が回るらしい。そ

の為、魔法による突発的な罠が必要なのだ。

「カウントを始める！」

ストロノーフ率いる騎馬隊に追われ、弓騎兵はこちらへと全力で駆けてくる。どうやらストロノーフの部下達は優秀らしく、追い込みとは別に弓騎兵を取り囲むように左右からも挟んでいる。通常の馬よりも速い弓騎兵にここまで上手く合わせられるのは日頃の鍛錬のおかげだろう。

「5、4、3、2——」

カウントの途中で弓騎兵は、ウルベルトに弓を向け、番えていた矢を放つ。

「相手が悪いですよ！」

ペロロンは、馬に乗り迫りくる弓騎兵の矢を正確に捉える。いつ放たれるか分からない速く動く相手からの矢を見事に手に持つ盾で受け止めた。

「——1、《クラック・イン・ザ・グラウンド》」

ウルベルトは、身体で覚えたタイミングで魔法を行使する。すると、ウルベルトを中心に地面にヒビが入り大地が揺らぐ。

(こつちに来やがったな)

弓騎兵が飛び込んできたのはアングラウスの方。アングラウスは、間合いを見極め武技を続けて発動する。《領域》は、半径3メートル以内の事を手に取るように把握する事が出来る。ウルベルトの魔法でバランスを崩したおかげで止まって見える。《瞬閃》は、高速で剣を振りぬく武技。居合に適した刀との相性は良く、瞬く間に骨の馬の脚を切断する。刀の切れ味を考慮してもアングラウスの剣の腕は達人の域にある。

「——もらった！」

アングラウスの刀の一振りによって脚を切断され、勢いそのままに倒れた弓騎兵を最初にペロロンがスパイク付きのクラブで叩き潰す。

《強撃》

地面に置いてあった片手用の戦槌に持ち直したたちも追撃に参加する。

「俺も忘れるな！」

アングラウスもストロノーフから借りておいた両手用の戦槌で追撃に加わる。

三人により滅多打ちにされた弓騎兵は、魔法武器である弓だけを残し惨めな程にバラバラになる。

「終わってみれば呆気ないもんだな」

たった一騎の弓騎兵相手に二十人近くを動員して倒した。少々情けないがまともには戦えない強敵ではあった。戦いになればあつという間だったが。

「どうよ、たっち。俺の武技は？」

初めてたっちに見せた武技をアングラウスが自慢気に語る。

「速いですね。ですが、戦士長様には勝てないと思いますよ？」

「……そこは素直に褒めろよ」

そんな会話をしている二人をよそにペロロンは、弓騎兵が持っていた弓を拾い上げる。見た目は、銀色のあまり見ない紋様が刻まれた軽い弓。やつと手に入れる事が出来た魔法の力が宿る武器だ。

「おめでどう。それは、今日からペロロンの物だ」

馬を歩かせ、ストロノーフが傍にやって来る。

「ありがとうございます。皆さんのおかげで手に入れる事が出来ました」

ペロロンは、お礼を言うのと深々と頭を下げる。

「礼を言われる筋合いはない。王の治める領地と民の安全を守れたんだ。こちらからも礼を言わせてもらう」

過剰ではあるが、必要な戦力での戦いは無事に終わった。今日は、ペロロンが参加者に奢ると言い朝まで飲む事となった。

第40話

王都の屋敷にて、セバスは来客の対応をしていた。

「お忙しい中御出で頂きありがとうございます」

「いえいえ、アインズ様の御命令ですからお気になさらず」

「そうですよ、セバス。アインズ様が御認めになり、許されたのですからいつまでも引きずってはいはそれこそ失礼と言うものです」

セバスの前には、今回の件の対処をアインズから一任されたパンドラと手伝いとして来たデミウルゴスが座っていた。

「それよりも幾つかお聞きしてもよろしいでしょうか？ パンドラから話を聞きましたが改めて確認をしておきたいのですが？」

デミウルゴスがセバスの件を聞いたのは、ソリュシャンからパンドラに連絡があつてすぐの事だ。だが、デミウルゴスは別の件で忙しく、次の日である今日に至るまでの情報を此処に来る前にパンドラから簡単に聞いたただけだ。

「それでは、僭越ながら私が場を取り仕切らせて頂きます。アインズ様からこの件を一任された私は、デミウルゴス様に連絡を入れさせて頂いた後にペストーニヤ・ショートケーキ・ワンコ殿を人間の治療のために派遣させて頂きました」

ペストーニヤは、ナザリツク地下大墳墓のメイド長であり高位の神官でもある。ソリュシャンには、回復用のスクロールと呼ばれる一回限りのアイテムを持たせてはいるが、現時点では安定したスクロールの供給が出来ない状況にある。その為に使用の許可は下りず、代わりにペストーニヤが派遣される事となった。

「その後からは、私からお話させて頂きます。ペストーニヤの魔法により無事にツアレニーニヤ・ベイロンは傷が癒え助かりました」

「それが人間の名前なのかい？」

セバスは、頷く。

「ペストーニヤの話では、後遺症があり上手くまだ言葉などは話せないのですが聞きとれた限りではそのようです。今は、パンドラ様から言われた通りにペストーニヤとソリュシャンによりメイドとして使

えるように練習をさせています」

「そこが少し気になる。パンドラ、どうしてそのような事をアインズ様は命じられたのかな？ それは、パンドラとアインズ様が二人だけで行っている事に関係があるのだろうか？」

デミウルゴスは、注意をパンドラへと移す。デミウルゴスとパンドラの付き合いは短い。パンドラは、最近まで宝物殿の中に居たために存在を正確に知っていたのはアインズだけだ。外での活動を行っているデミウルゴスにとっては、パンドラはあまりにも未知の部分が多い。

「二度、セバス殿の付き添いで私もお話させて頂きました。するとどうでしょう？ か弱き人間の身体を奮い立たせ、恐怖に怯えながらもセバス殿の行った行為を咎めないでほしいと懇願されました。涙を流しながらも、私のこの目を見ながら真つ直ぐに言葉を口にした姿は……今まで手に入れた人間とは違うと判断致しました」

パンドラは、ドツペルゲンガーの姿のまま力を隠匿せずにツアレに会った。普段、力を隠匿するアイテムの効果によりセバス達は人として活動が出来ている。しかし、本来の姿は王国を一日足らずで滅ぼす事が出来る化け物。パンドラは、それを包み隠さずにした状態でツアレと会いこう言った。「貴女を助けたことにより、セバス・チャンは殺される事となりました」と。

「なるほど、それは興味深いね。アインズ様から貸し与えて頂いた人間達にも見習ってもらいたい限りだよ。少し教育を施し、その身をもって私の仕事を手伝ってもらったらすぐに音を上げてしまったからね。いろいろと苦労したよ」

デミウルゴスは、その時を思い出したからか笑みを零す。それに対して、セバスは表情を曇らす。デミウルゴスがなにをしているかは知らなくても、なにをするかは予想が出来る。他人の不幸を喜びとする悪魔の笑みは、生者にとってはなによりも恐ろしい。

「そこで、セバス殿の命を助ける代わりとして条件を提示しました。内容は、メイドとしてセバス殿達の活動の手伝いをする事。セバス殿は、最後まで責任をとる必要がありますし、人が居ることで活動も

しやすくなることでしょう」

「確かにそうだね。この規模の屋敷を持つ者が、使用人を一人だけしか雇っていないのは少々怪しいところがある。全てを知った上で自ら行おうと決めたのなら裏切る可能性も少ない。これで、セバスに好意の一つでももってもらえさえすれば良い人形になるんだけどね」

「なるほどなるほど。それは、面白そうですね」

当の本人を置いて、デミウルゴスとパンドラはそれぞれの思惑で笑みを零す。

「さて、もう聞きたいことはこれで十分です。今回の私の任務は、少々厄介ですね。手に入れた人間だけで行えと言うのがアインズ様と相談されたパンドラからの条件ですので時間が惜しいですから」

「できそうですね？」

「そうですね。不安が無いと言えます嘘になります。一応、見張りは付けておきますが少なくとも裏切ることはないと思います。むしろそれだけの物があるのならばもう少し楽しめたのですが、残念です。それでは、私はこれで失礼させて頂きます」

デミウルゴスは、二人に別れの挨拶をすると任務へ移る。

「セバス殿。今回の件は、直接関わった者以外には『アインズ様の御命令』で人間を確保したとお伝えします。アインズ様は、今回の件は自分に責任があるとお考えでおられます」

「悪いのは私です！ アインズ様には何一つ——」

パンドラは、人差し指を口の前に持って来る。それ以上は言わないようにと。

「アインズ様は、私達の心の内まで見抜いておいでです。この場所は、セバス殿にとっては心を揺さぶられる事と思います。奇しくも同じ名前を持ち、その人柄も酷似している。感化され、たちち・みー様に対しても同じ思いが強くなるのも仕方がないこと。アインズ様は、そう思われたからこそ今回の件を許されたのです」

返す言葉もない。冒険者たちちの話の聞く度にたちち・みーの姿を思い出していた。

「セバス殿。貴方の中では、未だにたちち・みー様が強く残っておられ

るのですね?」

答えるまでもなく見抜かれているのだろう。

「……はい。未だにたち・みー様をお慕い申しております」

「私達を見捨てたかもしれないのに?」

「例え、見捨てられたとしても私がたち・みー様の御手により創られた事は変わりません」

「そうですか」

セバスの言葉を聞いたパンドラは、ジッとセバスの事を見る。球体に二つの穴が空いたような目を持つパンドラの表情はセバスには読めない。

「仮の話なのですが、アインズ様とたち・みー様。どちらかを選ぶとしたらどうしますか?」

選べるわけがない。どちらも神のような存在。選べるわけが……

「私は、アインズ様を選びます」

悩むセバスとは違い、パンドラは呆気なくそう答える。

「私は、正直に言ってしまうえば他の御方に関しては、アインズ様程にお慕いしてはおりません。アインズ様が命じれば、たち・みー様を殺す事に躊躇いなどはありませんよ」

パンドラの言葉に湧き上がる感情がある。

「……たち・みー様を殺す?」

「はい。そう申しました。躊躇いもなく、この手で——」

その言葉を聞いた時には手が出ていた。

「……これは?」

二人の間に在った調度品であるテーブルを踏み壊し、パンドラの軍服の胸倉を強く掴んでいる。

「訂正してくれませんか?」

「なにを、です?」

「たち・みー様を殺すと言った事です」

普段の温厚な紳士であるセバスが見せる事のない表情をパンドラへと向ける。次に発する言葉次第では殺しかねない。

「……合格です。セバス殿に話してもいいかもしれません」

「合格？」

「そうです。これからセバス殿に一つお話があります。これは、アインズ様と話して決めた事です。私には、それをセバス殿に話す役割があります。その後でよければ殴るなり、殺すなりお好きになさってください」

アインズの名前が出た事により冷静さを取り戻していく。

「……どうかなさいましたか!？」

部屋の扉が勢いよく開き、ソリュシャンが慌てた様子でそこに居る。今の音でなにかあったと思っただろう。

「これは、失礼。つつい話話が盛り上がってしまい騒いでしまいましたね。なにもありませんのでご心配なさらず。そうですよね、セバス殿？」

「……その通りです」

セバスは、ゆっくりとパンドラから手を放し離れる。

「そうですか。お二人がそう仰るのなら私からは何も」

ソリュシャンは、疑いながらもその場から去る。間違いなくアインズに報告をすることだろう。

「申し訳ありません。失礼な事をしてしまいました」

セバスは、深々と頭を下げる。

「かまいませんよ。挑発するように言ったこちらに原因がありますので。ですが、今回の件と合わせて合格です」

「……パンドラ様。先ほどから申している合格とは何の事なのでしょうか？」

「立ち話もなんですから座りましょう」

パンドラに促され二人は座る。座るのだが、パンドラは先に席に着いたセバスの隣へと腰掛ける。

「これから話す事は、私とアインズ様しか知らない事です。他言した場合、殺すことになりますのでお忘れなく」

そう口にする言葉は、ツアレに行われた試験ではなく殺意が込められた本物の死の宣告。パンドラは、明確な敵意を持ってセバスへと口にする。

「勿論、アインズ様からの許可は得ておりますので御安心ください」

アインズが許可を出したのならその時は抵抗などはせずに受け入れる。それが、アインズを主として仕える者としての在り方だろう。

「他言する気はございません」

「いい返事です。まあ、話を聞けばししないと判断したからなんです。セバス殿は、この世界に居る冒険者たちが気になって仕方がない御様子。そこで、アインズ様の御言葉として本物かどうかを御伝えします。そうすれば、セバス殿の中にあるわだかまりも無くなると思います」

「そのようなことでもいいのですか？」

アインズの言葉なら形として納得は出来る。むしろそうしてもらえた方がありがたい。

「そのような事とはいけませんね。アインズ様の御言葉を聞いて行われた行動は、アインズ様に僅かばかりとは言え責任が生まれます。それ故に行った行動によっては死をもって償うのが仕える者としての務めではないでしょうか？」

「確かにそうですね。私は、既に一度自らの判断で勝手な行動をとってしまいました。次に何かあった時は、どのような処分でも甘んじて御受けします」

「結構。それでは、アインズ様の御言葉として御受け取り下さい。冒険者たちは、間違いなくなつち・みー様になります」

……今、パンドラはなんと言った？

「他の御二方もそうです。ウルベルト・アレイン・オードル様。ペロロンチーノ様になります」

「……それは、真なのでしょうが？」

「アインズ様の御言葉として、と申したと思いますが疑いになられるのですか？」

「い、いえ……そんなことは……で、ですがそれだと——」

本物という事になってしまう。

「少し事情が込み入っています。その為にこの話は、アインズ様と私だけしか知りません」

「それでは、何故私にこの話をしたのですか？」

「そこなんですよ！ セバス殿は、人間をどう思いますか？ 殺したいですか？ 食べたいですか？ 玩具として遊びたいですか？」

「いえ、そのような事は特には思いませんが」

「それが今は必要なのです！ 後で、実際に御三方を私と共に見に行きますがその意味がよく分かると思います。今の御三方は、生まれ変わり人間へとなられたのです。転生のアイテムなどで行う種族を変えるものではなく、もっと根源的な転生。その為か、記憶などはありませんがアインズ様に感じるような繋がりはないのです」

パンドラの言葉がよく理解できない。至高の存在である御方々がこの世界に居た。それだけの話ではないのだろうか？

「詳しいことは、またの機会としましょう。百聞は一見に如かずとも申します。それでは、共に会いに行きましょう」

パンドラは、姿を人間のものに変えると変装を施し、セバスを連れて目的の場所へと移動する。

「気持ち悪い……吐きそう……」

「俺も……」

「飲み過ぎですよ」

たつちは、昼過ぎまで飲んでいたペロロンとウルベルトに肩を貸して宿へ戻っている。弓騎兵を倒した祝宴は、ストロノーフ達が帰った後も行われた。

「ウルベルトさん……魔法を……」

「もう空っぽだよ。何度も気持ち悪くなつては使つてたから残つてねえ……うう……気持ちわる……」

ウルベルトとたつちからも金を借りて行われたデスマーチ。酔つて潰れようにもウルベルトによって回復させられ全員が最後まで参加をする事となった。

「今日は、このまま休みましょう。明日は、朝一番でエ・ランテルに戻りますから。いいですね？」

「耳元で騒がないでくださいよ……」

「わかったから、静かにしてくれよお……」

たつちによつて、宿へと二人が運ばれている姿を見つからないようにパンドラとセバスは見ていた。

「どうですか？ たつち・みー様だと確証がありますか？」

「……いえ、分かりません」

パンドラの言っていた意味が少しだけ分かった気がした。姿は変わってもその声や仕草は記憶にあるたつち・みーそのものに思える。だが、アインズに感じる繋がりのようなものはない。

「繋がりには、アインズ・ウール・ゴウンに所属する者だけが持つものです。ですが、至高の御方であるアインズ様の場合でいえば、私達のは違い繋がりの方の光のようなものは一際大きくあります。仮に御三方がお戻りになられ所属しなおしたとして……どちらになると思いますか？ アインズ様と同じか？ それとも私達と同じか？」

セバスに分かるわけがない。話からするにアインズですら分からないのだろう。

「確たる証拠をお持ちなのは、アインズ様だけ。命じられれば、異を唱える者は居ないでしょうがそれではいけません。些細な事が不和をもたらす事もあります。なにかもがアインズ様と同じになれるという保証がない以上は安全を確保してからでないとお迎えすることは出来ない。そう、アインズ様は御判断なされました」

「私は、なにをすればよろしいのでしょうか？」

「セバス殿には、後で私と共にアインズ様と御会いになって頂きます。その時にまだ話していない事や今後の事について御話しします」

◇◇◇◇◇

パンドラと共にセバスは、人払いが済まされたアインズが居る執務室へとやつて来た。

「形式的なものはいらない。早速、本題へと入ろうか」

アインズは、この場所から一部始終を遠隔視の鏡によって全て見ていた。二人が行動する上で安全を確保する意味もあつたが自分の目でセバスの様子確かめたかつた。

「私の口から改めて言おう。あの三人は、本物で間違いない。私は、人として在る三人と会った事があるからな。ちなみに、先ほどのパンドラが模した人の姿は私になる」

セバスは、同じように並んでアインズの前に立つパンドラの方を見る。すると、改めてパンドラは人間の姿へと変わる。

「この姿は、アインズ様の人として在る時のものだそうです。今回は特別に私が高貴なる御姿をお借りしております」

パンドラは、敬意を表すためにアインズに首を垂れる。

「パンドラ。気持ちは嬉しいがその姿ではやるな。自分にそんな事をやられるのは気味が悪い」

「申し訳ありません。以後、気をつけます」

パンドラは、姿勢を正し本来の姿へと戻る。

「さて本題なのだが、たちさんに対してセバスは未だに忠誠心があるとこちらは判断した。先ほどのパンドラへの行為を見せてもらったがよかったぞ」

「お恥ずかしいところをお見せ致しました」

「そう言うな。人間を助けた事からもセバスが人に対して悪意を持っていない事も分かった。私としては、三人の安全を確保するためにも協力をしてもらいたい」

「何なりとお申し付けください。全身全霊を捧げます」

セバスの言葉には、今まで以上の決意が感じられる。アインズだけではなく、たち・みーの事があるからだろう。

「結構。それでは、セバスには手に入れた人間をペストーニヤとソリュシヤンと共にメイドとして一人前に育ててもらう。その後、折を見て誰かをそちらに送る。ナザリックの者達は、人に対してあまりにも対応が悪い。そのように創ったのは私達だが今回ばかりはそうも言っていない。私には分からないがパンドラが言うには、私と三人では受ける印象が違うらしい。それが単にギルドに所属しているかの有無だけなのか分からない以上は慎重に行動したい」

「アインズ様の御心のままに」

「では、詳しいことはまた話すでしょう。いきなりで頭の中も混乱し

ていると思うからな。それと、他にもやっってもらう事がある。今、ナザリツクでは連携の大切さを学ばせている。セバスもそれに参加してもらおう。既に他の者達は、アルベドの下で行っている。パンドラ、歩きながらでかまわないから説明してやれ」

「畏まりました。それでは、セバス殿こちらに」

セバスは、パンドラに連れられ部屋から出て行く。

「パンドラに言われ、セバスを協力者に見たが悪くは無かったな」
対応を任せたパンドラからセバスを協力者へと招くかどうかを相談された時はどうしようかと思った。ただ、パンドラの言うアインズと三人との印象の違いというものがよく分からなかった。そこでセバスで三人を見た時の反応を試したのだが、見ていた限りセバスもどうやら素直に受け入れられないぐらいの差はあるらしい。

「やはり、人に対してもう少し対応がよくなってからでないとダメだな」

今回の件で、迎え入れるのは時期尚早であると再確認できた。せめて、至高の存在として思えなくても最低限の安全を確保できるぐらいの関係を築きたい。

「さて、どうするか……」

今も遠見の鏡は三人を映している。そこに加わりたいと願う事しか今はできないが、必ずもう一度そこに加わってみせる。その為にもできる事を考え一つずつ確実に成し遂げて行く必要がある。

第41話

魔法の弓を手に入れた三人は、エ・ランテルに戻るとモモンとナーベと合流し、アンデッドの討伐に精を出していた。もつともペロロンのレベリングを重点的に行いたかったので主に戦っているのはペロロン一人だけだ。

「常時発動型の《最適化》は最高ですね！ 今まで以上に楽ですよー」
パッシブスキルである最適化は、行動に補正が付く。既に習得済みの《速射》に《狙い撃ち》と《連射》を組み合わせて普段は行っている訳だが、これらの一連の流れを無駄なく行える。時間にすれば一秒にも満たないものではあるが本人の技術と合わせると一手増える事になる。他にも《狙撃》のスキルの習得により遠距離の敵に対しても補正が付いた。

「ペロロンさん。新しい矢です」
「どうもです」

ペロロンは鼻歌交じりで空になった矢筒を外し、代わりにたつちから受け取った新しい矢筒を装着する。これで取り替えた矢筒は、五つ目になる。

「単純だと楽で良いですよね」

最近では、スケルトンやゾンビ以外にもスケルトン・ライダーやレッサー・ヴァンパイアなどが混ざるようになってきた。それでも純ミスリル製の魔法の弓を手に入れたペロロンによる遠距離からの一方的な攻撃に成すすべもなく倒れていく。魔法の弓により火属性の力を得た鋼鉄製の矢は、スケルトンやゾンビ程度の弱いアンデッドなら一撃で葬るだけの威力がある。

「ペロロンさんの腕があつてこそだと思えますよ」

連射により手元は忙しく動く。ほぼ同時に三本の矢を放ち、その上で頭部を狙って射貫けるのはペロロン自身の腕によるものだ。スキルは、あくまでも補正でしかない。

「たつちさん、スケルトン・ライダーが来ます」

「任せて下さい」

スケルトン・ライダーがペロロン目掛けてランスを突き出しながら迫って来る。それを間に割って入るようにして、たつちが盾をスケルトン・ライダーに向けて身構える。勢いの乗ったランスの一撃が迫りくるがそれを逸らすようにして盾で弾き飛ばし、《スパイクアタック》によつて逆に骨の馬に盾で迎撃する。すると、まるで巨石にでも衝突したかのように骨の馬は盾に触れた部分から砕け亡骸を撒き散らす。「痛そうだな」

そんな二人の様子をキャンプ地から一部始終見ていたウルベルトに召喚されていたインプ達は、命じられていた通りに行動をしていく。彼らの手には、打ち漏らしを処理するためのクラブが握られており、ケラケラと不気味な笑みを浮かべながら地面でもがく者達を叩き潰していく。

役割を分担しながらレベリングを行っている訳だが最近は少し物足りなくなってきた。ユグドラシルの時と同じようにレベル90までは簡単にレベルが上がると予想しているのだが流石に敵が弱過ぎる。数が居るのでいずれは成長する事になるが時間が掛かる。だからと言って、まともな装備が揃わない現状では対処できる敵も限られる。

「すいませんね、ウチの鍛錬に付き合ってもらっちゃいまして。お礼にとびきり美味しいのを作りますから待っていてください」

三人の中で唯一料理のスキルを持つウルベルトは戦いの補助をインプ達に任せて料理を行っている。今日は、トマトソースの瓶詰めと出来立てのパンが手に入ったので、ピザパンとトマトスープを作る予定だ。モモンとナーベを加えた過剰な戦力は、アンデッド討伐をピクニックへと変えている。おかげで戦いながらも普通に昼ご飯を作れるぐらいの余裕が持てる。

「ウルベルトさんは、料理がお好きなのですか？」

火を囲んで向かい合うナーベに聞かれ考え込む。

「今は好きかな？　前は、食えればいいやぐらいだったけど自分で作るようになってからは少し拘ってるかな。人気のパン屋のフワフワなパンに酸味がほどよいトマトソースを掛けて山羊のチーズを乗っ

ける。最後にベーコンを乗つけて焼いてやればウルベルト特製のピザパンの完成！ 残りのトマトソースは、先に茹でといた野菜を加えてスープにすればもう一品だ」

ウルベルトは、密かに料理スキルのレベルをⅠからⅡに上げている。初めは仕方なくやっていたが、今では素材にも拘るぐらいにハマっている。

「あと少しで出来るけどモモンさんはどうする？」

モモンは、キャンプ地を挟んだ反対側の小岩に腰掛けながら背を向けるようにして見張りをしている。

「誘ってはみませんが、おそらくモモンさんは断られると思います」

五人で行動するようになってから分かったことがある。モモンには、宗教上の理由で戦いで命を奪った日は食事を他の者と共にできないという制約がある。ただ、それとは別に一緒に食事をとらない理由があった。

「モモンさんは、過去の出来事を忘れる事ができません。食事をしている時に奇襲を受けた事を」

モモンが語った昔話。一時的にとはいえ共に行動していた者達がモンスターに奇襲により全滅。未熟故に見張りが必要ないと判断して警戒を緩めたせいで奇襲に対応できなかったと今でも後悔しているとモモンは語った。もしかしたらその時の事が影響して珍しい戒律へと繋がっているのかもしれない。

「まあ、無理強いはいしないけどさ。はい、コレ。モモンさんの分」

綺麗な布に出来立てのピザパンを乗せてナーベに渡す。

「スープは、もう少し掛かるから先に持って行ってあげて」

「ありがとうございます。それでは、モモンさんの下へと持って行きます」

ナーベは、準備していた紅茶の入ったコップを一緒に持って見張りをしているモモンの下へと向かう。そんな様子をウルベルトは、他の分を用意しながら見ている。こちらを向いていないので顔は見えないがヘルムを脱ぎ、ナーベから受け取ったピザパンをモモンは食べている。髪は、ナーベと同じ黒。話によると、スレイン法国より南にあ

る国の者達の特徴らしい。モモンとナーベは、あまり過去を語らないが最近ではそちらの出身なのではないかと噂されている。

「お腹ペコペコですね」

「お疲れ様です、ペロロンさん」

どうやらアンデッドの討伐が終わったようだ。モンスターの質が低く数も百程度ならこんなものだろう。

「あと少して二人の分もできるから」

調理中のピザパンの前に紅茶を沸かしていた手鍋から二人の分の飲み物を準備する。

「今日もモモンさんは一人ですか」

「ナーベさんも傍に居ますけどね」

ナーベは、モモンが食事をしている時は片時も傍を離れない。食事をしているモモンの代わりに警戒をしているのだろうが、傍から見ると恋人にしか見えない。

「本当に恋人じゃないんですかね？」

「どうでしょうか？ 本人達は違うと言っていますからね」

「別にどっちでもいいだろ。ほら、二人の分も出来たぞ」

二人の分も綺麗な布に乗せて手渡す。

「そう言えば聞きました？ モモンさん達とクラルグラの一件」

「ああ、聞いた聞いた。イグヴァルジさんが喧嘩売ったって話だろ？」

これは、三人が王都に行っていた頃の話だ。エ・ランテルの冒険者組合に所属するミスリル級の冒険者チームは四つある。イグヴァルが代表の『クラルグラ』。ペロテが代表の『天狼』。モックナックが代表の『虹』。そして、チーム名は正式には無いが、漆黒の戦士であるモモンが代表であるために『漆黒』と呼ばれるモモンとナーベの冒険者チーム。彼らは、ズーラーノンの対応を話し合うために冒険者組合に呼ばれたのだがそこで騒動が起きた。

「アインザック組合長。私は、どうも納得がいかない。いや、私だけじゃない。他の二人も本心ではそうだ。確かに最近ご活躍のようだが本当にそこに居るモモン達はミスリル級に相応しいのか？ 聞いて

たところによるとたつちとの戦いだけで判断したそうじゃないですか？」

モモン達の昇進は異例中の異例。エ・ランテルの冒険者組合長であるプルトン・アインザックの独断に近い形で判断されたもの。苦勞しながら実績を積み重ねていった者達から不満があっても無理はない。「不満は分かる。だが、君達も見れば納得したはずだ」

モモンとたつちの戦いは、今では街の語り草になっている。腕を斬り落とされても闘争心は衰えず、むしろ一矢報いようと剣を振るつた英雄候補と呼ばれるたつち。それを圧倒する形で倒した英雄の領域に踏み込むモモン。あの戦いを見さえすれば、アインザックの判断に異を唱える者は居ない程だが、見ていなければ尾ひれが付いた夢物語のようなものだ。

「見れば、の話でしょう？　そもそもたつちは、ゴールド級の冒険者だった。私達ミスリル級の冒険者とは違う。実績に関しても疑問の余地はある。数百規模のアンデッドを二人だけで倒したというが雑魚ばかりなら難しくはない。ギガントバジリスクに關しても第三位階の魔法と石化に耐性のあるマジックアイテムがあれば話は別だ」

イグヴァルの意見には穴がある。だが、それを埋めるには抱く不満が大き過ぎる。

「ならどうすれば納得するのかね？　戦ってみれば納得でもするのか？」

イグヴァルの口角が釣りあがる。欲しい言葉が出たからだ。

「機会をくれれば是非。私が本物のミスリル級の冒険者がどんなものか教えてあげますよ。ついでに、そこのお嬢さんに誰に付いて行けばいいかもね」

イグヴァルの視線にナーベは不快感を表す。キツと睨み返すが力を隠匿している状態では効果が薄い。

「抑えろ、ナーベ」

「申し訳ありません、モモンさん」

念の為に言葉を掛けておく。ナーベは、未だにたつち達以外の人間相手だと感情に素直になりやすい。

「私は、彼の提案に賛成です。わだかまりがあると今後に響きます。ああ、それと私は一人だけでいいので文句のある方は御一緒にどうぞ。なんなら皆さん全員でもかまいませんよ」

「——ふっ、ふざけるなよっ！」

モモンの言葉に思わず感情が表に出る。これには静観を決め込んでいた他の者達も黙ってはいない。モモンに対しての不満が次々に言葉として出る。

「いいか、よく聞け！ 本当ならたっち達も俺達は気に食わないんだ！ だがな、あいつらは王都の冒険者で蒼の薔薇が後ろに居る！ だから見逃してきたがお前達は違う！ 誰が上か教えてやる！」

「どちらが上ですか。そうですね、いい機会です。アインザック組合長殿。少しばかりお時間を頂きます。なに、すぐに終わりますよ」

「……彼らも大事な戦力だ。ほどほどにしてくれ」

アインザックの態度に更に不満は強くなる。だが、そう言う以外に術はない。彼らは見ていないから強く出られるのだ。モモンの力は、既に英雄の領域に踏み込んでいる。それを知らないからこそ敵意を？き出しにできる。

「——聞いた話だと、モモンさんは剣を使わずに戦ったらしいですよ。密かに街の外でやったから目撃者は少ないですけど、イグヴァルさんの鎧が凹むぐらいのものだったらしいです。そのせいか他のところは畏縮しちゃって結局クラルグラだけがボコボコにされたって話ですよ」

「クラルグラの奴らも可哀想だよな。剣を使わなかったのにボコ負けとか。俺でも姿を隠すわ」

この話は、三人がエ・ランテルに戻って来た頃には街中に広まっており、クラルグラはひっそりと暮らしているそうだ。噂だと近々帝国に拠点を移すかもしれないらしい。

「でも、これでレートは変わるだろうな。剣を使わずにミスリル級冒険者チームを相手にできるんだから」

「まだ期間がありますけど勝つ自信ありますか？ 俺とウルベルトさんは、内容に関係なくたっちさんに賭ける予定なんですからね？」

王都での決闘の話をモモンは了承している。これで、王国最強の戦士が決まる事になる。

「正直に言うとは今は勝てないと思います。ですが、必ず勝ってみせますよ」

普段と変わらない口調だが、確かな意思がそこにはある。

「だったら少し遠出でもするか？ 今の装備だと不安もあるしな。たっちさんに全財産賭ける予定だから勝ってもらわないと困る。ここは、帝都に行つて強化を図るべきだと思う」

「いいかもしれませんが。どうせいつかは行かないといけませんからね。五人で活動しているおかげでエ・ランテル周辺は綺麗なもんです。通常の依頼料の倍は出してくれるって話ですし、帝都は品物も充実してるって聞きます。行くなら丁度いいんじゃないですか？」

帝国の冒険者組合からの催促は今も続いている。話によると、依頼料は通常の倍。他にも泊まる場所や馬なども用意してくれるそうだ。

「そうですね。半月ほど時間を頂いて行つてみましょう」

「じゃあ、決まりつて事で。後で、モモンさん達に話していつ行くか決めるとするか」

帝国の重鎮とも言われるフルーダ・パラダインが背後に居るのが気にはなるが、三人は帝都に行く事に決めた。賭けで一儲けするためにも実りのある時間を過ごしたい。

第42話

帝都アーウインタール。中央に皇帝の居城を置き、放射線状に各種行政機関が広がる帝国の心臓部。王都と違い、ほぼ全ての道路が石やレンガで舗装されており、道の真ん中を馬車や馬が通り端を人間が歩くという近代的な都市である。人口では王都に劣るが規模は王都以上であり、現皇帝であるジルクニフ・ルーン・ファーロード・エルⅡニクスの下で更なる繁栄を約束されている場所である。

「見て下さいよ！ 土で靴が汚れませんよ！」
「綺麗な街並みだな！ すげーよっ！」

ペロロンとウルベルトは、他人の視線を気にせず道真ん中で街並みを眺めている。帝都では、建造物の建て替えなども行われており新築が多い。整備された綺麗な街並みと建造物に二人は感動している。

「王国と違い封建制度から中央集権に切り替えたのが功を奏したということでしょうかね。王国は、貴族が好き勝手にやっていますからね」
「そのようですね。どちらが良いかの判断はともかく、上手く統治しているように思えます」

たつちとモモンは、はしゃぐ二人とは対照的に冷静に王国と帝国を見ている。帝都に来る途中の街もそうだが治安の良さや物流などの経済面でも随分と差があるようだ。今は小競り合いを行っているようだが衰退していく一方の王国と繁栄を迎えている帝国とでは結果は見えている。

「ほら、ナーベさんもそんな所でボーっとしてないで一緒に店を見て回りましょうよ！」

「よしっ！ 先ずは、あの店からだ！ 続けー！」

「あ、あの……私は——」

ナーベの事情などを無視して、ペロロンとウルベルトはナーベの手を両側から引いて目についた店へと突撃する。

「私達も行きましょう」

そう言うと、たつちも三人を追いかけるように店へと急いで向か

う。ほうっておくとなにをするか分からないからだ。

(これがアインズ様の御友人ですか)

モモンこと——モモンに姿を変えているパンドラはしみじみと思う。最近では、アインズが出来ない食事などの役割を演じる為にモモンとして三人と関わりを持つているのだが、アインズが三人にどうして拘るかが少しわかった気がする。

『——パンドラよ、聞こえるか?』

《メッセージ》の魔法で、ナザリック地下大墳墓から遠隔視の鏡で様子を見ていたアインズから声が届く。

『今も監視が行われている。聞こえていたら右手を腰にもっていけ』

言われた通り、パンドラは右手を腰へともっていく。

『こちらから調べているが間違いない。フールーダ・パラダインの手の者のようだ。予定通り安全が確保されるまでナーベと共に私を演じろ』

帝都に来る前に事前に連絡を入れてある。その為かどうかは分からないが帝国領内に入ってから監視が付いている。定期的にメッセージの魔法で連絡とっているらしく気が抜けない状態が続いている。

『予定されている宿も監視はされているようだが魔法などはない。今日は、二人は宿に籠れ。外で活動すると思われる三人と比べれば相手の出方も分かるというものだ』

(承知致しました。我が主であるアインズ様)

声を出しては気づかれる可能性があるので心の中で主人へと頭を下げる。

『どうかしたんですか、モモンさん?』

なかなか来ないモモンの様子を見にたつちが戻って来た。

「いえ、良い街だと思いました」

「そうですね。王都よりも活気があるように見えます」

王国の人間ではないが、冒険者として籍を置いているので複雑な心境だ。王国の人間よりも帝国の人間の方が生気に満ち溢れ、華やかな印象を受ける。

「おーい！ 早く、こっち来いよ！」

「ナーベさんに似合う髪飾りを選んでるんですからモモンさんも早く来てくださいよ！」

店の方から二人が顔を出している。

「行きましょう」

「そうしましょう」

パンドラは、モモンとしてたっちと共に三人の下へと向かう。

そんな楽しそうな様子を一人寂しく見ている男が居る。

(監視がなければ俺があの場合に……)

長く行動を共にする以上は、どうしても食事などの問題があるので無理なところがある。それでも見ていて羨ましくなる。遠隔視の鏡の中では、楽しそうにナーベに似合う髪飾りを四人で選んでいる姿がある。

「ほら、この白の花飾りの方が似合いますよね、ナーベさん？」

「いや、こっちの赤の方がナーベさんには合うだろ」

「私は、どちらでも……」

「こちらが良いと思います。この細かな細工が素晴らしい」

「モモンさんは、こういうのが好きなんですネ」

等身大の鏡の前で代わる代わる着せ替え人形のように男達に好き勝手に遊ばれているわけなのだが、あの人間嫌いのナーベがなすがままなのは素直に驚くところだろう。だがこれは、あくまでも至高の存在である三人を重ねているだけなので本心とは違う——違うのか？

気のせいではないければ本人も満更でもないように……今、笑わなかったか？ 一緒に居る時に笑った事はあるが人間を蔑んだものだった気がする。

「……早く終わらせよう」

一旦、五人を見るのを止めて安全の確認へと移る。安全確認さえ済めば自分もパンドラと交代できる。早く終わらせてあの中に混ざらなければ。



適当に街を見学しながらも帝都の冒険者組合へと無事に着いた。早速、王国との違いを含めて改めて話を聞いてみることにしたのだが待遇面が更に良くなっていた。おそろくだが王国に居る時に好条件を出すとなにか手を打たれると警戒されたからだと思われる。報酬はなんと通常の三倍。宿は、貴族などが泊まる高級な場所。馬などの必要な物資も内容次第で支給されるとの事だ。その代わり依頼内容は組合の方で選ぶとのことだ。

あくまでもあちら側の調査が終わるまでだがこのまま帝都に居たいと思える条件だ。ただ、帝国は軍が治安の維持の要を担っているために王国程旨味が少ないのも事実。一長一短。考えようだ。

とりあえず用意された依頼の中から幾つか選び、教えてもらった宿へと向かう。モモンとナーベが同室なのが気がかりではあるが、今更なので男三人は自分達の部屋へと入る。

「ベッドがフカフカですよ！　なんか良い匂いもしますよ！」

「テーブルにフルーツの盛り合わせがあんだけど、食べても金取られないよな？　嫌だぞ、後から請求されんの」

「この花瓶とかも高そうですね。もし割ってしまったら弁償できるのでしょうか？」

初めての豪華な部屋に休むことが許されない。普段使っている部屋の何倍も広く、調度品も無駄に大きく豪華な物ばかり。備え付けの食べ物や飲み物なんて初めてだし、ルームサービスのようなものまである。長旅の疲れよりも好奇心の方がどうしても勝ってしまう。三人は、一通り部屋を楽しんでからやつとくつろぐことが許される。

「依頼は明日からですけど今日はどうします？　モモンさん達は、部屋で休みたいですけど？」

「俺は、大闘技場に行ってみたいな。賭け事も出来そうだし、なんなら参加しても面白いかもな」

帝都にしかない娯楽。腕に自信のある者が名声や金の為に戦う場所。戦う事が出来なくても賭け事などに興じる事も出来る。

「私は、報酬が三倍ですから依頼を重点的に受けた方がいいと思いま

す。今日は、北市場と呼ばれる所なんてどうでしょうか？ 話によると闇市みたいですから掘り出し物があるかもしれない」

北市場と呼ばれる場所は、冒険者やワーカーと呼ばれる元冒険者達が手に入れたアイテムなどを売却している場所である。安く良い品を手に入れたいのなら行く価値はある。但し、一般人は近寄らないような場所であることを忘れてはいけない。

「闇市。なんだか心惹かれる響きがありますよね！ なにか面白いアイテムとかないかな？」

「いや、そこは普通に耐性のマジックアイテムでいいだろ？ そもそもそれが目的なわけだし。ただ、今の手持ちで買えるか分からないけど」

「見るだけ見てみましょう。稼ぐ目安を決めますから」

三人は、帝都で稼ぐ基準を決める為に北市場に行く事にする。報酬三倍というイベントを活かす為にも。

◇◇◇◇◇

北市場に来た三人は、露店を見て回るわけだが、その際にウルベルトの《ディテクト・マジック》を利用する。探知魔法であるディテクト・マジックは、魔法を見つける事が出来る。これにより多くの物の中から魔法の力のある物だけを選ぶ事が出来るのだ。

「毒に耐性のある指輪。金貨五枚は格安ですね」

たつちは、露店の店主に話を聞きながら指輪を眺めている。

「ここだけの話し、本当ならこんな安くできないんだよ。でもコレ盗品の可能性があるからその分……ね？」

店主は、たつちに近づき小声で話す。盗品だと後々に面倒事が起こる可能性がある。だからこそその格安なのだろう。

「ちよつと貸してくれ」

横に居たウルベルトがたつちの手から指輪を取り、《ディテクト・エンCHANT》を使って調べる。これは、アイテムに付与されている魔法を調べる事が出来る。

「ゴミだな。確かに耐性はあるが、弱過ぎて軽減にしかない」
ウルベルトは、調べ終えた指輪を店主に返す。

「……あんた、魔法詠唱者か？ だったら先に言ってくれよ」

明らかに嫌味を込めた態度をとられる。目利きの出来る商人とは別の意味で、魔法で鑑定が出来る魔法詠唱者は騙しにくい。

「残念だったな。他に良いのはないのか？」

「そうだな……コレなんてどうだい？」

店主は、並べている商品ではなく奥にある箱から指輪を取り出す。

「コレも盗品だが、さっきのよりは良いはずだ」

ウルベルトはそれを受け取り、魔法で調べてみる。

「これならその辺のモンスター相手ならなんとか出来そうだな」

耐性のマジックアイテムは、物によって価値が違ってくる。例えば、たつちが装備している石化の指輪は、ギガントバジリスクが使用する石化の視線なら防ぐ事が出来る。だが、ギガントバジリスクよりもレベルが上の者が使う石化攻撃を防げるかは微妙なところだ。できる事なら状態異常を無効に出来る完全耐性の物が欲しいのだがそれは高望みというものだ。なにせ、たつちの持つ指輪ですら金貨数百枚はくだらないのだから。

「金貨五十枚でどうよ？ あんたらミスリル級の冒険者なんだから？」

この辺じや見かけないから王国の」

店主の目がたつちが首から下げるミスリル冒険者の証であるプレートで止まっている。

「王国でこれだけの物はなかなかないんじゃないかい？ あつても倍はするだろうよ」

確かにその通りなのだが、毒だと少々高いような気もする。毒は、薬草やポーシヨンでも解毒出来る。一般人ならともかく三人からすれば即死するような猛毒でない限り時間の猶予がある。

「他を見てから決めるわ」

「すみません」

二人は、断りを入れてその場から去る。後ろから「冷やかしか」と聞こえてくるが、交渉の度に気にしていたら気が滅入るので無視して

先に進む。

「麻痺、精神支配、即死が欲しいですよね」

状態異常の中でも麻痺や精神支配は事前の対策を必要とする部類に入る。麻痺は、身動きが取れなくなりなにも出来ずに殺される。精神支配は、内容は様々だが攻撃を受けた時点で負けが濃厚になる。即死に関しては、対策がなければ死ぬ。

「ああ、そうだな。だが、重要な物ほど価値は高い。そもそも品物自体がなかなか見つからない。仮にあっても軽減だと不安が残る」

「でも、そうなると能力向上とかしかないですよ？」

下級の強化魔法程度の付与を持つマジックアイテム。基礎能力の高い者が使えば侮る事はできない。

「俺が魔法で使えるから微妙なんだよな。せめて同じぐらいの効果が無いと無駄になる。いや、わざわざ魔法を使う必要がないだけマシなのか？」

「マジックアイテムと魔法は別で加算されますからね。あつて損はないですけど値段と見合うかどうか」

二人は、値段と効果を考えながら片っ端から露店を見て行く途中で、一人別行動をとっていたペロロンに声を掛ける。その表情は真剣そのものだ。

「まだ悩んでいたのか？」

「そりゃ悩みますよ。どれをお土産に買えば喜んでもらえるか分からないんですから」

ペロロンは、マジックアイテムとは別にお土産用の物を探している。蒼の薔薇のイビルアイ。漆黒の剣のニニヤ。約束していたエルフと思われる姉弟。此処に来てから必死になって探している。

「来たばかりですからまた探しましょう？」

「分かってませんね、たっちさんは。いいですか、こういう場所は明日もあるとは限らないんです。もし、『素敵！ペロロンさん抱いて！』って、思わず言いたくなるような物が売りきれたらどうするんですか！もしそうなったら俺は、一生悔やむ自信があります！」

「いや、その前に金返せよ。王都での飲み代まだ払ってないからな？」

新調した矢の代金だつて俺達が立て替えたんだぞ？」

「細かいことは気にしない。ほら、ウルベルトさんもラキユースさんに買ってあげたらどうですか？　王都からなかなか離れられないですからきつと喜びますよ？」

ペロロンの言葉に気持ちが揺らぐ。

「ウルベルトさん、ありがとうございます。大切にしますね」

渡したプレゼントでそう言ってもらえたら嬉しい。喜んでもらえたらそれこそ……

「仕方ないな。少しだけだぞ」

「だったらコレなんてどうですか？　ココがですね——」

まるで店の回し者のようにペロロンがウルベルトに売り込みを始める。真剣に話を聞いているウルベルトを見るとマジックアイテム探しはここで終わり。これからは、お土産探しの時間へと変わる。

第43話

王国から五人が帝都に来てから数日が経過した。皇帝であるジルクニフは、パラダインから受け取った報告書に目を通していくのだが予定していたのとは別の物も含まれている。

「この報告書を見て、お前はと思う？」

ジルクニフは、傍に控えているバジウツド・ペシユメルに報告書を手渡す。ペシユメルは、『雷光』の二つ名で知られるバルス帝国の最強戦力である四騎士の内の一人。普段は、ジルクニフの身辺警護などを行っているが勅令が下れば困難な任務ですら成し遂げる実力者である。ジルクニフは、そんなバジウツドに意見を求めた。

「……陛下、これはなにかの冗談ですか？」

まだ内容の半分しか目を通していないが思わずそんな言葉が出る。

「それは、彼らに同行していた冒険者組合員からの報告書になる。バジウツドと同じように戦いを知る者が書いたものだ」

冒険者組合から五人に同行者が付くことになったのは、最初のアンデッド討伐を終えてからだ。彼らは、幾つもの依頼を受けたわけなのだが夕方には帝都へと戻って来た。どれも内容は組合の方で選んだ物であり、そう簡単に終わるものではない。しかし、本人達はそれを終えたと主張した。その為、確認を行いながらも同行を付けてより詳しく調べる事になった。

「いや、それでもこれはおかしいでしょう？ 一日で、アンデッドを千近く倒してますよ、これ？ 確かにスケルトンやゾンビは敵じゃないですが数が尋常じゃない。それに他にもいろいろと混ざって……つてか、スケリトル・ドラゴンとかも含まれてませんか？」

バジウツドは、呆れた態度をとりながら言葉を口にする。本来なら許されるものではないが、あくまでも護衛としての役割として必要なので礼儀などは必要としていない。そんな彼だからこそ率直な意見を聞く事も出来る。

「それにコレ。ココの部分ですけど、たった三人で挑んだとか書いてますよ。確かに魔法詠唱者じゃ、魔法に耐性を持つスケリトル・ドラ

ゴンとは戦えません。戦えませんが、三人だけで数百のアンデッドとスケリトル・ドラゴンと戦うとかありえんでしょ」

スケリトル・ドラゴンは、ギガントバジリスクやエルダー・リッチに並ぶ代表的なモンスターになる。魔法に対して絶対的な耐性を持つており物理攻撃でしか倒す事の出来ない凶悪なアンデッド。推奨されている冒険者のクラスは、ミスリル級になる。

「だが、報告にはそう書いてある。それに他にも面白い事が書いてあるな。どうやら王国の弓兵は前線で戦うものらしい。戦士二人と共に敵陣に突撃し、乱戦で戦うそうだ」

自分で言っていて意味が分からない。一般的な弓兵とは、敵から距離をとることで安全な場所から一方的な攻撃をするものだ。少なくともジルクニフの常識ではそうなっている。しかし、報告書の中に居る弓兵は、二人の戦士と共にアンデッドの群れの中に突入して戦うと書いてあった。確かに相手の数が圧倒的に多い場合に限り乱戦に持ち込むことで同士討ちを誘う戦い方はある。だが、それは命ある者の話しでありアンデッドは別だ。アンデッドは、同士討ちを恐れたりはしない。

「打撃武器と弓を器用に使い分けて戦うそうだ。バジウツド、お前はそんな戦い方をする者を見た事があるか？　まるで曲芸師のように戦う者を」

「いやいや、普通はないですよ。それだと弓の意味がないですからね」自分で聞いておいてなんだが当たり前だ。他に書かれている事もそうだ。報告書に書かれている事は何もかもがおかしい。それにパラダインが自分の部下に調べさせた話もそうだ。最近だとモモンとかいう戦士は、ミスリル級冒険者チームを相手に武器を使わずに倒したそうだ。別に己の肉体のみで戦う事を主とするモンクではないのに。

「なら別の聞き方をしよう。四騎士で、同じような事は出来るか？」

重要な問題だ。

「陛下の御命令ならやってやらんことありませんが、できる事なら一回限りにしてほしいですね。ココに書いてある通り、戦う時以外は

ずっと移動するしかありません。唯一休めたのが戦闘の時の僅かな時間だけとか意味が分かりませんが」

「各地に出没しているアンデッドと戦うためには仕方がないのだろうな。戦闘よりも移動の方に時間が掛かるのは。だが、軍でもここまでの強行軍は行わせてはいない」

そもそも前提がおかしい。パラダインが用意させた複数の依頼は、あくまでも多様性に富んだものであり、それによって出方を調べるための物であった。それを全て受け、成し遂げるなどとは誰が思うのか？

「それで、これからどうする気だ？ 内容を見るに戦士と弓兵の実力は分かるが、肝心の魔法詠唱者の情報は既に調べた内容の物しかない。爺、どうやら思惑が外れたようだな」

先ほどから黙ったまま蓄えた顎鬚を静かに手で撫でるパラダインを見る。その表情を見るに心ここにあらずと言ったところだろう。

「そうでもありません、陛下。確かに事前に集めた情報以外の事は分かりませんが、行動を共にする以上は見合う実力があるということ。できれば、手の内を晒してほしかったのですが今すぐに会いたいぐらいですぞ」

パラダインには、相手の魔力から行使できる魔法の力を見抜く事が出来るタレントがある。これにより相手の力量が推測できるのだが習得している魔法や戦術までは分からない。だからこそ会って警戒される前に調べておきたかったのだがあてが外れた。

「そうか。ならば、後は爺に任せるとしよう。私も興味はあるが立場として会うわけにもいかない。実力はともかくミスリル程度で会っているのは他に示しがないからな。爺、王国に帰す前に必ず見極めろ」

「もちろんでございます。その為に呼んだのですから」

パラダインは、気持ちを抑えられずに礼儀を忘れ、今にも駆け出しそうな勢いでその場から立ち去る。己の知識欲を満たしてくれるかもしれない者に会うために。

◇◇◇◇◇

冒険者が請け負わない仕事を受ける事を生業とする者をワーカ請負人と呼ぶ。ワーカーの多くは、組合の規則に反した冒険者や大きな見返りを求めてなる場合が多い。一見すると金にがめついならず者に思えるかもしれないが必ずしもそうとは限らない。

例えば、組合の規則では不用意に魔法で人の傷を癒してはならないとある。仲間であるのなら問題はないのだがそうでない場合は注意が必要だ。一般的に人の傷を癒したり病を治すのは、神殿の預かりとなっておりその仕事を安易に奪ってはならない。神殿は、治癒の魔法を使う代わりにお布施を得て運営されている。それを無料で冒険者が行ってしまえば、神殿の経営が成り立たなくなる。お互いにそれぞれの利益を守るために必要な規則になるわけだが、中にはそれに疑問を抱く者も少なくはない。

フォーサイトと呼ばれるワーカーチームは、定期的に請け負うカツツエ平野のアンデッド退治を終え、拠点としている帝都へと戻ろうとしていた。

「まったく、カツツエ平野で嫌ってほどアンデッドを見たつてのに本当に嫌になるぜ」

フォーサイトのリーダーであるヘツケラン・ターマイトは、何度目かになるアンデッドの遭遇に悪態を吐く。

「仕方ないわよ。今じゃ何処もかしこもアンデッドだらけなんだから」

ヘツケランの恋人で、ハーフェルフのイミーナもヘツケラン程ではないが嫌気が差している。それもそのはずだろう。カツツエ平野から帝都までは歩きで数日は掛かる距離だ。その道中いつ現れるかもしれないアンデッドに常に注意を向けていないといけない状況なのだから。

「アルシエ。疲れてはいませんか？」

フォーサイトの最年長者である神官のロバーディク・ゴルトロンは、まだ幼い仲間へと声を掛ける。

「——大丈夫。心配しなくていい」

若くして、第三位階の魔法を行使できる魔法詠唱者アルシエ・イーブ・リイル・フルトは、手に持つ杖で身体を支えながら答える。小柄で体力がないアルシエにとっては、身体に無理を強いる距離だ。

「無理はするなよ。いざって時に魔法が使えないなんて勘弁してほしいからな」

アルシエは、ヘツケランの言葉に頷いて答える。疲れているから戦えませんかとは言えない。

「でも、あれだな。こんな状況なら別にカツエ平野じゃなくてもいい気がする。その辺に居るのならそれでいいじゃねえか」

「馬鹿言わないで。軍の仕事に手を出したらなに言われるか分かったもんじやないわ」

「言ってみただけだろ。軍も冒険者もしない仕事をするのが俺達の仕事なんだからな」

帝国では、治安維持を軍が担い、それを冒険者が補う形になっている。カツエ平野のアンデッド退治は必要な事ではあるが人は住んでいないので優先順位はどうしても低くなる。だからこそワーカーに仕事回ってくる。

「なあ、イミーナ。周囲には何も居ないよな？」

帝都までそう遠くない場所に居るのだが既に陽は沈み暗くなっている。途中の村で一晩泊まるか悩んだ結果になるのだが今の状況で夜を迎えたのは愚策だった。全ては金が悪い。

「居ないわよ。今はね」

弓兵であるイミーナが周囲を確認する。アルシエに《ダーク・ヴィジョン》の魔法を掛けてもらい闇夜でも真昼のように見えてはいるが油断は許されない。闇は、アンデッドの領域なのだから。

「——ちよつと待って」

なにかに気づいたイミーナの声で三人はすぐに臨戦態勢をとる。フォーサイトは、冒険者で言えばミスリル級の実力を持つ。いつでも戦闘に移れるだけの場数は踏んでいる。

「どうした？ なにか居るか？」

ヘツケランは、抜いた剣を構えながら背中越しに訊ねる。

「今、あっちの方からなにか音が聞こえた気がする」

イミーナの指差した方は、帝都へ向かう道から少し外れた方向。森とまでは言わないが木々が邪魔をして先まで見えない。

「あの向こう側でなにかあるのか？」

「たぶんね。なんだか戦っている気がする」

他の三人は、確かめようと耳を傾けるがなにも聞こえない。どうやら距離があるらしくイミーナにしか聞こえないようだ。

「少し様子をみるか。関わりたくはないがこのままだと後ろをとられる可能性がある。俺とイミーナが先に行く。ロバーデイクとアルシエは後から付いて来い」

四人は、木々に隠れる為に森へと向かう。アンデッドは、生命探知を行う為に隠れても無駄ではあるがそうでない場合もある。相手の姿を確認できない内は警戒し過ぎて悪いことはない。

「……この先。この先で戦ってる」

イミーナはそう口にするが、言われるまでもなく他の三人も理解し始める。森を進むと聞こえる音。そして——揺れる地面。

「これって、大物だよな」

ヘツケランの言葉に不安の色が濃くなる。大きなモノが地面に倒れる音を伴い僅かに地面を揺らしている。そう考えるのが普通であろう。

「どうする引き返すか？ これ以上は進みたくないんだが」

それは、他の者も同じだ。だが、だからこそ確認しておかないと不安が残るのも事実。ここまで来たら確認するしかない。

「いつでも動けるようにしておけよ。危険だと判断したらすぐに逃げるからな。いいな？」

目と目を合わせ仲間を確認してから前に踏み出す。傍に信頼できる者が居なければ挫けてしまいそうに——見えた。見えてしまった。あと少しで森から抜け出そうなところでそれらは居た。

「——隠れろ」

戦うでもなく逃げるでもなくヘツケランはそう指示する。

「ねえ、アレってなに？ アレってスケリトル・ドラゴンよね？ なん
で二体も居るの？」

四人は、限界まで隠れながらそこに居る巨大な骨の竜の姿を見る。
魔法に絶対的な耐性を持つ危険なアンデッド。アンデッドが自然発
生するカツツエ平野でも滅多に見かけない危険なモンスターが二体
もそこに居る。

「他にも居ますね。スケルトン。ゾンビ。他にも居ますが上位種も少
し混ざっています」

骨の色が赤いレッド・スケルトン・ウォリアー。ガリガリに痩せて
いる死肉を貪るグール。下級の吸血鬼であるレッサー・ヴァンパイア
などがスケリトル・ドラゴンの周囲を埋め尽くしている。

「おい、あれって人だよな？ 戦ってるのかあの中で？」

よく見るとアンデッドの群れの中で動く何かが周囲のアンデッド
と戦っている光景が見える。数にして三人。そのたった三人があれ
だけのアンデッド相手に奮闘している——いや、奮闘ではすまない。
その三人に対して、スケリトル・ドラゴンが巨大な腕を振り下ろし圧
死させようとするわけだがそれを逆に巨大な剣で弾き返している姿
がある。すると、まさかの力負けをしたスケリトル・ドラゴンが体勢
を崩し、先ほどから聞こえていた音と揺れを再現してくれる。

「化け物の中に化け物が居るのかよ？ 意味わかんねえ」

「ねえ、あそこにも人が居ない？」

イミーナが指さす方を見ると、馬の上から魔法を放つ者の姿を見つ
ける。その者の周りには、乗っていたと思われる馬が居るようで手綱
を持って守っているようだ。ただ少し数が合わない。戦場に居るの
が三人になるのだが空いている馬の数は四頭。一人足りない。

「殺されたか」

「これだけの数を相手にしたのだ。死んでも仕方がない。」

「——みんな……あそこを見て」

アルシエが言葉を口にする。口にするのだが……その言葉はどこ
か絞り出したかのように苦しいものに聞こえる。

「どうかしたのか、アルシエ？」

思わずアルシエの方を見る。

「——ば、化け物が居る」

アルシエの顔は引きつり、カタカタと震えながら空を——アンデツドの群れで見る事の無かった場所を指差す。

「……おいおい、もしかしてアレが噂のブーラーノーンってヤツか？」
ヘツケランの言葉に他の者達も同意する。空に浮かぶその者は、多くの悪魔を従えながら戦場を見下ろしている。その容姿から魔法詠唱者だということは分かるのだがどこか不気味な雰囲気をもとっている。

「——気をつけて。第四位階を使う。それも普通じゃない。私は、第四位階の魔法を使える人達を知ってる。でも、あそこに居るのは異常。異常なまでに魔力量が多い」

アルシエには、彼女の師匠と同じタレントがある。『看破の魔眼』とも言えるその力は、相手の魔力から使える位階魔法を知る事が出来るのだが、その過程で知る事の出来る魔力量がアルシエの知る第四位階の使い手達よりも多く見える。それもただ多いだけではなく深いのだ。底が見えない。まるで夜よりも深い闇を更に濃くしたような程に今のアルシエでは理解できない深さ。それは、その者の才能を意味する。限界が分からない。こんな深さは、師匠であるかの偉大な魔法詠唱者であるパラダ——アルシエの思考を一つの叫びが途切れさせる。

「——敵よー」

イミーナの叫びで現実に戻されたアルシエの目に悪魔の姿が見える。それは、あの化け物の周囲に居た者と同じ。悪魔の正体は、インプ。イタズラ好きの力の弱い悪魔ではあるが背筋が凍るほどの恐怖を覚える。別にインプ相手にそう感じたわけではない。アルシエの脳裏には、このインプが『使役された者』ではないかと浮かんだからだ。アルシエは、それを確かめる為にゆっくりと恐怖と戦いながら化け物の方を見——目が合った。化け物が使役していたインプにより気づきこちらを見ている。

「——に、逃げる……」

不気味な仮面。悪魔の姿。それは、ジッとこちらを見ている。凶悪な底の見えない悪魔がこちらを見ている。

「撤退だ！ 全力で逃げるぞ！」

インプを一太刀で切り倒したヘツケランの言葉に従い一斉に元来た道に戻る。スケリトル・ドラゴンを二体に加え大量のアンデッドに従える化け物。戦っている者達も同様の化け物だろうが今は静観しているからこそ戦えているだけかもしれない。既に仲間の一人の姿がない。奮闘していると思っただけかもしれない。既に違うのかもしれない。

フォーサイトの四人は、振り返ることなく逃げる。逃げて逃げて、走れなくなるまで逃げたところで後を追って来ないことに気づき力無くその場に倒れ込む。

「聞いてはいたけどよ、あんなのがズーラーノーンには少なくとも二人は居るのか？」

帝都にアンデッドの大群を引き連れたズーラーノーンの高弟であるエルダー・リッチが宣戦布告したことはまだ記憶に新しい。フォーサイトの四人はその姿を見てはいないが仮面などはしておらず、よく知るエルダー・リッチの姿だったと聞く。既に姿を晒している者が仮面で顔を隠す事はしないだろうと考えると、仮面の化け物は別人となる。

「とにかく今日は此処で朝を迎える。まったく、これなら宿代をケチるんじゃないかった」

四人は、身を寄り添いながら生命の象徴である太陽が空に昇るのを神に祈りながら待つ。あの化け物がこちらに来ない事を祈りながら。

第44話

冒険者組合から受けた依頼を終わらせ帝都へと戻る途中で、スケリトル・ドラゴンが二体も居るアンデッドの群れを発見した。組合の話しでは、五人が帝都に来てからアンデッドの量が増えたらしい。それも以前は確認できなかったスケリトル・ドラゴンなどが加わっているとのことだ。レベリングと報酬の上乗せに期待ができるので、たち達にとっては嬉しい話なのだが自分達が原因のようで申し訳ない気もする。

「あと少しで帝都なのに困ったもんですね」

アンデッドの群れを倒し終えたが連日による連戦で流石に疲れてきた。帝都での初仕事となる初日は、土地勘がないので少なめに受けたわけだがその後は、朝から晩までのデスマーチを敢行している。報酬三倍に加えて、内容自体も旨味があるので稼ぎ時なのである。とはいえ、寝る以外は移動と戦いばかりなので疲労は溜まる。

「明日は、休みにしますか？ 私としても武器や防具を一度鍛冶屋に出しておきたいです」

連日による連戦で、たっちの装備は耐久値が減っている。鋼鉄製の全身鎧は傷だらけ、ミスリル加工の剣や盾も例外ではない。

「というか、モモンさんはズルいですよねー。こっちは、クラブや戦槌、矢とかを毎日補充しないといけないのに全然じゃないですかっ！

アダマントナイト級の剣と鎧とかズルいですよっ！」

「ズルいと言われても……」

一日だけで、多くの物資が消費される。たっちが使う戦槌は二本。ペロロンの木の盾とトゲ付きのクラブは十以上。矢に関しては、数本は軽く超えている。馬に乗せられる積載量を考えるとこれ以上は難しく、ウルベルトに関してはインプにその辺に落ちている石などを持たせて戦わせている。それなのにモモンの装備は無傷と言っている。

「戦士としても強い。マジックアイテムもいろいろと持ってるみたいだし、これが格差社会ってヤツですか!? ナーベさんも居るし、そ

りやイグヴァルさんとここに喧嘩を売られますよ」

「我が家に伝わる物ですし、何度も言いますが私とナーベはそういう関係ではないですよ」

「すみません。ペロロンさんが迷惑を掛けてしまつて」

地面に座り込み駄々をこねているペロロンの代わりにたつちが謝る。

「モモンさん。馬を連れてきました」

アンデッドから馬を守っていたナーベが三人の下へとやって来る。借り物なのでなにかあると弁償をしなくてはならず、積んでいる物資も守る必要がある。

「ありがとう、ナーベ。よく守ってくれたな」

「モモンさんの御命令ならば、この命に懸けても必ず成し遂げてみせます」

「そういうところが怪しいんですよ」

ペロロンに言われるがモモンも自覚がないわけではないので気にしていない素振りでも馬へと騎乗する。もう少し仲間として気軽に接してもらいたいのだがもう諦めた。至高の存在への忠誠心からくるものなので受け入れるしかない。

「周辺にアンデッドはもう居ない」

周辺の確認が終わつたウルベルトがインプ達と共に空から降りてくる。

「ただ、人が居たらしくてな。俺を敵だと勘違いして逃げて行つた」

「あははっ、またですか？　ズーラーノーンが居る今、そんな恰好をしてたら仕方ないですよ！」

これで何日目だろうか？　ウルベルトの事を知らない人間に逃げられるのは。

「うるさいな。帝国の人間は、少し大袈裟なんだよ。王国だどこまでじゃなかっただろ？」

「それは、先人が居るからですよ。蒼の薔薇のイビルアイさんが仮面を普段から身に着けていますからね」

王国の守護者であるアダマンタイト級冒険者チーム蒼の薔薇は高

い知名度を誇る。それ故にイビルアイが仮面を着けている事は知れ渡っている。しかし、帝国にはそのような者は居ない。それどころか今はズーラーノーンが人々の脅威となっている。そんな中で、不気味な仮面を被り悪魔を従えている魔法詠唱者を見かければ、敵だと思われても仕方がないだろう。

「俺は、絶対に外さないぞ！ 騎士達に何度も職質されたが最後まで貫いてみせるからな！」

ここまでくれば意地でも被り続ける。言われてやめるようなら初めから身に着けていない。

「ウルベルトさんらしいですね。私は、応援しますよ。それでは皆さん、早く帝都に戻りましょう」

五人は、急ぎ帝都へと戻る。久しぶりの休暇に備えて。

◇◇◇◇◇

フォーサイトの四人は、昼過ぎに帝都へと戻って来た。昨日の夜から不安と恐怖で精神的にも肉体的にも疲れた為に到着してすぐに解散。報酬などは、リーダーであるヘッケランに任せアルシエは家に戻ることにしたのであるがその足取りは疲労とは別の意味で重い。アルシエは、つい最近まで貴族の娘として生きていた。しかし、現皇帝であるジルクニフが行った政策による粛正により家は取り潰された。その為、通っていた帝国魔法学院を辞め、お金を稼ぐためにワーカーになる道を選んだ。

(帰りたくないな)

両親のことを思うと足取りが重くなっていく。アルシエの両親は、貴族ではなくなつた今も貴族として在り続けようとしている。しかし、そんなことは出来るはずがない。貴族でない以上は収入もなく借金をして取り繕っているだけだ。だが、現実を直視出来ない二人は自分の世界の中で生きている。

(ダメ。私がいっしょにいたい)

アルシエに弱音を吐いている時間はない。両親は、もう自分の力で

はどうすることも出来ないと言っている。しかし、幼い二人の妹を姉として守らないといけない。自分以外に守ってあげられる人間が居ない。決めたはずだ。二人の為なら自分はどうなってもかまわないと。どんなことでもすると誓ったはずだ。

(クーデリカ。ウレイリカ。お姉ちゃんは頑張るからね)

大切な妹達の顔を思い出し、妹達に会うために家に——アルシエは、急いで路地へと姿を隠す。

(なんで居るの!?)

思わず出そうになつた声を手で押さえながら呼吸と心臓の鼓動を静めるように努力する。ゆっくりと静かに気持ちを落ち着かせ覚悟を決めてから路地から顔を出す——居る。見間違うわけがない。魔法詠唱者の容姿に一度見れば忘れない不気味な仮面。それに身に纏う異常な魔力。昨日の夜に見たあの悪魔がそこに居る。それもアルシエの家の前で立ち止まり、家の方を見ている。

(私を追ってきた!?)

目と目が合った。だから目撃者である自分を殺しに来た。そう思うと必死で静めた心臓の音が瞬く間に強くなっていく。

(どうすればいいの?)

フォーサイトの仲間達を呼びに行く。それが今出来る最善手だろう。だが、昨夜の一件で疲れ果てている。それは、アルシエも同じだ。それに呼びに行く時間があるかも分からない。もしあの悪魔が家に押し入ったら? 家族を殺そうとしたら? そんなことはさせない。アルシエは、勝ち目がないと分かっているがそれでも戦う選択を選ぶ。大事な家族を守るために。

(——あれは、警備の人達?)

神の助けか? 道の奥の方からこちらに向かって歩いてくる二人の騎士の姿が見える。彼らは、帝都の治安を守るための騎士達だ。あの悪魔に勝てるとは思えないがそれでも助かるかもしれない。あれだけの悪魔が街中に居ると分かれば応援を呼ぶだろう。そうすれば、この帝都には力のある者が大勢居る。その中の誰でもいい。駆けつけてくれれば家族は——家族は……なんで? なんて何もしないの

？ アルシエは、目の前の光景に思わず路地から出てしまう。騎士達は、悪魔を一瞬見ただけでそのままその場を通り過ぎ、しまいにはアルシエをも通り過ぎてしまった。

(もしかしてなにかした？)

分からない。認識されていながら治安を守るはずの騎士がなにもしなかった。魔法？ アルシエには分からない。分からないがないとは言えない。相手は、第四位階の魔法を行使できる悪魔だ。アルシエの理解できない方法が使えてもおかしくはない。

(……私がやらないと。私が)

アルシエは、覚悟を決める。あの悪魔と戦えるのは自分以外に居ない。押し潰されそうになる。これが恐怖と言うものなのだろう。今までも感じた事はあるがここまで怖いと思った事はない……そうか、今は一人だからだ。いつもは、フォーサイトの仲間達が傍に居てくれた。だから怖くなかった。でも、今は一人。一人で立ち向かわないといけない。

(みんな、私に勇気を)

仲間達の事を思い浮かべ勇気を得る。一步、また一步悪魔へと足を進める。

「……あ、あの……」

喉の奥から言葉を引きずり出す。

「……誰だ？」

悪魔がゆつくりとこちらを見る。間近で見るとその仮面はより不気味さが増し、目穴から除く目が自分のことを見ていると思うと身体が小刻みに震える。

「……わ、私に用があるのでしょうか。家族には手を出さないで」

悪魔は何も答えずにジッとアルシエのことを見ている。怖い。ここまで頑張つて来たが逃げ出したくなる。

「……これは、もしかやアルシエさんではありませんか？」

急に聞こえた場違いな声。聞こえてきた場所は、家の方からだ。

「……あなたは」

見たくない顔がそこにある。その男がアルシエの家から出てきた

ということとは、両親がまた金を借りたということだ。

「お元氣そうでなによりです。いやはや、今日もお父上に頼まれて金貨を三十枚ほど貸させて頂きました。これでお貸した金貨は、四百三十枚になりますね」

男は、アルシエの前まで来る。傍に居る者には興味がないようだ。

「——また貸したの？　お願いだからもう貸さないで」

「そう言われましてもこちららも仕事ですからね。必要な方にはお貸し致します。ただ、もうそろそろ返して頂きたいのですが？」

「……今は持つていない。でも、必ず返す」

「それはいい心掛けです。ですが払えるのですか？　ワーカーでも払える金額ではありませんよ？　まあ、こちらとしては家にある資産と……」

男は、アルシエを舐めるように下から上まで見回す。気持ちの悪い視線に鳥肌が立つ。

「アルシエさんならいい値で売れますよ。第三位階の魔法が使えてその容姿ですからね。妹さん達と一緒に責任を持つて——」

男の肩に手が乗せられる。

「なんです——」

男は、そこで初めて傍に居た者を理解する。家の方から来た男からは背中しか見えなかった。ローブを着た姿から魔法詠唱者だと判断した。その為、アルシエの学院時代の知り合い程度に思っていたのだが思わず絶句する。

「お前は、誰だ？　人が話しているのに邪魔をするのか？」

不気味な仮面。まるで邪教徒が身に着ける仮面。それを身に着けた何者かがジツと男の顔を見る。

「わ、私は——」

「おい、今失礼な事を思わなかったか？」

「い、いえ……滅相も——」

「この仮面にケチをつけたら？」

怖い。此処は、貴族の家が建ち並ぶ場所だ。そんな場所でこんな変な格好をしているなんて危険人物でしかない。騎士達は何をしてい

る！

「お前、蛙って好きか？」

「か、蛙ですか？ いえ、そんなには……」

「お前、蛙になりたいか？」

「いったいこの者は何を言っているのだろうか？ 考えたくない。考えてはいけない気がする。」

「これ以上俺を不愉快にさせるなら呪いで蛙にするぞ？ 嫌ならサツサと消えろ、ゴミが」

理解した。理解してしまった。そうすると行動は早い。

「し、失礼しましたっ！」

男は、一目散に逃げていく。あのままで居たら呪いで蛙にされる。そう思うと逃げる以外の行動をとれない。

「不愉快だな。子供相手に大人が脅してどうする。おい、大丈夫……か？」

男が立ち去るのを見送り、少女の方を改めて見る。見るのだが涙を目に溜めている。

「——お、お願いです……私は、どうなってもかまいません。だから、せめて妹達には手を出さないで……」

（えー、なにこれ？）

悪魔——もといウルベルトは状況がさっぱり分からないでいた。本日は、それぞれが好きに休暇を楽しむということになったのだが、ウルベルトは一人で帝都の街を適当に見て回っていただけだ。それでたまたま屋敷が建ち並ぶ此処に来たのだがそこで知らない少女に話し掛けられ、知らない男がそこに登場。知らない男が少女に掛けた言葉の内容が気に入らなかつたので脅したわけだが、なぜか少女が泣きそうになっている。

「……よく分からないが何もしない」

「——嘘。貴方は、ズーラーノーンの人なんでしょう？ 昨日の夜に悪魔を従えているのを見た」

「昨日の夜？」

ウルベルトは、少女の顔をジッと見て思い出す。

「ああ、あの時の四人組か……そう言えば、敵だと思って逃げたんだな」

ウルベルトは、仮面を外し、ローブで隠れて見えない冒険者プレートを取り出して少女に見せる。

「俺は、ウルベルト。王国の冒険者だ。ズーラーノーンじゃないよ」

「——冒険者？」

冒険者と知って恐怖が少し和らいでいく。すると、頭の中でウルベルトという名前に心当たりが生まれる。

「……もしかして、第三位階の魔法を使う王国の冒険者？」

最近、帝都にまで名前が知れ渡って来た王国の冒険者チームが二つある。その一つにウルベルトと呼ばれる魔法詠唱者が居たはずだ。

「そうだ。そのウルベルトで間違いない」

「……でも、第四位階の魔法を使える」

「第四位階？」

「——私には、相手の使える魔法の位階が分かる。貴方は、第四位階が使えるはず」

「……なるほど。もしかしてタレントか？」

アルシエは頷いて答える。

「そうか。俺は、事情があつて第三位階の魔法までしか使えないことにしている。どうやら勘違いさせたようだな、すまない」

「——なんで、そんな事をするの？ 隠す必要なんてない」

悪魔でないと分かれると目の前の人物に興味が湧く。第四位階の魔法を使える者は、魔法詠唱者を育てる環境が整っている帝都でも少ない。それに内包する魔力が他の人達よりも多く、そして深い。アルシエの中にある魔法詠唱者としての性がどうしても知りたいと言葉を口から出させる。

「なぜだと思う？」

逆に訊ねられる。なぜ隠すのだろうか？ 第四位階の魔法が使えれば

多くの物を得る事が出来る。地位、名声、お金。それらを得る以上の理由……ダメだ、思いつかない。

「——ごめんなさい。私には、分からない」

「そうか。まあ、そんなもんだらうな」

そう言うと、アルシエの質問に答えないまま冒険者のプレート
ローブの中に仕舞い、仮面を被り直す。

「そう言えば、さつきなんでもするって言ったよな？　せつかくだか
ら一つ頼まれてはくれないか？」

「——頼みごと？」

「見たところ魔法詠唱者なんだろう？　この帝都に家があるってことは
学院の生徒だと思っただがどうだ？」

「——今は通っていない」

「それでもかまわない。観光をしているんだがよければ中を見学でき
るように話してくれないか？　せつかくだから見学したいんだけど
一人で行くのはなんか抵抗があつてな。知り合いに話をしてくれれ
ばいいからさ」

学院に行く。できれば——行きたくはない。妹達の為に諦めた場
所に行きたくはない。でも、この人には迷惑を掛けた。それにあの男
を追い払ってくれた。

「——話だけならしてみる」

「助かるよ。他にあてがないわけじゃないんだが最後の手段にしてお
きたかったんだ。それじゃあ気が変わる前に行こう」

「——案内するから付いてきて」

アルシエは、かつて学んでいた魔法学院にウルベルトを連れて行
く。通っていた道を歩きながら。

第45話

帝国魔法学院。魔法の名が付いているが実際は、魔法以外も学ぶ事の出来る学び舎。身分を問わずに実力があると認められれば入学する事が出来る場所だ。生徒達は、学院専用の制服を着ており、ペロロンのドストライクゾーンを超えるぐらいの年齢の子達が生徒として在籍している。もつとも、ペロロンのストライクゾーンはとんでもなく広いので十分対象ではある。

「どうぞ、こちらでお待ちください」

アルシエの取り次ぎにより、ウルベルトは無事に学院の中に入れた。——ではあるが、見学ではなく何故か貴賓室で待つように言われた。一人では不安になったので、アルシエに無理を言つて厚かましくも付いて来てもらった。

「こういう所は苦手だから本当に助かる」

学院に来るまでにアルシエからいろいろと話を聞いた。平民でも認められれば入れるとは言いが、やはり貴族などが多いらしい。礼儀や言葉遣いなどが面倒なウルベルトにとっては精神的な疲労ですぐに疲れてしまいそうになる場所だ。

「それで、アルシエ。久しぶりの学院はどうだ？　なんだか話しかけられたみたいけど」

貴賓室に来るまでに二人は多くの生徒から視線を集めた。ウルベルトが頑なに仮面を外さないのもあるが、アルシエの姿を見た者達が驚きの反応を表していた。その中で、一際良いところのお嬢様のような少女がアルシエに声を掛けたのだ。

「——別になんとも思っていない」

連れてきておいてなんだがやはり居心地は悪いようだ。道中に比べて口数が少なく、気持ちも沈んでいるように見える。

「そうか。でもあれだな、いい場所だな。綺麗だし、設備も整ってそうだな。やっぱり魔導書とか沢山あるのか？」

「——大学院や魔法省の方が多い。ウルベルトは、今までどんな魔導書を読んだの？」

隣に座るアルシエがウルベルトの方を見る。どうやら切り替えたようだ。今のアルシエの瞳には、好奇心の色が強く出ている。

「内緒だな。ただ、それだけだと悪いから少しだけ言おうと、俺には魔法に詳しい仲間達が居たんだよ。その人達といろいろと調べながら考えたかな」

今も忘れない。どう使えば効果的か？ どうすれば応用できるのか？ 未知の魔法は？ どうすれば対応できるのか？ そんな事ばかりを話し合っていた気がする。

「——他の人達も同じぐらい凄いの？」

「いや、自慢じゃないが俺が一番だったな。でも、優劣は付けられない。例えばそう……俺達のリーダーは、魔法の使い方や考え方が上手かったんだよ。少なくとも知識量なら俺よりも上だったはずだ」

ウルベルトよりも上と聞いてその人物に興味が湧く。目の前に居るのは間違いなく天才の部類に入る。その人物より上となると——

「好きなんだな、魔法。仏頂面だけかと思ったら違うみたいだ」

言われて気づく。自分が前のめりになって聞いていたことに。顔を背ける。恥ずかしい。

「照れる必要なんてないだろう？ 好きなものに熱くなるのは普通だ……ごめんな、此処に連れてきて。無理矢理連れて来た俺が言うのもなんだけど、そこまで好きだと辛いだろう？」

「……謝らなくていい。もう一度此処に来られたから」

家の事を知っている者も居る。惨めな自分を見られるのは嫌だ。それでも……またこうしてこの場所に足を踏み入れられてよかったと思う。

「そうか。ありがとな。そう言ってもらえると気が楽になる。しかし、勿体ないな。第三位階が使える上にタレント持ち。魔法に対する意欲もあるんだ。いい線行くと思うんだけどな。まったく、魔法に力を入れてるなんて嘘だな、嘘。こんな天才を囲わないなんて。見る目がない者ばかりだな、此処は」

「……もしかして気を使ってくれてるの？」

「そんなわけないだろう？ 事実を言ってるだけだ。なんだか帰りたく

なってきた。本当に帰るか？ なんなら妹さん達も誘ってなにか食いにでも行くか？ 今泊まってる所の飯も美味いがせっかくだから他も見てみたいしさ？」

「——ありがとう」

事故とはいえ、仲間にも話せなかった事を話せて少し気が楽になった。それにもう一度この場所にも来られた。それだけでもう——
「お待たせした」

貴賓室の扉が開き、二人はそちらの方に目をやる。

「アルシエか？」

「パラダイン様……」

部屋にやって来たのは他でもない現代の最高の魔法詠唱者と言われるフルーダ・パラダインその人だ。

「なぜ、お前が此処に居る」

パラダインは、アルシエの存在に驚く。自分を呼びに来た者は、ウルベルトの事しか言わなかった。

「——それは……」

アルシエは、ウルベルトの方を見る。

「それなら俺が頼みました。初めまして、ウルベルトと言います」

席を立ち、頭を軽く下げる。そんなウルベルトをパラダインはジッと見る。穴が空きそうなほどに。

「……なるほど、そうかお主がそうか。いや、ふむ、そうか。いやはやこれは正に……」

見る見るうちにパラダインのアルシエを見て硬くなっていた表情が歓喜で綻ぶ。アルシエと同じタレントを持つパラダインには、経験からアルシエ以上にウルベルトの素質を理解できる。

「——私は、これで」

アルシエは、この隙に部屋から出ようとして——手を掴まれる。

「せっかくだからもう少し付き合ってくれるか？」

アルシエの手をウルベルトが握っている。

「パラダイン様もどうぞ。立ち話もなんですから」

アルシエを改めて座らせ、パラダインを正面の席へと招く。

「どうやら二人は知り合いみたいですね？」

二人の反応を見れば想像はつく。少なくとも面識はあると。

「アルシエは、私が目を掛けていた教え子の一人になる。だが、愚かにもこの場所から去った。その者は、魔法を汚したのだ！ 才能がありながら！ 若さがありながら！ お前は、魔法詠唱者として失格だ！」

言葉に熱が入っている。思わずアルシエが身を縮める程に力ある言葉だ。

「愚かね……。パラダイン様は、アルシエが何故ここから離れたかご存じで？ アルシエの家は、政策の一環で取り潰しにあったそうですよ。別にそれに関しては仕方がないと、俺は思います。アルシエには悪いが国としてはそれでよかったみたいだからな。少なくとも家族よりも貴族の立場に執着しているような者は嫌いだ。死ねばいいすら思う」

ウルベルトの言葉に心のどこかで感情が動くのが分かった。他人に両親のことを言われて、まだ自分が両親のことを好きであったのだと気づく。

「アルシエは、ワーカーとして家族を支えているんですよ。親が借金をして金が必要だから。それで学院を辞めるしかなかった。そのどこが愚かなのか俺には分かりませんよ。こんな立派な人間に愚かとか言わないでほしいですね」

実力は認めたが、若造に言われパラダインも内心穏やかで居られるわけではない。

「俺は、魔法に興味がある。できれば、此处で学びたいぐらいだった。だが、こんな優秀な生徒を簡単に手放すような所でどれだけの事が学べる？ 断言しよう。たかが知れている」

「——貴様！ 黙って聞いて居ればいい気になりおつてっ！ 私が誰か知って言っているのだろうなっ！」

ついにパラダインが怒りを露わにする。気のせいか空間が歪むような息苦しさが生まれる。これが逸脱者と呼ばれるパラダインの力なのだろう。だが——ウルベルトの表情は変わらない。

「俺は、事情があつて使える位階魔法を第三までにしていた。それがどうしてか分かるか？」

ウルベルトは、パラダインを睨む。

「人間の限界が第六位階？　馬鹿を言うな。俺がそれを超えてみせる。超えて、名乗つてやる。俺が魔導を極める者だと世界中になつ！　フルーダ・パラダイン。俺は、あんたを超える。超えた時に『第七位階』まで使えると公言してやる！　いや、それ以上も使いこなしでみせる」

「第七位階を使うだと……」

これには、パラダインも動揺を隠せない。この者は、人類の限界を超えると言った。この現代最高の魔法詠唱者と呼ばれるフルーダ・パラダインの目の前で。馬鹿か。底抜けの……いや、それは違う。この者は違う。自信がある。揺らぎようなない自信がある。分かっているのだろう。自分がフルーダ・パラダイン同様の天才であることを理解しているのだろう。見える。看破の魔眼を持つパラダインには見える。才能を感じさせる底が見えない魔力が――悔しいが……この者なら今まで一人で進んできた暗闇を照らし、自分よりも前に進むかもしれない。そう思わせる……そう思いたい。逸脱者として孤独の中に居た自分と張り合える相手であると。

「ウルベルトと言つたな。私の下に来る気はないか？　できる限りの待遇で迎え入れる準備がこちらにはある」

パラダインは、気を静め深く座り直す。それに合わせ、ウルベルトも気を静める。

「申し訳ありませんが、今はまだ力を得る事を優先したいので辞めておきます。早いところ第五位階まで行きたいので」

「簡単に言つてのける。気に入った。いつでも私の下を訪れる許可をだそう。その代わり、幾つかの魔導書を渡しておきたい。その時にも意見を述べてほしい」

「読ませて頂けるのなら嬉しい限りです。意見に関しては読んでみないと分からないので期待はしないでください。それと、ついでに一つお願いをしても……」

「聞ける範囲ならかまわん。なにを求める?」

ウルベルトは、アルシエの方を見る。

「アルシエとその妹達をパラダイン様の名前で保護してもらえませんか? このままだと親の借金でどうなるかわかりませんので」

「ウルベルトさ——」

アルシエの言葉をウルベルトは、目だけで止める。黙っている。

「貴族に復帰させろ、ではなくか?」

「さつきも言ったが自業自得の部分があると俺は勝手に思ってるよ。子供が自分達の下から居なくなれば少しは頭が冷えて考えも変わるだろう。それと借金は、今ある分はアルシエが払え。金貨四百三十枚は大金だが、それぐらい返せるぐらいになってみせろ。できるな?」

アルシエが本当の意味で家族を支えるための条件を提示する。この程度乗り越えてみせろと。家族の為に。

「——払います。払ってみせます」

アルシエは、それを受け入れる。親が立ち直る機会と妹達を支える実力を身に着ける覚悟の証明の為に。

「いい返事だ。返済に関しては俺が交渉をしてもいいんですけど、手荒になる可能性があります。別にいいですか?」

「その時は、私も席を共にしよう。その代わり、アルシエよ。お前には、私の手伝いをしてもらう。ワーカーをしながらでもかまわんから手伝いなさい」

「——パラダイン様! ありがとうございます!」

アルシエは、立ち上がりパラダインに頭を下げる。深々と何度も。「さて、これでいいのかのう。一つと言ったが、お主にそこまで言わせた者を他所にやるわけにはいかんからな」

「話が早くて助かりますよ。じゃあ早速、魔導書でも見せてもらいましょうか。アルシエも来るだろう?」

「——私は……」

アルシエは、パラダインの方を見る。

「自分で決めなさい。どうやら私が知っているアルシエとは違うようだからな」

「——私も魔導書が読みたいです！ 読ませてください！」
アルシエの返事を聞き、パラダインの案内で魔導書を探しに行く。
膨大な数の中から魔法の深淵を覗くために。

第46話

自由な時間を終えて各自宿へと戻って来た。今は、遅めの食事をしながら部屋で報告をしている。たつちは、装備一式を整備に出し、その後は武器などを見て回ったそうだ。ペロロンは、お土産を買うために北市場をはじめいろいろな場所に足を運んだ。そして、最後にウルベルトの番が来た。

「いいなあ、ウルベルトさん。俺も学院を見学したかったなあ。俺なんて普通に門前払いでしたよ。警備の人もいっぱい来ましたし」
実は、ペロロンも魔法学院に行っていた。しかし、門前払いをくらって諦めたそうだ。どうやら目についた女生徒に片っ端から声を掛けていたのがまずかったらしい。

「それで、これからどうする気ですか？ ウルベルトさんのことだから分かっていてと思いますが、この件は終わっていないと思いますよ。裏稼業の人達は、体裁を大事にします。商売をする上で必要なのですから。そのアルシエと妹さん達は、フルーダ・パラダインの名の下に安全だとは思いますが。彼らも手を出せない相手ですからね。ですが、ウルベルトさんは違います。後ろ盾もない。確固たる地位も立場もない。恐れるだけの実力もないですからね」

ウルベルトは、あくまでも将来有望な魔法詠唱者としての価値しかない。手を出そうと思えば簡単に出来る。

「わかってるよ、言われなくても。分かった上で、落としどころにしたからな。これで少なくとも俺に不満が向けられるはずだ」

アルシエと妹達は、フルーダ・パラダインの名前で保護されることになる。しかし、ウルベルトは含まれていない。ウルベルトは、彼らが抱く不満が自分に向くように敢えてそうしなかった。面子を潰され、追い詰められれば自暴自棄になり約束事を反故にする可能性があるからだ。追い詰めるだけではなく、逃げ道も必要になる。

「俺には、他に思いつかなかった。だからと言って、家族の為に危険を冒してまで守ろうとするアルシエをほうつてはおけない。それに、妹

達は五歳やそこらだ。どうやって金になる？ 貴族の子供だから養子もあるかもしれない。でも、世の中はそんなに甘いもんじゃない。自分で選んだ道なら仕方がないと思える。でも、小さ過ぎて自分の立場すら理解出来ていないとは思えない。俺は、理不尽な世界で抗うことも許されず、誰かの私利私欲の為に使われるのは嫌なんだよ。せめて、どんな道であつても自分で決めた方がいいに決まつてる。例えば、地獄のような道であつても」

ウルベルトは、貧困層の生まれである。両親は、劣悪で危険な場所で働かされ早くに亡くしており、自分自身も似た様な境遇を辿つた。その為か、理不尽な社会に対する憎悪からウルベルト・アレイン・オールドルが生まれた。世の中への不満を晴らすための存在として。自分の世界を変える為に。

「今の俺は、昔と違って手を差し出すことが出来る。それが出来るだけの力を手に入れた。こうして第二の人生を迎えられたんだ。俺は、俺の思うままに出来ることをやりたい。理不尽な世界を変えたい。変えてやりたい。少なくともアルシエ達には、俺と同じ道を進まなくてもいいようにしてやりたいんだよ」

自分勝手な子供の我儘なようなものだ。それでも通したいものもある。

「なら、私から言うことはありません。私としても出来る限り力になりたいですからね」

「俺も力になりますよ。女の子達の為なら命を懸けられますからね」

「……いいのか？ 下手をすれば巻き込まれるぞ？ 少なくとも帝国領内は危険になる。それでもいいのか？」

「仲間を見捨てたりはしませんよ。それに私も似た様な事をしたかも知れませんかからね」

「そうそう。それよりも紹介してくださいよ。妹さん達も含めて」

裏稼業の者達に命を狙われるかもしれない。場合によっては、死ぬよりも辛い目に遭うかもしれない。それでも二人はあっさりを受け入れてくれる。二人もそうだった世界を知らないわけではない。それなのに自分の我儘を受け入れてくれた。

「ありがとな。俺の我儘に付き合ってくれて」

「いいってことですよ。それで、いつ会うんですか？　俺も同行しますよ」

「私達、ですよ。相手にウルベルトさんの仲間の顔を見せておきたいですからね」

「明日、少しだけ時間を貰いたい。魔法省の方に相手方を呼んで話すことになってる」

パラダインの力で、相手をこちらに有利な場所である魔法省へと呼ぶ手筈になっている。

「相手呼び出すとか権力がある人は違いますね。普通は、こっちから頭を下げて行くようなもんなのに」

「ですが、有利に事を運べるのは良いことです。交渉は、始まる前から勝負ですからね。ただ、この借りは大きそうですね。返すあてはあるんですか？」

「第五位階になれば期待に応えたことになる。だから、二人のレベリングを一旦中断したい」

現在は、たつちとペロロンを中心としたレベリングを行っている。前衛を強化することにより安定を得るためだ。

「いいと思います。危険が最も高いのは、他でもないウルベルトさんですからね。今度、モモンさん達にも話してみましよう」

「じゃあ、明日はモモンさん達とは別行動になるのかな？　まあ、明日になれば分かるか」

三人は、明日に備えて早めに休むことにする。もしかすると、ゆつくりと眠れる最後の夜になるかもしれないのだから。

◇◇◇◇◇

アインズは、ナザリック地下大墳墓に戻り、執務室でパンドラとセバスと共に会議を開いていた。

「——と、ここまでが現状になる。意見はあるか？」

アインズは、ウルベルトの一件を二人に話したわけだが反応は違

う。

「私は、どのような事でも致します」

セバスは、ウルベルトの行った行為に少なからず好意を抱いている。最初に話を聞いた時は、ウルベルトを悪の象徴と思っていたように驚きを見せていた。しかし、アインズがウルベルトの境遇を話したことで理解を示した。

「アインズ様は、なにを望まれるのですか？」

パンドラは、既にアインズから三人に関する話も聞いていたのでこれまでの変化はない。ただ、どのようにするべきか判断しかねるようだ。

「既に帝都に存在する勢力は調べ終えた。最も危険であると判断していたフルーダ・パラダインは味方であるため脅威ではない。ただ、今回は出来ることに限りがある。潰すのは簡単だがそれでは私達の存在に気づかれる。正体が分かることはないと思うが、何者かが関わっていると勘づかれるのを良しとはしない」

「ズーラーノーンをお使いにはならないのですか？ この時の為のモノだと思いますが？」

ズーラーノーンは、ナザリックの存在が表に出ないようにするため
の隠れ蓑だ。

「デミウルゴス様が王都で活動を行っておりますので、手が空いた私が帝都で工作活動を行っております。それを用いてはいけないのでしょうか？」

「アレは、まだ温存しておきたい。それに今の段階では問題は起こらないと判断している。刺客を差し向けるにしても準備は必要だろうからな。三人は、そう遠くないうちに王国へと戻る。少なくとも今回には間に合わないだろう」

三人が王国へ戻る時間は残り僅かだ。その間にウルベルトを殺せる戦力を揃えるのは難しい。

「承知致しました。それでは、次回に備えて強化しておきたいと思えます」

「頼むぞ、パンドラ。それと、セバス。お前には、王都での役割がある。

デミウルゴスを支援しながら三人の為に上手く動いてほしい」

「畏まりました。アインズ様の御心のままに」

アインズは、そこで一息つく。ウルベルトがとった行動に驚きはしたが、別におかしいとは思わない。アインズも——鈴木悟もウルベルトと同じ境遇を辿っている。理不尽な力に翻弄される辛さと憎さは分かるつもりだ。

「——さて、それでは私も仲間として動くのでしょうか」

明日に備え、ナーベを残している帝都へと戻る。アインズ・ウール・ゴウンの仲間として動くために。

◇◇◇◇◇

予定通りに魔法省へと足を運ぶことにしたのだが他にも一緒に来た者達が居る。

「いいんですか、一緒に来て？」

「旅は道連れ世は情けと言うでしょう？ 乗り掛かった舟です。最後までお付き合いしますよ。そうだろ、ナーベ？」

「モモンさんの仰る通りです」

モモンとナーベに事情を話したのだが、一緒に付いてくると言われた。「人数が多い方がいいでしょう」という理由で。

「二人も居てくれれば心強い。だが、きけ——」

ウルベルトは、危険ですよと言おうとしたところで言葉を止める。

ナーベはともかく、モモンが危険な状況が想像できない。

「私達は、強いですからね。振り返ちにするだけです。それよりも、なんだか人が多くないですか？」

モモンに言われ魔法省の入り口の方を見ると、アルシエ以外にも人が居た。パラダインは、中で待っているはずなので違うはずだ。

「お前さんが、ウルベルトか？」

見た限り冒険者——いや、アルシエと共に居たのを見た事がある。どうやらフォーサイトの仲間達のような。

「ヘツケラン・ターマイトさんですね？ アルシエから話は——」

挨拶をしようとしたウルベルトを睨むようにヘツケランは、上から下までジロジロとウルベルトを見る。

「なにか?」

「あの時の化け物が王国の冒険者とはね。なんで、あんな仮面をしているかは分からないが一つだけ言っておく。いいか、アルシエは俺達の妹分だ! てめえ、みたいな胡散臭い奴にはやらんからなっ!」

「……はっ?」

状況がよく分からない。アルシエに説明を求める為に視線を移すが——その前にヘツケランの隣に居たハーフェルフのイミーナが思いつきりヘツケランを叩いている。

「少しは空気を読みなさいよっ!」

「イミーナ……こういうのは最初が肝心だろ? フォーサイトのリーダーとしてはガツンと言っておかないと」

「あんたって……ごめんなさいね、ウルベルト。ヘツケランは、アルシエの悩みを先に聞いたあんたを妬んでるのよ。自分を差し置いてって感じでね」

どうやらアルシエは、今回のことを仲間達に話したようだ。二人の後ろで恥ずかしがっているアルシエの姿が見える。

「よかったな、話せて」

アルシエは、嬉しそうに頷く。

「すまないが、アルシエは借りていく。あくまでも会うのは、三人だけなんだな」

「上手くやらなかったら俺がお前を殺すからな」

今にも噛みつかれそうな形相だが、イミーナに叩かれ奥に連れられる。

「じゃあ、行くか」

ウルベルトとアルシエは、仲間達に見送られながら魔法省へと入って行く。今よりも前に進むために。

第47話

魔法省で行われた話し合いは、パラダインの仕切りにより滞りなく行われた。金貨四百三十枚は、毎月金貨十枚以上を目安に返済することで合意。一般的な月収が金貨三枚であることを考えると随分な金額ではあるが、ワーカーの仕事に励めば数年を掛けて返済出来るだろう。それにしても明日の保証もないこの世界において数年もの猶予があるのは異例である。普通なら数ヶ月での返済なのだから。ウルベルトとアルシエは、フルーダ・パラダインの力が帝国において絶大であることを改めて知ることになった。

そしてここからは、アルシエから聞いた話になる。パラダインは、アルシエの両親の下に足を運び話し合いを行ったそうだ。まさかパラダインが家を訪れるとは思ってもいなかった両親は驚き、パラダインの説教交じりの提案に頭と肝が冷えた。皇帝であるシルクニフを若造と罵る両親も自分より遥かに年上なパラダインの言葉はこたえたようだ。妹達は、パラダインの知り合いの家に引き取られ、両親は復興の為に親戚や知り合いの下を訪れているそうだ。家の復興は簡単に出来るものではないがそれでもこのまま腐るよりはマシになるだろう。

アルシエ自身は、ワーカーをフォーサイトの仲間達と共に言いながらパラダインの研究の手伝いをする事になった。パラダインの話では、アルシエは既に才能の限界に近く努力しても第四位階が限界とのことだ。ただ、必ずしも行使できる位階だけで評価は決まらない。そもそもパラダインは、アルシエの魔法に対する姿勢や考え方を高く評価していた。だからこそ魔法から離れたことに失望感を覚えたのだ。今後は、魔法科学の研究者として指導するとのことだ。それに暇な時間は魔法学院で学ぶことにもなった。限られた時間ではあるがそれでも通えて嬉しいとアルシエは語っていた。

それと、パラダインはナーベのことは諦めたようだ。理由としては、本人がまったく魔法に興味がないからだ。ただ、ウルベルトから聞いた話で、モモンが自分と同じ英雄の領域に足を踏み入れている逸

脱者である可能性が高いと判断した。その為に何かしらの方法を用いて、パラダインのタレントでも行使できる位階魔法が分からないナーベも同等の力を保有しているのではないかと考えている。とはいえ、パラダインとしては、自分の高弟達と同じく第四位階の魔法が使い、パラダイン同様に複数の系統に精通しているウルベルトという存在に知り合えたことで十分だったようだ。わざわざウルベルトの為にだけに講義を行うぐらいには喜んでいた。

その一方で、帝国の裏社会に喧嘩を売った形になったウルベルトを守るために残された期間中は、常に三人で行動することになった。冒険者組合から受ける依頼を減らしてまで身構えたわけだが特に何も起こらなかった。だからと言って安心はできないが無事に三人は、王国へと帰還する事が出来た。

「やはり、フルーダ・パラダイン様の読む魔導書となると難しいですね」

「うむ。流石は、パラダイン様である」

漆黒の剣のニヤとダインは、ウルベルトが借りて来た魔導書を読んで感心している。ウルベルトは、新しくメッセージの魔法を習得した。ユグドラシルにおいては、仲間達と連絡を取る為に必要な物ではあったがこの世界では話す相手が居なかつたので今まで必要としていなかった。それに話によるとメッセージの魔法は人気がないらしい。距離が離れると途切れたり、雑音がしたりするからだ。だが、ウルベルトとパラダインの場合は問題がない。エ・ランテルから帝都までの距離でまったく問題がないのは、パラダインも初めてのことからしく興味が湧いたようで嬉しいだった。二人が力のある魔法詠唱者だからなのか？ それとも相性がいいのかは分からないが無事に魔法に関しての話し合いがいつでも行えるようになった。ちなみにメッセージの魔法をアルシエも習得するために勉強中だったりする。「二人の意見も聞かせてくれよ。一人で読むには量が多いからな」

貴重な物ではあるがそれを四冊もパラダインは、ウルベルトに預けた。『アンデッドの生態』。『アンデッドの召喚に関して』。『呪いについて』。『呪いを行使するモンスターについて』の内容となる計四冊が

パラダインとの話し合いで選んだ魔導書になる。魔導書は物によって形式が違うようで、研究レポートのような物もあれば、聖書のように物語めいた物もある。他にも日記形式や図鑑のような物もある。あくまでも魔法に関する本をまとめて魔導書と呼んでいるようだ。最終学歴が小卒であるウルベルト的には、日記形式や図鑑の方が分かりやすく好きだ。

「ふーん。帝国って危険なんだな」

「こちらもアンデッドの種類が増えてきましたが、そこまで危険ではありませんね」

「私達が来てから増えたそうです。ウルベルトさんがメッセージの魔法で聞いた話だと今はこちらとあまり変わらないようです」

「俺達って疫病神なんですかね？」

ウルベルト達の隣の卓では、漆黒の剣のルクルトとペテルがたちとペロロンと話している。どうやら三人とモモン達が王国に帰ってからアンデッドの数が落ちてきているらしい。五人が粗方片付けたのもあるだろうが一部では、五人がアンデッドを招いたのではないかと噂があった。特にモモンとナーベは、ズラーノーンとの因縁があるので信じる者も少なくはなかった。

「それにしても今頃どうなってるんですかね？ 会食が始まってから大分経ってますけど」

「アインザック組合長と共にエ・ランテルの有力者達との会食。あの二人なら間違いなく昇級すると思いますよ」

エ・ランテルに戻ってきてすぐのことだ。モモンとナーベにアインザックから話があった。それは、モモンとナーベの昇級試験の話。エ・ランテルの最高ランクの冒険者は、ミスリル級となっている。これは組合に来る依頼のほとんどが個人の持ち込みであることが影響している。単純にエ・ランテルよりも王都の方が身分が上の者が多く、払える報酬額が大きくなる。その為にオリハルコン級以上の依頼のほとんどは王都で受けることになるので、オリハルコン級になると王都に拠点を移す場合が多い。ただ、今の状況下で実力のある冒険者チームに移られるとエ・ランテル側は大変困ることになる。そこで、

エ・ランテルの有力者達は、モモンとナーベをエ・ランテルの冒険者として囲うことにしたのだ。今回の会食での話し合いが上手くいけば、二人は晴れてオリハルコン級冒険者となる。

「でも、オリハルコン止まりなんだな。もうアダマンタイトにすればいいんじゃないか？ 帝国での話を聞くと十分だろ？」

「いろいろとあるのではないのでしょうか？ アダマンタイト級冒険者というのは、力無き者にとっては希望です。審査もそれだけ厳しいでしょう」

「私もモークさんの意見に賛成ですね。国や人々の為に行動できる者でないと務まらないと思います。蒼の薔薇の方々は、少なくともそうでしたから」

「じゃあ、俺とウルベルトさんは無理っぽいですね。そう思いませんか？」

「かもな。だが、それでも俺はアダマンタイトになる。国や人々の為ではなく俺の為にな」

国の守護者と言われるアダマンタイト級冒険者に相応しくない台詞ではあるが、繕ったところでボロが出るというのがウルベルトの考えだ。今更誤魔化す気はない。

「——おっ？ 噂をすれば」

ペロロンが組合に戻って来たアインザックとモモン達に気づく。

「それでは、また後で」

「分かりました」

アインザックは、そう言う組合長室へと向かって行く。

「モモンさん、ナーベさん！ こっちこっち！」

アインザックが立ち去った後にペロロンが二人を招く。手を振りながら。

「やっと終わりました」

疲れたようにモモンとナーベは、空いている席に座る。

「ねえ、どうだったのナーベちゃん？ もしかして王都に行ったりするの？ 俺を置いて行かないでよおー！」

空いていた席がルクルットの隣なので仕方なくナーベは座ったが、

いきなり不機嫌になる。キツとルクルツを睨むわけだが、ルクルツも慣れたものでまったく応えない。

「私達は、此処に残ります。ただ、しばらくは組合で用意した依頼をこなししていくことになりそうです。皆さんとは別行動になります」

「そうですか。ですが、モモンさんとナーベさんがエ・ランテルに居てくれれば安心ですね」

「私もエ・ランテルの冒険者の一人として歓迎します。お二人が居てくれると心強いです」

どうやら二人は、エ・ランテルの冒険者達を中心になりそうだ。盗み聞きをしていた他の冒険者達も好意的に受け止めている。モモン達の実力を知らない冒険者は今やエ・ランテルには居ない。

「じゃあ、どうします？ 前祝でもします？」

「いえ、今回はお断りしておきます。これからナーベと共にいろいろと用事を済ませないといけませんので」

「そうなんですか。俺達も王都に行くように言われていますけど、帝都の方で疲れたんでしばらく此処に居ます。時間があつたらいつでも言ってください」

モモン達同様に三人にも昇級の話は来ている。ただ、帝都での一件で疲れたのでしばらく休むことにした。

「お互いに忙しいようです。それでは、私達はこれで」

モモンは、話しもほどほどにナーベを連れて組合から出て行く。本当に忙しいのだろ。あつと言う間に居なくなった。

「それでは、私達もそろそろ準備をしましようか」

「そうですね。ウルベルトさん、トブの大森林に行くから準備してください。王都に行く前に行きたいんですから」

「本当に行くのか？」

「当たり前じゃないですかっ！ 俺は、約束は守る男ですよっ！」

嫌々なウルベルトと違い、ペロロンは行く気満々だ。

「トブの大森林になにか用でもあるのか？」

「そんなところですよ。じゃあ、二ニヤちゃん行ってくるねっ！」

「気をつけて下さいね、ペロロンさん」

ペロロンを先頭にたつちとウルベルトも後に続く。王都に行く前に未だ姿すら分からない存在に会いに。沢山のお土産を持って。

第48話

お土産の入った荷物を持つペロロンを先頭にたちちとウルベルトが続く。トブの大森林を訪れるのは久しぶりではあるがモンスターや動物に遭遇することが無い。ただ、此処に来る前に話を集めてはみたが他はそうではないようだ。ゴブリンや危険な野生動物と普通に遭遇するらしい。それこそ漆黒の剣も三人と来たあの時だけで他は以前と変わらないとのことだ。

「たちちさん、そつちはどうですか？」

「いえ、なにも。ウルベルトさんは、どうですか？」

「こつちも特にはないな」

二人は、周囲を警戒しているが何者の気配も感じない。前と変わらずに生き物が棲んでいない死んだ森のままだ。

「噂だと、森の賢王は相手を支配できるらしいから買ってはみたが既に術中にハマっていたりしてないよな？」

ウルベルトは、帝都で稼いだ三人分の報酬で買った精神支配に耐性を持つネットワークスを身に着けている。精神支配に耐性を持つマジックアイテムは数が少なく高額ではあるがそれでも必要と思いつてみた。理想とするほどの効果は無いがそれでも不安を少しでも紛らわせられる。

「その可能性はゼロではないと思います。少なくとも私達の時だけ森が静かなのは気になりますからね」

「森に入る前から監視されているって状況は考えたくないが、ここまですなにもないとそうもいかないか」

二人の中での警戒は以前よりも強まっている。レベルが上がっているたちちでも気づかない相手——絶望的な差を感じる。

「考え過ぎですよ。きっと、エルフの子達が俺達の為にモンスター払いとかしてくれてるんですよ」

警戒はしているはずだが、それでも呑気に先を歩いていたように思えるペロロンが後ろを振り返る。

「それはそれで危険だぞ？ 森の賢王が支配している南の森で力を振

るえるってことだからな」

「そうですね。少なくとも森の賢王とはなにかしらの面識はあると考えるべきでしょう」

「二人共、そんなに警戒してたら友好関係は結べないですよ！ 俺達は、不要な争いをしないためにこうして来てるんですから！」

確かにペロロンの言う通りだ。この森には、以前と変わらずに多くの者が訪れている。しかし、エルフと思われる者達と接触したのは三人だけになる。調べて分かったのだが現在のエルフと人間は、友好的な関係を築けてはいない。どうやらスレイン法国とエルフの国が戦争中らしい。詳しい内情までは分からないが、ハーフエルフのイミーナから話を聞く限りでは、人間とエルフの間には深い溝が出来てしまっているそうだ。そんな情勢下では、些細な事で問題が起こる可能性がある。ズーラーノーンの脅威が強まっている今の状況では、無用な争いを避けるべきだと三人は考えている。その為、できる事なら友好関係を築いた上で、トブの大森林での双方の安全を確保したい考えだ。

「分かってるよ。予定通り、話し合いはペロロンさんに任せる。但し、今回は土産を渡すだけだ。もしかしたら渡した物の中に相手を不快にさせる物があるかもしれないからな」

「イミーナさんに聞いてはいますが念には念を入れた方がいいと思います。この森は、王国の人達にとって必要な物です。争いは避けた方がいいですからね」

話し合いの役をペロロンに一任した。既に二人は警戒を通じて、相手に不安と不信を与えている可能性が高い。だからこそ初めから友好的なペロロン一人に任せ、二人は周囲の警戒に回ることにした。

「任せて下さい！ 俺が彼女達のハートをキャッチしますから！」

頼りになるような、ならないような。相手が亜人種——この世界だと異形種になる彼らを問題なく受け入れようとするペロロンは交渉役としては最適だろう。本人の資質はともかく。

「——来てくれたんですね」

急に聞こえた声。おそらくエルフの姉の方だ。

「もちろん！ 俺は、約束を守る男だからねっ！」

ペロロンは、何処に居るかも分からない相手に胸を張って答える。その一方で、たっちとウルベルトは少し離れた場所で周囲を警戒する。お土産を渡すわけだが内容を確認する為に近くに来る可能性がある。二人は、視界の悪い森の中の様子を出来る限り広く見る為に意識して立ち位置を決める。

(こちらには居ません)

(こつちもだ)

予め発見出来なかった時用に決めていた合図を互いに出すと未だに相手の正体を掴めないことに落胆を隠せない。どうやら相手は相当の実力者ということになる。そうなると現段階では、ペロロンに任せる以外にない。

「三人で話したんだけど、二人が警戒すべきだって言ってね。今回はお土産を渡すだけになったんだけど、それでいいかな？」

余計なことをと言いたいが既に態度で表してしまっている。仕方がないので、ペロロンを睨むだけに留めておく。

「分かりました。それと、こつちからもお土産があるんです」

「——こ、此処に置いておきます」

二人目の声が自分達と同じ高さ——近くの草むらの方から聞こえた。おそらく弟の声だろう。

「本当に!? いやー、嬉しいなー」

ペロロンは、警戒もせずに草むらへと移動して発見する。

「コレって、前に置いて行った籠だ。たっちさん、ウルベルトさん！ 籠の中に薬草がいっぱい入ってますよ！」

「本当ですか？ どうします、ウルベルトさん？」

「俺が行って来る。たっちさんは、此処に居てくれ」

たっちに警戒を任せ、ウルベルトがペロロンの下まで向かう。すると、確かにこの前置いていった籠があり、その中には沢山の薬草が入っていた。

「……どれも本物だ。魔法なども掛かっていない」

おかしなところがないか調べてみる。魔法の有無が無いかを《ディ

テクト・マジック》で調べるが反応はない。手に持って薬草を確認してみるのが貴重な部類に入る物ばかり。これだけあればお土産の元が取れそうだ。

「ありがとー！　じゃあ、今度はこっちの番だね」

ウルベルトが草むらから籠をたっちの下まで運んでいる間にペロロンはお土産を見せるための布を地面に敷く。

「姿が見えないから想像でいろいろと買って来たんだよね。服とかはサイズが分からないから買えなかったけど、装飾品とかなら大丈夫だと思つて——」

先ず取り出したのは、木彫りのブローチ。鳥をモチーフとした子供の手の平に納まるサイズの物だ。次に取り出したのは、ガラス製のコップだ。透明度はそこまで高くはないが細かな模様が施されている。他にもいろいろと取り出しては、ペロロンはお土産の説明をしていく。だが、反応は特にない。傍から見ているとペロロンが一人で誰も居ない森に話しているように見える。

「——後は、コレだね。最後になるんだけど、姉弟のエルフって聞いて最初に浮かんだイメージで買ったんだ。俺としては、ちよつと不本意なところもあるんだけどね」

ペロロンが最後に取り出したのは、小さな二つのぬいぐるみだ。肌が薄黒く、金髪の子供の人形。

「探している時に見つけてね。本当は、人間の双子の人形だったんだけど無理言つて手を加えてもらったんだ。耳をエルフみたいに長くして、目を緑と青のオッドアイにしてもらったんだ。本当は、服とかにも拘りたかつたんだけど予算が尽きちゃつて。ちなみに、こっちの方がお姉ちゃん、こっちが弟になるからね」

作り直してもらった人形を手を持ちながらペロロンは森へと向ける。人形の目は、左右で色が違いその姉弟の人形はどこか——

「その人形に名前とかありますか？」

久しぶりに聞く声。ペロロンが何を話しても言葉が返つてこない。もう居なくなつたと思つていた。

「ないんじゃないかな？　お店の人に聞いたけど双子の人形だとしたか

言われなかったし。でも……そうだな……」

ペロロンは考える——考えて、口にする。

「ダメだ。この名前を勝手に付けたら姉ちゃんに蹴られる気がする。もつとウチの子は可愛いって。せめて、服装や髪型……いや、造形ももう少し拘らないと姉ちゃんの拘りが再現出来ない……」

二つの人形を凝視しながらペロロンはブツブツと呟いている。どうやら変なスイッチが入ったようだ。

「よくよく考えたら勝手にダークエルフの姉弟って思うのもアレだね。もしかしたら他の種族かもしれないし」

ペロロンは、そう言う人と人形を布の上に置く。

「おい、もうそろそろ行くぞ。土産の感想は、今度改めて聞かせてもらおう」

籠を背中に背負ったウルベルトがペロロンを急かす。今まで何も反応が無かった相手が急に反応したからだ。それも名前を聞くという不可思議な内容。状況が読めない。

「分かりました。じゃあ、また来るからその時にお土産の感想をお願いね。それと、リクエストがあれば聞くから」

手を森中に振りながらペロロンは、二人と共に森から去っていく。

「行つたみたいね。行こう、マーレ」

「う、うん」

木の上の物陰からアウラとマーレは姿を現し、お土産のある所まで軽々と飛び降りる。

「……ねえ、お姉ちゃん。コレって、ボク達に似てない?」

「分からないわよ、そんなの」

人形は、二人の容姿にはほど遠い造形である。そもそもアウラとマーレは、一般人から見れば芸術品と呼ばれるだけの容姿をしている。その辺で売っている人形では比べる価値もない。

「で、でも……ボク達と同じだよ?」

男の子と女の子の子の人形の目にある緑と青のガラス玉の位置が二人と同じ。男の子の目は、右が緑で左が青。女の子の目は、右が青で左が緑。もつともそれは、あくまでもアウラとマーレの常識に当て嵌め

た場合だ。

「でも、あたし達と同じかは分からない。あたしは、確かに男の子の服を着てるけどそれはぶくぶく茶釜様がお決めになったこと。この人形に同じ意味があるとは限らない」

ぶくぶく茶釜は、アウラに男装を、マーレに女装をさせていた。理由は分からないが、性別とは逆の服装を着せる意味がぶくぶく茶釜にはあった。

「でも、人形を見せてくれる時に男の子の格好をしている方をお姉ちゃんって言うてなかった？ 女の子の方を弟って」

ペロロンが森に居る二人に見せる時にそう言った気がする。

「もしかしたらぶくぶく茶釜様と同じ考えなだけかもしれないでしょ！ ああ、もうわけが分かんない！ マーレ、どうにかしてよ！」

「——えっ!? ボ、ボク!? む、無理だよ！」

「じゃあ、どうすればいいのよ！ ペロロンって呼ばれる人間が偶然にもぶくぶく茶釜様と同じ考えを持ってたって言うの？」

「だから、ボクにはわからないよ……」

自分達に似た人形。それをお土産としてもらった二人は、答えの見つからない問題を新たに得てしまう。あの時に名前を言ってくれれば——聞いていればこうはならなかったのに。

第49話

そこは、アインズの寝室。ナザリック地下大墳墓の支配者に相応しい部屋にシャルティアは招かれ、ベッドの上に横たわる。

「ああ……アインズ様……。今日こそわたし達は結ばれるのでありますね」

それは、二人にとって初めての夜。目の前には、愛しきアインズが居る。

「そうだ。今からシャルティア……お前を私のモノにする」

「はいっ！ シャルティアをアインズ様のモノ——」

見つめ合う二人の邪魔をするように勢いよく部屋の扉が開き、バードマンであるペロロンチーノが割って入る。

「ペロロンチーノ様!？」

急に現れた自分の創造者であるペロロンチーノの姿にシャルティアは慌てて取り繕う。

「これは、どういうことだ？ 答えろ、シャルティア！」

ペロロンチーノが真っ直ぐにシャルティアを見る。その顔には、怒りが表れている。普段の温厚なペロロンチーノからは、とてもではないが想像も出来ない。

「そ、それは……」

「シャルティアの代わりに私がお答えしよう」

どう答えていいかわからないシャルティアの前にアインズは身を乗り出し、ペロロンチーノからシャルティアを隠す。

「シャルティアは、今日から私のモノだということだ。そうだよな、シャルティア？」

アインズが後ろに居るシャルティアを見る。普段なら歓喜に震えるほどの事なのだが今回は素直に喜べない。

「ふざけるな！ シャルティアは、俺のモノだ！ いくらモモンガさんでも……今は、アインズでしたっけ？ ええい、どっちでもかまいませんがシャルティアは渡せません！ 欲しければ俺を倒してからにしてください！」

「分かりました。シャルティア、ここで少し待っている」

アインズは、シャドーボクシングを始めているペロロンチーノの下へと足を運ぶ。これから男二人による愛する者を賭けた戦いが行われる。

「ああ……わたしの為にお二人があ……。でも、嬉しいのはなぜでありんすえ？ でもでも、このままではアインズ様とペロロンチーノ様がお怪我を……」

自分を求めて戦う姿になんとも言えない気分になる。どちらも応援したい。どちらを応援すればいい？ どちらが勝つ方がいいのか？ どちらが負ければいいのか？

「決められるわけがない……どうすればいいのでありんすかえ……」

シャルティアの悩みに共鳴するかのようにアインズの寝室が歪み景色を変えていく。それは徐々にどす黒く歪み、世界を混沌へと変えていく。

「わたしをくえらべくシャルティアく」

「いいやくおれをえらぶのだく」

悩みで頭を抱えるシャルティアを囲むようにアインズとペロロンチーノが手を合わせながらグルグルと回る。歌いながら。

「——いい加減目を覚ましなさいよっ！」

シャルティアを現実へと戻す衝撃が頭に響く。

「なにをするでありんすか!？」

痛みにより意識が一気に覚醒する。

「人がせつかく来たっていうのに起きないなんて失礼じゃないの？

そもそもアンデッドは眠らないでしょう！」

シャルティアの部屋に来たのだが、なかなか起きて来ないシャルティアにしびれを切らしたアウラが思い切りシャルティアの頭を引つ叩いて起こした。

「わたしにもいろいろとありなんし。それで、いったい何のよう？

それと、服を汚さないでほしいのでありんすが」

「無理言わないでよ！ この状況でどうしろっっていうの?！」

シャルティアの寝室には、様々な趣向を凝らした服が散乱してい

る。これらは全て、ペロロンチーノがシャルティアの為に用意した物になる。

「うるさいであります！ とにかくペロロンチーノ様から頂いた服の上からどいてくれなんし！」

「はいはい、わかったわよ」

アウラは、散らばっている服を綺麗にまとめて自分の場所を作る。

「それよりもシャルティア、あの話考えてくれた？」

「あの話……」

アウラとマールから聞かされた話。至高の存在である御方々と同じ名前を持つ者達がトブの大森林へとやって来る。そこで、アウラとマールは話をする機会を得たというものだ。

「実はね、さつきも来たのよ。それで、お土産をくれたんだけどシャルティアにも見せてあげようかと——」

「本当でありますか!？」

話しの途中でシャルティアの形相が変わる。それこそアウラの胸倉をつかむぐらいに。

「——ちよつと!?! なに掴んでんのよ!」

「いいから見せて! 早く!」

「ああもう、分かったから離れなさいよ! マール! シャルティアを引き離すのを手伝って!」

「は、入っても、大丈夫なの?」

「いいから早く来なさい!」

女性が眠る寝室ということもあり、男性であるマールを外で待たせていた。今は、凶暴化しているシャルティアを引き離す手伝いをしてもらうために呼ぶ。

「コレがそうであります?」

マールがやって来た事により、マールが手に持っていたお土産が入った袋をシャルティアが見つける。

「そうよ! それよりもあたしになにか言うことはないのかしらね?

こうして一緒に見ようと親切に来てあげた、あたしに? ねえ、シャルティア?」

「……ごめんでありんす……つい、身体が勝手に……」

慌てて手を放し頭を下げる。

「気持ちに分かるけど気をつけてよね。ほら、マール、こっちに来てお土産をここに並べて」

「う、うん。失礼します」

マールは、言われた通りにベッドの上に袋から出したお土産を並べていく。

「なんだか品の無い物ばかりでありんすね」

至高の品々に彩られたナザリツクで生活するシャルティアからしてみればどれも大した物ではない。それこそゴミとして扱う程度には価値の無い物ばかりだ。

「そうかもしれないけど、コレを見てよ」

「人形でありんすか？」

その中にある人形を二つアウラから渡される。みすばらしい人形。ただ、誰かに似ているような気がする。

「ペロロンって人がくれたんだけど、こつちが女の子で、こつちが女の子なんだって。シャルティアは、どう思う？」

男の子の人形を女の子と説明され、女の子の人形を男の子と説明される。左右で違う緑と青の目。それに金髪で、薄黒い肌の尖ったエルフ耳。

「アウラとマールでありんすか？　しかし、似てないでありんすね」

「そうじゃなくて！　コレを見て何も思わないの？　ペロロンって人は、ぶくぶく茶釜様と同じ考えを持つてることじゃないの？」

言われてみれば確かに。しかし――

「ペロロンチーノ様は、ぶくぶく茶釜様と同じ考えを持つていたとは限らないでありんす。わたしには、男装などは……なくはありんせんが、基本的には女性の格好を選んでいたのでありんすから」

ペロロンチーノは、シャルティアを着せ替え人形のようにしていた。「シャルティアは、最高だよ！　可愛いよ、シャルティア！　うひょー！」などの称賛の言葉を掛けながら課金を惜しまずに服などを着せていた。

「じゃあ、たまたまなのかなあ……」

ペロロンチーノに詳しいシャルティアに言われると違う気がしてくる。もしかしてと思っていた心が静かに沈んでいく。

「あ、あの、他にもいろいろあるみたいだから見てみようよ。コレなんて、どうかな？」

マールは、適当に目についたものを手に取る。

「えっと……あつ、コレってトランプじゃないかな？」

トランプ。それは、至高の御方々が興じていた遊びの一つ。数字と四種類の絵柄のあるカードで遊ぶ為の道具だ。ペロロンは、予算が少ない中でも多くお土産を用意したかった。そこで、自分で製作したトランプをお土産の一つにした。

「トランプなんて珍しくもないでしょう。あたし達の所にもあるじゃない」

かつて、女子会と呼ばれる女性限定の集まりが第六階層にあるアウラとマールの部屋で行われていた。その時にぶくぶく茶釜をはじめとした女性達が遊んでいた物が今も大事に仕舞われている。

「そうだけど……ほら、可愛い絵が描いてあるよ。こっちは……この世界の文字で読めないね」

木の札で出来た風変りなトランプと一緒に遊び方が書いてある紙がある。ただ、残念ながらこの世界の文字で書かれていてマール達には読めない。読む為には、専用のマジックアイテムなどが必要になる。

「可愛い絵ね」

「どんなものがあるのでありません？」

マールからアウラとシャルティアはトランプを受け取る。

「ふーん。なんだかトランプというよりも絵みたいね」

木の板に描いた絵。そのままではあるが、意外と書き込みなどが細かく拘りを感じさせる。

「そうでありんすね。まるで——」

シャルティアは、一枚の絵を見て目を大きく見開く。

「どうかしたの？」

アウラは、横から覗き込む。

「コレって、『すくーる水着』だったわよね？ あたし達の所にもある」
「泳ぐ時に着る服だよね」

ぶくぶく茶釜がアウラに着せたことがある服だ。女性の服ではあるが、この服だけはマーレに着せることはなかった。

「ありえない……まさか……」

そう呟いたと思えば、シャルティアは散らばっている服からある物を探し始める。ペロロンチーノとの思い出に浸るために出していた物の中から目当ての物を探し終わると——絵のすくーる水着と比べてみる。

「こ、これを見るでありんす！」

慌てた様子のシャルティアに促され、アウラとマーレはそれらを見比べる。絵とシャルティアの持っているすくーる水着は、確かに似ている——が、この世界に無いとは限らない。三人は、この世界の情報をまったくと言っていいほどに持っていない。

「これがどうかしたの？ この世界の服とか分からないから判断——」

「違うでありんす！ ココ！ ココをよく見るでありんす！ この文字！ ひらがなではないでありんすか？」

すくーる水着には、名前を書く場所がある。シャルティアの持っている物には、『しゃるていあ』と書かれているわけだが、絵の方にも同じように『ありす』とひらがなで書いてある。

「お、お姉ちゃん!? コレって、ボク達と同じ文字だよ！」

「うそ……でも、言われてみれば、ありすって読める」

「それだけじゃないでありんす！ この丸文字！ それに敢えて綺麗には書かずに少し崩して書く拘り！ コレは、間違いなくペロロンチーノ様の拘りでありんす！」

シャルティアが自分の持っていた物と同じように絵の方も幼さを感じさせるようにバランスの崩した丸文字で書かれている。偶然にしては——あまりにも出来過ぎではないか？

「もしかして本当に？ でも、それならなんでアインズ様は隠すの？」

「そんなことわたしが分かるわけないでありんしょう？ アインズ様の思慮深きお考えなど。ですが、コレからは間違いなくペロロンチーノ様の拘りを感じるでありんす。こうして見てみると他のもの——ああ、ペロロンチーノ様！　なんて芸術的な絵をお描きに！」

すっかりシャルティアの中では、ペロロンチーノが書いた絵だと確信を得ている。その一方で、アウラとマールレはまだあと少し足りない。

「マールレ、デミウルゴスはどうしてるんだっけ？」

「デミウルゴスさんは、アインズ様達と会議をしようと思ってるよ？　なんだか最近忙しそうだけど……もしかして、デミウルゴスさんに？」

アウラとマールレで判断ができないのならナザリックでもアインズの次に知恵者であるデミウルゴスに聞くしかない。聞くしかないが——忙しいのに大丈夫だろうか？　デミウルゴスは、アインズの命令を遂行するために忙しいはず。それを邪魔する訳にはいかない。

「やっぱり、デミウルゴスはやめましょう。そうだ！　ナーベラルに話を聞いてみるのはどう？　一緒に行動してみたいだからなにか分かるかもしれない」

「そういえば、第六階層の湖の傍でプレアデスのお茶会があるはずだよ。お休みだから使ってもいいかって聞かれたから」

「丁度いいじゃない。シャルティア、行くわよ！」

「——ちよっと、待つでありんす！　この芸術品を大事に保管してからにしてほしいでありんす！」

「まだ本物かどうかも分かんないんだから後にしなさいよ！　もし違ったらペロロンチーノ様に対して不敬になるんだからね！」

「……そ、それは……そうかもしれないでありんすね」

もし違っていたら。そう思うと、昂っていた熱が徐々に冷めていく。仮に違っていた場合、創造者の手による物かも分からない不忠の臣下も同然。シャルティアは、手に持っていたトランプをそつとベツドの上に置く。

「今は、ナーベラルに話を聞きに行くわよ。ほら、急ぐ！」

急ぐアウラに続いて、手を引かれたシャルティアと慌てるように

マーレが続く。第六階層で行われているプレアデスのお茶会へと急ぎ向かう。この悩みを解決するためにも。

第50話

ナーベラル・ガンマは、多忙な日々を送っている。漆黒の戦士モモンと共に冒険者として活動し、アインズがナザリック地下大墳墓に帰還した後も周囲を警戒しながら宿屋で待機。ナザリック地下大墳墓に共に帰還した時は、ナザリックの者達と連携を学ぶための訓練を行っている。いくら疲労を取り除くマジックアイテムを身に着けているとはいえ、精神的なものは——至高の存在であるアインズの為に尽くせているという満足感から寧ろ好調である。

そうは言ってもアインズはそれを必ずしも良しとはしない。知らぬうちに心労が溜まり、それが原因となり人間関係が悪くなる場合があると考えているからだ。アインズの計画では、ナーベラルを一つの基準として、三人を迎え入れるかどうかを判断している。少しでも良好な関係を築けるようにしたいのが本心となる。

「——と、言ったところですよ」

第六階層にある湖の畔でナーベラルは、冒険者としてアインズと共に過ごした出来事を自慢気に同じプレアデスの者達に話す。いくら取り繕おうとも至高の存在であるアインズに奉仕しているという優越感は隠しきれない。

「ナーちゃんばかりズルいつす！ 私もアインズ様と一緒に行動したいーい！」

ルプスレギナ・ベータは、不満を言葉で表す。他のプレアデスであるユリ・アルファやシズ・デルタ、エントマ・ヴァシリッサ・ゼータも言葉に出さないだけで同意見だ。ナザリックの者にとって、至高の存在であるアインズの為に働くことが存在意義であり、全てに勝る幸福なのだから。

「でもおー、ルプーもアインズ様から御命令を頂いてるからあ、私達からしてみたら十分羨ましいですよ」

「……ズルーい」

意外なところから攻められる。アインズの命令を受けて外で活動しているルプスレギナも差はあるにしろ他からすれば嫉妬の対象に

なる。

「もう！ エンちゃんもシズちゃんもこつちの味方じゃないんすか？
御命令を頂いてはいるつすけど、パンドラ様に代わってから滅多に
顔を出されないつすからね」

クレマンティーヌから得た情報で、この世界に危険な勢力が存在す
ることが判明した。そこで、パンドラがアインズ・ウール・ゴウンに
成り代わることになったのだが、その時にカルネ村に関する事を一任
された。その為、アインズは様子を見る以外は行く事が無い。

「あの村は、これからどうする気なのでしょう？ アインズ様は、あの
村をこの世界との接点にしようとお考えのようだけど……その価値
があるのかしら？」

ユリの言葉に答えなど出ない。アインズの思慮深きお考えを理解
できるのは、同じ至高の存在だけだろう。

「うがぁー！ アインズ様のお考えとか全然わかんないつす！ ナー
ちゃんは、なにか聞いてないつすか？」

「そうね……」

ナーベラルは、アインズの言葉を一言一句思い出そうと考え込む。

「確か、デミウルゴス様とパンドラ様の準備ができしだい次の段階に
移る、と仰られていました」

「次の段階？」

「さっぱり分かんないつすね？」

「全然ですう」

「……理解不能」

試しに考えてはみるがこの場に居る誰にも答えは出ない。そもそ
も外で行っている作戦の詳細を知っているのは、現在執務室にて会議
を行なっている者達だけ。内政を担当しているアルベド。外での作
戦の指揮を執るデミウルゴス。アインズの補佐をしているパンドラ。
このナザリックにおいて優秀な頭脳を持つ者達である彼らならアイ
ンズの考えが分かるかもしれない。

「ソリュシヤンの方はどうなっているのかしら？ 今もセバス様と共
に王都で活動をしていると聞くけど何をする気なのかしら？ 人間

の為にメイド長が呼ばれたようだけど?」

メイド長であるペストーニヤは、王都でツアレの指導をソリュシャンと共にやっている。それによりメイド長もセバスも居ないナザリックの雑務をユリが取りまとめることになった。それ自体に不満はないのだが、わざわざ人間を使う理由がやはり理解できない。

「そこんとどうなんすか?」

ルプスレギナの言葉でナーベラルは考え込むが記憶にない。

「……ナーベラル。忙しいのは分かるけど、アインズ様の御考えを少しは聞いておいた方がいいのではないかしら?」

「……ごめんなさい」

ユリに言われ、他からの視線にも耐えかねてナーベラルは謝る。ただ、ナーベラルはなにも悪くない。アインズは、あくまでも他の三人に提案させて選んでいるだけだ。なので、会議以外では特に話などはない。否、出来ない。

「おーい! あたし達も仲間に入れてー!」

声のした方を見てみると、アウラのシモベであるフェンリルのフェンの背中に主であるアウラとマーレ、それにシャルティアが乗っている姿が見える。

「これは、アウラ様、マーレ様。それにシャルティア様まで」

プレアデス達は、席から立ち上がり三人を出迎える。戦闘と名が付いてはいるが彼女達もまたメイドである。

「別に座ってもよかったのに」

「そうはいきません。すぐに準備致します」

ルプスレギナ、エントマ、シズの三人がもてなしの準備を行う。急な来客が来ても大丈夫なように余分に用意してある。三人がフェンから降り、こちらに来る頃までには椅子の準備が終わり、後は飲み物が淹れ終わるのを待つだけだ。

アウラ達は、プレアデス達の準備が終わるのを待つてから本題へと入る。

「暇だから外での話を聞きたくて来たんだけど、聞いても大丈夫?」

「外でのお話ですか?」

プレアデスの副リーダーとしてユリが応対しようと言ったが、
どうやらナーベラルに用があったようだ。だが——先ほどのこ
とを考えると期待に応えられるか分からない。

「ナーベラル。外でのお話をしてあげて」

「分かりました。それで、私は何をお話しすればよろしいのでし
ょうか？」

「ペロロンチ——ではなく、アインズ様がお気に掛けている者達の話
が聞きたいのであります。なにかありませんか？」

「気に掛けている者達……ですか？」

ナーベラルの反応が悪い。

「えっと、ほら、至高の御方々と同じ名前を持つる冒険者がいるで
しょ？——一緒に行動してたんだよね？」

「ああ……あの者達ですか」

「どうやらアインズが気に掛けていたという部分で誰のことか分か
らなかったようだ。」

「あの者達の何をお話すればよろしいのでしょうか？」

「何をつて……シャルティアからは何かある？」

「私でありんすか!？」

「ここまで来ておいてなんだが何も考えていなかった。話を聞けば、
いろいろと聞けると思っていたからだ。」

「え、えっと、どんな人達なのかなって」

二人のフォローをするためにマールレが口を開く。これには、心の中
で二人はマールレのことを褒める。

「どんな、ですか？　そうですね……他の人間とは違いますね」

「……えっ？　それだけ？」

「はい」

短い。あまりにも短い。

「ナーちゃん、それはないっすよ。せめて、どう違うかぐらいは言わな
いとダメっすよ」

「そうでありんす。もう少しなにかないのでありませんか？」

今のでダメだったのかと思いい改めて考える。

「……他の人間ほど不快に思うことはないです。やはり、至高の御方々と同じ名前だからでしょうか？ 本来であるのなら、至高の御方々と同じ名前を人間が持つことは許されるべきではありませんが、アインズ様も御認めになられていますので、私からは特に言うことはありません」

ナーベラルは、自分なりに考えてみた。その結果がこれである。

「……皆様。この答えでよろしいでしょうか？」

ユリが三人に問う。人間に興味がないナーベラルは、本来なら名前から覚える気がない。そもそもナザリックの者達は、ナザリック以外の者達に関心を持たない。そう考えると、記憶に存在し、暴言や悪態を吐かないだけ高評価ということだ。ただ、三人が求めていた答えとはほど遠い。とはいえ、下手に聞くと怪しまれるかもしれない。三人と接触していることは秘密。聞きたいが聞き過ぎては――

「そういえば、贈り物を頂きました」

ふと、ナーベラルは言葉を口にする。

「贈り物でありんすか？」

「はい。花飾りを頂きました。今は、エ・ランテルで拠点としている宿屋に置いてあります」

「人間からの贈りものお？ 珍しいですう」

「……不思議」

「へえー、あのナーちゃんが……」

なにやらプレアデス達の反応が奇異なものを見ているかのように驚きに満ちている。

「それは、本当なのナーベラル？」

「はい、ユリ姉様。帝都に赴いた際に私の為に選んだ物を頂きました」

「ナーちゃんが人間から貰った物を捨ててないなんて意外っすね。ビックリしちゃったっすよ」

「そんなに珍しいの？」

「珍しいというかあ、初めてですう」

ナーベラルは、人間の男達に人気がある。贈り物などを貰うこともあるがそれらは金に換えられるか捨てられる定めにある。

「ナーベラルは、人間の名前を覚えられない程度には嫌っていますので。この前もアインズ様に注意されたぐらいで」

ここ最近、アインズと共に新しく会う人間が増えた。しかし、人間にまったく興味のないナーベラルは名前を覚えていなかったようで、後からアインズに注意されたことがある。

「今は、覚えるように心掛けています。アインズ様の御命令ですので」「名前を覚えても自慢になりません。アウラ様、マール様、シャルティア様。申し訳ありませんがこれ以上は求めても無駄だと思われます」

三人の存在が確認されてから度々お茶会で話題に上がっていたがこんなものだ。詳しく聞けば口にする――ナーベラルにとってはそれでも破格の評価ではある。

そんな状況では、少なくとも三人がほしい情報を手に入れることは出来ないかと相談の必要もなく判断できる。急に居なくなるわけにもいかないので普通のお茶会として参加を続ける。

◇◇◇◇◇

土がむき出しの何処かの洞穴。魔法の光だけが照らす世界は、クレマンティーンにとっては地獄にある唯一の心休まる居場所である。

(よく平気で居られるわね)

この場所には、三つのタイプの者達が居る。

「お前達、なにか成果はあったか？」

ズーラーノーンの盟主の名を語る何者かにエルダー・リッチへと生まれ変わること許されたカジットは、他にも許されエルダー・リッチとなった弟子達と共に魔法の研究を行っている。強大な力を持つ悪魔の内の一人、二つの穴の開いた面の方に命令されたものは、新たな魔法の開発である。それを嬉々として未だに拝謁することも許されぬ真の主の為に粉骨砕身の思いで働いている。拷問に掛けられ、地獄を見せられてなお平気で居られるのが不思議で仕方がない。まるでそれらが洗礼であったかのようにすら思える。他にも様々な命令を忠実に言うさまは、正に絶対者に奉仕する喜びを知る者の姿であ

る。

その傍では、ただ静かに椅子に座り命じられる時を待つ人形と化した者達が居る。この者達は、エルダー・リッチになることを許されなかった者達。その基準は不明だが彼らはこの地獄から抜け出すために自ら進んで自我を放棄した。彼らは、もう一人の悪魔——こちらも同じく仮面を着けてはいるのだが名前がある。名を、ヤルダバオト。もう一人の悪魔同様に強大な力を持ち、彼らとクレマンティーンの主となった。ヤルダバオトは、正に悪魔に抱くイメージを体現するものであり——

(いやあ……)

ヤルダバオトの行いを思い出すと、身体の震えが止まらなくなる。クレマンティーンの腕には、既に何度も身を抱きしめた時に出来た爪痕が刻まれている。爪が食い込むほどに身体を抱きしめていないと身体の震えが止まらないのだ。ヤルダバオトは、自らの国を持っていた。ゴブリンやオーク、オーガなどの亜人が住むその国は、おそらくアペリオン丘陵だと思われる。クレマンティーンの生まれ故郷であるスレイン法国とローブル聖王国の間にある場所。まさか自分が居た場所の近くに地獄があるとは想像もしていなかった——知りたくなかった。

ヤルダバオトは、一つの部族に力を貸しており、その見返りに様々な物を献上させている。金、物、そして……身体である。日頃から行われている拷問とは別に生きたまま生皮を？がさせることがある。戦いで捕えた者達を、必要であれば力を貸している者達からも生皮を剥ぐ。もしそれが出来ないのなら、出来なかった者達の中から代わりを生皮を剥がれる者を選び直す。それを繰り返し——仮に誰も行えなければ全員が地獄へと落とされる。ブラックカプセルと呼ばれる場所。それは、無数の虫が閉じ込められた場所。その場所に落とされ生きたまま虫に食われ続ける。皮膚、眼球、舌、内蔵……それを回復魔法を受けることにより死ぬことなく受け続ける。どれだけの時間を虫に食われ、虫に這われ、虫を受け入れ、虫に——思い出すだけであの時のことが追体験する。

クレマンティーヌは、既に様々拷問をその身に受けていた。それ故に全てを諦めていた。だがあの地獄の中でもがき苦しむ者達を見て、恐怖によりこの世界に呼び戻された。まだ自我が完全に壊れていなかったことを恨んだ。自我を取り戻したクレマンティーヌは、ヤルダバオトと共に繰り返される地獄を見ていた。それを見ていただけで済んだ。もつともそれは幸せではない。隣では、楽し気に笑う悪魔が居るのだ。これらを行っている者が居るのだ。そして、こうも口にする『あなたの場合は、これらが幸福であると思うようになります』よと。拷問に掛けられ、生皮を？がされ、虫の大群の中に身を沈めることよりも残酷なことがあるのだろうか？

クレマンティーヌは、血の繋がりのある兄妹との確執により性格が歪んだ。常に比べられた劣等感から弱者で遊ぶ趣味が出来た。捕らえ、拷問に掛け、自らが強者であることを自覚するために何度もそれを繰り返した。そんな自分が今では馬鹿らしく思える。あの程度の男に劣等感を抱いていた自分に。強者であると思いついていた自分に。ヤルダバオトが支配するこの世界では、家畜程度の存在でしかなかった。否、家畜としての価値があるかも分からない。家畜は、食われるまでは大切に育てられるのだから。

「おっと、どうやら時間のようだな。皆の者、準備を」

カジットがそれに気づき、その場に居る者達に声を掛ける。先ほどまでこの場所には居なかった悪魔。闇の扉に人間の髑髏と腕が生えた悪魔。見たこともない悪魔ではあるが、少なくともこの場に居る誰よりも強者である。だが、その悪魔はあくまでもこの場に居る者達を運ぶだけの存在。あの悪魔達からしてみれば、国を滅ぼせるだけの者ですら小間使いでしかない。渴いた笑いが出る——否、もう出るほどの力もない。

「早くしろ、クレマンティーヌ」

「わかったわよ」

逆らう気などない。逆らうだけの勇氣など無い。今日もまた言われるがまま、命じられるままに動くだけ。それだけが安らげるこの場所に帰る唯一の方法である。

第51話

現在の王国での三人の評価。

ペロロン——変態。王国でも有数の弓の名手。

ペロロンの評価を語る際には、街の評判を聞く必要がある。ペロロンは、子供に食べ物や物を与えたり、一緒に遊んだりして過ごすことが多い。しかし、本人の言動や行動からよく衛兵のお世話になることがあり、牢屋に入った経験もある。しかし、無理やり手を握られる。抱きつかれる。路地裏に連れ込まれるなどの報告はない。だからと言って、親御さん達からしてみれば不安の種に違いない。

戦闘に関しても変態とよく言われる。理由としては、その独特な戦い方による。弓兵は、遠くから戦うのが基本なのに対して、ペロロンは近接戦闘も得意としている。武器を器用に持ち替えながら避けて戦うその姿は曲芸師のようであり、一般の弓兵からしてみれば不思議で仕方がない戦い方である。しかし、盾や重装備で身を固めていないと戦士でも負ける可能性があるとされている。真似をする者もたまに現れるが実際にやってみた上で、ペロロンのことを変態と言ってはやめていく。単純な弓の腕に関しては、空を飛んでいる鳥を撃ち落とし、地面に落ちる前に二本の矢を追加で当てられるほどである。

ウルベルト——変人の魔法詠唱者。悪魔。

頑なに仮面を外そうとしない変わり者。何度注意されても被り続けることから変人と言われている。なぜ悪魔のような不気味な仮面を身に着けているのか本人に聞くと、趣味だからと言われるだけである。性格に関しては、実は意外とまともであったりする。街のチンピラとの喧嘩はあるものの一般人に手を出したことはない。

実力に関しては、本人の申告では第三位階の魔法までとなっているが今では疑いの目を向けられている。そもそも一系統の魔法を第三位階まで習得することすら難しいはずなのに複数系統の使用が確認されている。これは、実力に雲泥の差があるとはいえ、偉大な魔法詠唱者として有名であるフルーダ・パラダインと同じになる。帝都に行つてからは、フルーダと関わりを持ち魔法に関して親密な関係を

築いたと言われている。噂では、第四位階まで使えるとも言われている。謎の多い人物である。

たっち——英雄候補。若き天才。

最後になるが、彼らのリーダーでもあり唯一英雄候補と言われているたっちである。品行方正。誰にでも優しく、礼儀正しい態度をとることで有名である。なぜそんな彼が問題児である他の二人と行動を共にしているのか未だに不思議がられる。試しに聞いてみても仲間なのでと言われるだけだ。アイアン級の実力から瞬く間にミスリル級にまで上り詰めたたっちの姿を見て、十三英雄のリーダーを思い浮かべる者は少なくない。最も弱く、最後には誰よりも強くなった英雄の再来ではないかと吟遊詩人が歌うことがある。

◇◇◇◇◇

エルフと思われる者達の様子を窺うために時間を空ける必要があるので、嫌々ながらも三人は王都へと足を運ぶことにした。オリハルコン級への昇級試験は、冒険者組合からの依頼を淡々と受けて信頼を得ること。意外かもしれないが三人は、あまり組合からの仕事を受けていない。主に行っているのがレベリングや金稼ぎの為のモンスター狩りばかりで、依頼を通しての信頼の積み重ねが全然ないのだ。今までと違いオリハルコン級ともなれば上流階級の者達からの依頼も増えてくる。果たして、三人——主に二人になるわけだが安心して依頼を任せられるかどうかを確かめる必要がある。

とはいえ、組合からはたっち個人への依頼が多く、今回も蒼の薔薇のガガーランと共に依頼を受けて王国戦士達の訓練場へと赴いている。依頼内容は、アンデッドに対する戦い方の指導になる。戦士達は、剣での戦い方には慣れていますが打撃武器はそうでもない。戦槌を主な武器とするガガーランと盾と併用するたっちが最適と判断され呼ばれたのだ。

初めにたっちとガガーランとで模擬戦を行う。蒼の薔薇のガガーランの実力に関して疑う者はいないが、それに対抗しているたっちを

見て多くの者が息をのむ。過去に王国戦士長であるガゼフ・ストロノーフと戦った事がある訳だが、その時よりも遥かに成長している姿がそこにある。

「——やるじゃねえか！」

自らの戦槌による攻撃を巧みに盾で捌き、様子を窺うようにして反対の手に持つ戦槌を身構えるたつちに思わずガガーランは叫ぶ。戦ってみて分かったが、今のたつちは自分と互角に戦えるところまで来ている。他の者と違い平和を願うたつちだから嬉しいことは嬉しいが——戦士としては気に入らない部分もある。

「——模擬戦だからと言って負ける気はありません！」

アンデッドの討伐で、戦槌の使い方をたつちは覚えた。両手で振るうガガーランに比べて威力は大分劣るが、その分盾と併用しての小回りの優位性で翻弄している。

「ふーん。なかなかやるじゃねえか」

ブレイン・アングラウスは、腕を組み余裕を見せながら二人の戦いを眺めている。ただ、目だけは真剣そのものだ。少しでも多く二人の動きからなにかを得ようと必死である。

「どうやら今度の戦いは楽には勝たせてもらえないようだな」

ガゼフ・ストロノーフもその隣で戦いを眺めている。二人が今日此処に呼ばれたのは、ガゼフが王に進言した結果によるものだ。アンデッドの戦いに慣れている者達の話などが今後必要になると判断したからだ。どうやらそれはいい方に当たったらしく、この場に居る戦士達は興奮を抑えながら必死に二人の動きを目で追っている。もちろん、ガゼフもその中の一人だ。ブレインとの鍛錬で腕を上げた気ではいたが、どうやら若き天才はそれでは足りないと言っているようだ。未だに成長の限界が見えないたつちに恥ずかしながら興奮を覚える。

「——さて、惜しいが止めるとするか。両者そこまでっ！」

ガゼフの声で、二人はほぼ同時に動きを止める。

「たつち……お前、本気じゃないだろ？」

息を切らし、汗を腕で拭うガガーランが同じく疲れ果てているたつちに訊ねる。

「本気ですよ。ガガーランさん相手に余裕なんてありません」

「嘘言うな。前々から不思議に思ってたんだ。二つしか技を持ってないことにな。それもどちらも必殺つてわけじゃない。なにか考えがあるのか？」

「たつちが習得しているスキルは、『強撃』、『スパイクアタック』の二つだけ。どちらも使い勝手がいいが必殺の威力はない。」

「秘密でお願いします」

「答えてもいいが、もし話して笑われたら恥ずかしいので言わない。『ズルい奴だな。まあ、時間はある。おい、少し休んでからでいいか？』

「たつちのせいで予想以上に疲れちゃった」

「別にかまわない。今の戦いを自分のものにする時間も必要だろうか
らな」

二人の下まで歩いて来たガゼフの言う通り、見ていた者達は今の戦いについて各々好きに語っている。大半が賛美になるわけだが、動きについて話す者も少なくはない。いい刺激になればいいのだが。

「なあ、たつち。本当にお前よりもモモンは強いのか？ そうだとしたら本物の化け物だぞ？」

ガゼフの後からブレインも来る。二人が戦う前に帝都での事を少し話した。三人の興味は、主に今度戦う予定となっているモモンに向けられたが今の戦いを見た上で考えを改めたようだ。

「言ったでしょう？ 本当に強いんですよ、モモンさんは。戦士長様も気をつけないと恥をかくことになりますよ」

「たつち殿からの忠告、忘れずに胸に仕舞っておこう。ただ、早く剣を交えてみたいものだな。その御仁と」

「ガゼフのおっさんも大変だな面倒なもんがあつて。俺も蒼の薔薇を背負ってはいるがまだ気は楽なもんだ」

「ガガーラン。要らぬ言葉をくれるな。あくまでも私は、王国戦士長としてではなく、一介の戦士として戦いたい」

ガゼフの言葉に無理があるのは誰からみても分かる。本人も分かっている。王国の戦士の柱であるガゼフが負ければ、それは支えを失うことになる。それでもガゼフは必要だと考えている。この王

国には、これだけの強さを持っている者達が居るのだと世界に知らしめるためにも。

「おい、早く始めようぜ。どうやら待てない奴らが多いみたいだぞ?」
ブレインもその中の一人なのでよく分かる。あれだけの戦いを見せられれば、昂る興奮を静めるためにも戦いが必要になる。次に予定していた二人との模擬戦を心待ちにしている者の視線をたつちとガ
ラーランは一身に受ける。

「望むところです」

「これは何人が貰って帰っても許されるよなあ?」

不穏なガラーランの言葉にガゼフは苦笑いだ。若き戦士達の中にガラーラン好み
が居たら優先的にたつちに回した方がいいだろう。そうでないと——若い花が散ることになる。

第52話

たっちが冒険者組合からの依頼で出張している頃、ウルベルトとペロロンは組合の待合室で好きに時間を潰していた。

「この子、可愛い。どこの子？」

「この子は、パン屋のある通りの子だね。いつか戦士長様みたいになるんだって言ってたから戦士の役にしたんだ」

蒼の薔薇専用とも言える席の隣で、ティナと共にペロロンは紙芝居制作を行っている。といっても、ティナは何かをするわけでもなくペロロンの描いているデフォルメされた実際の人物に興味があるだけだ。主に男の子に。ティナは、シヨタコンだったりする。

「でも、ペロロンは絵が上手い。初めて見る描き方だけど」

ペロロンが描く絵は、一般的な肖像画とはかけ離れている。あくまでも特徴を捉え、それらを抜き出して簡略化した描き方であって写実的ではない。

「でも、可愛いでしょう？」

ティナは、試作品を既に何枚も選んでは、自分の物にしている。

「私も何かあれば手伝う。言って、絶対に行くから」

「じゃあ、その時はお願いしますね。それで、次は……」

ペロロンは、いつも遊んでいる子供の中から物語の役を考える。ペロロンは、子供達を自分の紙芝居に登場させる予定でいる。最近暇な事もあり時間が十二分にあるので紙芝居でもと思ってやってみたはいいが、これが結構大変だったりする。

「ペロロンは、登場しないの？」

「俺ですか？ いや、俺は登場しませんよ。代わりにウルベルトさんが登場しますけど」

悪魔王ウルベルト。冒険者である子供達の前に立ちふさがる悪魔王として登場する。もちろんいつもの仮面を着けた姿で。ウルベルトは、気が向いた時ではあるがペロロンの付き合いで子供達の冒険者ごっこに付き合う時がある。その時に必ずウルベルトが進んで敵役をするので、最近では悪魔のお兄ちゃんと言われることがある。おか

げで、ペロロンとウルベルトが子供達と遊ぶ時にはもれなく衛兵の見張りが付く。

「紙芝居かなんだか知らないが、このままでいてほしいな」

いつもの席で、イビルアイは心からそう思う。紙芝居の製作に専念しているペロロンは、イビルアイにちよつかいを出している暇がない。

「そう言いながら気になるのではなくて？」

「そ、そんなわけないだろ!？」

ラクユースに言われ、思わず動揺から言葉が乱れる。ペロロンが描く可愛い絵は、イビルアイも嫌いではない。娯楽の少ないこの世界では、些細な物でも気にはなる。

「ペロロンさんは、子供達から人気があるみたいですね」

「大人からは絶望的ですけどね」

向かいの席で、魔導書を読み耽っているウルベルトに話し掛ける。目の下に濃いくまを持つウルベルトに。

「ウルベルトさんも子供達とは遊ばれているのでしょうか？ たまに街の子供達が話しているのを耳にすることがあります」

「ええ、まあ。時間はありますから。たっちさんに対する個人依頼ばっかりで暇なんですよ。二人だけで行動する訳にも行かないですし、魔導書を読むのも——失礼」

ラクユースに断りを入れ、《メッセージ》の魔法に対応する。

『どうかな、ウルベルト君。メッセージの魔法の状態は？』

「問題ありません。12時50分。問題なく通じています」

ウルベルトは、待合室にある柱時計で時間を確認する。

『こちらも問題はない。それでは、また十分後に連絡する』

帝都に居るフルーダからのメッセージが切れる。

「大変そうですね」

ラクユースの言葉に苦笑いしか出ない。

エ・ランテルだけではなく、王都でもメッセージの魔法が問題なく行えることにフルーダがますます興奮していた。そこで、時間があ
るならと実験をすることになった。十分おきにメッセージの魔法を

使い通信状況の確認を行う。魔法詠唱者なら誰でも覚えられるぐらい簡単なメッセージの魔法の唯一の欠点である距離を解決できれば、各分野において画期的な出来事になる。既に実験は、昨日の昼頃から行われており不眠不休でメッセージの魔法の対応をしている。

「しかし、本当にあのパラダインに気に入られたんだな。まあ、ウルベルトの力を考えれば当然か」

イビルアイの見立てでは、ウルベルトもそうだが他の二人も神人であると同感している。異常過ぎる成長速度からそう考えているわけだが、他にも何かあるのではないかと考えている。この三人は、イビルアイの目から見てもいろいろとおかしな部分がある。もしかすると、神人ですらない可能性も。

「俺は、第三位階までしか使えないしがない魔法詠唱者ですよ」

「第三位階でも十分だ。それにウルベルトは、複数の系統に精通している。帝都の組合からの報告では、第四位階を使用可能との噂ありとなってるみたいだしな」

本来であれば機密になる情報が漏れているのはどうかと思うが、人の口に戸を立てることは出来ない。それに帝都の方では、フルーダの側近に限るがウルベルトが第四位階を使えると知られているので時間の問題ではある。

「本当ですか？ もしそうなら凄いですね！」

自分のことのように喜んでくれるラキユースを見て心が揺らぐ。しかし、それでもまだ隠す時だと考えている。

「すみません、ラキユースさん。俺は……第三位階までしか使えないんです。本当に……すみません」

ラキユースに嘘を吐く行為は、ウルベルトにとっては酷である。傍から見れば、答えを言っているようなものだが。

「しかし、組合もおかしな方法をとったものだ。昇級試験で個人依頼など前代未聞だろう」

「そうですね。私も初めて聞きます」

一般的には、チームとして昇級試験が行われる。その為、たちだけが実質的に昇級試験を受けている現状はとてもおかし。

「俺達は、評判悪いみたいですからね。自覚はしてますけど」

不気味な悪魔の仮面を被り続けるウルベルト。子供に悪影響を与える可能性のあるペロロン。警戒をするなという方が無理だろう。

「分かっているのなら直してみてもどうだ？ 上に行くには、実力に見合う振る舞いも必要となる。たっちもリーダーに話を聞いて学んでいる。一緒にやってみたらどうだ？」

「私でよろしければ、お手伝いさせて頂きますけど？」

ウルベルトからすれば魅力的な提案だ。ラキユースに一对一で教えてもらう。例えば、食事のマナーを教えてもらうとすれば、それはある意味では食事デートではないか？ そう考えると提案を受けたいのだが——難しい。

「向き不向きがありますからね。こればかりは。ウチは、そっち方面はたっちさんに丸投げにした方がいい気がします。俺とペロロンさんじゃ、きつと碌なことにならない気がしますからね」

オリハルコン級ともなれば、上級階級の人間との関わりも増えてくる。下手な振舞いで反感を買えばどうなるか分からない。

「——リーダー」

声がしてその存在に初めて気づく。いつの間にそこまで来ていたのかウルベルトには分からなかったが、ティアが三人の居る席の傍にまで来ていた。ちなみにティアとティナは三つ子であり、もう一人外見が似ている姉妹が居るそうだ。

「どうかしたの？」

問い返すラキユースに対して、言葉の代わりに一枚の手紙を手渡す。

「……分かりました。後でお伺いすると伝えてもらっていいかしら？」

手紙を読み終えたラキユースは、それを大事そうに仕舞う。

「わかった。でも、出来るだけ急いだほうがいいかもしれない」

そう言い残すと、ティアはすぐにその場を去る。此処に来た時同様に足音が聞こえない特殊な歩き方をして。

「すみません。私は、これで失礼します」

ラクキュースは、普段と変わらず丁寧な対応をしてその場を離れるが——どうも様子がおかしい。ラクキュースが居なくなつたのを見てイビルアイに聞いてみる。

「厄介事ですかね？」

「さあ？ 私はなにも知らない」

前に情報屋から蒼の薔薇が犯罪組織である八本指に関わっていると聞いたことがある。わざわざ関わるような話でもないので興味はなかったが、もしかするとそれに関係する話なのかもしれない……いや、考えるのはやめておいた方がいい。関わりの無い話なら知る必要はない。

◇◇◇◇◇

日暮れ近くまで訓練場で行われた、たつちとガガーランによる指導も今は終わり、疲れ果てた二人は訓練場の端で休んでいた。既にガゼフやブレインの姿はなく、この場に残り鍛錬をする者達を眺めながら静かな時を過ごしている。

「疲れましたね」

「ああ、そうだなあ。まったく、少しは女として扱ってんだ」

あくまでも二人との戦闘が依頼の要だったので、代わる代わる王国の戦士達と戦った。たまにブレインが混じることもあったが、流石にガゼフは混ざることにはなかった。仮にそうなった場合は、依頼料の引き上げを要求しないと割に合わない。

「——ん？ あれは……」

「どうかしたんですか？」

隣で休んでいたガガーランがなにかに気づき目を細める。試しにたつちもその方向を見てみると——貴族がそこに居た。一人は、二人がよく知る蒼の薔薇のラクキュースだ。いつもの冒険者としての姿ではなく、綺麗なドレスを着飾った貴族としての姿でそこに居る。だが、その隣に居る男は——少なくともたつちの知らない人物になる。「嫌な予感がするな」

ガガーランが嫌そうに口にする。どうやらガガーランには誰だか分かるようだ。

「あの人物を知っているのですか？」

「あれは、レエブン候だ。貴族の中でも一番の力を誇る大貴族様だ」

「もしかして、エリアス・ブランド・デイル・レエブンですか？」

王国の貴族の中でも特に力のある者達を『六大貴族』と呼ぶ。レエブンは、その中でも最も力のある侯爵として、王族の次に力を持つ権力者だったはず。しかし、なぜそんな人物とラキユースが共に居るのだろうか？

「なんだかこつちを見ていませんか？」

気のせいではなければ、レエブンがこちらを見ている気がする。既に王国戦士長であるガゼフはこの場所には居ない。此処に残っているのは、居残りで鍛錬に励む者か——疲れて休んでいるたつちとガガーランぐらいだ。

「見てるだけならいいけどなあ。ほら、こつちに来たぞ」

レエブンがラキユースを連れてこちらへとやって来る。

「君が、たつち君でいいのかな？」

たつちは、自分の名前が呼ばれたことに驚くがすぐに姿勢を正そうとする——が、それをレエブンは手で制する。そのままがかまわないと。

「疲れているだろうからそのままがかまわない。見せてもらったよ。君は、噂にたがわぬ素晴らしい戦士のようだ」

見られていた。いや、そんなはずはない。レエブンのような身綺麗で場違いな格好なら気づくはずだ。

「お褒め頂き光栄です。レエブン侯」

「どうやら私のことは知っているようだな。なら、話は早い。これから少し話でもしないか？ ガガーラン。彼をお借りするがよろしいかな？」

「どうぞ、好きに。ただ、ウチのリーダーも同席するのかい？」

「ええ、私も同席させて頂きます」

「なら、俺からはなにも。先に帰ってるからな」

ガガーランはそういうとサツサとその場から立ち去る。

「それでは、こちらに。ああ、服装はそれでかまわないよ。今回は、私から君に用があるからね」

そうは言うが、軽く手で汚れを叩き落とす。相手は、身分が遙かに上の存在だ。失礼があれば、たつちは——三人はどうなるか分からない。ここは言われるままにする方がいいだろう。少なくともキュースが居る以上は無理難題を押し付けられる可能性は少ないと祈りながら。

第53話

レエブン候は、ロ・レンテ城の一室へと二人を案内した。調度品などを見る限り応接室のようなその場所には、先客が居た。

「たっち君。彼は、私の部下で元オリハルコン級冒険者のボリス・アクセルソンだ。先ほど、君の戦いを見たと言ったがそれは彼の目を通してのことだ」

「ボリス・アクセルソンと言います。素晴らしい戦いぶりでした。以前、戦士長様と戦われた時よりも腕を上げたようだ」

たっちの記憶にはないが、どうやらガゼフと剣を交えたあの場所にもボリスは居たようだ。

「ボリスの話聞いて、それから君に興味が湧いた。ただ、今回はその話ではない。機会があれば場を改めていろいろと話でも聞かせてもらいたい。ボリス」

ボリスは、レエブン候に頭を下げるとそのまま部屋の外へと出て行く。気配から察するに扉の前で周辺の警戒をしているようだ。

「それでは、早速話に入ろうか。座ってくれ」

レエブン候に招かれるが、上位者であるレエブン候が座るまで二人は待ち、レエブン候が座り再度促されてから向かい側の席に着く。

「私は、冒険者の知り合いが多くてね。貴族特有の回りくどい言い方などが嫌いなのも知っている。なので、単刀直入に言おう。たっち君。私は、君に——君達に依頼を頼みたい」

「依頼ですか？ それは、組合を通してでしょうか？」

冒険者は、冒険者組合を通してしか仕事を受けてはいけない規定がある。

「いや、違う。正確に言えば、組合の方には既に話は通してある。だが、事情が事情でね。表向きにしたくはないのだよ。とりあえず規定に触れる事はないからそれだけは安心してほしい」

安心。そうは言うが安心とはほど遠い状況だ。既に組合に話を通され、王族の次に権力があるレエブン候直々の依頼だ。内容がどんなものであっても断れない。

「内容をお聞きしても？」

「依頼内容は、失踪者の捜索又は、その原因の究明になる。実は、失踪者は貴族やその関係者になる。私は、相談を受けてね。蒼の薔薇に依頼しようと思いい彼女を呼んだのだよ」

ふと、隣に座るラクユースを見る。ラクユースの方もこちらをチラリと見たが、すぐに視線を前へと戻す。

「蒼の薔薇は、既に別件を抱えていてね、人手が足りないようだ。そこで、彼女の推薦を受けて君達に依頼することにした。君達の役割は、彼女達の手伝いと言ったところかな」

蒼の薔薇からの推薦。本当にそれだけだろうか？

「少しよろしいでしょうか？ 推薦は分かりますが、なぜ私達なのでしようか？ レエブン候ならば他にも相応しい者達に話を持っていくのでは？ 恥ずかしい話ですが私達は、組合から信頼に足らないと評価を受けております。そんな私達に秘密裏の依頼をする理由をお聞かせ頂きたい」

質問など出来る立場ではない。言われた通りに動かなければならない。だが、たちちとしては仲間を守る方が大事だ。

「先ほどの話に戻ろう。前々から君達のことには調べていたのだよ。良くも悪くも目立つ存在だからね。正直に言ってしまうえば、確かに信頼は無い。だが、それは組合の方でもそうだが他の二人を加えての評価になる。たちち君個人に限れば問題はないと私も判断している。君達の関係を調べてみて分かったがそれで十分なのだろう？ 三人の内誰かが決めたことであるのなら他の二人も協力するようだからね。理由は、これでいいかな？」

嘘は言っていないと思う。組合からも似た様な事を言われた。たちちが依頼を受ける窓口となり、依頼人と二人の間を上手く取り持つようにと。

「では、ここからはラクユースに任せるとしよう。報酬に関しては十分な物を御支払いする。それでは、後は二人で話してもらいたい」

レエブン候は、そう言い残すと役目は終わったと言わんばかりにすぐに部屋から出て行く。それを二人は見送るわけだが――

「ごめんなさい。厄介事に巻き込んでしまつて」

開口一番で謝られる。申し訳ないラキユースの表情を見るに碌な依頼ではないようだ。そもそもアダマンタイト級の蒼の薔薇に依頼する時点で嫌な予感しかない。

「かまいません。それよりもお話を聞かせて頂けますか？」

二人は、向かい合うように座り直す。

「今回の失踪者には共通点があります。それは、麻薬になります」

嫌な単語が出た。麻薬が関わる話なのか。

「失踪者達は、八本指の麻薬部門が主催している催しに参加した者達になります。内容は——その……ですね……」

急にしどろもどろになり、恥ずかしそうにラキユースは頬を紅潮させ視線を逸らす。

「男女が集まり麻薬……ここでは、媚薬という言い方をした方が適切なのですが夜な夜な——」

「分かりました。それ以上は言わなくて大丈夫です」

男女が媚薬を用いて行う催し。淑女であるラキユースが口に出しにくい話なわけだ。

「しかし、なぜ私達なのでしょう？ ラキユースさんの推薦とありましたが秘密裏に行うのであれば自分の手の者を使えばいいと思うのですが？ 先ほどのボリスと名乗る方ならば十分ではないのでしょうか？」

レエブン候ほどの人物であれば、優秀な人材を手元に置いていることだろう。少なくとも先ほど居たボリスは、十分な実力があるように思える。

「簡単な話です。レエブン候は、この件から手を引く気です。既に調べられたそうなのですが、どうやら八本指と敵対している者が居る可能性があります」

「犯罪者組織の元締めのようなところですよ？ そこに敵対ですか？」

八本指は、王国の犯罪者達を取りまとめる者達だと聞く。そこに喧嘩を売るような者など居るのか？

「八本指が主催の催しに参加した人物が相次いで失踪。当然のように彼らに疑いを持ちますが、どうやらあちらでも失踪者が居るそうです。レエブン候がお調べになった話からするに一人や二人ではないと」

「現在判明している失踪者の数は分かりますか？」

「話では、既に十二名になるそうです。その中には、あちらは含まれてはいません」

麻薬絡みの失踪事件と考えるのは安易なのかもしれない。普通なら麻薬による死亡事故の隠蔽。麻薬や売り上げの持ち逃げなどが考えられるが数が多い。

「もう少し情報が欲しいですね。いつからなのか？ 場所や時間帯など」

「期間は、ここ一週間ほどになります。時間は夜から朝方まで。場所は、特に決まっているわけではなくある程度の広さを確保できる場所。出入り口には、見張りが数名居るとのことです」

「見張りですか？」

「内容が内容なので見張りを付けているのでしよう。先ほど話したあちら側の失踪者は主に見張りをしていた者達になるそうです」

「普通に考えれば、見張りを倒し、参加者と共に誘拐でしょうか？ なんだか雑な気がしますか？」

ここで問題なのは、誰がそんなことをするかだ。誘拐の理由は分からないが、元締めに喧嘩を売ってまでするようなものなのだろうか？

しかし、少なくともその者は——者達かもしれないが上手く出し抜けるだけの力はあるようだ。

「見張りか——出来れば潜入調査をする必要がありますね。レエブン候で調べられないようなら他の手段では難しそうですからね」

「その際は、私達もできる限りの協力はさせて頂きます。推薦した責任もありますから」

「……そういえば、なぜ私達を推薦したのですか？ 参考に聞いてみますか。」

「理由はいくつかあります。一つは、実力です。場合によっては、八本

指と争えるだけの戦力を持つ相手の可能性があります。八本指は、アダマンタイト級の実力者を複数抱えているという噂があります。そうなると、こちらもそれ相応の実力者を用意しなければなりません。皆さんならそれを満たしていると思いませんか？」

「それだと期待に応えないといけないですね。他にもありますか？」
「他だと、ウルベルトさんの存在です。私も潜入調査の必要性を考えていました。ただ、今は警戒が厳重なようで武器になるような物を持つ事が出来ないようです。ウルベルトさんは、魔力系に信仰系の魔法を行使できます。戦うことも治療も行えます。それに普段から仮面でお顔を隠されていますので、素顔を知っている方は多くないと思います」

確かにウルベルトなら武器は必要ない。それに裏の仕事をする者達は、毒などを使用する傾向がある。治療が行えるのは必須かもしれない。それにラクユースの言う通り、普段から仮面で顔を隠しているウルベルトなら正体がバレにくい。

「推薦の理由は分かりました。ただ、潜入調査はどのように行う予定なのですか？ 場所などは変わるのでしょう？」

「場所に関しては、既にティアに調べてもらっています。潜入に関してなのですが——私がウルベルトさんで行おうと思います」

「ラクユースさんが？」

潜入調査は危険な役割になる。それに今回は内容がラクユースには合わない。

「私なら信仰系ではありませんが魔法を使えます。ティアやティナに任せるというのがありますが、二人には周囲の見張りをしてもらおうと考えています。次もあるとは限りませんが」

「分かりました。こちらはあくまでも蒼の薔薇の手伝いとのことなのでやり方はお任せします。他にはありますか？」

「今のところはあります」

「それでは、私はこの話を二人に持って行きます。話はその後で改めてということにしましょう」

レエブン候からの依頼。既に危険と判断して切り捨てたものでは

あるが、こちらはやる以外の選択肢しかない。王国の裏社会を支配するような組織に喧嘩を売るような厄介な相手をしなければならぬかもしれない。割に合わない仕事にならなければいいが。

第54話

たっちは、ラキユースと共に仲間達が居る冒険者組合へと足を運び、ウルベルトとペロロンを連れ宿へと戻って来た。そして、レエブン侯からの話を二人にしたのだが――

「うわぁー、きなくせえー」

「怪しき満点ですね」

二人のレエブン侯に対する評価はかなり悪いものとなった。

「俺がそこに居たらいろいろと聞いたんだけどな。どう考えてもおかしなところだらけだろ？」

「いやー、ウルベルトさんじゃ無理だと思えますよ？　だって、ラキユースさんがその場に居たんでしょ？　俺達には関係ないからいいですけど、ラキユースさんからしてみれば上位者ですからね。推薦した……いえ、そもそも本当に推薦したかも怪しいですね。実力者は居ないか？　頼りになる者は居ないか？　適当な話で言質をとられた可能性もあります。まあ、経緯はどうあれ推薦したとなった以上は、推薦した相手が無礼を働いたら責任をラキユースさんがとらされます。耐えられますか？　傍でラキユースさんの顔色が変わるの？」

貴族であるラキユースにとって、身分が上のレエブン侯は逆らってはいけない相手になる。その上で、推薦した人間が無礼を働きでもしたらどれだけの責任をとらされることになるのか分からない。ラキユースのことだから最後まで何事もないように装ったかもしれないが。

「それは……無理かもしれない」

自分の行いで憧れている人物に迷惑を掛けると思うと強気には出られない。必要であったとしても。

「俺達がそこに居なくてよかったですね。そうでなかったら問題なく終わったか分かりませんから。しかし、気に入らないですね。言いたい事だけ言って、余計な事を聞かれる前にラキユースさんに丸投げした感じがします。一刻も早くこの件から手を引きかけた感じが……ね？　いったい何を隠しているんですかね？」

「普通に考えれば、一回の催しで十二名が一斉に居なくなつたとは思えません。最低でも数回。いつの段階で相談を受けたか分かりませんが、調べる上でも一度くらいは見張りをするでしょう。ラクキュースさんから聞いた話では、失踪者以外の話はありません。精々相手側にも失踪者がいるというだけで、調べた人達に関しては不明です。仮に見張りをしていたとしたら犯人に見つかる、又は遭遇した可能性が考えられます」

「被害を受けたか？　そうでないなら相手を見て関わらない方がいいと判断したかだな。意外と八本指が犯人だったなんて落ちだつたりしないかな？　何かあつて隠蔽しようとしたとか？　侯爵に相談出来るような人間が失踪者側に居るみたいだし、ありえなくはないんじゃないか？」

失踪者に関する情報もないので憶測でしかない。しかし、その中に身分や地位の高い者がいれば誤魔化す可能性はあるかもしれない。

「無いとは言えませんが現状では判断のしようがありません。レエブン侯が本当に隠しているのかも分かりません。今は、ティアさんが情報を持ち帰り、蒼の薔薇で話し合った内容通りに動くだけです」

「厄介事だから断りたいがラクキュースさんに迷惑は掛けたくないな。いつそのこと直接依頼してくれば断われたのに」

「だからこそじゃないですか？　こちらの事は調べていたそうですから蒼の薔薇が鎖になると判断したのかもしれないですよ？　実際、断らない方で考えていますからね。俺達に直接なら帝国に行くつて選択肢もありましたから。王国と帝国は既に戦争状態。ウルベルトさんがパラダインさんに気に入られていますから条件次第では匿つてもらえますよ」

王国と帝国は冷戦に近いが戦争中である。帝国からしてみれば、王国の顔色を窺う必要がない。ただ、帝国に匿つてもらう際に幾つかの条件を付けられるかもしれない。

「これ以上は借りを作りたくない。それに何処かに属したくもない。何処かに属するぐらいなら山籠もりでもしてモンスター狩りでレベルを上げまくつて、邪魔者を全員潰した方がいい。俺達は、まだ道を

選べる立場なんだからな。この程度の事で決めるには早い」

「確かにそうですね。ですが、あまり荒事は好きではないのでほどほどでお願いしますね？」

「なら良い方で考えますか？ 悪い方だと八本指と犯人を同時に相手にするとかありますからね。良い方だとそうですね……大貴族様に借りが作れる。蒼の薔薇に格好の良いところを見せられる。アダマントイト級に推薦してくれるとかですかね？ 報酬も割に合うかは分かりませんが少ないとも思えませんし」

「とにかく今は準備をして待つとしましょう。例え、相手が誰であれ三人居れば何とかなると思いますから」

明日になれば少しは状況に進展が生まれるかもしれない。今は、今後に備えて休んでおこう。

◇◇◇◇◇

ボリスを連れ、自分の屋敷へと戻って来たレエブン侯は、警備を厳重に敷いた上で屋敷の奥に籠っていた。

「これでよろしかったのですか？ わざわざレエブン侯が汚れ役を買って出なくてもよかったです。彼らは、蒼の薔薇に好意や恩を感じているとの話もあります。蒼の薔薇からなら話を受けたのではないでしょうか？」

「かもしれないな。だが、それではダメなのだよ」

レエブン侯は、細工の施された酒瓶から琥珀色の酒をガラスのグラスへと注ぎ一息で飲み干す。

「ラキユースのことはよく知っている。彼女の叔父であるアズスとは、旧知の仲だからな。彼に憧れ、冒険者を目指した少女の姿は今もまだ新しい記憶として私の中にある」

ラキユースは、朱の雫の冒険譚を聞き冒険者を目指した過去がある。朱の雫のリーダーであるアズス・アインドラと交流のあったレエブン侯は、ラキユースが冒険者を目指した頃から縁がある。

「ラキユースは、優しい子だ。危険だと分かっているこの件に彼らを

巻き込むことを良しとは考えてはいないだろう。例え、それが最善の選択だとは分かっていたとしてもだ」

この件は、王国の未来に関わる可能性がある。王国に生きる者ならば仕方なく関わる者も居るかもしれないが、あの三人にはそれが無い。いつでも王国を離れることが出来る。だが——今回の件には彼らの力が必要になる、少なくともレエブン侯はそう考えている。

全ては、二日ほど前に話は戻る。レエブン侯は、王をトップとした王派閥に所属しているのだが、その派閥に属する貴族達から相談を受けた。自分の家族が八本指の主催する会場に行つたきり戻つてこない。レエブン侯は、派閥をまとめる立場として仕方なく話を聞いたのだが眉をひそめることになる。内容は、麻薬を使用した催しに参加して帰らないというものになるのだが失踪した理由が分からない。麻薬の使用は命に関わることもある。だからこそ使用する場合は了承した上で行われる場合が多い。その為、仮に麻薬により命を落としたりとところで問題にはならない。事故か病気で処理されるだけだ。家族からすれば、厄介者が居なくなつたと胸を撫で下ろすだけの話だ。麻薬により死亡した場合は、速やかに遺体を明け渡すのが決められた形になる。それをなぜ失踪にするのかが分からない。相談に来た者達もレエブン侯と考えは同じだ。

厄介事であることに間違いはないが、立場として何もしないわけにはいかない。人を介して八本指に詳細を求めたが返事は変わらない。失踪したと言われただけだ。それだけでは面目が立たないので詳しく調べる必要があった。いつも通り足がつかないように飼いならしている下級貴族を介し、ワーカーに失踪者に関する情報を集めさせ——蒼の薔薇に依頼することに決めた。

レエブン侯は、蒼の薔薇に依頼する為にすぐにラナー王女に連絡を取り面会することにした。そして、詳しい話をラナー王女にした上で蒼の薔薇のリーダーであるラクユースを至急呼び出したのだ。場所は、ラナー王女の自室。ラナー王女とレエブン侯の待つ場所に貴族として相応しい格好に着飾つたラクユースが訪れた。

「ラクユース。レエブン侯からお話があるそうです」

「レエブン侯からですか？」

人払いを済ませた上での話し合い。急な呼び出しもあり、ラキユースは思わず身構える。

「そう身構えないでほしい。知らぬ仲ではないだろう？」

「確かにそうですが、レエブン侯が此処に御出でになられているのが珍しくて、つい。それで、どのようなお話なのでしょう？」

「先ずは、そうだな。ラナー王女からの依頼で蒼の薔薇が八本指のことを調べている件を私が知っていることから話そう」

ラキユースは、ラナー王女の方を見る。ラナー王女からの依頼で、蒼の薔薇が八本指を調べていることは秘密になっている。完全に隠しきれてはいないのが実情ではあるが、少なくとも確証を持ってラナー王女の前で第三者が話すことはなかったはずだ。

「レエブン侯は、全てを知っておられます」

それだけを口にしてラナー王女は微笑む。内容が他であるならば友人でも見惚れるものではあるが今回はそうはいかない。

「私は、この件に関わる気はなかった。麻葉がこの国を衰退させる要因であると分かってはいるが、私の立場で何かすることは出来ない。今や八本指をどうにかすればいい話ではないからな。多くの貴族が関わる以上は静観も致し方ないと考えていたよ……今までは」

「それは、ご協力頂けるといふことでしょうか？」

大貴族であるレエブン侯の力は知っている。この王国で起きていることは全てレエブン侯の耳に入ると言われるほどの力を有している。ただ、レエブン侯が口にした言葉はラキユースの求めるモノとは違う。

「残念ながら違う。むしろ蒼の薔薇もこの件からは手を引くことになる」

「……手を引く？ ラナー王女、これはどういうことなのでしょう？」

レエブン侯の手前、礼節を守りはするがラキユースの心境はよくない。今までやってきた行いが無駄になる。

「ラナーでいいですよ？ 私とラキユースの仲は、レエブン侯もご存

知ですから」

嫌味を気にもせずに返される。

「分かりました。では、改めて言わせてもらおうけど、どういうことなのラナー？ この国を悪しき方向へと招く麻薬を根絶するのが私達の目標ではなかったの？」

蒼の薔薇はその為に行動してきた。それが意味を無くそうとしている。

「勘違いしないで、ラキユース。麻薬を根絶する目標を忘れたわけではないわ。でも、事態は大きく変わってしまったようなの」

「つい先日のことだ。私は、貴族達から相談を受けた。内容は、麻薬を使用した催しに参加した者達が失踪したというもの。判明しているだけでも既に十二名になる。催しが行われた会場はそれぞれ違うが、どれも八本指が主催したものになる」

「失踪ですか？」

あまり聞き慣れない言葉だ。麻薬に関して調べているうちに問題が起きた時の処理の仕方も耳に入った。麻薬により死亡事故などが起きた場合は、速やかに遺体を家族に引き渡す手筈になっている。仮に暴力沙汰になったとしても処理の仕方に変わりはない。面子を重んじる貴族からしてみれば厄介事は表に出したくない。内々で処理され、闇に葬るのが一般的なはずだ。

「失踪なんておかしいでしょう？ 問題が起きたとしてもそれを咎める者は居ないのだから。誰も厄介事には関わりたくないものね」

「では、なぜ失踪に？」

「それに関しては簡単だよ。身柄が無いのだよ。人を介して調べてみたが、失踪者達は誰一人として身柄が見つかっていない。病死や事故で処理するには身体が必要だろ？ しかし、引き渡すための身体が無いのではそれも出来ない。それに話はそれだけに留まらない。八本指の方でも失踪者が居るそうさ。会場の見張りをしていた者達になるが一人や二人ではないとの話だ。どう思う？」

レエブン侯に尋ねられるが、一つしか思い浮かばない。

「第三者による犯行でしょうか？ ですが、誰がそのような事を？」

貴族や八本指を敵に回すような行いをする者が居るとは思えません
が？」

この犯人は、貴族を誘拐しただけではなく八本指の縄張りで事を犯
した。これは、八本指の面子を著しく貶める行為である。王国におい
て、貴族と八本指を二者同時に敵に回すほど愚かなことは無い。

「誰が何のために行ったかは分からない。だが、事実として人は居な
くなり、八本指は犯人を捜しているようだ。蒼の薔薇には申し訳ない
が麻薬の根絶に関しては一旦手を引いてほしい。今は、この問題の方
が優先だ。何処の誰かは分からないが王国でなにかを企む者が居る。
貴族と八本指を敵に回すことを恐れない何者かが居る以上は対処し
なければならぬ」

「ラキユース。私からもお願い。この問題を無視しておくことは出来
ないと私も思うの」

レエブン侯とラナー王女に言われるまでもない。ただ、蒼の薔薇だ
けで対処できる問題だとは思えない。

「確かに解決しないといけない問題だとは思いますが、私達だ
けで対処できるとは思えません。レエブン侯、御力をお貸し頂けるの
でしょうか？」

「出来る限りのことはしよう。ただ、人を出すことは出来ない。実は、
この件を調べる為に既に人を送った。人を介して行ったわけだがそ
こで問題が起きたのだよ。事前に会場を調べた上で見張りを立てる
というものだったのだが、その見張りをした者達は失敗したらしい」

レエブン侯は、話すべきか悩みながら表情を歪める。この事を話せ
ば、蒼の薔薇であっても手を引くかもしれない。

「――殺されたのだ。私と見張りをする者達を介する役に立っていた
者が、見張りをしていた者達の手によって」

最悪な知らせは、今朝方に届いた。昨夜に行われていた会場を元
ゴルド級の冒険者チームであったワーカー達が見張りをする手筈
となっていた。彼らは、戦闘に関しては今一つではあったが真価は偵
察任務にあった。冒険者をしていた時から困難な偵察任務を幾度も
遂行してきた彼らは、ワーカーになった後もその能力を買われ多くの

者たちが依頼をしていた。しかし、そんな優秀な偵察能力を持つ者達が敵の手に落ちた。

「人を送り調べさせたが、彼らは見張りをしていた時から依頼人を殺すまでの記憶が無いらしい。どうやら魔法か何かで操られたらしい。偵察のプロである彼らを出し抜き、魔法で操り依頼人を殺させるような者達だ。下手に実力の不足している者を送れば悪手になる可能性がある。すまないが、そちらの方で適当な人材を選んではくれないか？」

レエブン侯が此処に居る理由が分かった。下手に人を送れば逆に操られ、刺客として目の前に現れる可能性がある。だからこそ操られる可能性が少ない実力者に依頼する必要があるのだ。

「レエブン侯のお考えは分かりました。しかし、選ぶと言いましても話からするに最低でもプラチナ級以上の実力が必要だと思われます。冒険者組合に話をすることは出来ますか？」

「出来れば組合を通してほしくはない。貴族の汚点が広がるのは好ましくない」

「それでしたら私の力ではどうしようもありません。私個人の力では、組合を通さずに人を集めるのは難しいです。レエブン侯の方でどうにかできませんか？」

「難しいな。今は隠せてはいるがこの手の話は深い所から広まるものだ。実力のある者達から順に知ることになるだろう。彼らは、この件には関わりたがらないはずだ」

厄介事だと分かっているこの件に関わる物好きなどはいないだろう。八本指に貴族、それらを相手に戦いを挑む第三者。場合によっては、全てを敵に回す可能性すらある。それこそ蒼の薔薇ですら本来なら引くべき案件かもしれない。だが、その選択肢はない。朱の雫が王都を空けている以上は、蒼の薔薇が王都の平和を守る必要がある。

「ラキュース。仮の話だが、この件を行うにはどれだけの実力者なら相応しいと思う？ 先ほどは、プラチナ級と言っていたがそれで足りると思うか？」

八本指には、アダマンタイト級冒険者と同等の実力者達が居ると噂

に聞く。敵対者も同程度と考えれば、プラチナ級では荷が重い。

「戦いになるとすれば、アダマンタイト級の実力者でないと対応は難しいと思います」

「王国に居るアダマンタイト級は、蒼の薔薇と今は居ない朱の雫だけだ。今から連絡をしたとしてもアーグランド評議国に居る朱の雫がこちらに戻るのには当分先になるだろう。彼らを悠長に待つだけの時間があるとは思えない」

そうは言われても他に相応しい実力者は――

(まさか……)

ラキユースは、ある考えに辿り着き、先ほどからこちらをジッと見ているレエブン侯の瞳を覗き込んでしまう。

「どうかしたのかな？」

白々しく問い掛ける。

「私が呼ばれた理由は、他にもあるのですね？」

ラキユースの言葉にレエブン侯は答ええない。ラナー王女の方も見るが澄ました顔でそこに居る。

「確かに彼らなら実力に関しては相応しいと思います。ですが、彼らはこの国の者ではありません」

「だが、他に居ない。この件は、不明な点が多過ぎる。誰が何の目的で動いているのか分からない。開けてみれば、国を滅ぼすだけの災厄があるかもしれない。ラキユース。君の心情は分かるつもりだ。無関係な者を巻き込みたくないのだろう。だが、綺麗事を言っている場合ではない。蒼の薔薇だけで処理できるのなら私は何も言わない。しかし、もしそれが出来ないのならその後はどうすればいい？ 君達が居なくなれば誰がこの国を守る？ 彼らも君達が居るならば力を貸すかもしれないが、居なくなれば王国を見捨てる可能性がある。いや、既に帝国との繋がりを持っている。未練が無くなれば残る理由がない。この国を守るために彼らを巻き込む他はない。分かってほしい。全てはこの国の為だ」

「だからといって――」

「ラキユース。君の中でも他には居ないと思っただはずだ。いいか、こ

れだけは忘れてはいけない。国を守るといふのは簡単ではない。綺麗事だけでどうにかなるものではない。時には、他者を利用する必要もある。そうでなければ守れないのだよ、国と言うものは」

静かに、だが強く言葉を言い放つ。その言葉に理解はできるが、心では納得できない。

「少し——考える時間を頂けますか？」

「かまわないが今日中に話を済ませておきたい」

「ラクユース。隣の部屋を空けてあります」

「……失礼します」

ラクユースは、二人に断りを入れてから部屋から出て行く。

「受けると思いますか？」

部屋に残されたレエブン侯は、同じく残るラナー王女に尋ねる。

「ラクユースは、とても優しい子です。ですけど、この国のことをとても大事に思っています。私の親友である彼女をあまり苦しめないでくださいね？」

「分かっています。先ほどもまでは、あくまでも形だけでも自分で決めてほしかっただけです。揺らいだままでは、決断が鈍ることになります。お約束通り、最後までこの件に関しては私が支援させて頂きません。私も他人事ではありませんので」

「そうですね。依頼主を殺すような相手です。レエブン侯の身も安全ではありませんね」

あくまでも可能性でしかない。繋がりも濁してある。しかし、必ずしも安全とは思えない。この件の方がつくまで周囲の人間を信用するのは難しい。誰が操られているのか分からない。

「ラクユースは、この件を引き受けてくれた。彼女の性格を考えれば、苦悩の末に決めたことだろう。それを考えれば、私が汚名を被るなど当然だろう」

しばらくして部屋に戻って来たラクユースは、レエブン侯の依頼を受けることにした。その表情は辛いものではあったが国の未来を考えて決断を下した。その後は、予め決めていた通りにレエブン侯はラクユースと打ち合わせをした。レエブン侯が立場を利用し、無理やり

ラキユースに厄介事を押し付けたように印象付ける為に。

「ボリス、私は卑怯だな。心の優しい少女と無関係な者達に全てを押し付けてしまったよ。だが、他に方法が思いつかなかった」

レエブン侯は、空になったガラスのコップを静かに眺める。

「私が思うに他に適任者は居ない。蒼の薔薇はもちろんだが、あの三人は極めて異常だ。彼らの話を集めてみればその異常さが分かる。別に彼らの成長が特別早いことは異常ではない。ラキユースも十九歳という若さでアダマンタイト級にまでなったんだ。英雄と呼ばれる者達ならそれは不思議な事ではないのだろう。だが、だからこそ異常なのだ。彼らは、戦いを恐れない。戦うことを好んでしているように思える。そんな彼らがなぜアイアン級の冒険者をやっていた？ その気になればこれだけ早く成長できる者達が。ボリス、以前にたちと戦士長との戦いを見た時は全力だったのだな？」

「はい。少なくとも私にはそう見えませんでした。全力を尽くした上で戦士長様に負けていたはずですよ」

「私は、ボリスの目を信じているよ。だからこそ尚更異常に思える。力を隠していたわけではない。本当に彼らはアイアン級の実力だったのだろう。ただ、そうだとしたらなぜ弱かったのだ？ 戦いを好む者達が、戦いを恐れない者達がなぜだ？ この危険に満ちた世界で今まで戦う機会に一切恵まれなかったとしても言うのか？ 王族や貴族であれば無くはないだろう。だが、彼らはそうではない」

「たつちは、少なくとも一定の教養を身に着けている。下級貴族の生まれと言われれば信じられなくはない。しかし、他の二人はそうではない。特にウルベルトは、自分のことを貧民層の出身だと話していることが分かっている。」

「彼らは、転移の罫でこの地に来たという話があります。元いた場所などの詳しい話は、記憶を一部失っているために不明とのことですが一つの説は立てられます。あくまでも憶測ですが古代の遺跡を探索中に転移の罫に掛かりこの地へと転移。その際に記憶と共に力を失ったというのはどうでしょうか？ 過去には、私達の知らない魔法が存在したとあります。その中に対象の力を奪う、又は減退させるも

のがあつたとしても不思議ではないかと思われれます」

「確かにそうだな。彼らは今と同等かそれ以上の実力者であつた。それが何かの力により失い、今はそれを取り戻しているだけだ。奇しくもその考えがしつくりくる。彼らの場合、単純な実力だけではない。戦術や戦略を既に得ている点にも疑問がある。例えば、ペロロンの特殊な戦い方がその一例だろう。試しに真似をしてみた者達も居るよ。うだが、モノにできた者は居ないそうではないか。才能と言えればそれまでだが、既に一度会得していたと考えれば納得だ」

「まるで御伽噺ですね。力を失つた過去の英雄。何処かでありそうな話です」

ボリスの言葉に笑いそうになる。熱が入るほどに口にしておいてなんだが確かに御伽噺の類だろう。だが、今はそんなモノにでも縋りたい気分だ。少なくとも味方であるのならば。

「この際、御伽噺でもかまわないさ。この国もそうだが、私や私の家族の安全を守るためにはこの件を終わらせる必要がある。ボリス、警備を固めた上で常に情報を集めろ。必要とあれば私の指示を仰ぐ必要はない。すぐに蒼の薔薇に伝えろ」

「畏まりました。仰せの通りに致します」

この件が無事に済めばいくらでも詫びよう。今はこの問題が一刻も早く解決することを神にでも祈る。

第55話

バルド・ロフーレは、招待状を胸に大事に仕舞い王都まで足を運んできた。バルドは、エ・ランテルの商人の中で食料を扱う商人になり、若くしてエ・ランテルの有力者の一人として名前が挙がる程度の地位に居る。そんな彼が緊張の面持ちで訪れるのは、王都の中でも貴族達が住まう高級住宅街にある屋敷になる。以前に交流を持ったセバスから王都に屋敷を買ったので是非来てほしいと紹介状が届いた。

「此処がそうなのか」

招待状に書かれていた場所に来たバルドは、その見事な屋敷に驚きを隠せない。此処に来るまでに少し調べてみたが高級住宅街にある屋敷の中でも一際目立つ豪邸を気に入ったという理由だけでセバスの主人は購入したのだそうだ。金貨にして数千枚はくだらない屋敷を簡単に購入できるだけの財力を持つ人物。

「いったい何者なのだろうな」

バルドがセバスの主人であるソリュシャン・イプシロンと名乗る美女に興味を持ったのは、彼女達がまだエ・ランテルに滞在していた頃になる。絶世の美貌を持つだけでも目立つ人物になるのだが、その性格が更に目立たせていた。傲慢でわがまま。空気も読まずに自分勝手な振る舞いをとるその姿は嫌悪感を抱きつつもその美貌故に見惚れる者も少なくはなかった。バルドもはじめはその中の一人ではあったのだが、よくよく調べてみれば興味は更に深まることになった。

まず初めに注目すべき点は財力になる。彼女は、エ・ランテルでも有数の高級宿に宿泊をしていた。当然、その宿泊代は商人として成功しているバルドからみても安くはない金額になるのだが、彼女の場合はそれだけに留まらなかった。食事の度に出される料理に暴言を吐き店や客に多大な迷惑を掛けた。その際には決まって、執事であるセバスからお詫びとしてその日その場に居る全員分の飲食代を持つことがあった。安くても金貨数十枚はする行為を宿泊している期間のほぼ全てで行っていた。少なく見積もっても金貨を数百枚近くは浪

費していたであろう。そう考えると金貨数千枚ぐらいどうとでもなるのかもしれない。だが、その財力はどこから出ている？ 調べてみたがソリュシャン・イプシロンという名前の令嬢を持つ商人など何処にも居ない。そもそもこれだけの美貌を持つていれば噂になつていてもおかしくはない。

それにセバスという存在も興味を強く持つ要因となつた。その家の価値を知りたければ、仕える使用人を見れば分かるとある。これは、使用人にどれだけの教養を持たせられるかで家の力を見る方法になる。そもそも使用人は、ピンからキリまである。上の方になると、貴族の長男が身分上位者の下に奉公として出向く場合がある。下の方では、平民などを仕方なく雇っている場合がある。セバスの場合は、その容姿や立ち振る舞い、教養の高さから判断して前者の可能性がある。その二つだけを見てもソリュシャン・イプシロンと名乗る人物は、かなり上の階級の生まれであることが考えられる。

「——やめておくとしましよう」

バルドは、考えることをいったん止めると呼吸をして姿勢を正す。今日は、客として呼ばれたのだ。下手にあれこれ考えることなく友好関係を結ぶことだけを考える方がいい。何せ相手はあの傲慢な令嬢なのだ。いくら執事であるセバスの招待とはいえ本場の客として迎えられるか疑わしいものである。バルドは、屋敷の門から中に入り、屋敷の玄関まで足を運ぶと呼び鈴を鳴らす。すると、しばらくして見知った仲であるセバスがその姿を現す。

「これは、ロフール様。よくぞ御出で下さいました」

思わずホツとしてしまう。招待状は来たが関わつたのは極僅かな時間だけだ。少しでも好感を持つてもらえるように振る舞いはしたがそれでも心配ではあつた。しかし、セバスの好意のある対応がバルドに安心感を与えてくれる。

「お久しぶりです、セバス殿。本日は、御招待頂きありがとうございます。王都に屋敷を購入したと聞きましたが、いやはや素晴らしいものですね」

「お褒め頂きましてありがとうございます。それでは、立ち話もなん

です。中にお入りください」

セバスに促されバルドは――

「これは素晴らしい……」

バルドは、思わず立ち止まり言葉を口にする。屋敷を見た時も驚いたが、屋敷の中は更に驚くべき内容だった。魔法の光を灯す照明器具は高級品になる。それなのにこの屋敷にある物は、今まで見た事が無いほどに大きく、見事な細工が施されている。それに床には、金糸を用いた赤を基調とした巨大な絨毯が惜しげもなく敷かれており、大貴族が所有するような調度品も置かれている。

「ありがとうございます。どれも主人の趣味になるのですが、ロフレ様のような方にお褒め頂ければ他の方に見せても問題はなさそうですね」

問題はあると思う。口には出せないが、ここまで見事であると身分のある者からしてみれば嫌味にしか見えない。

「これらは、何処で購入されたのですか？」

「いえ、これらは主人が家を出る時に持たせて頂いた物になります。今までは、知人の所に置かせてもらっていたのですが屋敷を購入したのでこちらに運んで頂きました」

「知人ですか？」

「はい。元々その方を頼って王都に来る予定でしたので。主人は――」

セバスはそこで言葉を止め、深々と頭を下げる。

「そこからは、私がお話させて頂きますわ」

入り口の正面にある二階へと続く階段から主人であるソリュシヤンがゆっくりと降りてくる。魔法の光の中で、この場にある全ての美品よりも美しいその姿は、バルドの記憶の中で色濃く残るソリュシヤンの姿とはどこか違うように感じられた。

「どうかしましたか？」

「あっ……いえ、申し訳ありません。あまりの美しさに見惚れてしまいました。息をのむほどの美しさとは、イプシロン様の為にあるのですね」

「そう言ってもらえて光栄です。それでは、こちらへどうぞ」

ソリュシャンは、バルドの言葉に微笑んで返し、屋敷の奥へと案内する。

（別人ではないよな？）

違和感の正体はすぐに分かる。美貌はそのままではあるが性格が全く違うものになっている。少なくともバルドの記憶にあるソリュシャンであれば、今のような世辞を言ったとしたら不快を表し、一言二言吐き捨てるように何か言われたことだろう。

（覚悟を決めるか）

バルドは、改めて姿勢を正す。どうやら自分は人生において大事な場所に立っているのかもしれない。今日の此処での振る舞いによって、今後の自分の立場が決まってしまうのではないかと今まで培ってきた商人としての勘が激しく警鐘を鳴らしている。謎に包まれたこの人物相手にできる限りのことをしないといけない。

「こちらになります」

覚悟を決めたバルドをソリュシャンは、奥の方の部屋へと招く。当然のようにそこにも一級品とも呼べる美品の数々があるので、少しだけ様子が違う。向かい合わせの席が設けられているので応接間だとは思うのだが調度品がどうも在り合わせのように思える。今までがフランスのとれていた飾りつけだった為はその違和感は強い。

「この部屋にある物は頂き物になります。何処に置こうか悩んでおりまして、置く場所が決まるまでは多くの方に見て頂けるこの場所に置かせて頂く事にしました」

「頂き物ですか」

頂き物をただ置いただけの部屋ならこの違和感も納得だ。だが、どうやら招待されたのは自分だけではないようだ。人の気配がまったくしないところをみると呼ばれるのは一人ずつになるのだろう。しかし、此処にある物——流石にソファやテーブルは頂き物ではないだろうが仮に他の物が全て頂き物で、尚且つ一人につき一つと考えると最低でも十人程先に屋敷に招かれた者が居るようだ。

「ちなみにどのような方がこちらに？」

「そうですね。実は、恥ずかしながら面識のない方のも混じっておりますの。知人を通して頂いた物が半分ぐらいはあるのかしら？」

ソリュシャンは、人差し指を口元にあて考えるような仕草をとる。人によつてはあざとい行為になるが美女がやるとなると絵になる。

「はい。少なくともそちらにある物に関してはそうなります」

セバスが示したのは、この部屋の中でも一際目立つ物が飾られている場所。この部屋の調度品のバランスを大きく壊す要因である絵に関しては、一般的な物と比べて数倍の大きさはある。しかし、作りは雑ではなく細かな部分にまで丁寧な筆が入れているのが分かる。絵にとつて大きさは価値を見るための基準になるので相当な価値があると思われる。その近くに置かれているガラス製の鳥の彫像も細かく作り込まれており、子供ほどの大きさになるので金貨百枚はするかもしれない。

「ああ、そうでした。確か、絵の方がバルブロ王子からでしたか？ 彫像の方は……誰だったかしら？」

「ボウロロップ侯爵になります。バルブロ王子の義理の父親になります」

「他の方もそうですがどうしたものでしょう？」

ソリュシャンは、困ったように考え込むがバルドはそれを止める。

「申し訳ありません。バルブロ王子ですか？ 第一王位継承者である？」

聞かずにはいられない。このリ・エステーゼ王国の次期国王候補の名前が出れば確かめないわけにはいかない。

「他に居りますの？」

逆に問い掛けられる。確かに他には居ないだろう。

「居ないと思います。ですが、バルブロ王子と面識があるのですか？」
「いえ、残念ながら。ただ、私の懇意にしている知人と仲が良いそう
で、私が王都に屋敷を設けたと聞き知人を介して贈り物を下さいました」

バルブロ王子が面識の無い者の為に贈り物を？ いや、バルブロ王子だけではない。大貴族であるボウロロップ侯からも贈り物が届い

ている。

「あのイプシロン様の御友人は、どのような方なのでしょうか？」

「そうですね——立ち話もなんですのでお席にどうぞ。セバス、飲み物をロフーレ様に」

「畏まりました。ロフーレ様、何かお飲みになりたい物はございますか？」

「紅茶を頂けますか」

「承りました。それでは、こちらでお待ちください」

セバスが部屋を出てソリュシャンと二人きりになる。心の許せるセバスがこの場所から居なくなると心細くもなるがそうは言っていない。招かれるままにソファーに座り、本来なら楽しいはずの美女との時間に備えなければならない。

「私の友人もロフーレ様と同じく商人をなさっております」

「商人ですか？」

バルドは、自分の知っている限りの商人を思い出す。ただ、バルブロ王子やボウロロープ侯と関わりのある商人は少ないのでそれもすぐに終わる。

「確か、イプシロン様のお家も商家でしたよね？」

「ええ、そうなります。ただ、お恥ずかしい話なのですがイプシロン家には少々変わった掟があるのです」

「掟ですか？」

長く続く家には独自の家訓や風習があったりするものだ。その類なのだろうが相手が相手だ。心しておいた方がいいかもしれない。

「イプシロン家の人間は、一定の年齢になると家を出て自らの商才で生きていく掟があります。私もその例に従い自分なりのやり方で自らの店を持つ場所を探しておりました。ロフーレ様や他の方々に対する数々の振る舞いはその一環になります。あの時は、誠に申し訳ございませんでした」

ソリュシャンが深々と頭を下げる。

「——そのような事はしなくても結構です！ 私は、気分などを害してはおりませんので！ 頭をお上げください！」

エ・ランテルでの事が演技だったとは素直に信じられない。しかし、今のソリュシャンは明らかに別人だ。そこにどんな意味があったのかは分からないが王族と関わりを持つ者に頭を下げさせるわけにはいかない。

「ロフール様はお優しいですね」

頭を上げたソリュシャンは、バルドに微笑みかける。一瞬その笑みにクラッとしてしまうがそこに意味があるわけではないはずだ。最後まで気を強く持て。

「私は商人です。相手の内面を見抜く事を信条としております。イプシロン様がそのような方でないと思つたからこそ関わりを持つとうとしていたぐらいですから」

まったくの嘘ではないが演技だとは気づかなかつた。いや、もしかしたら今も演技なのかもしれない。今日一日で心身ともに大分疲れそう。

「そう言つて頂けると救われます。セバスが言つておりました。ロフール様は、必ずや私の力になると。だからこそこうしてお呼びしたのです」

「私にできる事なら力になります。遠慮なく仰つてください」

商人として言つてはいけない言葉になるが、ここは危険を冒してでも進んだ方がいいかもしれない。富は、危険を恐れずに進んだ者に与えられるものだ。

「先ずは、こちらをご覧ください」

ソリュシャンはおもむろに自分の胸元へと手を持つて行く。豊かな胸部を強調するように開けられたドレスなのでそこに目をやらないように気をつけていたが、こうして動きがあると見ずにはいられない。というよりも何を見せるつもりなのだろうか？　バルドは、思わず生唾を呑み込み凝視する——が、残念ながらバルドの期待は裏切られた。ソリュシャンは、なぜそこに隠し持っていたか分からないが胸元から折りたたまれた紙を一枚取り出した。

「どうぞ、ロフール様」

バルドは、ソリュシャンからそれを——温かい。なんだか良い匂い

も漂ってきた気がする。何気なく受け取ってみたが、この紙は美女の豊かな胸元にあった物だ。思わず嗅いでみたい衝動にかられるが固い意志で抑え込み中身を拝見する。

「……人の名前ですね？」

紙には、名前が書いてある。名前から察するに貴族のものだろう。

「はい。実は、私が行おうとしている商売は仲介人になります」

「仲介人ですか？　あまり聞き慣れないですね」

仲介人で商売を行う？　確かにそういった者も居る。ただ、どちらかと言えば裏稼業の者が行うような仕事だ。

「私は、この地に交易路などを持っておりません。それに縄張りなどもありますので参入は難しいものです。ですので、私は人や物を必要としている方に紹介することを仕事にしようと考えております」

確かに見ず知らずの者が簡単に商いを行なえるような仕組みではない。むしろ排他的とも言える。組合や派閥に属し、その上で協力関係を結び行うのが一般的だ。

「仰りたいことは分かりました。それで、この者達は私に何を求めているのでしょうか？」

「その紙に書かれている方々は貴族の次男にあたる方々になります」
「次男ですか？」

旨味の無い話になりそうだ。貴族もそうだが家の力を次に残すために分ける事はなく、全てを一人の人間に与えるものだ。今回で言えば、長男になるわけなので次男だと価値は無いに等しい。

「そんな顔をなさらないで下さい。ロフール様にも利益のあるお話になりますので」

バルドは、思わず苦笑いを浮かべる。どうやら表情に出してしまったようだ。気を強く持つようにはしていたのに情けない。

「実は、今王都では少し問題が起きています」

「問題ですか？」

「はい。これはあくまでも内密にしてほしいのですが、そこに書かれている方々の兄——つまり、本来なら家を継ぐはずだった者が失踪したそうなのです」

嫌な言葉だ。

「もしかして家督争いでもあつたのです——」

バルドは、そこで言葉を止めもう一度紙を見直す。見る限り一人や二人ではない。全部で、六人。六つの家で同時に家督争いがあつた？「本当に内密にしてくださいね？ どうやらなにかの事件に巻き込まれたようなのです。今もまだ解決されてはいませんがだからといって何もしないわけにもいきません。そこで、知人を通して私の所に相談がありました。彼らは、自分の人脈を持っていません。今まで後継者ではなかつたので仕方がありませんが、このまま見つからなければ家を継ぐことになります。そこで、今のうちから人脈を作りたいとお考えのようです」

「もしかして私を御用商人にする気なのですか？ 小さな家でも貴族であれば既に居ると思うのですが？」

「確かにそうなのですが、あまり関係は上手くいっていないのが本音なのでしようね。長男と次男では扱いに天と地ほどの差があるはずですから。気持ち新たにするためにも一新したいのでしょうか」

バルドにも経験があるので分からなくはない話だ。どうせ長男が引き継ぐのだからと他との付き合いはしない場合がある。むしろ下手に懇意の仲になると要らぬ疑いを持たれる可能性がある。次男と御用商人が手を組んで跡継ぎを殺す話もなくはない。

「話は分かりました。ただ、他へ話を通す必要があります。返事はそれからでもかまいませんか？」

「もちろん構いません。私の方はいつでもよろしいので好きな時に屋敷まで御出で下さい」

話しが済んだと同時にセバスが部屋に戻って来る。

「失礼致します。只今準備の方を致しますので少々お待ちください」
手際よくセバスが準備を行っていく。それを眺めながらバルドは、考えをまとめる。

（いろいろと引っ掛かるが……やはり一番は、なぜ内密な情報を知っているかだな）

ソリュシャンとセバスが王都に来てから日は浅い。その間に表に

出ていない情報を集め、尚且つ今回のような話に結び付ける。果たしてそんなことが可能なのだろうか？　もしかするとこの事件に二人が関わっていたりする？　いや、どうなのだろうか？　仲介役にそれだけの利益があるとは思えない。

「イプシロン様。仲介料はいくらぐらいになるのでしょうか？」

「仲介料は、私を通して結ばれた契約による売り上げの一割でどうでしょうか？　もちろん通さなければ、私に払う必要はありません」

「安い。それに通さなければ払う必要もない。旨過ぎる話である。そうなるも他に旨味でもあるのだろうか？」

「こちらとしてはありがたい内容ですが、それではイプシロン様の利益が少なくはありませんか？」

「そんなことはありません。私にも利益はありますので」

「……お聞きしても？」

「詳しくはお話できませんが別にこれだけではありません。ここでの話は、あくまでも一部でしかないのですよ」

「確信の無い含みのある言い方だ。しかし、他になにが——ふと、バルドの目に先ほど紹介された物が映る。バルブロ王子とボウロロプ侯からの贈り物だ。」

（まさか、王子と侯爵が絡んでいるのか？）

「唯一の手掛かりとなる紙に書かれた者達の名前を思い出す——が、ダメだ。なにも思い浮かばない……待て、そういえば一つ聞いていないものがある。」

「イプシロン様。まだ、御友人の商人がどのような物を取り扱っているのかお聞きしていないのですが？」

「そういえばそうでしたね。私の知人が取り扱っている商品は、特にありません。しいて言うのなら、願いでしょうか？　誰にでも胸に抱く願いというものはあります。それを叶えることが商品になります」

「願いを叶え——」

「思いついてしまった。考えてしまった。分かってしまえば、後悔と共に背中にビッシリと冷や汗が噴き出す。」

「もちろん商品ですので代価を払う必要はあります。ですが、願いを叶えることに比べれば些細な事だとは思いませんか？」

貴族の次男として生まれた者が抱く願い。それは、自分が後を継ぐために邪魔な人間を消すことではないだろうか？ そう思いついてしまふと、なぜ目の前に居る者がそれを知っているのかが分かる。共犯なのだろう。失踪事件を犯した者と——いや、場合によっては犯人なのかもしれない。

「ロフール様。貴方は、何を望まれますか？」

絶世の美女は今も目の前で微笑んでいる。ただ今だから思うが、美貌によって気づかなかつたが、目の前に居る者の瞳には深い闇があるように思える。答え一つで今後が決まる。そう確信してしまう。

「ご安心ください。ロフール様の考えられているようなことはありませんよ」

救いの主はそこに居た。セバスが淹れたばかりの紅茶をバルドの前にそつと置く。

「イプシロン様は、人をからかわれる悪い癖があります。既にロフール様も御存知だとは思いますが」

「……悪い癖？」

人をからかう——演技のことか？ あれにどのような意味があつたかは分からないが、あれも悪い癖によるものなのだろうか？

「イプシロン様の知人は、珍しい物を調達するお仕事をなさっております。貴重なマジックアイテムや宝飾品などになるのですが、どれも高額になりますので取引相手は一部の方のみになります。ですので、ロフール様はお知りにならない方だと思います」

「ごめんなさい、ロフール様。どうも先ほどから変なことを考えておられたようですので少しからかってしまいましたわ」

ソリユシャンは、口元を抑え悪戯の笑みを浮かべている。流石にこれに関してはバルドもムツとするが勝手に勘違いしてしまったのも事実になる。

「お詫びではありませんが本来なら話すわけにはいかない情報をお教えいたします。今回の話を持ってこられたのは、ボウロロープ侯爵に

なりません。その紙に書かれている方々は、敵対派閥の者達になるのですがその引き抜きの一環で私の下に知人を通してきました。こういう言い方は失礼ですが、その者達は家をまとめるだけの力はないそうです。そこで、この機会に取り込む計画だそうです。御用商人は、それなりに発言力を持つものです。上手く取り入り派閥に招き入れるまでが計画の一部になります」

「ボウロロープ侯が絡んでいるのですか？」

「ボウロロープ侯の義理の息子であるバルブロ王子が王位を継ぐ前に地盤を固めておきたいとお考えです。ですので、ロフーレ様が御用商人になれるように話もしてくださいませし、その後の援助も行うそうです。ただ、これらはあくまでも引き受けてから御話するように言われております。ですので、引き受けない場合は内緒でお願いしますね？」

常に敵対する派閥の情勢を調べているボウロロープ侯であれば、知っていてもおかしくはないだろう。少しでもバルブロ王子が王位を継いだ時の為に自分の勢力を強めておきたいと思うのは不思議でもない。しかしそうになると、ソリュシヤンの知人とボウロロープ侯はかなり親密な関係のようだ。

「私とその御友人と会う事は出来ませうでしょうか？」

「引き受けて頂ければ可能です。今、この屋敷に居りますのでお呼び致しますでしょうか？」

思わず、今ですか——と、口に出しそうになった。

「是非、お願いします」

「分かりました。セバス、彼女をお呼びして」

「畏まりました」

セバスは、頭を下げ部屋の外へと出て行く。

「会うという事は、引き受けて下さるということでよろしいのでしょうか？」

「ええ、お受けいたします」

これは賭けだ。どこまでが本当で、どこまでが嘘なのか分からな。しかし、王位を受け継ぐ可能性が最も高いバルブロ王子が絡んで

いるとすれば受けた方が得なはず。ここは多少のことは目をつぶつても受けた方がいい。

「そうですか、それは良かったです。ああ、それと一つだけ先に言っておかなければなりません。彼女は忙しい身ですので挨拶だけにしておいてください。大変多忙な方なので休ませてあげたいので」
「分かりました。それでかまいません」

覚悟が決まれば一息つける。セバスが淹れた紅茶を——美味しい。なんだか分からないが今まで飲んだ事が無いぐらい美味しい。茶葉が違うのか淹れ方によるものかは分からないが、ホッと出来ればなんでも構わらない。

「お連れ致しました。どうぞこちらに」

セバスが戻って来たのだが——一緒に部屋に来た女性は想像と大違った。服は、平民のそれで。頬はややこけている。髪もボサボサな感じであり、その瞳には生氣というのが感じられない。

「彼女の名前は、クレマンティーヌと言います。あまり自分の服装などには興味の無い方ですので」

「クレマンティーヌと言います」

口が僅かに動き、最低限の動きだけで会釈を行う。

「バルド・ロフールと言います。お目にかかれて光栄です」

バルドは、席から立ち名前を名乗るが反応は悪い。むしろ憐れんだ目で見られている気がする。

「ロフール様。彼女は、見ての通り疲れております。今日は、ここまでということまで」

「分かりました。またお会いできる時を楽しみにしております」

「ええ、本当に」

クレマンティーヌと名乗る女性は、そう言い残すとその場から立ち去る。

「それでは、私も失礼させて頂きます。ロフール様、好きだけ此処でおくつろぎ下さい。セバス、後は頼みましたよ」

「畏まりました」

ソリュシャンもそれだけ言い残しこの場を去る。

「セバス殿。クレマンティーヌ様は、普段はどのように過ごされているのですか？」

「申し訳ありませんが私の口からはお話できません。女性の話を勝手にするわけにはいきませんので」

「そうですね。それでは、少ししたら私も失礼します」

淹れてもらった紅茶を飲み干したら急いでエ・ランテルへ戻るとしよう。この件を上手く処理できれば、今よりも上へと行けるはずだ。

第56話

クレマンティーヌは、バルドとの面会を終え廊下へと出た。

(また馬鹿な人間が来たのね)

これでこの屋敷を訪れた人間は三人目だ。どいつもこいつも何も知らないからこそ話に乗ってしまう。いや、そういう人間を選んで招いていると楽しそうにあの悪魔は話していた。

(早く戻ろう)

気は進まないが他に道はない。此処は、王国の王都。屋敷を飛び出せば人も居るだろう。だが、彼らに何が出来るのだろうか？ この屋敷には、国を簡単に滅ぼせるヤルダバオトが居る。それに此処の住人達がただの人間だとも思えない。力は特に感じないが女主人と執事はヤルダバオト相手に恐れる様子を一切見せる事が無い。人間のメイドも居るが——彼女の場合は、中身がイカれているのだろう。でなければ、この屋敷で働こうとは思わないはずだ。そして、もう一人に關しては明らかにヤルダバオトの仲間だろう。人間の身体に犬の頭が付いているのだから。ただ、少なくともこの屋敷の中では最もマシな部類に入るのかもしれない。見た事のない魔法で傷を癒してくれる時に優しい言葉を掛けてくれることがある。腹の中でなにを考えているかは分からないが他はそれもない。

クレマンティーヌは、バルドが居る一階ではなく階段を上り二階へと向かう。この屋敷は、一階に比べると二階の部屋数は少ない構造をしている。女主人の部屋と来客を迎えるための部屋が幾つかあるぐらいで、他は一階にある応接間よりも広く作られた部屋があるぐらいだ。ただ、そこには見た事もないような豪華な調度品の数々が置かれている。物の価値はよく分からないが少なくとも王になる予定の王子の屋敷よりも豪華なのは間違いないと思う。

「ただいま戻りました」

クレマンティーヌは、部屋の扉を開け自らの主である悪魔に頭を下げる。

「お帰り。さあ、続きをどうぞ」

仮面を着けた悪魔の表情は見えないが優しい声色で向かいのソファーに招かれる。できることなら床の方がいい。

「失礼します」

クレマンティーヌは、ソファーへと腰掛け——居心地がいいと思つてしまった自分を窘める。初めて座つた時にも思つたが座り心地が他の物とは比べ物にならない。優しく身体を包み込み支えてくれるような感覚が今は憎い。

「もし此処にある物が気に食わないのであれば他を用意しよう。遠慮なく言ってくれてかまわないよ」

ヤルダバオトは、手に持つ紙の束から目を離さずに言葉を口にす
る。

「お腹は減っていません」

クレマンティーヌの目の前にあるテーブルには料理が大量に置かれて
いる。既に冷めた物もあるがその種類は多岐にわたる。よくは
分からないがツアレと呼ばれる人間が料理の練習をしているようだ。
次から次へと作りたての料理が運ばれてくる。

「嘘はよくないな。他の者達と違い食事が取れないわけではないのだ
ろ？ 治療を施したはずだからね。それとも新しく出来た腕の傷を
見る限りまた思い出してしまったのかい？」

食事がとれないままの方がよかつた。自分は体験してはいないが
生きてまま虫に食われ続ける者達の姿と声にならない悲鳴を思い出
すと身体が振るえ吐き気が込み上げてくる。今度は自分にも——否、
悪魔はこれ以上のものが待っていると確かに口にした。怖い。怖い
が——ここで自らの身体を抱きしめる行為は出来ない。また服を爪
で破き、血で汚しでもしたら罰が待っている。

「申し訳ありません。食べられません」

「困つたものだね。君には沢山食べてもらわないと困る。必要とあれ
ばまたこちらで用意してもかまわないよ？ 美味しかっただろう？

あれは、本来であれば君のような者が食せる物ではないからね」

あまりにも食事をとらないクレマンティーヌの為にヤルダバオト
が見た事もない食事を持ってきたことがある。初めは毒——毒なら

マシな方か。得体の知れない物が入っていると思つたそれは……今まで食べた事が無いほどに美味しいと思えた。まるで生命力を形にしたものを食べた様な感覚。身体に生気が満ちるのを確かに感じた。ただ、食べたい衝動を必死に抑えた。食べれば地獄が待っている。

「許して下さい。お願いします」

頭を深々と下げる。それがどれだけの価値のある行為かは分からないが他に出来ることもない。

「本当に困つたね。無理矢理食べさせても吐かれてしまつては意味がない。口や胃を糸で縛るわけにもいかないし」

「――失礼いたします」

部屋の扉が叩かれ、この屋敷の女主人であるソリュシャンが部屋へと入つて来る。

「お疲れ様、ソリュシャン。素晴らしい演技だつたと私達の主人が褒めていたよ」

「お褒めにあずかり恐悦至極に存じます。主の為であれば私はどのような事でも致します。主への奉仕こそ私の喜びですので」

ソリュシャンは、その場に居ない主へと頭を垂れる。ちなみにデミウルゴスがヤルダバオトを演じている間は、アインズのこととは主、又は主人と呼ぶことになっている。決して、アインズやモモンの名前を出してはいけない。

「しかし、ヤルダバオト様。この者の姿はどうかにならないのでしょうか？ 此処は、他と違い主を迎え入れることのある場所。このようなみすばらしい姿の者が居てよい場所ではないと思うのですが？」

ソリュシャンからの冷たい視線がクレマンティーヌへと送られる。力は全く感じない。しかし、背筋に氷柱を突っ込まれる感覚が確かにある。絶対に人ではない。化け物だ。

「確かにその通りなのだけど、主人から許可は得ているからね。というよりも主人の提案なんだ」

「――申し訳ありません！ 主のお考えとは知らずに！」

ソリュシャンは、表情を急変させ跪き許しを乞う。その必死さからは忠誠心と共に畏怖を感じ取れる。この化け物達がここまでする相

手だ。絶対に会いたくはない。

「そんなことはしなくても大丈夫だよ、ソリュシャン。主人は気にはしない。むしろそう思う者も居るかもしれないと言われていたよ」

「ですが——いえ、失礼しました」

「ここでこのままの姿勢をとり続ければそれこそ失礼にあたると思っているソリュシャンは姿勢を正す。」

「彼女の役割を考えるとこの方がいいのだよ。人間は、毛色の違うものに対して強く印象が残る。平民の中に貴族が居れば目立つように、貴族の中に彼女のようなみすばらしい者が居れば必ず記憶に残るだろう。そして、こうも思う。なぜこのような者が此処に居る、とね。下に居る彼も不思議に思った事だろう。いや、他の者達もそうだ。道端に落ちていようような石であつても豪華絢爛な宝石箱の中に嚴重に納められていれば貴重な物に思える。彼女に対しての評価もこの方が上がりやすいのだよ。勝手な妄想や思考が際限なく上げてくれる。後は、それを肯定してあげる要素があれば完璧だね」

クレマンティヌに与えられている役割の一つに異様な存在として認識されることがある。

「彼女には、ズーラーノーン同様に闇の部分を担当してもらわないといけない。ソリュシャン、君と違ってね。そういえば、セバスと共に任せた件は上手くいっているのかな？ 立ち話もなんだから座つて聞かせほしい」

「分かりました。お隣を失礼します」

ソリュシャンは、クレマンティヌの方ではなくヤルダバオトの隣に座る。理由はどうあれ席を共にはしたくないのだろう。

「御指示のあったように教会に多額の寄付を行いました。孤児院や浮浪者の為の施設の建設に賛成頂き、他の方々にもお話をしてくださるようですよ」

「それは結構。必要であれば金は惜しげもなく使つてかまわないからね？ ソリュシャンの役割は慈善事業に精を出す慈悲深き女主人ということになる。他と同じように光の面を担当するのだから上手くやってくれないと困る」

「分かっております。ただ御許し頂けるのならば、一つお願いしてもよろしいでしょうか？」

「なにかな？ 主人から君達の働きに対して労うように仰せつかつているから遠慮はいらないよ？ 内容によっては伺う必要もあるけど、そうでないなら私に与えられている権限で応えよう」

「もしよろしければ私に一人頂けないでしょうか？ この前、孤児院を見学したのですが見ていたら欲しくなりまして。すぐにではなくてもよろしいので」

「主人からは、罪無き者には極力手を出すなど言われています。私としては、価値の低い者なら構わないと思うのだけど確認してからでいいかな？」

「それでかまいません。感謝致します」

ソリュシャンは、笑みを浮かべながら感謝を述べる。一見すると孤児を引き取るだけの話に思えるが一部始終を見ていたクレマンティーンにはそうは思えなかった。手を出すな。価値の無い者という言葉は孤児を引き取る上では必要のない言葉だろう。この女主人のことはよく知らないがもしかするとヤルダバオトと同じ種類の化け物なのかもしれない。

「それにしても今日も食事をしないのですね。よろしいのですか無理にでも食べさせなくて？」

急にこちらをソリュシャンが向いたかと思えば自分の事が話題に上がる。向かいの席に居るとはいえ見ていた事を不快にでも思ったのか？ ヤルダバオトの意識が自分に向けられると思うと生きた心地がしない。

「前に試したけど結果はよくなってね。それに彼女は私のお気に入りでもある」

「お気に入りですか？」

ソリュシャンが不思議そうな表情でこちらを見る。こっちだって初耳だ。

「彼女が担う役割は多くてね。主人も多少なら好きにさせてもかまわないとお考えなぐらいだ。今後は、先ほどの話のように功績に応じて

褒美をとらせてもよいと仰られました」

「このような者にも慈悲をお掛けになるとは。主の慈悲深さには心より敬服致します」

「本当にそう思うよ。だからあまり強制はしたくない。ただ……食事としてはほしい。死ぬことはないように管理はしているのだけど痩せることは出来ればやめてほしいんだ。方針が変わった為に手元には、主人から与えられた人間と亜人達しか居ない。亜人達が捕らえていた人間や他の種族も居ただけど、そちらは他にとられてしまつてね。まあ、彼女さえいれば問題はないのだけどね」

「そういえば、スクロールの用途が立ったのですよね？ おめでとーございませう」

ヤルダバオトには、多くの役割が与えられている。その中の一つにスクロールに必要な羊皮紙の確保がある。スクロールは、封じ込めた魔法を一度だけ使用できるアイテムになる。第一位階から第十位階の魔法を好きに封じ込める事が出来るのだが、一般に出回っている羊皮紙では上位の魔法を封じ込める事が出来ない。そこで、ヤルダバオトが上位の魔法を封じ込められる羊皮紙を探すように命じられた。

「そうなんだよ。今も手元にあるモノだけでいろいろと試行錯誤しているのだけど幾つか分かったことがある。同じ種族や種類であっても大人と子供では、子供の方が質の高い羊皮紙が取れる傾向にある。それに上位種や力のある者からは、それに見合うだけのモノが取れる場合がある」

嬉々として話すヤルダバオトの言葉に身体の震えが止まらなくなる。今は無いはずの痛みと共に記憶が甦る。

「ただ、条件が幾つかあってね。栄養を取らせある程度は太らせないといけない。だからといって無理矢理はダメなんだ。精神的負担が質を悪くする。自ら進んで行つてくれればいいのだけどね」

「そのように躡けることは出来ないのですか？」

「出来なくはないのだけど他にも役割があるからね。あまり弄りたくはないのだよ。与えている役割が多い為に功績も少なくはない。だからこそ強制はしないことにしている。それに先ほども提案したん

「だけど……どうかな？ 欲しいものはあるかな？ できる限りこちらで用意させてもらおうよ？」

ヤルダバオトがこちらをジツと見ている。表情が仮面で見えないことが唯一の救いだ。もし仮面の下にある素顔を見てしまえば気を失い、それに対して罰が待っていたであろう。

「大丈夫です。許して下さい」

今はただ頭を下げ、自分から他に興味が移るのを祈りながら待つだけだ。ただ、出来ることならこの悪魔達を殺してほしい。無理な願いであることは分かっているがもうそれしか救いはない。誰でもいい——この悪魔達を殺して。

第57話

「遅くなり申し訳ありません」

バルドの対応を終えたセバスがペストーニヤとツアレを連れヤルダバオト達の居る部屋へとやって来る。

「お疲れ様、セバス。意外と長かったね。何を話したのかな？」

「現在イプシロン様が行っている活動のお話を少々。ただ、お話をさせて頂く前にお食事を下げさせて頂きます。ペストーニヤ、ツアレ」

セバスの声に従いペストーニヤとツアレがテーブルの上の食事を片付け始める。

「申し訳ないね、ツアレ。彼女は今日も残してしまつたよ」

ツアレは、持つて来ていた純銀製のワゴンに食器を片付ける手を一旦止め、ヤルダバオトの言葉に落ち着いて答える。

「私は、気にしておりませんのでご安心ください」

ペストーニヤとセバスが見守る中で、ツアレはメイドとしての対応を行う。相手は、生者の命を弄ぶ悪魔だ。それも国を滅ぼすことのできる強大な力を持つ。それなのにツアレは平静に対応する。そんな彼女の様子を見て、仮面の下でヤルダバオトは笑みを浮かべる。

「これなら問題はなさそうだね。ペストーニヤ、君には帰還命令が出ている。今日の分の仕事を終えたら帰還してほしい」

「わかりました。ですが、まだ教えていないこともありますので時間を頂きたいです……わん」

「ペストーニヤがそう考えているのならかまわないよ。この件に関しては君に一任されているからね」

「ありがとうございます」

ペストーニヤは、頭を垂れるとツアレと共に急いで食事を片付けて部屋から出て行く。

「意外と拾い物かもしれないね。今まで手に入れた人間の中で最も強いかもしれない。私の手元にある者達にも見習ってほしいものだよ」

確かにツアレは強いかもしれない。この場に居る者達が国を簡単に滅ぼせる化け物達だと知っていても恐れを見せない。これなら相

手が王族であったとしても平然としていられることだろう。しかしそれでもヤルダバオトの下に居れば、此処に居るクレマンティーンのよきに心身ともに全てを諦めることになるだろう。人間の闇を知ったツアレですら悪魔の抱く底の無い悪意には耐えられない。

「さて、それでは話を聞かせてもらおうかな？ セバス、悪いけど彼女の隣で頼むよ」

セバスは、クレマンティーンの方を見る。みすばらしい格好の女性。自らの保護下——監視下に置かれているツアレとは待遇に差がある。だが、セバスは何もしない。もし何かすれば、それはツアレにも繋がる。ツアレを保護するためにも彼女に関わってはいけない。相互不干渉がツアレを守る唯一の方法だ。

「分かりました。お隣を失礼させて頂きます」

「どうぞ」

クレマンティーンの返事を聞いてから隣へと腰を下ろす。

「それで、どのような話をしたのかな？」

「事前にヤルダバオト様が決められていた通りの内容をお話させて頂きました。主に慈善活動に関する物になりますが、他にもロフーレ様とは別の形で他の商人とも関わりがあるとお話をさせて頂きました。中には、ロフーレ様も御存知の方も居られますので接触を図ると思われれます」

「それは結構。準備が整うまで時間はあります。他の者達と同様に甘い蜜を吸わせて飼いならすとしましょう。それで、他には何かあるかな？」

「クレマンティーンとまたお会いしたいとのことですよ」

「彼女に関しては、時機を見て正式な場を設ける予定だからね。その時に招待状を送ればいいだろう。さて、他に無いようなら本題に入るとしよう。何か私に聞いておきたいことはあるかな？」

ヤルダバオトは、部屋に居る者達の顔を順番に見る。

「問題はなさそうだね。それでは話をしますが——その前に確認をしておきましょう。私達は、主人が決められた方針に従い『この世界の者達の願いを叶える』お手伝いをさせて頂いております。お腹が空い

ている者には食事を。住む場所の無い者には安らげる場所を。仕事の無い者には、仕事先の紹介などをしております。他にも多岐に渡り活動を行っていますが全ては彼らの願いを叶えているだけです。いいですか？ これだけは忘れないでくださいね」

ヤルダバオトの言葉にセバスとソリュシヤンは頷く。この言葉は絶対的なもの。今後を見越して考えられたアインズからのものになる。

「それでは、本題に入るとしましょう。クレマンティーン、君にこれを渡しておこう。今回の商品リストになる」

ヤルダバオトは、先ほどまで読んでいた紙の束をクレマンティーンに手渡す。

「顧客達の評判は上々。時間を掛けて飼いなら——失礼。取引してきた甲斐があるよ。彼らの要望に合う商品だと思っただけで一度目を通してほしい。自分の商品なのに知らないと困るからね」

ヤルダバオトに言われるままに紙の束に目を通していく。

紙には、商品の詳細な情報が記載されており、その横には精巧な絵が描かれている。ヤルダバオトが言うには、カタログと呼ばれる物なのだそう。最初の方には、装飾品や調度品などが記載されている。質に関してはこの部屋にあるような物ではなく、下の部屋にあるような王族や貴族が使用するような高級品ばかりになる。顧客達の中には、気に入って購入する者も居るがあまり人気の無い商品になる。その次に目に入るのは、剣や盾などの装備品になる。魔法の力の有無を問わずどれも一級品の物ばかりが記載されており、耐性や身体能力向上などのマジックアイテムなども記載されている。こちらはそれなりに購入者がいるのだが顧客からしてみれば本当に欲しい商品ではない。あくまでも最後の方に僅かにある商品のオマケでしかない。

(この国も終わりね)

最後の方に記載されている『傭兵モンスター』と呼ばれる物を購入している顧客達の顔を思い出すと暗い笑みが零れる。この者達は、モンスターを商品として扱っている。初めにこの話をされた時は耳を疑った。確かにモンスターを使役する方法はある。クレマンティーン

又の兄のように召喚による使役がまず一つ。時間という制限があるので商品として扱う場合は、召喚できる者を商品として扱うことになるのだろうが絶対的な命令をモンスターに命じる事が出来る。それ以外だと野生のモンスターを捕え調教を行い従わせる場合。こちらは時間の制限もないので一般的な奴隷のように商品として扱えるかもしれない。しかし、購入者の命令を絶対に聞くわけではなく常に裏切られる不安が残る。だからこそ普通ではありえないような事ではあるのだが目の前に居る悪魔なら可能かもしれない。

この悪魔の言葉には力がある。おそらくバードと呼ばれる者達が使用するとされる呪詛や呪歌の類なのだろうが強制的に命令に従わせる事が出来る。ただ、身をもって体験したから分かるが時間による制限があつたはずだ。そう考えると別の方法なのかもしれないが――考えたところで意味はないだろう。結果は変わらない。

「明日も顧客の所に行くことになるわけだけど取扱いに関してはこちらで用意した通りの説明をするように。分かったかな？」
「分かりました」

何度も重複させて記憶させられた。どうやら説明の一つ一つにも意味があるらしい。他の事を聞かれたとしても一切答えずに口を閉じるように命じられている。

「では、先に地下に行っておいてほしい。私は、二人と話があるからね」

クレマンティーヌは、この場から一刻も早く去りたい一心で足早に立ち去る。少しでもこの場所から――この悪魔から離れる為に。

「どうやら嫌われているようだ。愛を持って接しているつもりなのだけどね」

ヤルダバオトは、残念そうな言葉を口にしながら仮面を外す。その仮面の下にあった顔には、言葉とは違い笑みに零れていた。

「さて、私も忙しい身なので早急に用件を済ませよう。知つての通り、現在の王都での事柄に関してはアインズ様から私に権限が一任されています。その中には、『保護者リスト』の製作と保護があるのですが少々厄介なことになってしまいました」

「厄介なことですか？」

「実は、保護者リストに記載されている者達がとある事件に関わってしまうようにね。権限を与えられている私は、その対処をしなければならぬんだ」

「それは、至高の御方々と同じ名前を持つ方々のことでしょうか？」

人間の居る場所で活動している者達には、デミウルゴスとパンドラの手により製作された保護者リストと呼ばれる物が配布されている。これには、ナザリックにとって有益であると判断された者の名前と人相書きが記載されている。

「そうだよ、セバス。ただ、あくまでも同じ名前だというだけで至高の御方々ではない。アインズ様からもやむをえない場合は見捨ててもかまわないと言われているからね。もし本物であるのなら……そのような命令が下されるわけではない。そうは思わないかな、セバス？」

デミウルゴスは、向かいのソファアに座るセバスの事をジツと見つめる。眼鏡越しにデミウルゴスの宝石の目がセバスを確かに捉える。「もちろんでございませう。あくまでも同姓同名なだけ。ナザリックにとって不利益になるのであれば切り捨てることは当然でございませう」

セバスは、デミウルゴスの視線から顔を背けずに言葉を口にする。相手は、自分よりも叡智に富んだ悪魔。ここで見抜かれてはいけません。

「……その通りだね。それでは、私も失礼させてもらうよ。いろいろとやる事があるからね」

デミウルゴスは、セバスとソリュシヤンに別れを告げると早々に部屋から出て行く。ただ、部屋から出る前に——デミウルゴスの背中を視線で追っていたセバスの視線がデミウルゴスと僅かに合った気がした。

◇◇◇◇◇

「ソリュシヤンは、問題なさそうだな」

バルド・ロフーレへの対応をナザリック地下大墳墓の執務室から遠隔視の鏡で様子を見ていたアインズはそう判断する。ソリュシヤンの場合は、方針が変更されるまでは人を見下すような傲慢な対応をとらせていたので普通に人間に接することに対して不安があつた。特に同じプレアデスであるナーベラル・ガンマの人間に対する言動や行動などを知っているのです。その思いは強かつたのだが、どうやら要らぬ心配だつたようだ。他の二人もそうだつたが上手く対応できていた。ナーベラルには悪いが魔法が使用できたのならソリュシヤンをモモンのパートナーにする選択肢もあつたのかもしれない。

「他の人間の時もそうだつたが、いい演技だとは思わないか、パンドラ？」

人払いをしている部屋に唯一残しているパンドラス・アクターに尋ねる。

「そうですね。素晴らしい演技だと思います」

傍に控え共に見ていたパンドラも褒めてはいる——が、なんだか不満そうだ。最近共にすることが多いので球体に穴が空いただけの顔にも関わらず表情が読めるような気がしてきた。

「安心しろ、パンドラ。お前も素晴らしいぞ。モモンやアインズ・ウル・ゴウンとしてのお前の振る舞いはとても自然だ。お前を創つた身としては誇らしいぞ」

「それは本当でしょうか!? ああ……アインズ様にそのような言葉を頂きこのパンドラス・アクター！ 光栄の極みでございます！ 本当に……本当に……嬉しゅうございます……」

涙は流れてはいないが、腕で目を拭っている。普通に褒めただけだが、なんだか照れ臭い。

「まあ、落ち着け。しかし、あれだな。人間というのは浅ましいものだな。願いを叶えるという餌をぶら下げるだけで危険と分かっているも飛びついてしまうとはな」

アインズとしても気持ちからは分らない。アインズだつて今すぐ問題なく三人と合流できるのなら多少の危険も冒すだろう。た

だ、あまりにも多くてこの世界の人間達が心配になってくる。

「ですが、そのおかげで事は順調に運んでおります。既にカルネ村の方の準備は最終段階に入り、帝都の方も最低限必要な分は終了しております。デミウルゴス様のアベリオン丘陵に居る亜人達の統治もほぼ終了しておりますし、後は王都の処理を行うのみとなります」

「そうだな。王都の方は、デミウルゴスに任せておけば問題はないだろう。だが、三人との接触だけには注意しろ。アウラやマーレ、シャルティアのように分かりやすくはないからな。私とお前の考えでは、王都で得られる情報から確証に近いものを抱いていてもおかしくないところ。今、三人が関わっている件に干渉はしないだろうが……必要とあれば分かっているな？」

「承知しております。その時は、速やかに処理を行います」

「それでいい。三人に比べれば、他はどうでもいいからな。関係者全員——それこそ国が減んだとしてもかまわない。邪魔者は全て消す。たとえそれがナザリックの者であったとしてもだ。それだけは忘れるな」

パンドラは、アインズを胸に留める。全ては、我が主であるアインズの思うままに。それが創造者に創られた創造物の存在意義なのだから。